

いち だに
市 谷 遺 跡 群

市谷地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書

もち だ
餅 田 遺 跡
だい ぶ
大 部 遺 跡
すぎ その
杉 蘭 遺 跡
とし がみ
年 神 遺 跡

2001. 3

市谷遺跡群正誤表

ページ番号	誤	正
P12	図表内26	15
P51	第41図 遺物番号抜け	上:壺1、下:壺2
P70	第59図 遺物番号抜け	上:壺1、左下:壺2、右:壺底部3
P77	第65図 鉄器番号抜け	5
P184	右本文40、41行目 懐炉	温石
P195	右本文3行目 懐炉	温石

いち だに
市 谷 遺 跡 群

市谷地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書

餅	もち	田	だ	遺	跡
大	だい	部	ぶ	遺	跡
杉	すぎ	園	ぞの	遺	跡
年	とし	神	がみ	遺	跡

2001. 3

宮崎県小林市教育委員会

はじめに

小林市は、宮崎県の南西部、霧島火山のふもとにあり、古くは日向国16駅の一つである夷守駅の所在地に比定されるなど、歴史と伝説を残す町です。現在は花と星空と湧水の美しい田園観光都市として発展を続けています。

市谷地区では平成7年度から10年度にかけて発掘調査を行いました。その結果、餅田地区では縄文時代の住居が4軒、弥生時代の住居が1軒、古墳時代の住居が29軒発見されました。

また、大部地区、杉蔭地区、年神地区では広い範囲からピット群が見つかっており、中世から近世にかけての陶磁器など様々な遺構・遺物が出土しました。

これらが学校教育、生涯学習の一環として広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査に際しましては、宮崎県西諸県農林振興局および市谷地区土地改良区、地元の皆さんには多大なるご理解、ご協力をいただきました。また宮崎県文化課の方々をはじめ、調査に快くご協力くださいました地元の方々、また調査、整理作業に従事してくださいました皆さんに対して厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

小林市教育委員会

教育長 山口寅一郎

例　　言

- (1) 本書は市谷地区県営担い手育成基盤整備工事に伴う、埋蔵文化財調査報告書です。
- (2) 発掘調査は宮崎県西諸県農林振興局の委託を受け、小林市教育委員会が実施しました。
- (3) 発掘調査地は小林市大字真方字餅田ほかです。
- (4) 調査は平成7~10年度に実施され、整理・報告書作成を平成11年~12年度に行いました。
- (5) 調査面積は約58,500m²です。
- (6) 本書の遺構・土層図等にみられるレベル数値は海拔絶対高です。
- (7) 本書にみられる色調は標準土色帳を用いました。
- (8) 現地での実測等の記録は一部簡ジバングサーべイに委託しました。
- (9) 本書の執筆・写真撮影・編集は中村真由美が担当しました。
- (10) 遺物実測・製図・トレース・写真図版等の分担は次のとおりです。
- ・遺構・遺物・土層等の実測
[REDACTED]
- ・遺物の水洗・注記・整理・分類
[REDACTED]
- ・遺物の復元・接合
[REDACTED]
- ・遺物の実測
[REDACTED]
- ・遺物・遺構・土層図等の製図
[REDACTED]
- ・遺物・遺構図等のトレース
[REDACTED]
- (11) 本書に関する記録・図面・及び出土遺物は小林市教育委員会が保管しています。
- (12) 発掘調査にあたっては、宮崎県文化課及び宮崎県埋蔵文化財センターの方々と高原町教育委員会の大塚康宏氏の協力をいただきました。

本 文 目 次

第1章 調査の経緯	7
第1節 調査にいたる経緯	7
第2節 調査の組織	7
第2章 地理的・歴史的環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 餅田遺跡の調査	13
第1節 位置と環境	13
第2節 調査に至る契機	13
第3節 調査の概要	13
第4節 1、2区の調査	13
第5節 3区の調査	13
1. 3-1区の遺物	13
2. 3-2区の遺物	13
3. 3-3区の調査	13
(1) 縄文時代の遺構・遺物	13
(2) 弓生時代の遺構・遺物	20
(3) 古墳時代の遺構・遺物	23
(4) その他の遺物	79
4. 3-4区の調査	79
(1) 古墳時代の遺構・遺物	79
(2) その他の遺物	79
第6節 まとめ	90
第4章 大部遺跡の調査	101
第1節 位置と環境	101
第2節 調査に至る契機	101
第3節 調査の概要	101
第4節 1区の調査	101
1. 1-1区の遺構・遺物	101
2. 1-2区の遺構・遺物	101
(1) 古墳時代の遺構・遺物	101
(2) その他の遺物	113
3. 1-3区の遺構・遺物	113
4. 1-4区の遺構・遺物	113
5. 1-5区の遺構・遺物	120
第5節 2区の調査	120
第6節 3区の調査	127
第7節 4区の調査	135

第8節 大部遺跡出土石器	135	第15図 3-3区6号住居出土遺物	25
第9節 まとめ	135	第16図 3-3区28号住居	26
第5章 杉葉遺跡の調査	143	第17図 3-3区12号住居土層図	26
第1節 位置と環境	143	第18図 3-3区12号・31号住居	27
第2節 調査に至る契機	143	第19図 3-3区12号住居出土遺物(1)	28
第3節 調査の概要	143	第20図 3-3区12号住居出土遺物(2)	29
第4節 1区の調査	143	第21図 3-3区1号住居	30
第5節 2区の調査	143	第22図 3-3区1号住居出土遺物(1)	31
第6節 3区の調査	167	第23図 3-3区1号住居出土遺物(2)	32
第7節 まとめ	167	第24図 3-3区2号住居	33
第6章 年神遺跡の調査	173	第25図 3-3区2号住居出土遺物(1)	34
第1節 位置と環境	173	第26図 3-3区2号住居出土遺物(2)	35
第2節 調査に至る契機	173	第27図 3-3区3号住居	36
第3節 調査の概要	173	第28図 3-3区3号住居出土遺物	37
第4節 1区の調査	173	第29図 3-3区4号住居	39
第5節 2区の調査	173	第30図 3-3区4号住居出土遺物	40
1. 2-1区の遺構・遺物	173	第31図 3-3区7号住居	41
2. 2-3区の遺構・遺物	178	第32図 3-3区7号住居出土遺物	42
3. 2-4区の遺構・遺物	181	第33図 3-3区8号住居	43
第6節 3区の調査	189	第34図 3-3区8号住居出土遺物	44
第7節 まとめ	201	第35図 3-3区9号住居	45
第7章 総括	217	第36図 3-3区10号住居	46

挿図目次

第1図 市内遺跡位置図	9	第39図 3-3区11号住居	49
第2図 市谷地区調査区	10	第40図 3-3区11号住居出土遺物	50
餅田遺跡	-	第41図 3-3区13号住居及F13号住居出土遺物	51
第3図 餅田遺跡基本層序	13	第42図 3-3区14号住居	52
第4図 餅田遺跡位置図	15	第43図 3-3区14号住居出土遺物	53
第5図 2区出土遺物	17	第44図 3-3区15号住居	55
第6図 3区遺構分布図	18	第45図 3-3区15号住居出土遺物(1)	56
第7図 3-1区包含層出土遺物(1)	19	第46図 3-3区15号住居出土遺物(2)	57
第8図 3-1区包含層出土遺物(2)	20	第47図 3-3区15号住居出土遺物(3)	58
第9図 3-1区包含層出土遺物(3)	21	第48図 3-3区15号住居出土遺物(4)	59
第10図 3-2区包含層出土遺物(1)	22	第49図 3-3区15号住居出土遺物(5)	60
第11図 3-2区包含層出土遺物(2)	23	第50図 3-3区16号住居	61
第12図 3-3区5号住居	24	第51図 3-3区16号住居出土遺物	61
第13図 3-3区5号住居出土遺物	24	第52図 3-3区17号住居	62
第14図 3-3区6号住居	25	第53図 3-3区17号住居出土遺物	63

第54図	3-3区18号住居	64	第2図	大部遺跡位置図	103
第55図	3-3区18号住居出土遺物(1)	65	第3図	1区配置図	105
第56図	3-3区18号住居出土遺物(2)	66	第4図	1-1区地形図	106
第57図	3-3区18号住居出土遺物(3)	67	第5図	1-1区遺構分布図	107
第58図	3-3区19号住居	69	第6図	1-1区包含層出土遺物	108
第59図	3-3区19号住居出土遺物	70	第7図	1-2区地形図	109
第60図	3-3区20号住居	71	第8図	1-2区遺構分布図	110
第61図	3-3区20号住居出土遺物(1)	72	第9図	1-2区1号住居	111
第62図	3-3区20号住居出土遺物(2)	73	第10図	1-2区1号住居出土遺物	112
第63図	3-3区21号住居及U21号住居出土遺物	74	第11図	1-2区土壤1	113
			第12図	1-2区土壤1出土遺物	113
第64図	3-3区22号住居	76	第13図	1-2区包含層出土遺物(1)	114
第65図	3-3区22号住居出土遺物	77	第14図	1-2区包含層出土遺物(2)	115
第66図	3-3区23号住居及U23号住居出土遺物	78	第15図	1-3区地形図	116
			第16図	1-3区遺構分布図	117
第67図	3-3区24号住居	81	第17図	1-4区地形図	118
第68図	3-3区24号住居出土遺物(1)	82	第18図	1-4区遺構分布図	119
第69図	3-3区24号住居出土遺物(2)	83	第19図	1-4区堅穴状遺構1	120
第70図	3-3区24号住居出土遺物(3)	84	第20図	1-4区包含層出土遺物(1)	121
第71図	3-3区24号住居出土遺物(4)	85	第21図	1-4区包含層出土遺物(2)	122
第72図	3-3区25号住居	85	第22図	1-4区包含層出土遺物(3)	123
第73図	3-3区26号住居	86	第23図	1-4区包含層出土遺物(4)	124
第74図	3-3区26号住居出土遺	87	第24図	1-5区地形図	125
第75図	3-3区27号住居	87	第25図	1-5区遺構分布図	126
第76図	3-3区29号住居及U29号住居出土遺物	88	第26図	1-5区堅穴状遺構	127
			第27図	2区地形図	128
第77図	3-3区30号住居	89	第28図	2区遺構分布図	129
第78図	3-3区32号住居及U出土遺物	89	第29図	2区堅穴状遺構	130
第79図	3-3区33号住居	90	第30図	2区土壤1	130
第80図	3-3区掘立柱建物跡	91	第31図	2区土壤2	131
第81図	3-3区包含層出土遺物(1)	92	第32図	2区包含層出土遺物	131
第82図	3-3区包含層出土遺物(2)	93	第33図	2区掘立柱建物	132
第83図	3-3区包含層出土遺物(3)	94	第34図	3区地形図	133
第84図	3-4区遺構分布図	95	第35図	3区遺構分布図	134
第85図	3-4区1号住居及びU出土遺物	96	第36図	3区包含層出土遺物	135
第86図	3-4区包含層出土遺物(1)	97	第37図	4区地形図	136
第87図	3-4区包含層出土遺物(2)	98	第38図	4区遺構分布図	137
			第39図	4区包含層出土遺物	138
			第40図	大部遺跡出土石器	139

大部遺跡

第1図 大部遺跡基本層序 101

杉園遺跡	
第1図 杉園遺跡基本層序	143
第2図 杉園遺跡位置図	145
第3図 1区地形図	147
第4図 1区遺構分布図	148
第5図 1区包含層出土遺物（1）	149
第6図 1区包含層出土遺物（2）	150
第7図 2区地形図	151
第8図 2区遺構分布図	152
第9図 2区堅穴状遺構1	153
第10図 2区堅穴状遺構2及び出土遺物	154
第11図 2区堅穴状遺構3及び出土遺物	155
第12図 2区土壤1	156
第13図 2区土壤2	157
第14図 2区円形土壤1	158
第15図 2区円形土壤2	158
第16図 2区円形土壤3	158
第17図 2区円形土壤4	158
第18図 2区円形土壤5	158
第19図 2区円形土壙6	158
第20図 2区包含層出土遺物（1）	159
第21図 2区包含層出土遺物（2）	160
第22図 2区包含層出土遺物（3）	161
第23図 2区包含層出土遺物（4）	162
第24図 2区包含層出土遺物（5）	163
第25図 2区包含層出土遺物（6）	164
第26図 2区包含層出土遺物（7）	165
第27図 2区包含層出土遺物（8）	166
第28図 3区地形図	168
第29図 3区遺構分布図	169
第30図 3区堅穴状遺構1	170
第31図 3区包含層出土遺物	170
第32図 2区堅穴状遺構	181
第33図 2-1区土壤1及び出土遺物	182
第34図 2-3区堅穴状遺構1	183
第35図 2-3区堅穴状遺構2及び出土遺物	184
第36図 2-3区集石遺構1	185
第37図 2-3区集石遺構2	186
第38図 2-4区堅穴状居住	187
第39図 2-4区石組遺構	188
第40図 2-4区集石遺構	189
第41図 2-1区包含層出土遺物（1）	190
第42図 2-1区包含層出土遺物（2）	191
第43図 2-1区包含層出土遺物（3）	192
第44図 2-1区包含層出土遺物（4）	193
第45図 2-1区包含層出土遺物（5）	194
第46図 2-1区包含層出土遺物（6）	195
第47図 2-1区包含層出土遺物（7）	196
第48図 2-3区包含層出土遺物	196
第49図 2-4区包含層出土遺物（1）	197
第50図 2-4区包含層出土遺物（2）	198
第51図 2-4区包含層出土遺物（3）	199
第52図 2-4区円形土壤1出土遺物	200
第53図 2-3区石垣状遺構出土遺物	201
第54図 2-4区外出土遺物	201
第55図 3区地形図	202
第56図 3区遺構分布図	203
第57図 3区堅穴状遺構1及び出土遺物	204
第58図 3区堅穴状遺構1炭化物出土状況	205
第59図 3区堅穴状遺構2及び出土遺物	206
第60図 3区堅穴状遺構3及び出土遺物	207
第61図 3区堅穴状遺構4及び出土遺物	208
第62図 3区土壤1	209
第63図 3区土壤2	209
第64図 3区包含層出土遺物（1）	210
第65図 3区包含層出土遺物（2）	211
第66図 3区包含層出土遺物（3）	212
第67図 3区包含層出土遺物（4）	213
第68図 3区包含層出土遺物（5）	214
第69図 3区包含層出土遺物（6）	215
第70図 年神遺跡出土石器	216
年神遺跡	
第1図 年神遺跡基本層序	173
第2図 年神遺跡位置図	175
第3図 1区地形図・遺構分布図	177
第4図 1区出土遺物	178
第5図 2区地形図	179
第6図 2区遺構分布図	180

図 版

餅田遺跡 3 - 3 区全景	220	大部遺跡 1 - 4 区堅穴状遺構 1	233
餅田遺跡 3 - 3 区 1 号住居	221	大部遺跡 1 - 5 区堅穴状遺構 1	233
餅田遺跡 3 - 3 区 1 号住居概	221	大部遺跡 2 区 1 号住居	233
餅田遺跡 3 - 3 区 3 号住居	221	大部遺跡 2 区土壤 1 土師碗出土状況	233
餅田遺跡 3 - 3 区 4 号住居	222	杉菌遺跡 2 区全景	234
餅田遺跡 3 - 3 区 5 号住居	222	杉菌遺跡 2 区堅穴状遺構 1	234
餅田遺跡 3 - 3 区 6 号住居	222	杉菌遺跡 2 区堅穴状遺構 2	234
餅田遺跡 3 - 3 区 11号住居	223	杉菌遺跡 2 区円形土壤 5	235
餅田遺跡 3 - 3 区 12号住居	223	杉菌遺跡出土遺物	235
餅田遺跡 3 - 3 区 14号住居	223	年神遺跡 2 - 1 区堅穴状遺構	236
餅田遺跡 3 - 3 区 15号住居	224	年神遺跡 2 - 3 区土壤	236
餅田遺跡 3 - 3 区 16号住居	224	年神遺跡 2 - 4 区堅穴住居	236
餅田遺跡 3 - 3 区 17号住居	224	年神遺跡 2 - 3 区堅穴状遺構	237
餅田遺跡 3 - 3 区 18号住居	225	年神遺跡 2 - 4 区石組遺構	237
餅田遺跡 3 - 3 区 19号住居	225	年神遺跡 2 - 4 区円形土壤	237
餅田遺跡 3 - 3 区 20号住居	225	年神遺跡 2 - 4 区集石遺構	238
餅田遺跡 3 - 3 区 21号住居	225	年神遺跡 3 区堅穴状遺構 1	238
餅田遺跡 3 - 3 区 23号住居	226	年神遺跡 3 区堅穴状遺構 1 土柱出土状況	238
餅田遺跡 3 - 3 区 24、25号住居	226	年神遺跡 3 区堅穴状遺構 3	239
餅田遺跡 3 - 3 区 26号住居	226	年神遺跡 3 区土壇 1	239
餅田遺跡 3 - 3 区 29号住居	227	年神遺跡出土遺物	239
餅田遺跡 3 - 3 区 30号住居	227		
餅田遺跡 3 - 3 区 32号住居	227		
餅田遺跡 3 - 3 区 33号住居	227		
8 号住居埋甕炉	228		
10号住居埋甕炉	228		
14号住居埋甕炉	228		
20号住居埋甕炉	228		
22号住居埋甕炉	228		
21号住居高坏出土状況	228		
餅田・大部遺跡出土遺物（1）	229		
餅田・大部遺跡出土遺物（2）	230		
大部遺跡 1 - 1 区ピット群	231		
大部遺跡 1 - 1 区土壤	231		
大部遺跡 1 - 2 区 1 号住居	231		
大部遺跡 1 - 2 区 1 号住居高坏出土状況	232		
大部遺跡 1 - 2 区堅穴状遺構 1	232		
大部遺跡 1 - 4 区ピット群	232		

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

平成7年度から平成11年度にかけて実施された市谷地区県営担い手育成基盤整備事業は、総事業面積23.6haである。小林市教育委員会では平成6年度に事業予定地を試掘調査したところ、遺物の分布を確認した。

そこで、西諸県農林振興局、市谷地区土地改良区、県文化課、及び市教育委員会の四者で埋蔵文化財の保護について協議を行った。その結果、事業施工上現状保存が困難な部分について記録保存の措置をとることになった。調査は市教育委員会が主体となり、下記期間実施された。

餅田遺跡	平成7年11月28日～平成8年3月13日 (調査面積13,000m ²)
人部遺跡	平成8年7月25日～平成9年3月7日 (調査面積25,000m ²)
杉薙遺跡	平成9年5月6日～平成9年12月15日 (調査面積8,300m ²)
年神遺跡	平成10年5月20日～平成11年3月15日 (調査面積12,200m ²)

第2節 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

調査主体	小林市教育委員会
教育長	瀬戸口克彦(～平成12年9月) 山口寅一郎(平成12年10月～)
社会教育課長	谷山己雄(平成7、8年度) 山口末男(平成9～11年度) 上原守義(平成12年度～)
社会教育係長	原口勝年(平成7年度) 堀英博(平成8年度～)

調査員 中村真由美

発掘作業員 相場ミヨ、朝広津由子、有尾みよ、有村勇一、池之上笑子、池之上真理子、池畠芳助、板谷レイ子、市谷輔規、今別府恵子、今村スミ、今尾栄子、入佐トシ、上飯屋タエ、内飯屋エミ、内園マスミ、永住ケイ子、櫻田エミ、押領司洋子、大迫サカエ、大坪正信、大平落正美、大牟田京子、岡原なつえ、小川加代子、小川サヨ、小倉スギ、小倉チヨ、押川和美、甲斐キミ子、篠田文代、上沢津ミドリ、神ノ瀧成子、木尾美智子、木切倉タミ、木佐貫けい子、木佐貫春子、北ノ瀧アツ子、北ノ瀧美代子、黒木美須子、倉田マツエ、倉田ミツ子、桑島ツネ、小磯トシミ、奥呂木スズ子、小水流真佐子、小畠真弓、坂下トシ子、坂元カリ、里岡千代子、重留康宏、下薗みゆき、正覚サエ、正覚由美子、瀬戸口勝信、瀬戸山千鶴子、芹田めい子、大部瀧カツエ、大部瀧和子、大部瀧ムツ、高下久子、立代ムツ、田端正仁、知覧ムツ、津久田タエ子、唐仁原タツ、殿所ノリ、鳥井

ハツ子、永井ツギ、永井ミヨ、永久井美樹、永久井康子、永追ミ工、中園イツ、中園アン子、中園美枝子、中村イネ、西ノ瀧和子、西ノ瀧チリ、温水トシ、橋ノロアツ、橋ノロシツ、早川真由美、野スミ、野美重子、野チリ、平原靖代、深草マツミ、深田國雄、松尾サチ、松尾スエマツ、松尾スミ子、松尾ツル子、松田アヤ子、松田セツ子、松山喜代子、丸尾エミ、満園ワイ、南園久、村山マキ、餅原トミ子、元澤ミサエ、盛満雅子、八重尾ツル子、柳田昭徳、山浦蓮子、山浦律、山口豊、遊木節子、湯之前ひとみ、脇黒丸ケイ子

整理作業員 有島イツ、有馬江美、安藤五月、池田朱美、上田アヤ、樋原理子、北野尚子、谷口和代、富ヶ原史、中庭愛子、中村大介、松田幸江、松永克子

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

小林盆地は、北を四万十層群からなる裏山山地、西を加久藤溶結凝灰岩からなる溶灰岩台地に、また南を霧島火山群によって囲まれている。地形は、北部の四万十層群を基盤とする扇状地と、南部の霧島火山の溶岩流末端から形成された新旧の扇状地、および海拔200m前後のシラス台地とからなり、盆地底の大半はシラス台地とそれが浸食されて形成された段丘からなり、最低位に氾濫原性低地がかなり発達している。河川は、盆地内を石水川などの小河川が流れ、合流して大淀川の支流岩瀬川となって東流し、西部では川内川支流の池島川が西流する。また、市内には湧水が多く、約50ヶ所点在する。』

第2節 歴史的環境

小林市内の遺跡は、平成4、5年度実施の市内遺跡詳細分布調査では163か所確認されている。

次に、これまで調査・報告されている遺跡について、時代別に概略を挙げる。

旧石器時代の遺跡は、横峰迫(大字南西方字横峰迫)で黒曜石製の打製石器が採集されている。『

縄文時代の遺跡は、本田遺跡^a(大字東方字坂ノ下)、山中前遺跡^b(大字細野字山中前)、鬼塚遺跡^c(大字南西方字鬼塚)、こまくりげ遺跡^d(大字細野字出の山)などがある。なかでも本田遺跡は、前期の住居としては県内唯一であり、県指定を受けている。

弥生時代の遺跡の調査例としては、鬼塚ヒレ原遺跡^e(大字南西方字ヒレ原)の掘立柱建物跡がある。そのほか東方、永久津、南西方で石包丁が出土しており、また、小林小学校所蔵の重弧文土器片が知られている。

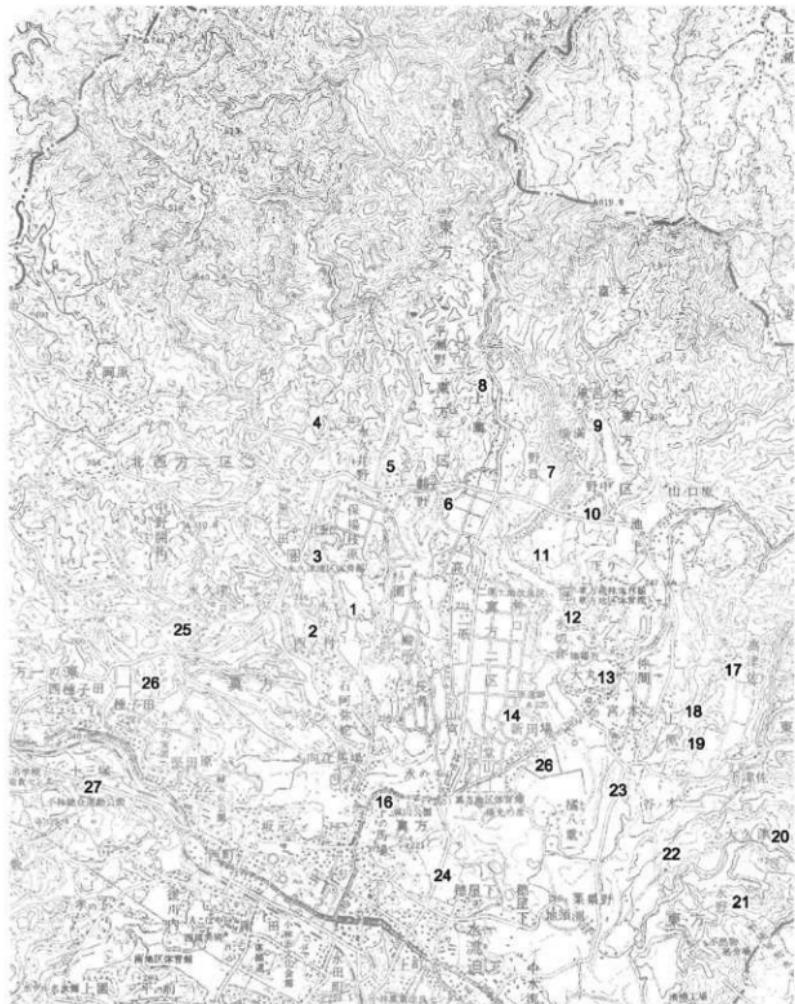
古墳時代の遺跡例は、地下式横穴墓が東二原^f(大字真方字東二原)、下の平^g(大字水流追字下の平)、新田場^h(大字真方字新田場)、尾中原ⁱ(大字北西方字尾中原)等で確認されている。また、水落^j(大字細

野字水落)、平木場遺跡¹⁰(大字南西方字平木場)では住居跡が調査されている。

歴史時代では、日向国16駅の一つ、夷守駅所在地が大字細野字夷守に比定されている。¹¹平安時代の遺跡としては、としては、竹山遺跡¹²(大字細野字竹山)、こまくりげ遺跡から布痕瓦器などが出土している。中世の山城では、三山城(大字細野字城山)、小林城(大字真方字下の馬場)、内木場城(大字東方字内木場)、野首城(大字東方字野首)、岩本丸城(大字東方字城ヶ追)¹³などがあり、古石塔群が總屋下(大字真方字屋下)、大久津(大字東方字大久津)、下り(大字東方字下り)にある。近世では、水落遺跡で江戸時代の墓が検出されている。

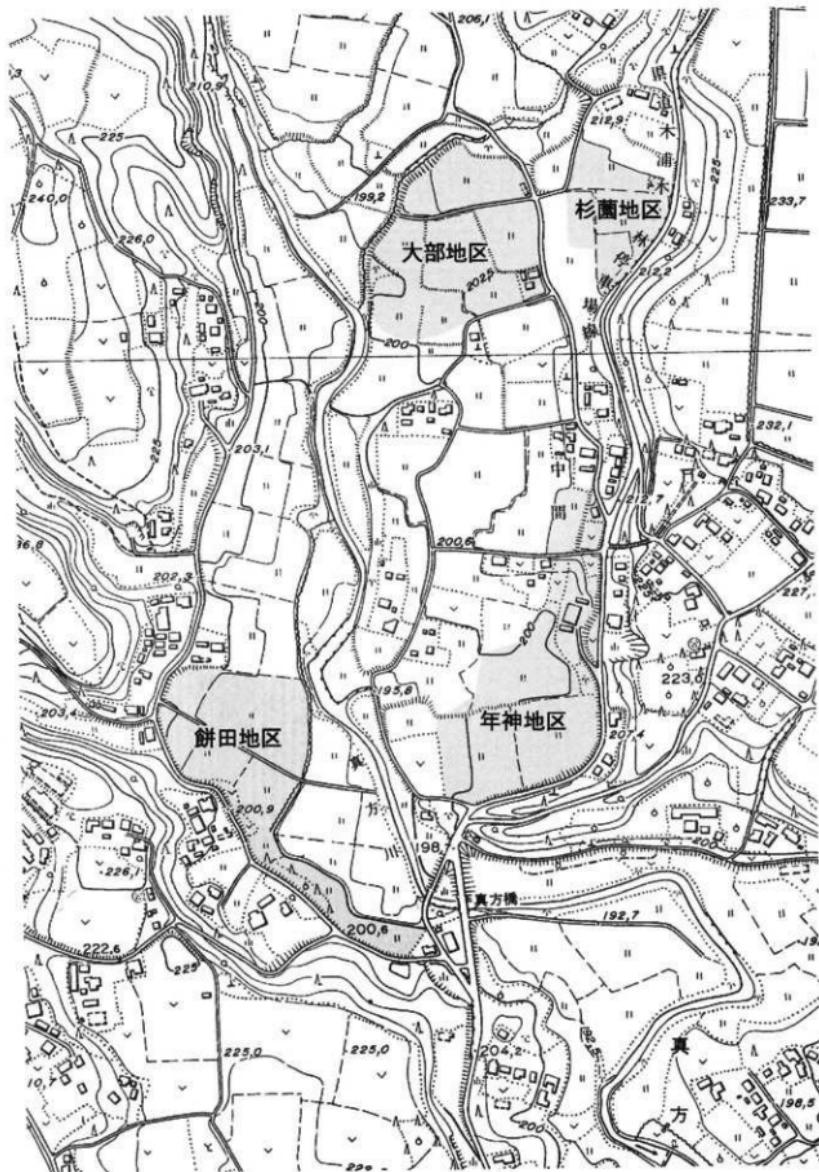
（参考文献）

- 1) 経済企画庁総合開発局『土地分類図(宮崎県)』
1974
- 2) 中村真由美「市内遺跡詳細分布調査報告書」「小林市文化財調査報告書」第7集 小林市教育委員会 1994
- 3) 2)と同じ
- 4) 鈴木重治「本田遺跡」『宮崎県史 資料編 考古1』宮崎県 1989
- 5) 石川恒太郎「中山ノ前住居跡」『宮崎県の考古学』吉川弘文館 1968
※報告には「中山ノ前」とあるが、実際の字名は「山中前」であり、本書では後者を用いた。
- 6) 中村真由美「鬼塚遺跡」『小林市文化財調査報告書』第3集 小林市教育委員会 1991
- 7) 田中 茂「こまくりげ遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 宮崎県教育委員会 1973
- 8) 中村真由美「鬼塚ヒレ原遺跡」『小林市文化財調査報告書』第4集 小林市教育委員会1992
- 9) 永友良典・長友郁子・面高哲郎「東二原地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書』第6集 小林市教育委員会 1993
- 10) 9)と同じ
- 11) 面高哲郎・長津宗重「新田場地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書』第34集 宮崎県教育委員会 1991
- 12) 石川恒太郎「尾中原地下式古墳」『地下式古墳の研究』帝國地方行政学会 1973
- 13) 長津宗重・長友郁子「水落遺跡」『小林市文化財調査報告書』第1集 小林市教育委員会 1990
- 14) 安楽 勘「平木場遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 宮崎県教育委員会 1973
- 15) 藤岡謙二郎「日向国」「古代日本の交通路網」大明堂 1979
- 16) 5)と同じ
- 17) 平部嶽南『日向地誌』 1884



第1図 市内遺跡位置図(縮尺5万分の1)

- | | | | | |
|------------|------------|----------------|------------|------------|
| 1. 市谷遺跡群 | 7. 野首遺跡群 | 13. 大丸遺跡 | 19. 谷ノ木原遺跡 | 25. 森吹遺跡 |
| 2. 正覚原遺跡 | 8. 上蘭遺跡 | 14. 東二原地下式横穴墓群 | 20. 大久津遺跡 | 26. 種子田遺跡群 |
| 3. 黒仁田遺跡群 | 9. 橋溝遺跡 | 15. 新田場遺跡群 | 21. 永野遺跡 | 27. 十三塚遺跡群 |
| 4. 大平遺跡群 | 10. 野中遺跡 | 16. 小林城跡 | 22. 梅木原遺跡 | |
| 5. 永久井野遺跡群 | 11. 平才原遺跡群 | 17. 梶ノ尾遺跡 | 23. 立山前遺跡群 | |
| 6. ひばり野遺跡群 | 12. 内木場城跡 | 18. 下津佐遺跡 | 24. 小林原遺跡群 | |



第2図 市谷地区調査区（縮尺1/5,000）

もち だ
餅 田 遺 跡

第3章 餅田遺跡の調査

第1節 位置と環境

当遺跡は、市内中央部に位置し、標高は約200mである。真方川（大淀川支流）によって形成された河岸段丘の西岸に立地し、真方川と北西方向から伸びる標高240mの舌状台地によって囲まれている。

第2節 調査に至る契機

西諸県農林振興局との協議の結果、平成7年度市谷地区1工区の面工事実施面積6.2haのうち、13,000m²について発掘調査を実施することになった。

第3節 調査の概要(第4図)

調査期間は平成7年11月28日から平成8年3月13日で、事業予定地を南から1～3区に設定し、うち3区10,000m²をさらに1～4区に分けた。

餅田地区の基本層序は次のとおりである。

1	
2	
3	第1層 耕作土 第2層 黒ボク土 第3層 アカホヤ火山灰土 第4層 牛ノ脛火山灰土 第5層 暗褐色土
4	
5	

第3図 餅田遺跡基本層序

第2層の黒ボク土層は2層に分かれており、下層が若干色が薄いようである。しかし、発掘時には区分できなかった。遺物を多量に包含している。遺構はアカホヤ火山灰面で検出した。

第4節 1、2区の調査(第4図)

1、2区は一部アカホヤ面まで削平を受けており、遺構もなく、耕作土層及び擾乱層より遺物が若干出土したのみである。

1区の遺構・遺物

遺構は確認されず、遺物はいずれも細片で実測できなかった。

2区の遺構・遺物(第5図)

2区もアカホヤ層まで擾乱されており、遺構は検出されなかった。遺物については次のとおりである。

土師器

1～3は甕の口縁部である。短く外反し、端部は丸い。

須恵器

4、5は高台付の碗である。

縄文土器

6～8は深鉢である。6、7の口縁部はやや外反し、端部外面に斜めの刻み目突帯を巡らせている。8は口縁端部に貝殻条痕文を施している。

第5節 3区の調査(第6図)

3区の東側にあたる3～3区、3～4区からは縄文時代3軒、弥生時代1軒、古墳時代29軒の堅穴住居跡が、また、大型の掘立柱建物が1軒検出されている。3区のほぼ全体にビット群が分布していたが、諸般の事情により3～4区のみの調査となった。

1.3～1区の遺物(第7～9図)

遺物は古代のものを中心に耕作土、黒ボク土から出土している。

布痕土器

1は布痕土器である。外面に指オサ工痕があり、内面の布目は平織りである。この他にパンケース1箱分出土している。

土師器

2、4、5、15は壺で、うち4、5はヘラ切り底である。15は墨書き器で口縁端部内面に墨痕がある。9、11、14は高台付の壺である。

須恵器

3は壺で、ヘラ切り底である。

内黒土器

6～8は壺である。10は皿で、回転ヘラ切りを行っている。12、13は高台付の壺である。

土錐

16～31は土錐である。うち30、31は3～2区、32は3～3区の黒ボク土層から出土したものであるが、レイアウトの都合で同ページに掲載した。

2.3～2区の遺物(第10、11図)

包含層は黒ボク土である。遺物は縄文～古代に及んでいる。

土師器

11は甕である。口縁部は短く外反し、端部は丸い。4は鉢である。底部は平底である。5、6は壺の口縁部で、内外面に丹塗りが施されている。

縄文土器

3は深鉢で、口縁部はやや外傾しており、端部は平坦である。端部上面には孔列文があり、口縁部外面には頭部に横方向の弦線と、口縁端部から横方向の沈

餅田遺跡

縁までの間を縦方向に連続して沈線が施されている。

弥生土器

7～9、11は甌である。7、11の口縁部は内傾し、端部は外向きに突き出し、やや下に垂れている。三角突帯が3条巡っている。9は口縁部にタテ2条の短い突帯があり、直下を水平方向に巡っている突帯とつながっている。2は底部で中央にくぼみがあり、やや突き出している。10は台付甌の底部で、裾がやや広がっている。

須恵器

12、13は広口甌で、口縁部内面から外面にかけて灰をかぶっている。12の胴部内面にタタキ痕がある。14は高坏で、坏部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部で外反する。坏部外面には2条の三角突帯を巡らし、突帯の間に櫛描波状文を施している。6世紀初頭と思われる。

縄釉陶器

15は甌である。復元口径28.2cm。

3.3-3区の調査

(1) 縄文時代の遺構・遺物

竪穴住居

5号住居(第12図)

調査区の北東部に位置し、住居の直径は3.8mであり、床面積は11.16m²である。円形プランを持つ。住居中央から検出された土壙からは石、土器片、炭化物が出土しており、この住居の炉跡と思われる。土壙内の土器片は細片で実測できなかった。

5号住居跡出土遺物(第13図)

遺物は少なく、いずれも埋土からの出土である。

1は小型の甌で鍍先状の口縁部を持つ。2は甌の底部でやや上げ底である。

3は甌で、口縁端部外面に台形突帯を巡らし、端部に縦2本の沈線を施している。弥生時代後期と思われる。

6号住居(第14図)

調査区の北部に位置し、住居の直径は2.94mであり、床面積は6.12m²である。円形プランを持つ。住居中央から検出された土壙からは炭化物が出土しており、この住居の炉跡と思われる。床面からは西平式の深鉢が出土している。

6号住居跡出土遺物(第15図)

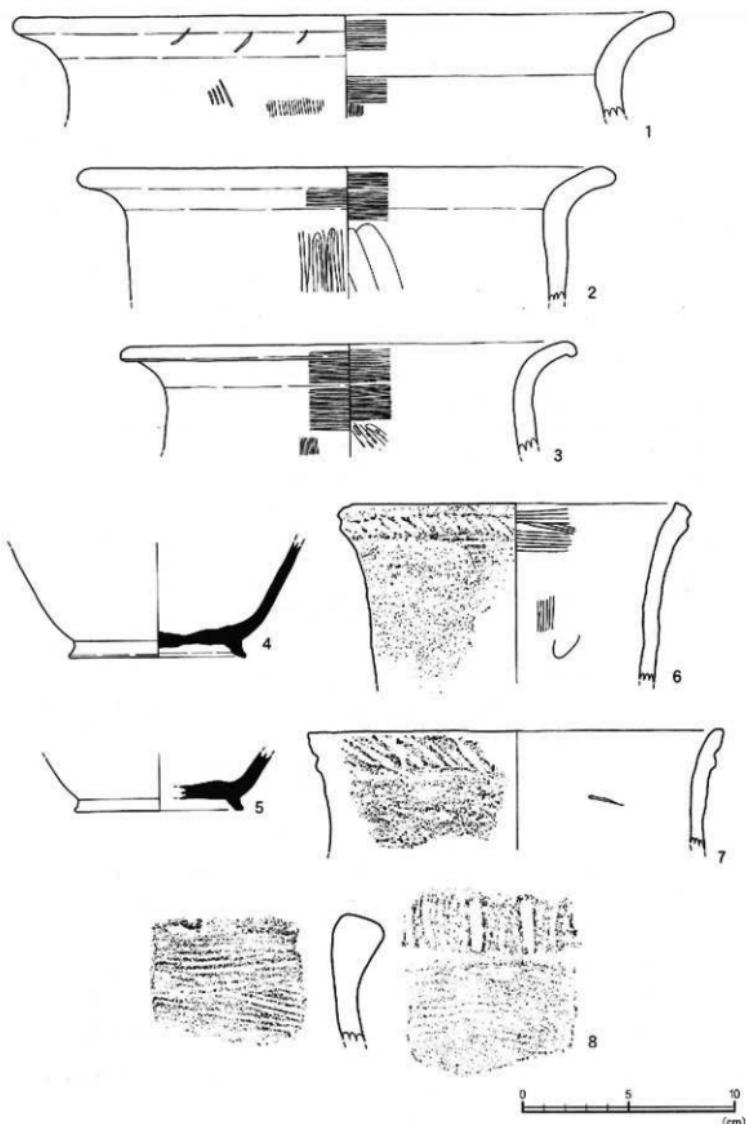
縄文土器

1、2は深鉢で外面タテ方向のミガキ、内面横方向のミガキを施している。2の底部はわずかに上げ底である。床面から出土している。

餅田遺跡

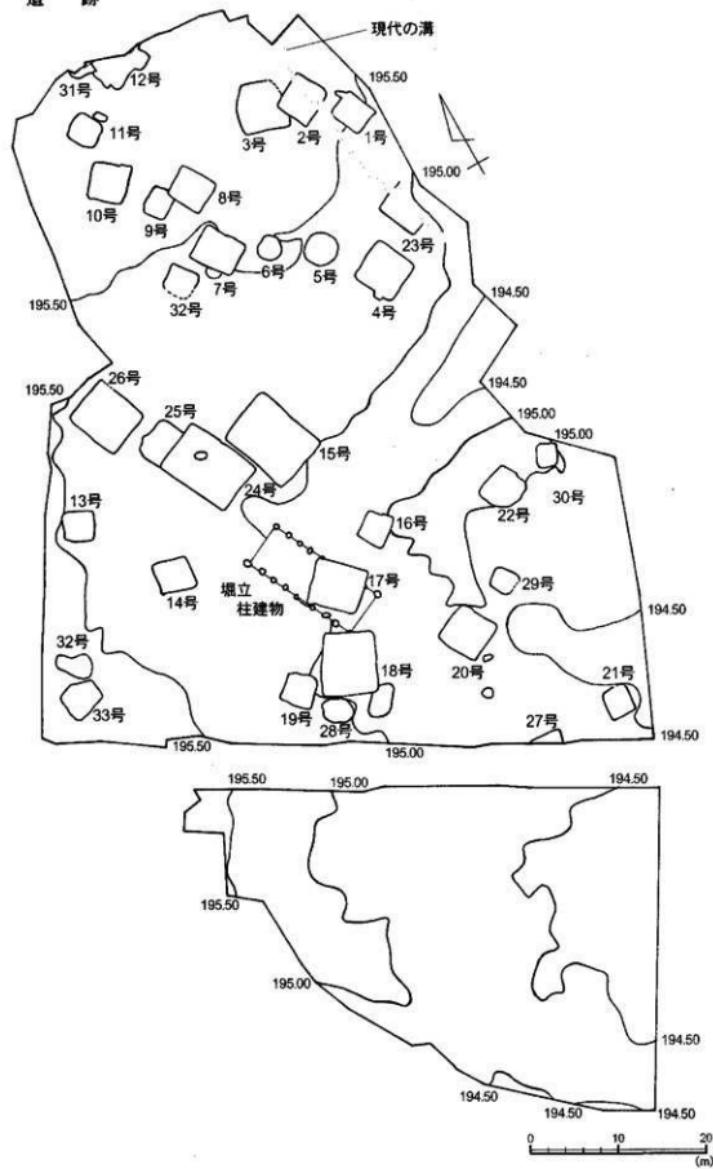


第4図 餅田遺跡位置図

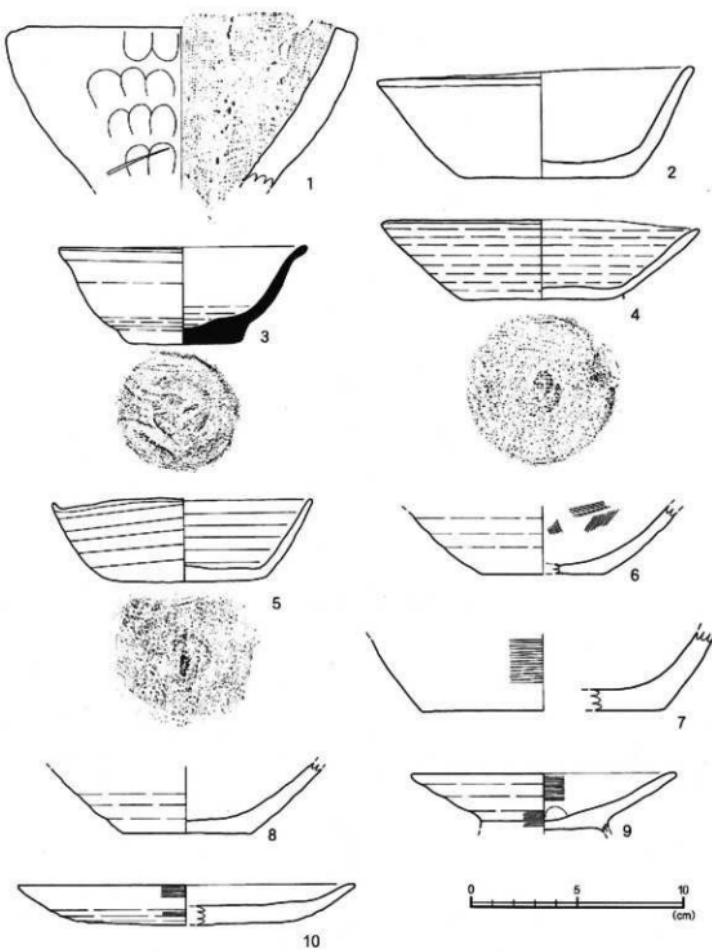


第5図 2区出土遺物

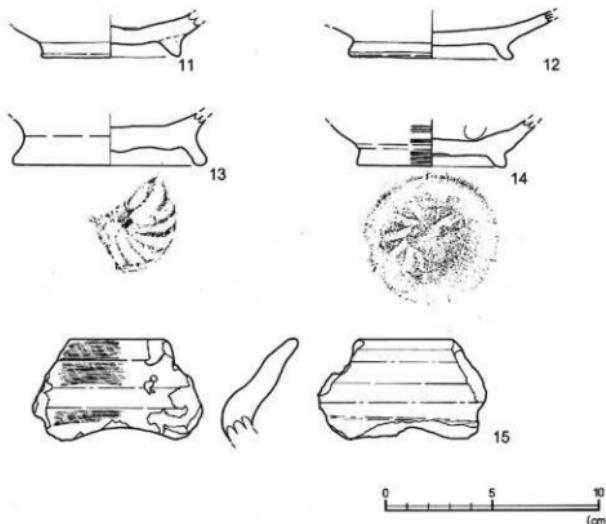
餅田遺跡



第6図 3区遺構分布図



第7図 3-1区包含層出土遺物（1）



第8図 3-1区包含層出土遺物（2）

28号住居(第16図)

調査区の南西端に位置し、住居の長径は3.72m、短径は3.1m、床面積は8.47m²である。だ円形プランを持つ。住居北東部に不定形の土壤を持つ。主柱は2本で、主柱穴の深さは約20cmである。

遺物は出土しなかった。

31号住居(第17図)

調査区の北端に位置し、12号住居に切られている。また住居の過半は調査区外にあたり、完掘していない。円形住居である。

遺物は出土しなかった。

(2)弥生時代の遺構・遺物

竪穴住居跡

12号住居(第18図)

調査区の北端に位置し、31号住居を切っている。花弁型住居であるが、住居北半分は調査対象区外にあ

たり、完掘されていない。

炭化物が多数出土している。また、貼り床が5層確認された。

12号住居出土遺物(第19、20図)

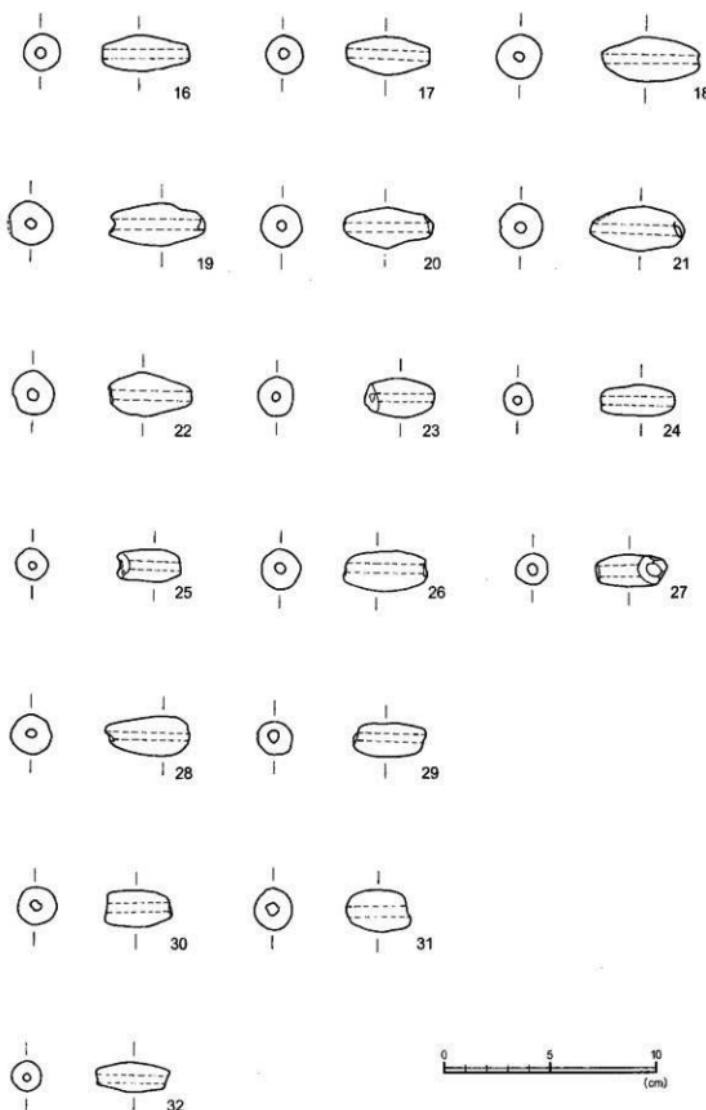
1～3は甕である。2は礫先状の口縁を持つ。貼り床1層目直上より出土している。7～14は口縁破片である。11は3層より出土している。13、14は口縁端部外面に刻み目突帯を巡らしている。15は胴部に斜めの刻み目突帯を巡らす。

4、5は長頸壺で床面から浮いた状態で出土している。

6は台付鉢で、内面にハケ目調整を施している。口縁にかけて内湾して立ち上がる。床面から浮いた状態で出土している。

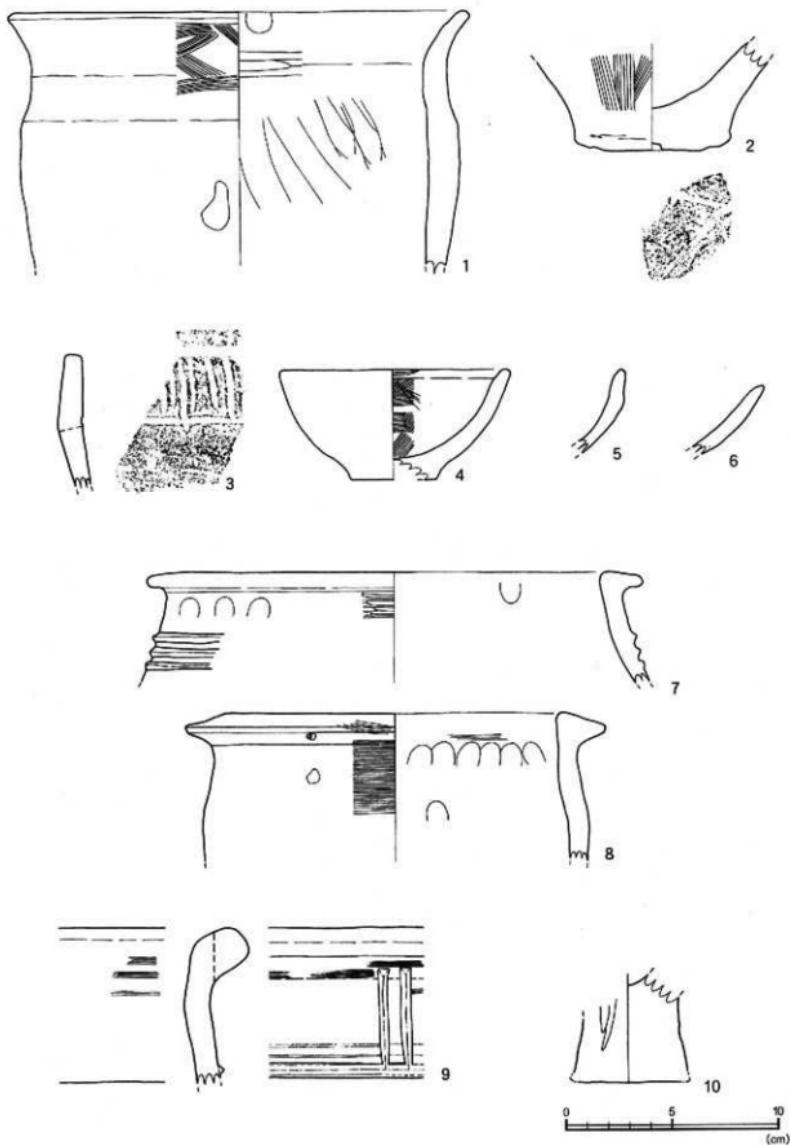
16はミニチュアの高杯である。

17～21は縄文土器の深鉢で、17～19は2層より出土している。20、21は1層から出土している。西

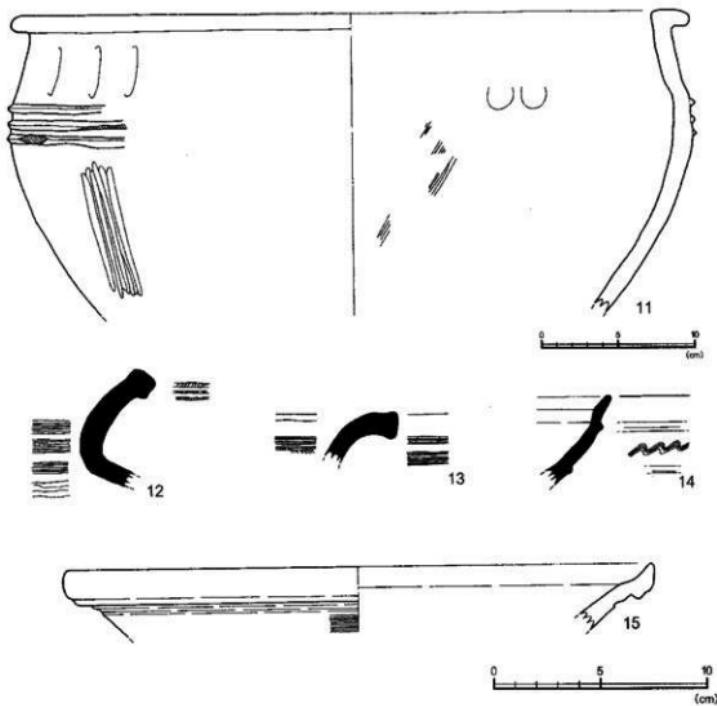


第9図 3-1区出土遺物(3)

餅 田 遺 跡



第10図 3-2区包含層出土遺物（1）



第11図 3-2区包含層出土遺物（2）

平系と思われるが、31号住居からの流れ込みの可能性がある。

（3）古墳時代の遺構・遺物

竪穴住居跡

1号住居(第21図)

調査区の北東部に位置し、住居の長辺は3.86mで短辺は3.28mであり、床面積は12.66m²である。

住居北東には外に向かって1.2m程度の浅い掘り込みがあり、南東隅より甌が出土している。

住居を支える主柱は4本と想定されるが北西隅、南東隅からは検出されなかった。主柱穴の深さは約18~38cmである。

1号住居跡出土遺物(第22、23図)

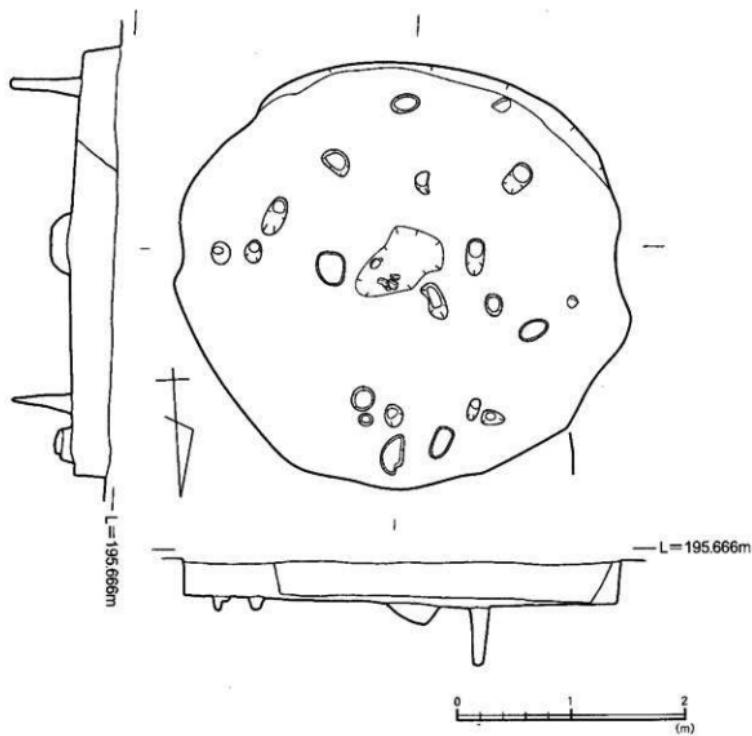
整理作業時のミスで甌、甌1を除き、原位置不明。

1、2、5~8は甌である。1は頸部に斜めの刻み目突帯を持つ。2は長胴の粗製甌である。器形、胎土が後述の甌と類似しており、甌の可能性もあるが、底部を欠くため不明である。3、4、9、13は壺である。9は内外面にミガキを施している。

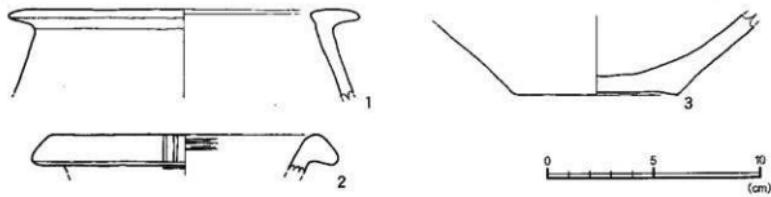
10は単口式の甌である。輪積み痕に指押さえが明顯に残っている。住居南東壁上に横転した状態で出土した。

11、12、14、15は高杯である。体部の浅いもの(11、12)と深いもの(14、15)の2種類が見られる。

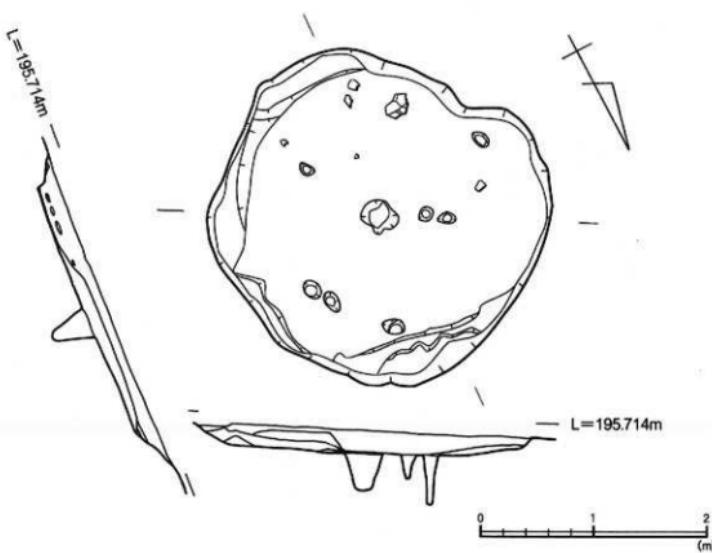
餅田遺跡



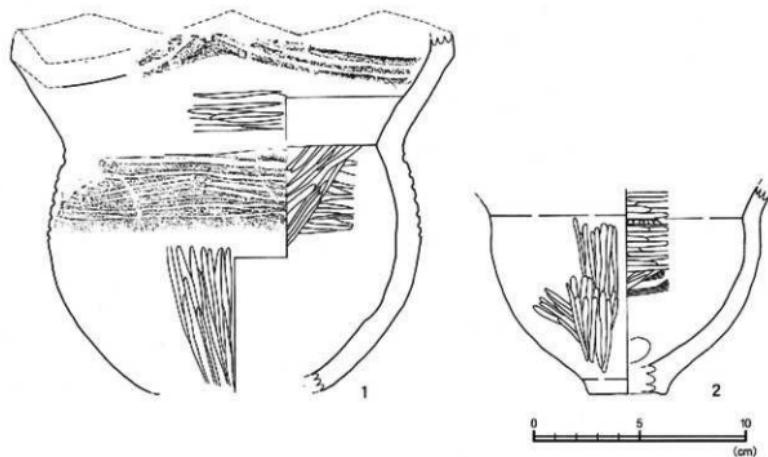
第12図 3-3区5号住居



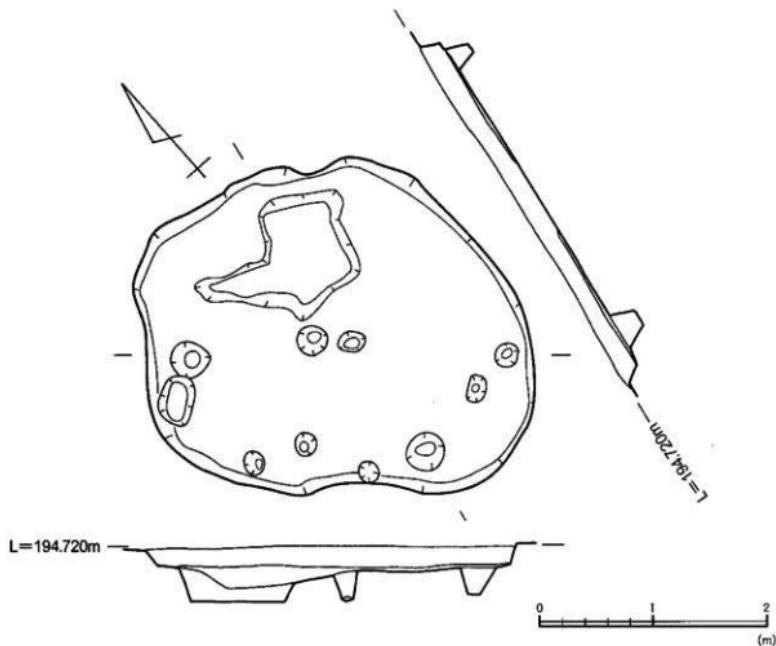
第13図 3-3区5号住居出土遺物



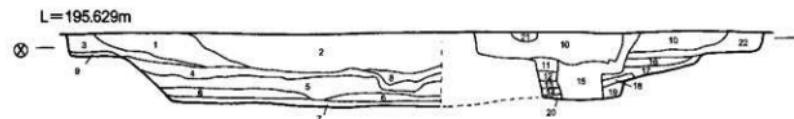
第14図 3-3区 6号住居



第15図 3-3区 6号住居出土遺物



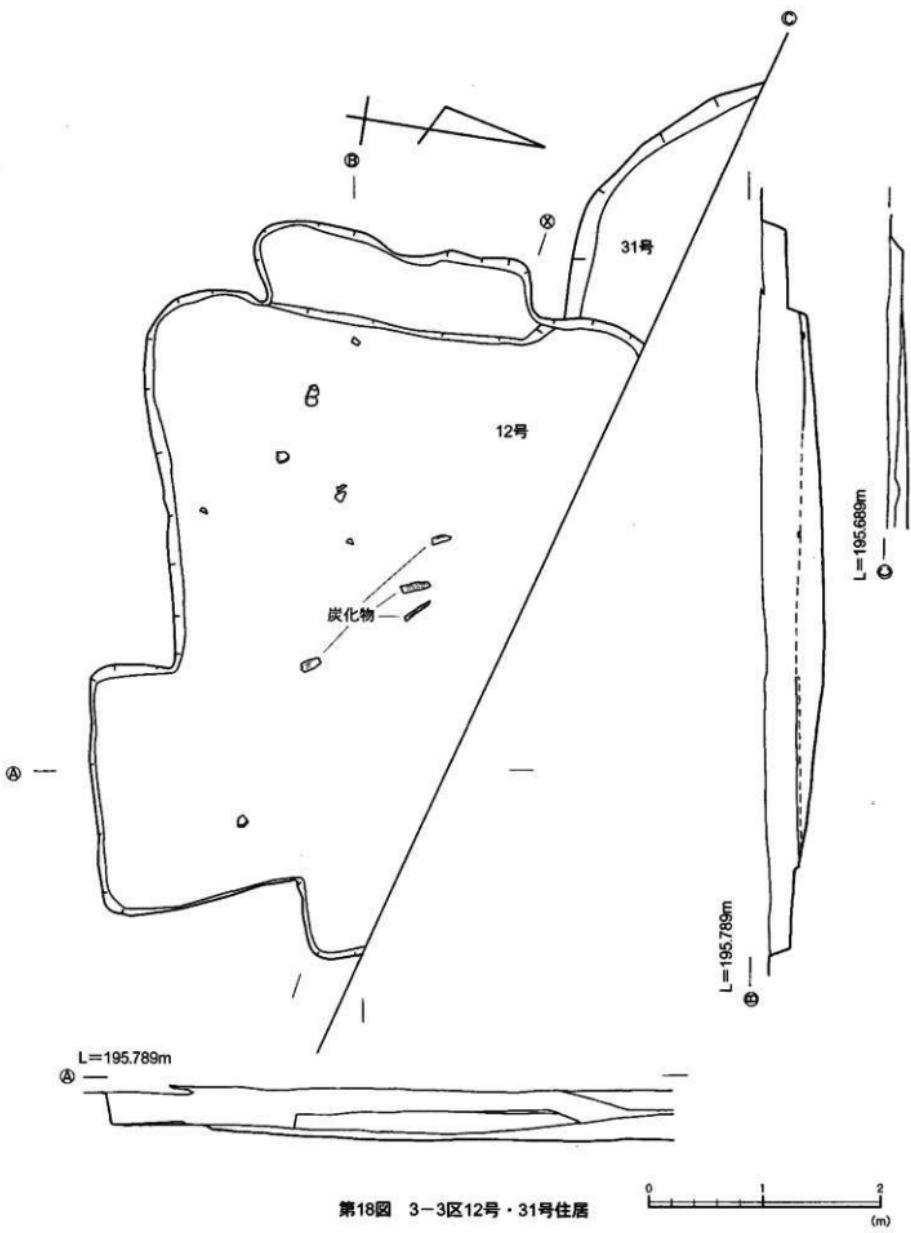
第16図 3-3区28号住居



- 1: 黒褐(10YR3/1)、アカホヤ粒(2cm大)、炭化粒を含む。
- 2: 黒褐(10YR2/3)、アカホヤ粒、炭化粒、わずかに石を含みしまっている。
- 3: 黒褐(7.5YR3/1)、アカホヤ粒(1cm程度)、炭化粒を含みやや固め。
- 4: 暗褐(10YR3/3)、アカホヤ粒(2cm程度)を多數含む。
- 5: 黒(10YR2/1)、アカホヤ粒を含み固い。
- 6: 黄褐(10YR5/6)、アカホヤのブロック群。
- 7: 黒褐(10YR2/2)、わずかにアカホヤ粒を含む、粘土質。
- 8: 黑(7.5YR2/1)、アカホヤ粒を含みしまっている。
- 9: 黄褐(10YR5/6)、アカホヤ
- 10: 黒褐(10YR2/2)、アカホヤ粒、炭化粒を含む。
- 11: 黒褐(10YR3/1)、アカホヤ粒、炭化粒を含む、固い。
- 12: 黒褐(10YR3/2)、アカホヤのブロックを多數含む。
- 13: 黒褐(10YR2/3)、わずかにアカホヤ粒を含み、固い。
- 14: にぶい黄褐(10YR5/4)、アカホヤのブロック群。
- 15: 灰黄褐(10YR4/2)、アカホヤ粒を含む、粘土有り。
- 16: 暗褐(10YR3/3)、アカホヤのブロックを多數含む。
- 17: 褐(10YR4/4)、16よりアカホヤの量が多い。
- 18: 黒褐(10YR3/1)、ごく細かいアカホヤ粒を含み柔かい。
- 19: 黑(10YR2/1)、ごく細かいアカホヤ粒を含み柔かい。
- 20: 黑(10YR1.7/1)、アカホヤ粒を含まない粘土質。
- 21: 明黄褐(10YR6/8)、アカホヤのブロック群。
- 22: 黑(10YR1.7/1)、ごく細かいアカホヤ粒を含み固い。

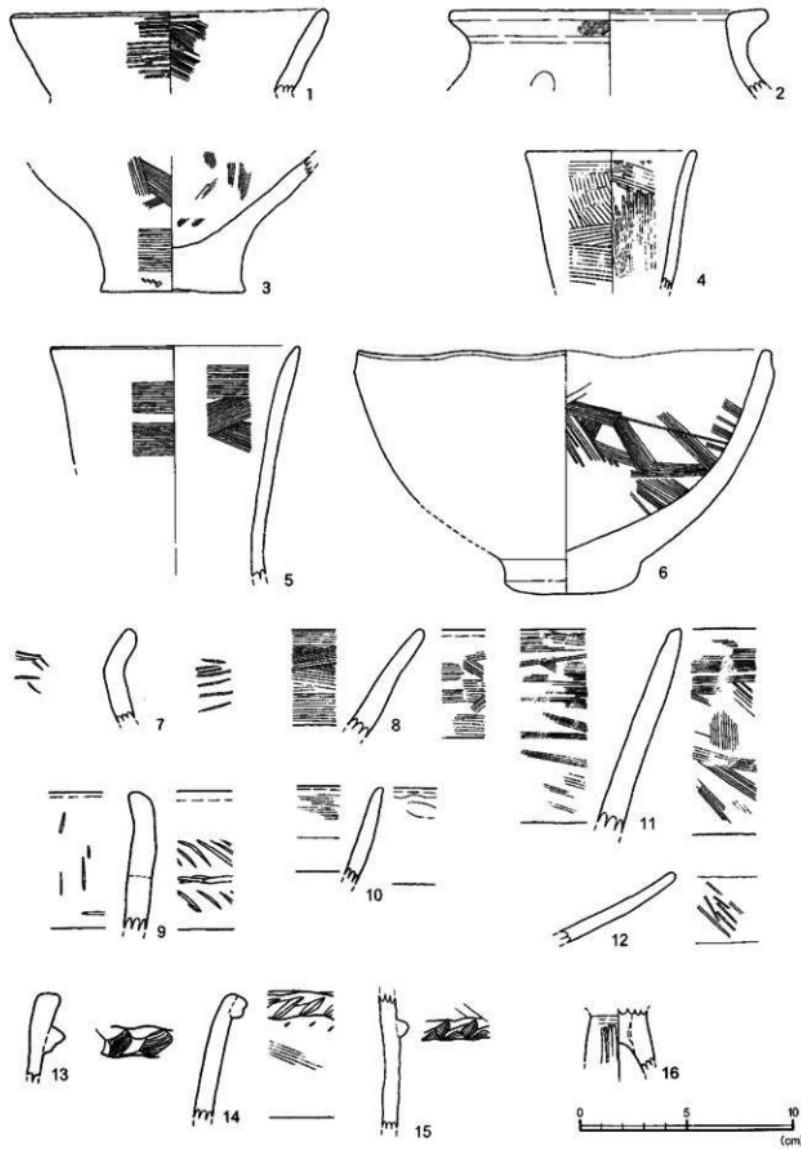
第17図 3-3区12号土層図

餅田遺跡

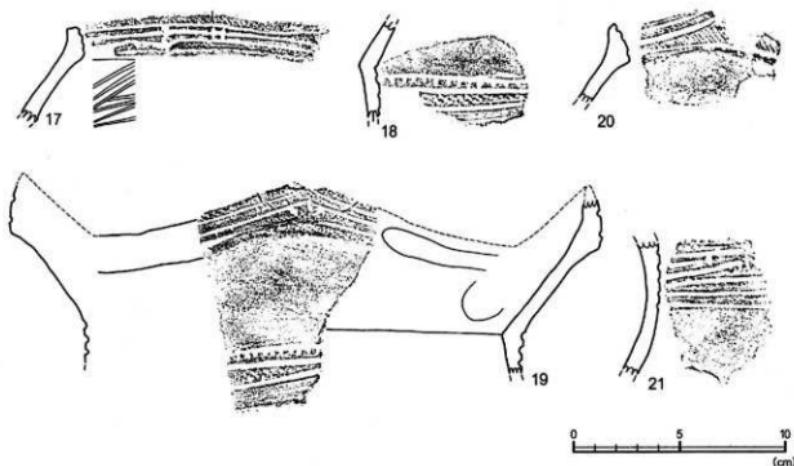


第18図 3-3区12号・31号住居





第19図 3-3区12号住居出土遺物(1)



第20図 3-3区12号住居出土遺物（2）

16は須恵器甕の胴部片で、内外面にタタキを施しており、気泡による亀裂を生じている。

2号住居(第24図)

調査区の北東部に位置し、3号住居を切っている。また住居の東側を溝で切られている。住居の長辺は4.44mで短辺は3.82mであり、床面積は17m²である。

住居北壁沿いにピットが2基検出されているが、この住居の構造に係わるものかどうかは不明である。

2号住居跡出土遺物(第25、26図)

2、3、8、14~19、22、26、28~31は甕である。口縁端部は平坦なもの(2、26など)、丸いもの(14)が見られる。また端部上面にナデ調整による横線が入るもの(17、18など)がある。底部は平底(28、29など)と上げ底(8)がある。なお、8は住居中央床面より出土した。

1、9、10は甕である。1は二重口縁甕で、埋土より出土した。9は小型丸底甕の口縁である。10は台付甕の脚部である。

4は鉢である。胸部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部でわずかに内湾する。内外面に指才サエ痕がある。復元口径14.4cm。

5~7、13、20、21、23、25、27は坏である。

11、12、24は高坏の脚部である。ラッパ状に開くもの(11)、エンタシス状のもの(12)がある。

32~35は繩文土器である。口縁端部外面に刻み目突帯を巡らす。また突帯の直下に孔列文を施すものがある。

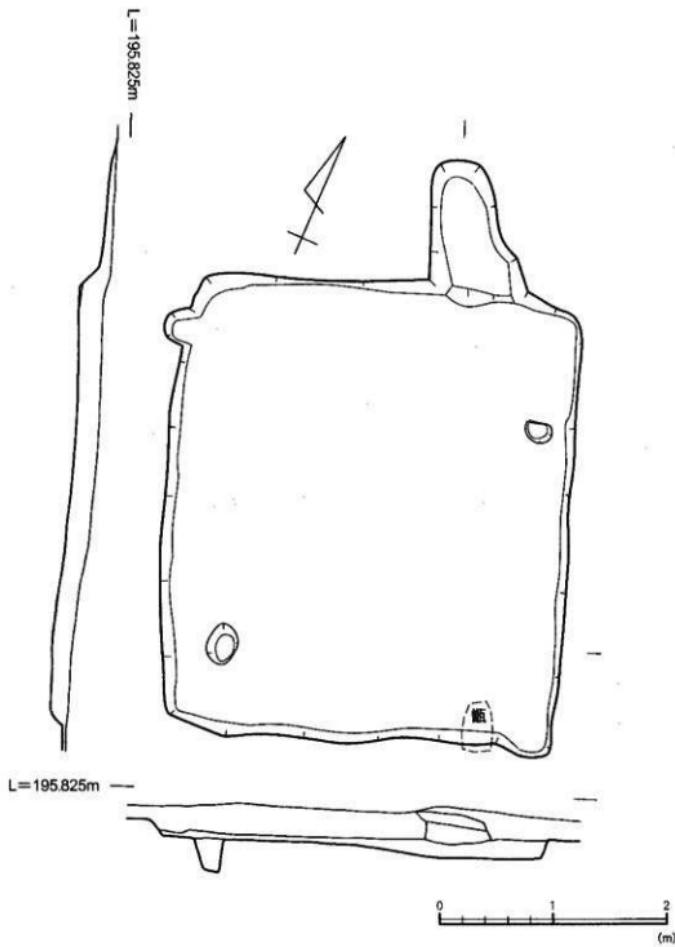
3号住居(第27図)

調査区の北東部に位置し、2号住居に切られている。また住居の東側を溝で切られている。住居の長辺は5.68mで短辺は5.3mであり、北西壁が外側に膨らんだプランである。壁から0.6~1m内側に溝が巡っており、深さは5cm前後である。また溝内側の区画は外側に比べ2~4cm程度低くなっている。住居中央西側より検出された土壤からは石、土器片、炭化物が出土しており、この住居の炉跡と思われる。住居を支える主柱は4本と想定されるが北東部からは検出されなかった。主柱穴の深さは約50cmである。

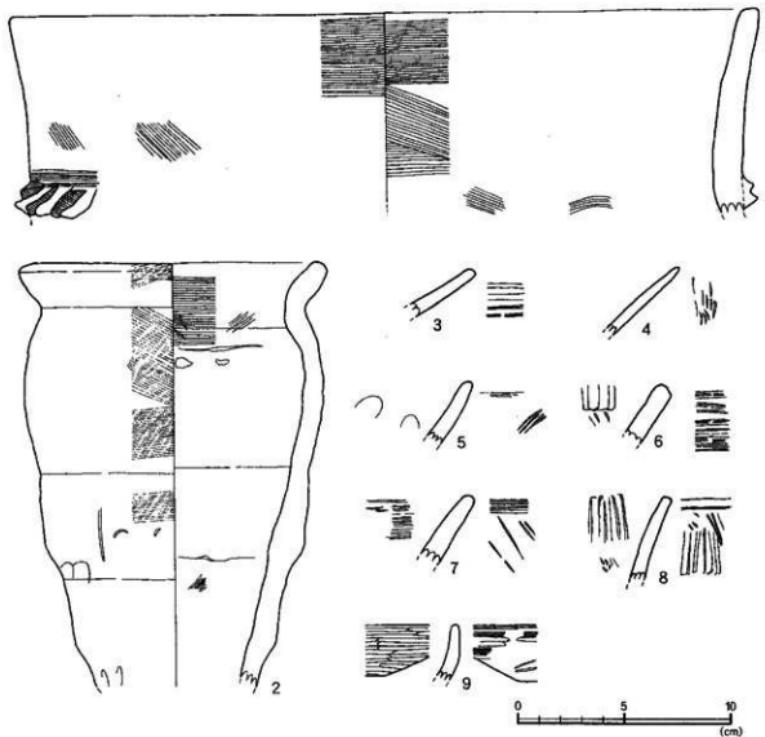
3号住居跡出土遺物(第28図)

1は甕の口縁部である。口縁部外面に突帯を巡らしている。2は甕の肩部である。3は弥生土器の胸部である。突帯を3条巡らしている。4はミニチュア土器の底部である。いずれも埋土から出土した。

餅田遺跡



第21図 3-3区1号住居



第22図 3-3区1号住居出土遺物(1)

4号住居(第29図)

調査区の北東部に位置し、住居の1辺は5mであり、ほぼ方形を呈している。床面積は25m²である。住居南西部に0.65m×1m程度の張り出し部を、また北西壁に接して深さ3cmの壁帯溝を持つ。住居中央より検出された土壌からは炭化物が出土しており、この住居の炉跡と思われる。

住居を支える主柱は4本と想定されるが南東部からは検出されなかった。主柱穴の深さは約50cmである。

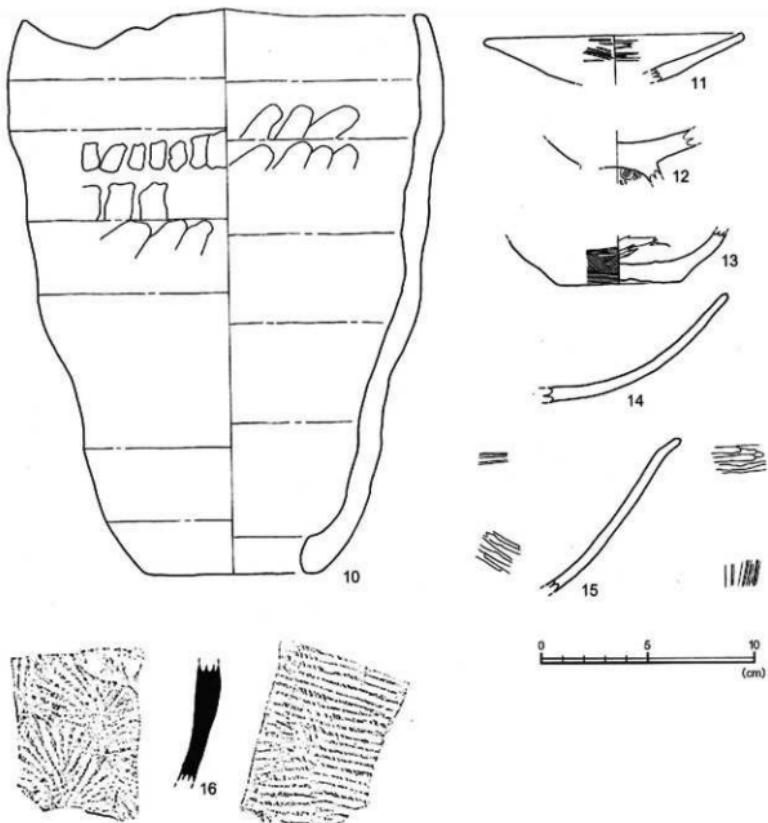
住居内からは多量の河原石が出土している。

4号住跡(第30図)

1～5、7は土器である。1～5は甕である。7は壺で、外面に丹塗りを施している。

8～10は須恵器である。8、9は壺で口頸部は丸みをもって外反し、口縁端部を折り曲げて肥厚する。口頸部内面及び肩部外面に灰をかぶっている。10は壺蓋で体部は浅い。天井部外面にヘラ記号がある。TK43段階併行からやや下るとと思われる。

6は弥生土器で、口縁部外面に斜めの刻み目突帯を巡らしている。



第23図 3-3区 1号住居出土遺物（2）

7号住居(第31図)

調査区の北西部に位置し、住居の長辺は4.92mで短辺は3.94mであり、床面積は19.38m²である。東西北3方の壁に接して深さ3cmの盤帯溝が巡っている。

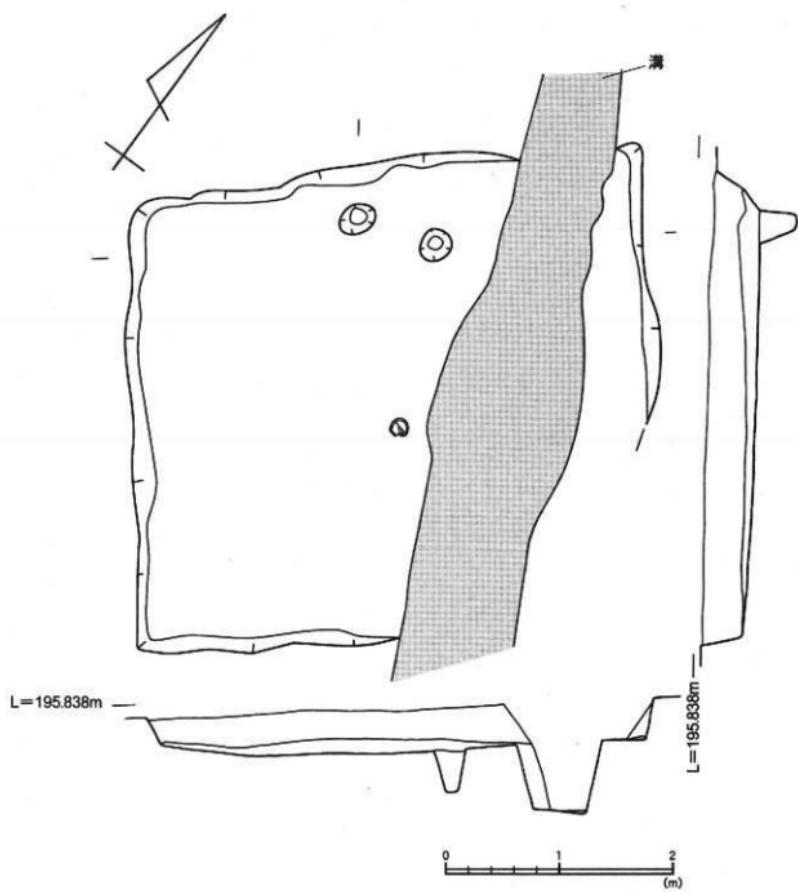
住居を支える主柱は4本と想定されるが北西隅からは検出されなかった。他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に關係あるものかどうかは不明である。主柱穴の深さは約50cmである。

7号住居跡出土遺物(第32図)

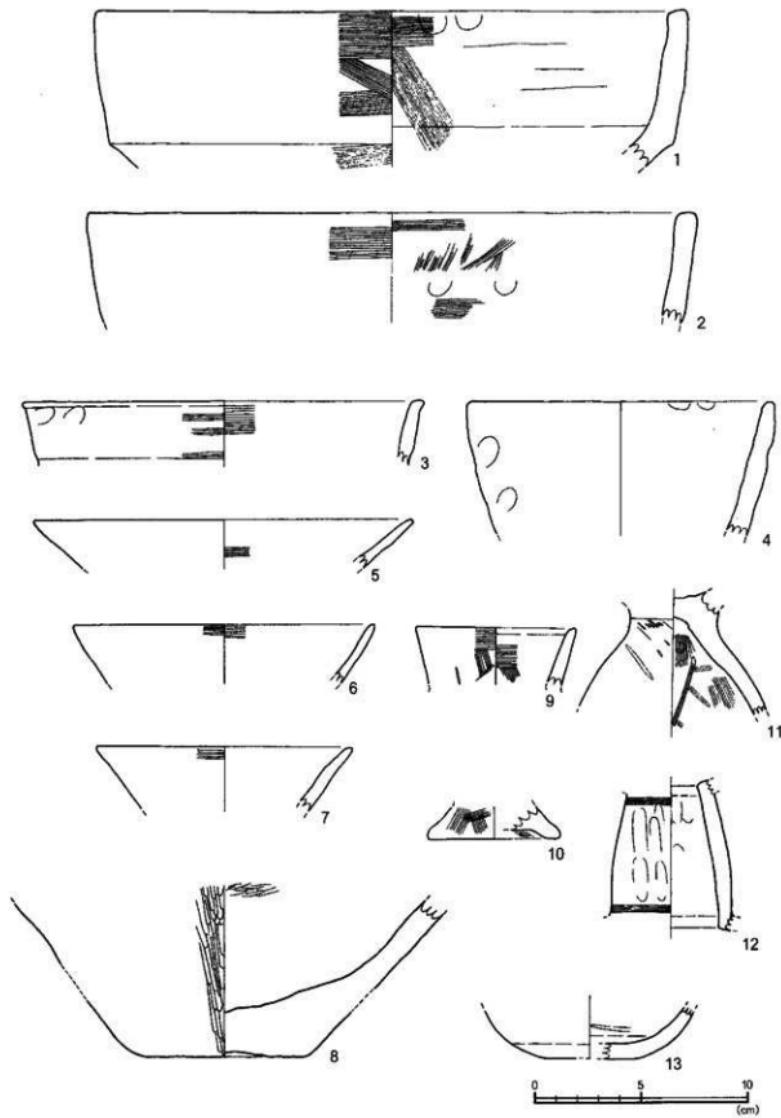
3～6は甕である。3は底部で上げ底である。外にやや突き出している。床面から出土した。1、2は高杯である。床面から浮いた状態で出土した。

9～12は縄文土器である。いずれも床面から浮いた状態で出土した。三万田系と思われる。

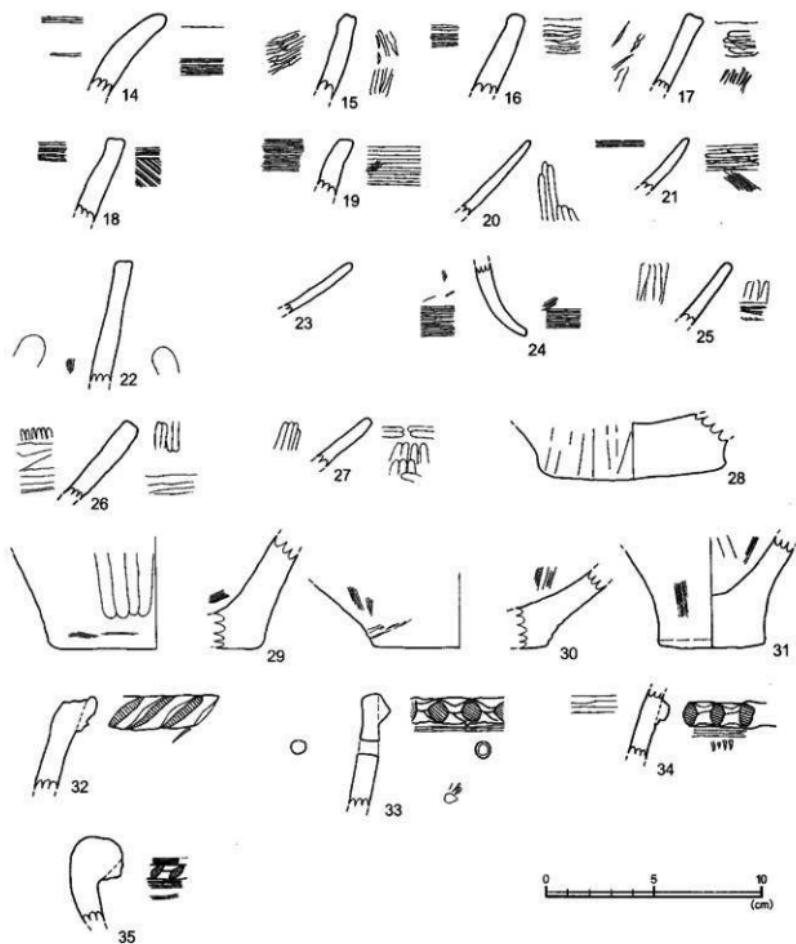
7は弥生土器である。小型の甕で、鋸先状の口縁端部を持つ。



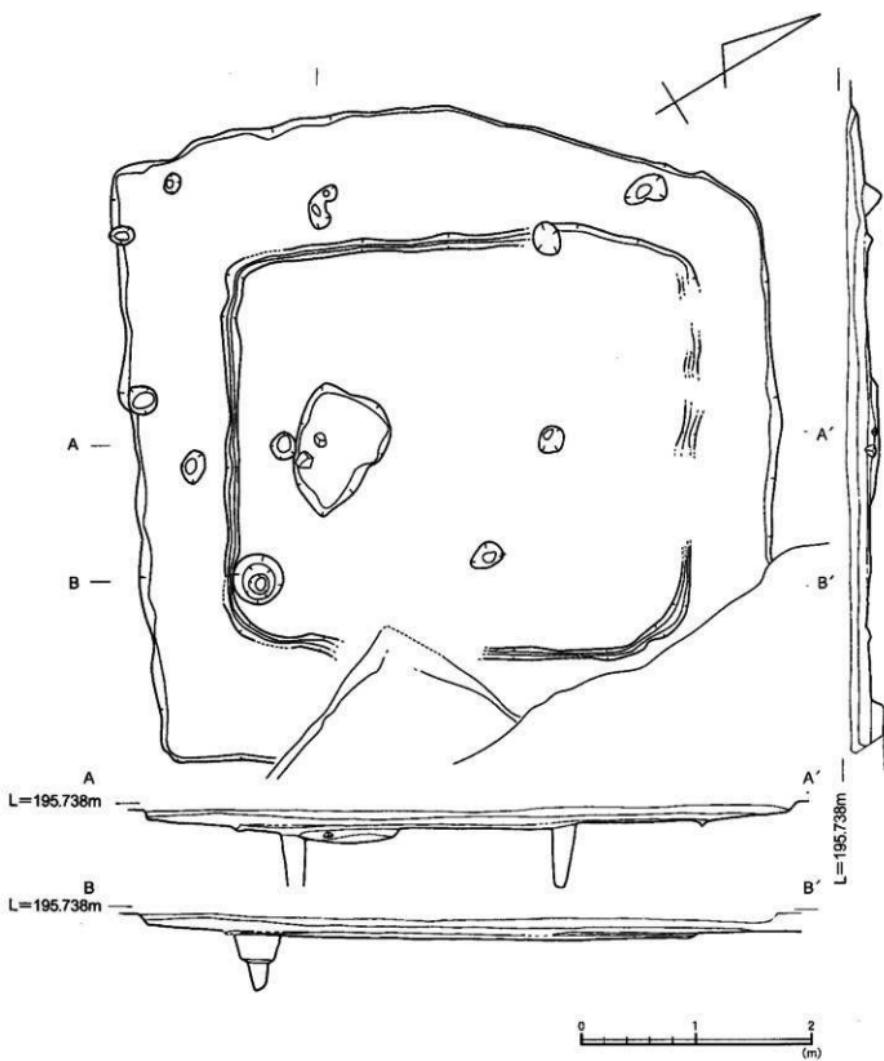
第24図 3-3区 2号住居



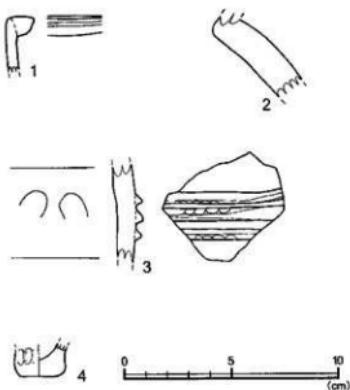
第25図 3-3区2号住居出土遺物(1)



第26図 3-3区 2号住居出土遺物 (2)



第27図 3-3区3号住居



第28図 3-3区 3号住居出土遺物

8号住居(第33図)

調査区の北西部に位置し、9号住居を切っている。住居の長辺は4.5mで短辺は3.78mであり、床面積は17m²である。

住居の中央南側には埋甕炉が設置されており、甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。

住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約40～60cmである。他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。

8号住居跡出土遺物(第34図)

1～6は土師器である。1、2は甕である。1は口縁部は短く外反し、端部は丸い。肩部に1.5～2cmのタテ方向の刻みを施している。床面から浮いた状態で出土した。

3、6は甕である。6は埋甕で、輪積み痕が沿つて胴部上半分を打ち欠いた状態で使用していたと思われる。甕のつくりは丁寧である。胴部から底部にかけてタテに4cm程度の亀裂があり、焼成時に生じたものと思われる。3は6の周囲に散乱しており、6の頭部と思われるが、肩部を欠くため、6と接合しなかった。

4は高杯である。体部は直線的で屈曲は明瞭である。端部は丸い。

5は壺である。内外面に丹塗りを施し、横方向のミガキ調整をしている。床面直上より出土した。この他、住居南壁中央沿いから、3、6と同一個体と思われる胴部破片が床面から浮いた状態で出土して

いる。

9号住居(第35図)

調査区の北西部に位置し、南東隅を8号住居に切られている。住居の長辺は3.2mで短辺は2.38mであり、床面積は7.62m²である。

住居の規模から主柱は2本と想定される。主柱穴の深さは約40～60cmである。

甕の胸部と思われる細片が2点出土しているが、計測できなかった。

10号住居(第36図)

調査区の北部に位置し、住居の1辺は4.2mであり、ほぼ方形を呈している。住居北東部に0.4m×1.4m程度の張り出し部を持つ。床面積は18.1m²である。

住居の中央には埋甕炉が設置されており、甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。

住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約40～50cmである。

10号住居跡出土遺物(第37、38図)

1～10は土師器である。1～6は甕である。1は埋甕で、内面には輪積み痕が残っており、甕の底部も輪積み痕に沿って割れている。

2～4は小型甕の口縁部である。6は厚い平底で、わずかに突き出している。床面から浮いた状態で出土した。

7～10は壺である。内外面に丹塗りを施している。10は7と同一個体の可能性がある。床面より浮いた状態で出土している。

12～15は須恵器である。12、13は広口壺で床面より浮いた状態で出土している。15は壺の肩部で内外面にタタキ調整を施している。14は壺身である。

11は弥生土器の甕である。

11号住居(第39図)

調査区の北部に位置し、住居の長辺は3.2mで短辺は2.98mであり、床面積は9.53m²である。住居の東側に0.9m×1.2mの土壙が隣接するが、住居との関連は不明である。

また住居内のピットであるが、主軸がずれており、後世の掘立柱建物の柱穴と考えられるため、住居の柱穴については不明である。

11号住居跡出土遺物(第40図)

1、4は甕である。

2は壺である。口縁部内面は摩耗している。3は高杯の脚部である。エンタシス状を呈している。

5は須恵器壺蓋の天井部である。

餅田遺跡

13号住居(第41図)

調査区の西端に位置し、住居の長辺は3.46mで短辺は3.06mであり、床面積は10.59m²である。住居南東壁際の床面がやや盛り上がっている。

住居の中央やや東側には埋甕が設置されており、甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。

住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約20~40cmである。

13号住居出土遺物(第41図)

1は甕である。粗製で頭部に指オサエが残っている。頭部へ胴部上位にスス痕がある。頭部を下にし、埋甕として使用していた。

2は壺で器壁は薄く、胴部は球形を呈すると思われる。

14号住居(第42図)

調査区の西端に位置し、住居の長辺は3.82mで短辺は3.4mであり、床面積は12.99m²である。

住居の中央には埋甕が設置されており、甕に伏せた状態で平底の鉢が一個出土している。甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。

住居を支える主柱は2本で、主柱穴の深さは約20~30cmである。

14号住居出土遺物(第43図)

1~5は甕である。1は埋甕で完形品である。口縁端部は尖っており、輪積み痕を残している。3は丸底で、床面直上から出土した。5は小型の甕で、焼成がやや甘い。床面から浮いた状態で出土した。

6は鉢である。1の上に伏せた状態で出土した。粗製である。

7は壺で外面にミガキを施している。

15号住居(第44図)

調査区の中央に位置し、住居の長辺は8.82mで短辺は6.82m、床面積は60.15m²と他の住居の2~3倍の規模を持つ。住居東、北壁の一部に壁帶溝があり、また北西隅に不定形の凹みと東側に溝状の造構を持つ。

住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約30~50cmである。他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。隣接する24号住居との後関係は不明である。

15号住居出土遺物(第45~49図)

住居内には土器が大量に投棄され、遺物量はパンケース3箱分に及んだ。同様に、隣接する24号住居でも大量の土器の投棄が見られる。なお、出土層位について言及していないものはすべて埋土からの出土で

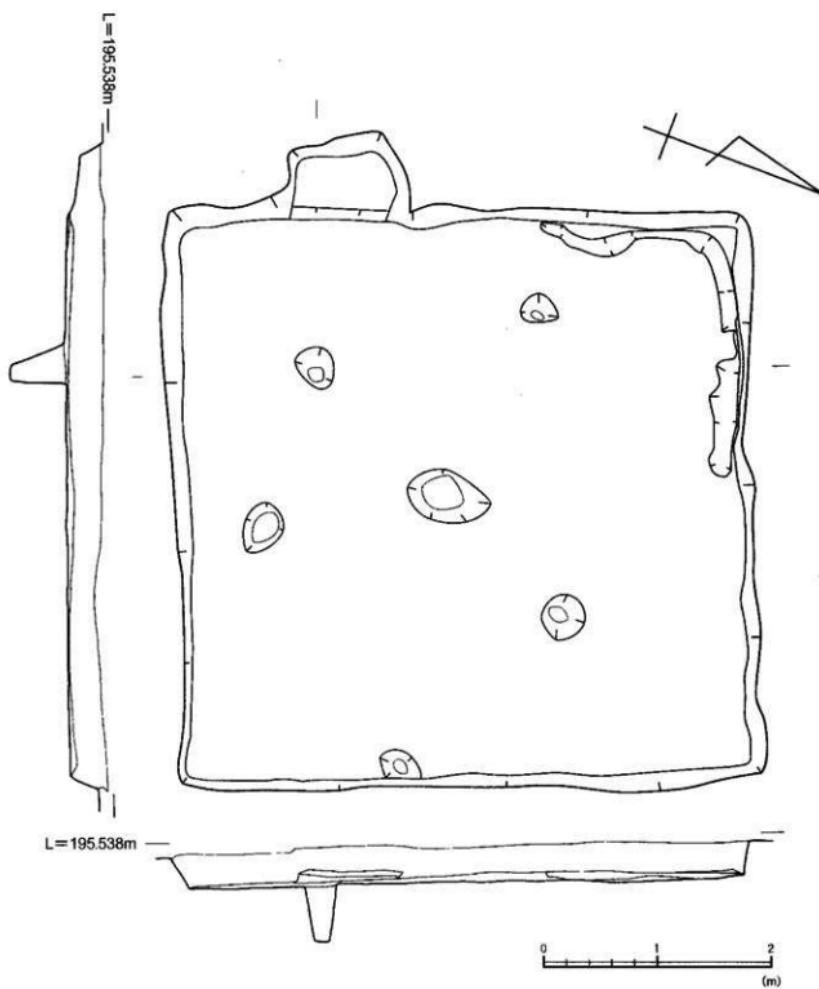
ある。

1から52は土師器である。1~33は甕で、頭部に刻み目突帯を巡らすものの(1、2)、口縁部に最大径を持ち、底部に向かってぼぼましていくものの(1、6、7、8)、頭部が緩く縮まるものの(2、3、4、9)などが見られる。

1の口縁端部は平坦で、胴部に布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らしている。床面から浮いた状態で出土し、破片は住居内に散乱していた。2の口縁部はやや内湾して立ち上がる。端部は平坦である。頭部は布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らしている。床面から浮いた状態で出土した。3の口縁部は直線的でやや外傾し、端部は丸い。床面から浮いた状態で出土した。4の口縁部はやや外反し、端部は平坦である。最大径は口縁部にある。床面から浮いた状態で出土し、破片は住居内に散乱していた。5の口縁部は外反し、端部は丸い。頭部外面に小さな段を持つ。6の口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸い。7の口縁部は内湾し、端部は丸く、端部内面がやや膨らむ。8の口縁部はほぼ直立し、端部は平坦である。床面から浮いた状態で出土した。9の口縁部はやや外反し、端部は平坦である。床面から浮いた状態で出土した。10の口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、端部は丸い。11の口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部付近でわずかに外反する。端部は丸い。12の口縁部は直線的に開き、端部は平坦である。13の口縁部は直線的に開き、口縁端部は丸い。外面にススが付着している。14の口縁部は直線的に開き、端部は平坦である。床面から浮いた状態で出土した。15は口縁部片で、床面から浮いた状態で出土した。16の口縁部はやや外反し、端部は平坦である。17は口縁端部付近でやや外反し、端部は平坦である。18は直線的に開きながら立ち上がり、端部は平坦で、端部外面に調整による突き出しがわずかに見られる。19の口縁端部には調整によるくぼみがある。20は口縁端部付近でやや外反し、端部は丸い。床面から浮いた状態で出土した。21の口縁部は直線的に開き、端部は丸い。22の口縁部はわずかに内湾し、端部は平坦である。23の口縁部は直線的に開き、端部は平坦である。24はくの字口縁を持ち、端部は平坦である。床面から浮いた状態で出土した。25の口縁部は直線的に開き、端部は平坦である。26の口縁部は軽く外反する。端部は丸い。27は平底でわずかに突き出している。床面直上から出土している。28は平底でやや突き出している。29は平底で大きく突き出している。30の底部は厚く、わずかに上げ底である。外面にはスス付着。31は平底でわずかに突き出している。32は上げ底である。胴部は直線的に開いている。33は上げ底である。丁寧なつくりである。

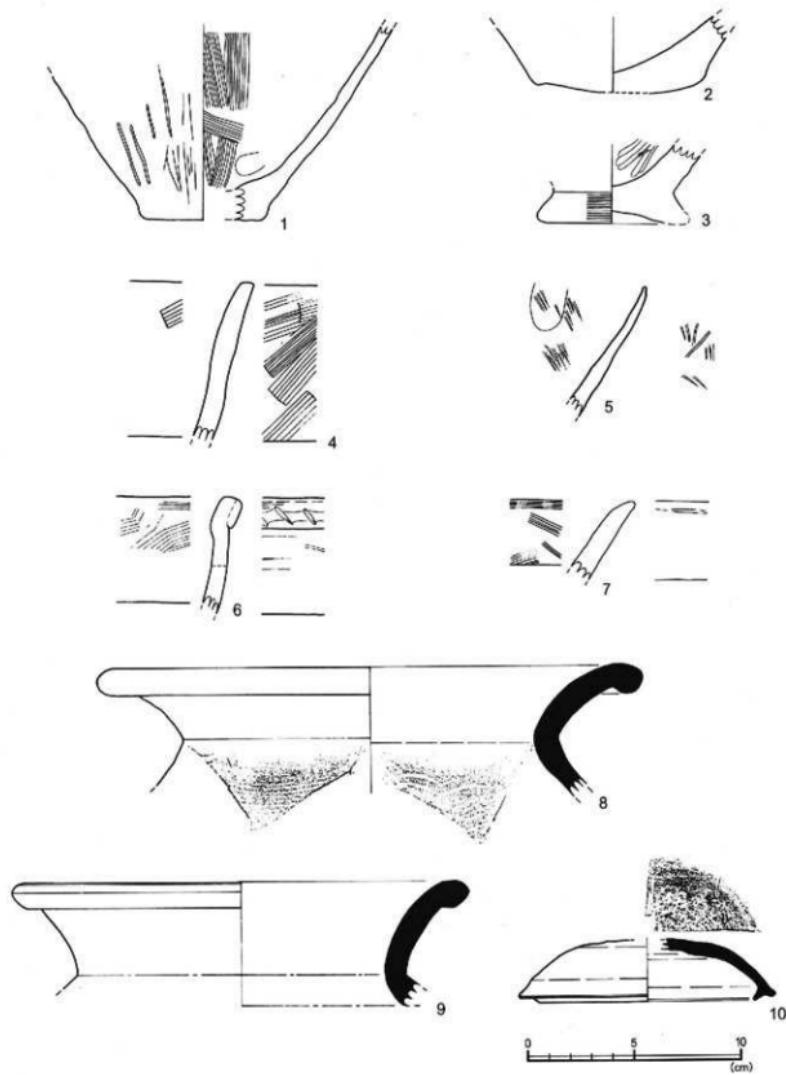
34は甕の底部で、底部は厚い。35~37は小型丸底甕である。いずれも床面から浮いた状態で出土した。

35の口縁部は内湾しながら立ち上がる。復元口径

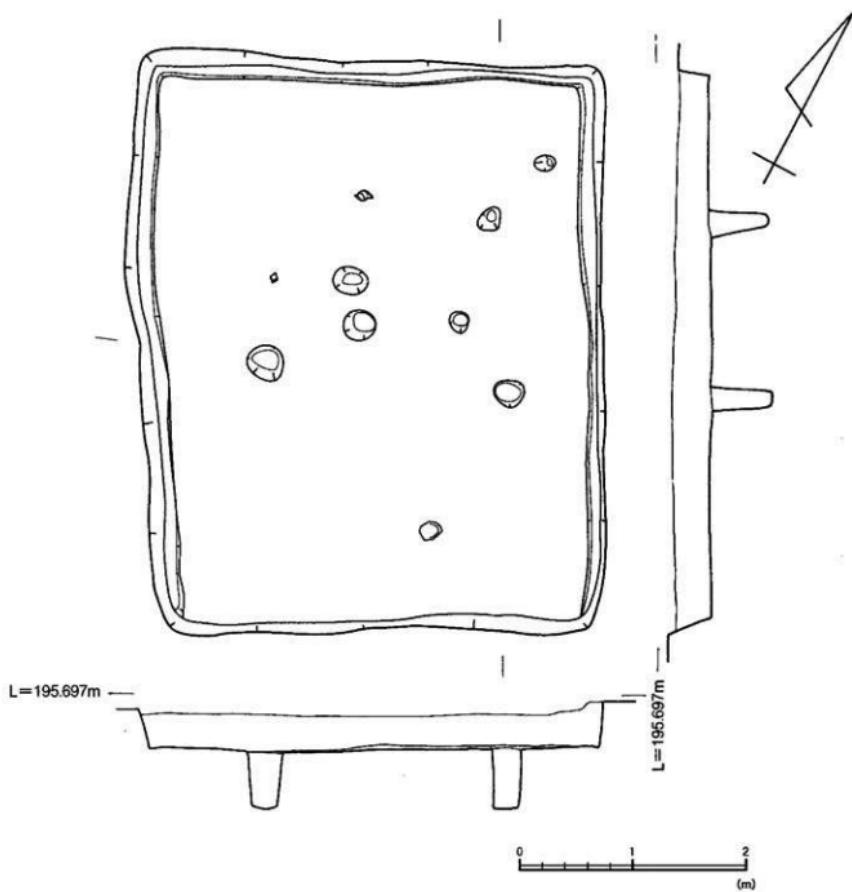


第29図 3-3区 4号住居

餅 田 遺 跡

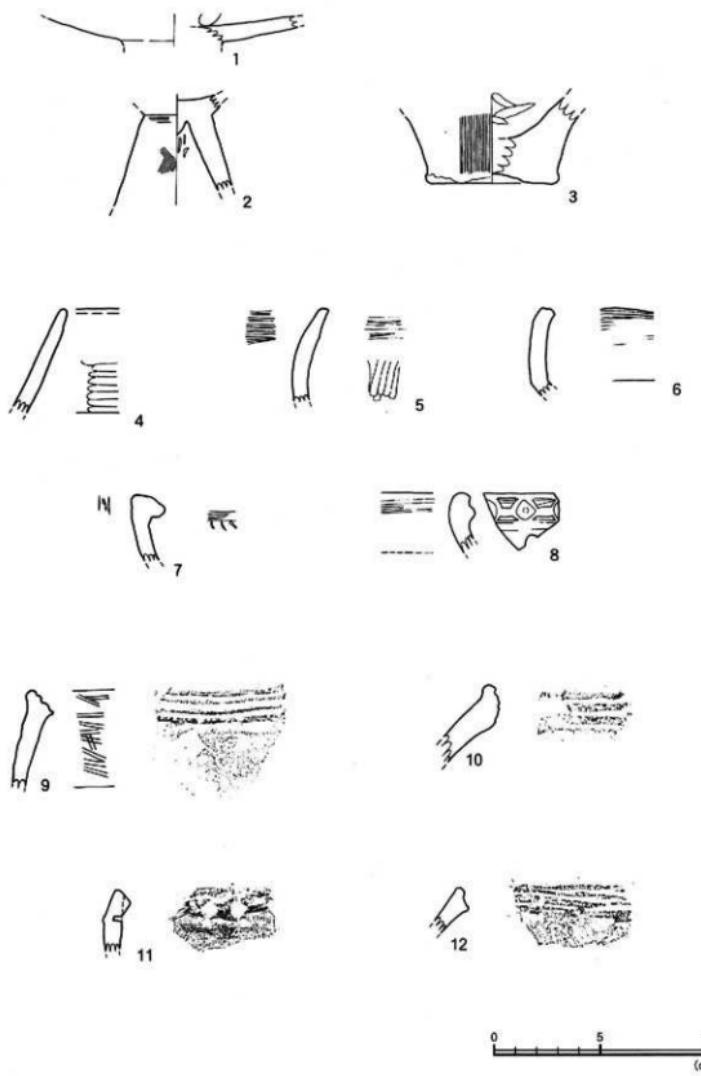


第30図 3-3区 4号住居出土遺物

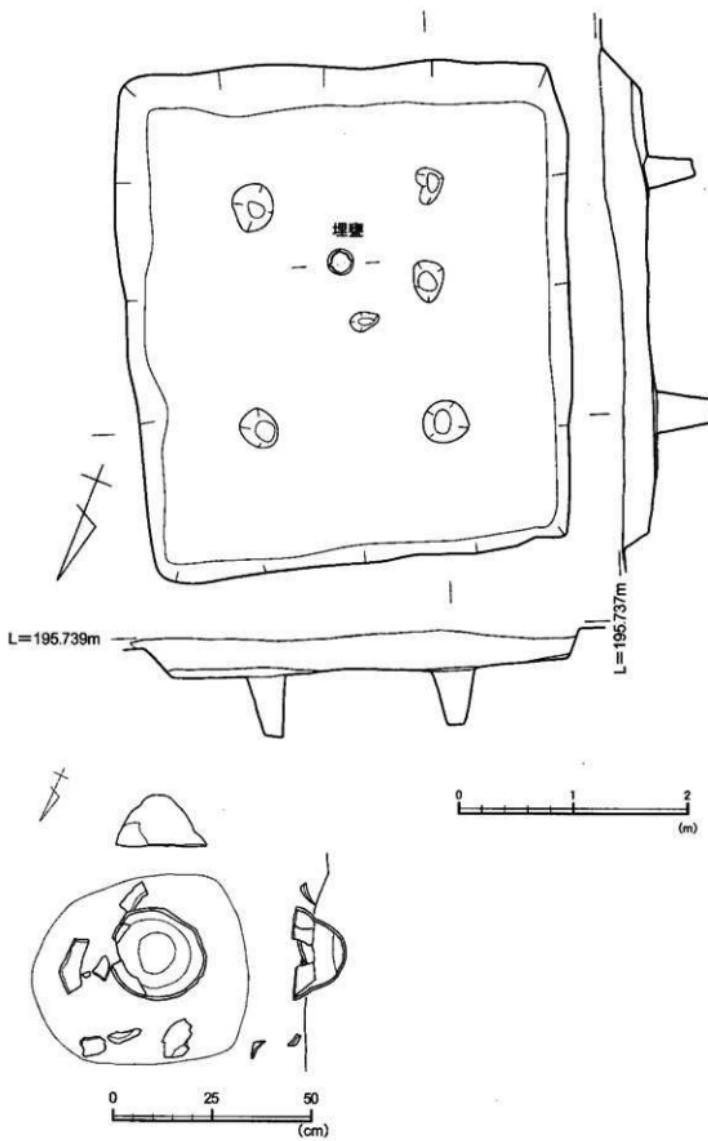


第31図 3-3区 7号住居

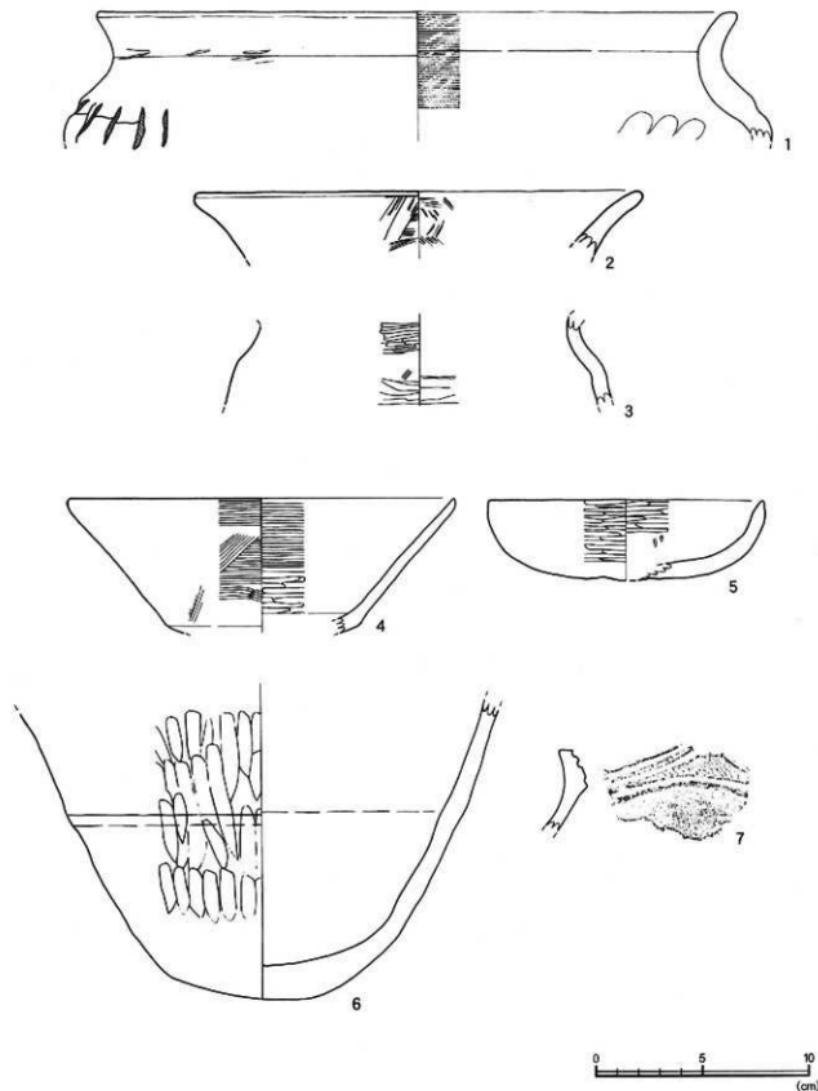
餅 田 遺 跡



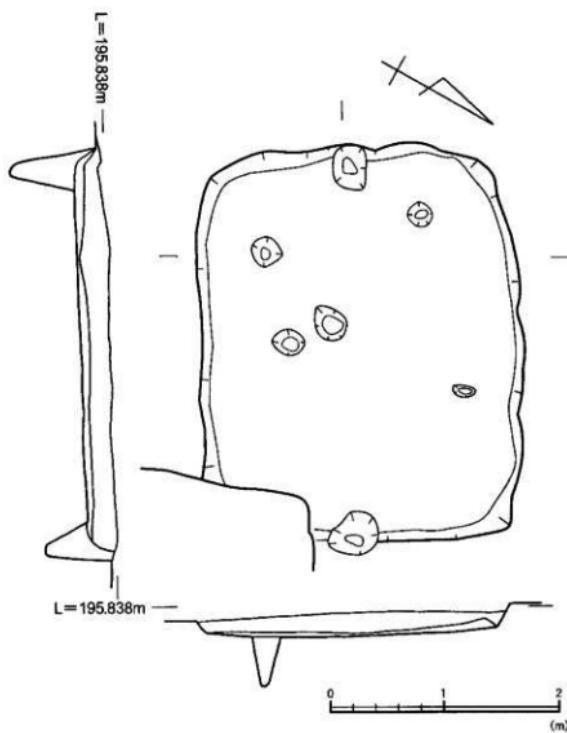
第32図 3-3区7号住居出土遺物



第33図 3-3区 8号住居

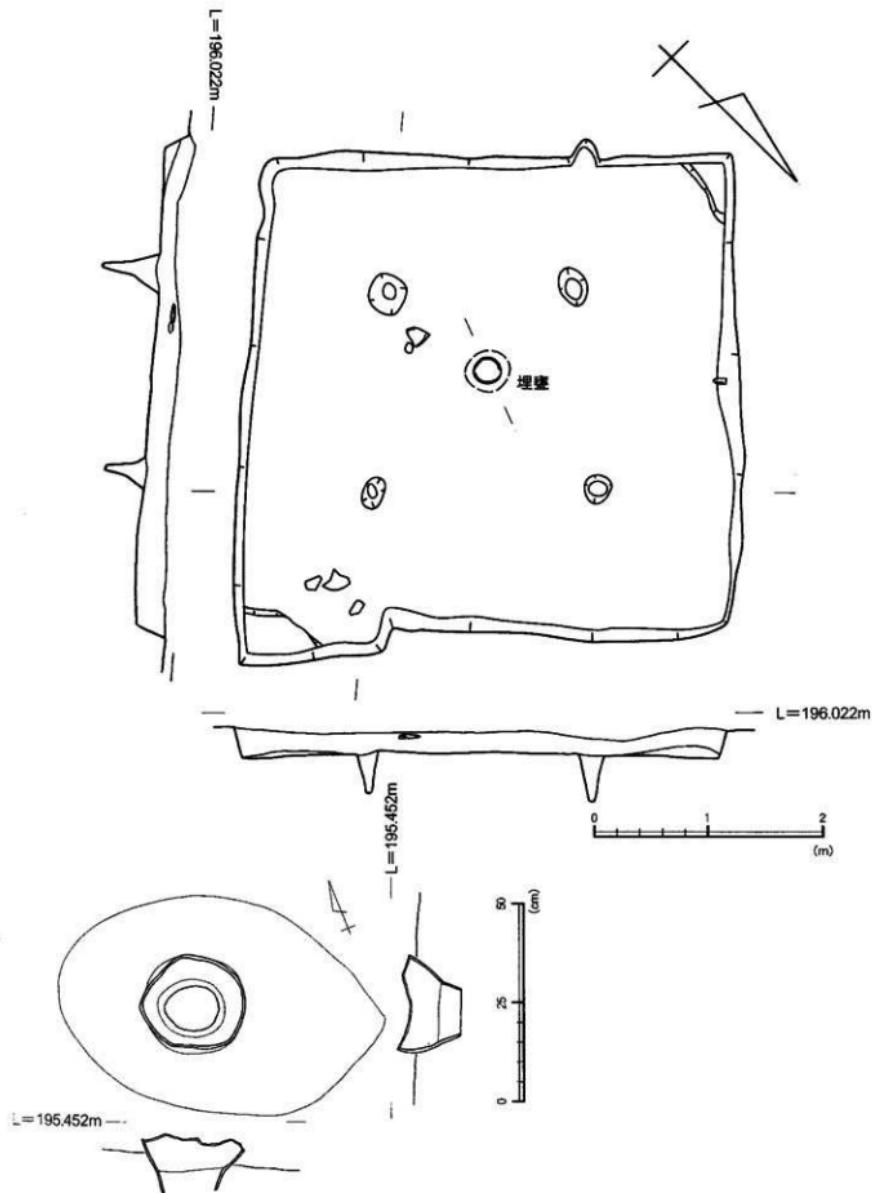


第34図 3-3区8号住居出土遺物

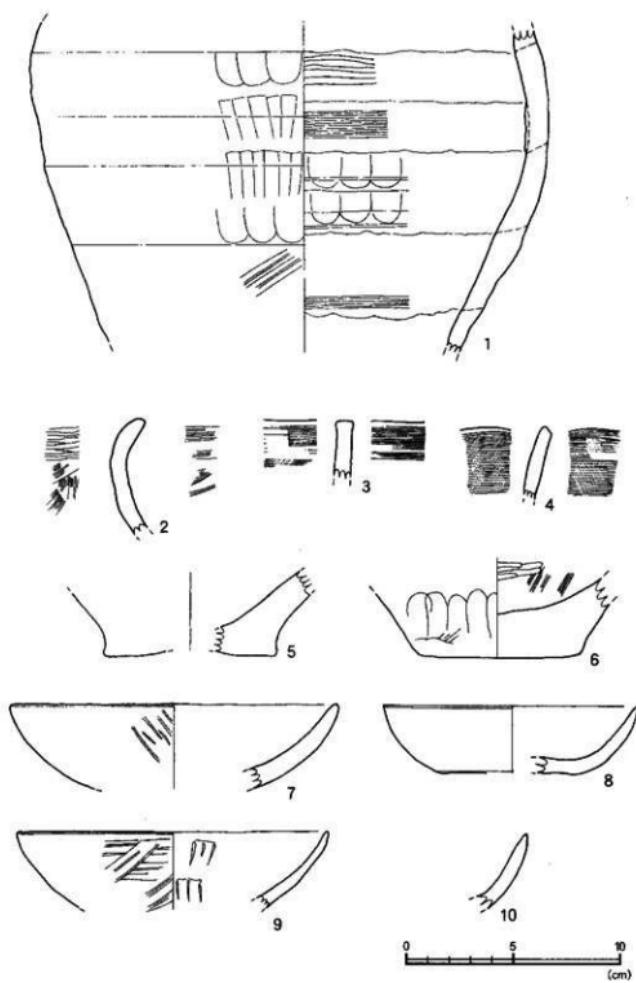


第35図 3-3区9号住居

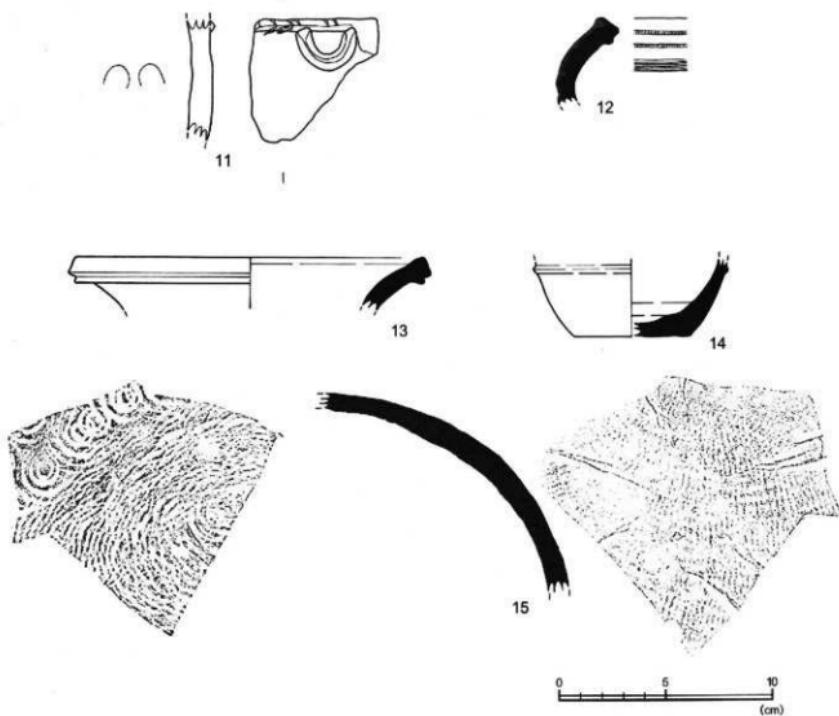
餅田遺跡



第36図 3-3区10号住居



第37図 3-3区10号住居出土遺物（1）



第38図 3-3区10号住居出土遺物（2）

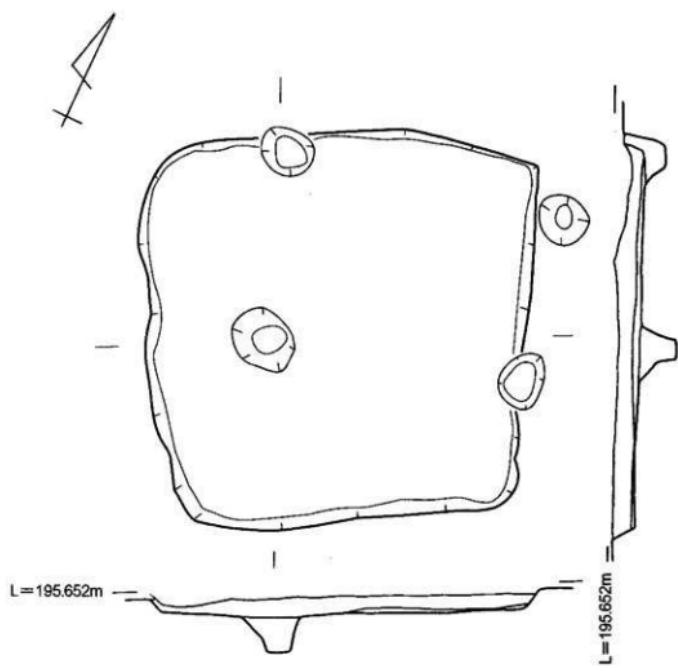
10cm。36は脚部～底部で、最大径は脚部下位にある。外面は風化しているが、丹塗りの痕跡が見られる。37の最大径は脚部下位にある。

38～49は高杯である。坏部は深手のもの(38、39)と浅いもの(40、41)が見られる。また脚部はエンタシス状のもの(44、46)とラッパ状に開くもの(45、47、48)がある。

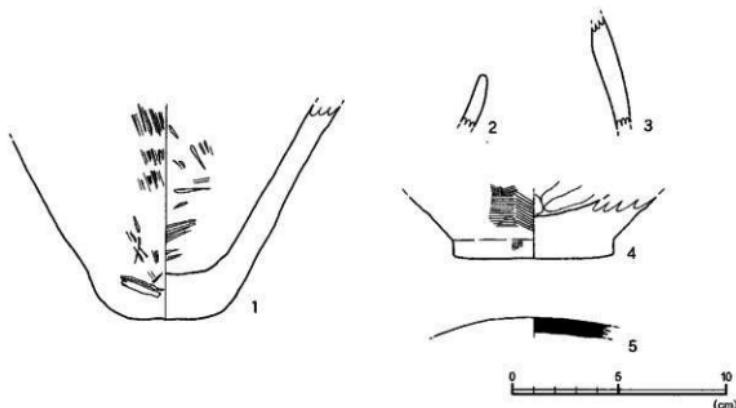
38の坏部はやや内湾しながら立ち上がり、坏底部の稜線は不明瞭である。床面から浮いた状態で出土した。39の坏部はやや内湾しながら立ち上がり、坏底部の稜線は不明瞭である。床面から浮いた状態で出土し、破片は住居南壁沿いに散乱していた。40の坏部は浅く、やや内湾しながら立ち上がり、坏底部の稜線は不明瞭である。41の坏部は直線的に開き、口縁端部付近でわずかに外反する。端部は丸い。床面

から浮いた状態で出土した。42は坏底部でジョイントを持つ。43は坏底部に丸いジョイント部を持つ。44の脚部はエンタシス状で、ジョイントを持つ。床面から浮いた状態で出土した。45の脚部はラッパ状で開く。ジョイントを持つ。46の脚部はエンタシス状で、ジョイントを持たない。床面から浮いた状態で出土した。47の脚部はラッパ状に開く。床面から浮いた状態で出土した。48の脚部はラッパ状に開く。49は小型の高杯で、脚部は開き気味である。

50、51、52は坏である。50の口縁部はやや内湾しながら立ち上がる、端部は丸い。高杯の可能性もある。51の口縁部は直線的に開き、口縁端部付近でわずかに外反する。端部は丸い。高杯の可能性もある。



第39図 3-3区11号住居



第40図 3-3区11号住居出土遺物

52の口縁部は丸く、内外面に丹塗り痕あり。摩滅している。

53～62は弥生土器である。53～59は甕である。53、54は口縁端部に布で包んだヘラ状工具で施した斜めの刻み目突帯を巡らしている。55、56は口縁端部外面に刻み目突帯を巡らしている。57は胴部に布で包んだヘラ状工具で施した斜めの刻み目突帯を巡らし、余った突帯の先端を下に垂らしている。58は胴部に三角突帯を巡らし、刻み目を施している。59は三角突帯を胴部に5条巡らしている。60は屈曲部に斜めの刻み目を施している。61、62は甕である。61は口縁部と頭部に布で包んだヘラ状工具で施したハの字形の刻み目突帯を巡らせている。62は頭部に布で包んだヘラ状工具で施した斜めの刻み目突帯を巡らせている。

63は縄文土器で、口縁部はやや外反し、端部は平坦で、外面につまみ出している。端部平坦面に斜めの沈線を施している。

16号住居(第50図)

調査区の南西部に位置し、住居の長辺は3.68mで短辺は3.2mであり、住居北東部に0.3m×1.2m程度の張り出し部を持つ。床面積は12.14m²である。

住居を支える主柱は4本と想定されるが東隅から検出されなかった。主柱穴の深さは約25～65cmである。

16号住居出土遺物(第51図)

1、2は甕の口縁部である。土師器の他に、縄文土器、弥生土器の細片が10数点出土している。

17号住居(第52図)

調査区の南西部に位置し、住居の長辺は5.82mで短辺は4.9mであり、床面積は28.51m²である。北西、北東壁から1.1～1.2m内側に溝が巡っており、深さは4cm前後である。また溝内側の区画は外側に比べ2～3cm程度低くなっている。住居南壁際中央より長辺0.8m短辺1mの円形土壙が検出されており、はしご穴ではないかと思われる。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約20～50cmである。他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。

17号住居出土遺物(第53図)

出土地点について言及がないものはすべて埋土からの出土である。

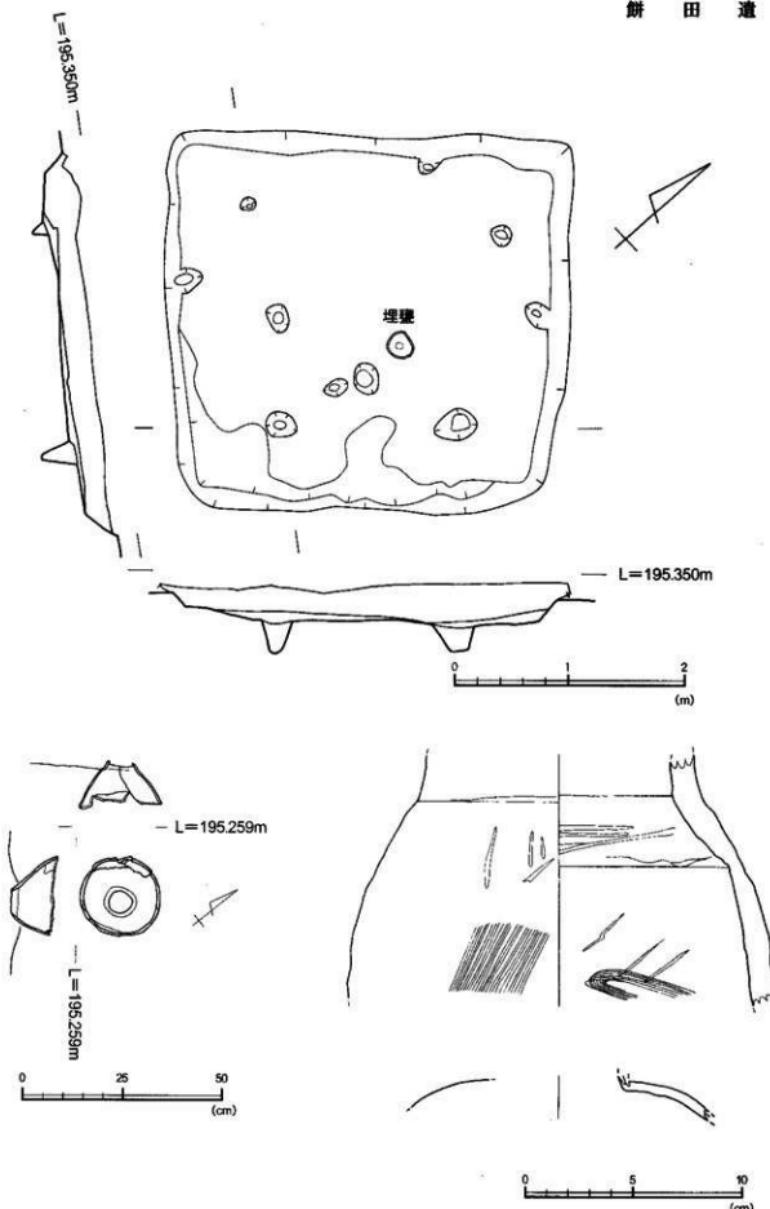
1～5、8、9は土師器である。1～5は甕で、1は口縁部がやや内湾し、頭部に布で包んだヘラ状工具で施した斜めの刻み目突帯を巡らしている。胎土に1～5mmの鉄石を含む。床面より浮いた状態で出土した。

8は高杯の脚部で、ラッパ状に開く。床面より浮いた状態で出土した。

9は甕で、わずかに内湾しながら立ち上がる。高杯の脚部の可能性もある。

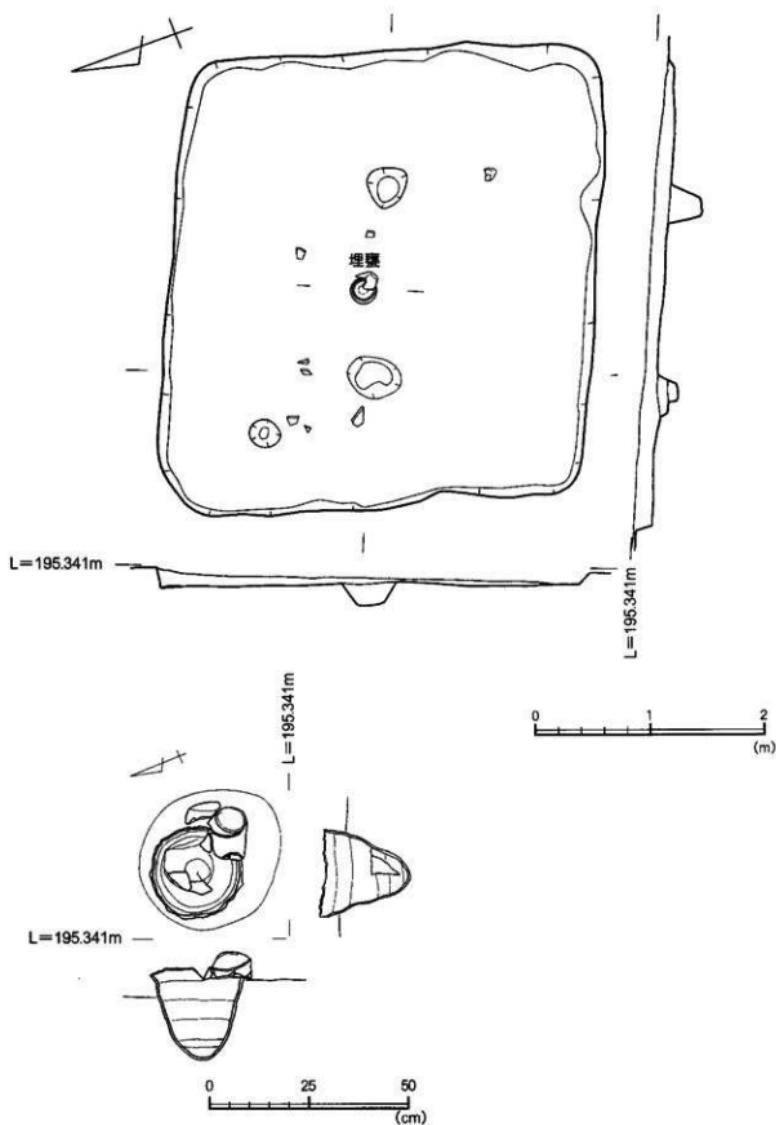
6は弥生土器の甕で、口縁端部外面及び胴部に布で包んだヘラ状工具で施した刻み目突帯を巡らせている。

7は縄文土器の口縁部である。外面に沈線文が施されている。

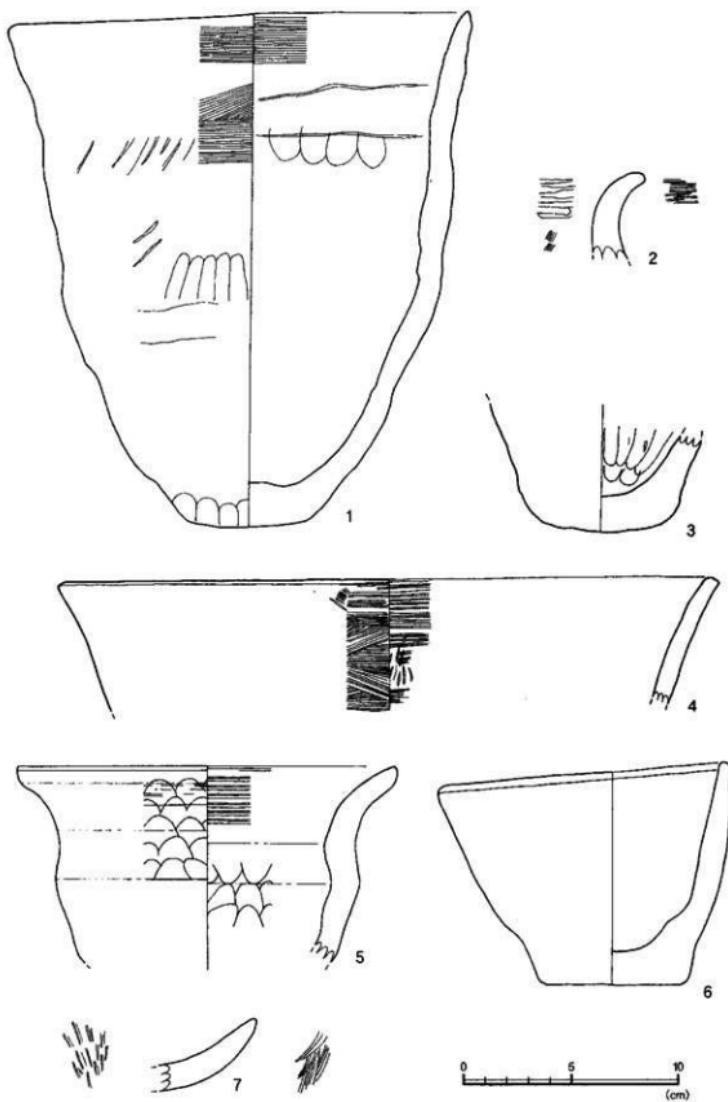


第41図 3-3区13号住居及び13号住居出土遺物

餅田遺跡



第42図 3-3区14号住居



第43図 3-3区14号住居出土遺物

餅田遺跡

18号住居(第54図)

調査区の南西部に位置し、住居の長辺は6.24mで短辺は5.84mであり、床面積は36.44m²である。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約20~50cmである。

18号住居出土遺物(第55~57図)

1~13、17~26は土師器である。

1~8は甕である。1は残存1/4程度で、輪積み痕が残っている。内外面にヘラケズリ、ハケ目を施し、内面には指ナデ、指押さえが残る。端部は丸い。床面から浮いた状態で出土した。2の口縁端部は丸い。内外面に横方向のハケ目を施し、胴部に布で包んだヘラ状工具で施した斜めの刻み目突帯を持つ。床面から浮いた状態で出土した。3の口縁部は直線的に開き、端部は丸い。内外面に横方向のハケ目を施し、胴部に斜めの刻み目突帯を持つ。床面から浮いた状態で出土した。6の口縁端部は平坦で、胴部に斜めの刻み目突帯を持つ。7は甕の脚台部である。8はわずかに上げ底で、突き出している。床面上から出土した。

9~12は小型丸底甕である。9の最大径は体部の下半にくる。10の口縁部は11と比べると開き気味である。端部は丸い。復元口径13.6cm。11の口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。復元口径6.2cm。4の口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。復元口径9cm。

13は罐である。ほぼ完形である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、胴部の最大径は中位にくる。須恵器罐の模倣品である。内外面に横方向のミガキを施す。床面上から出土した。

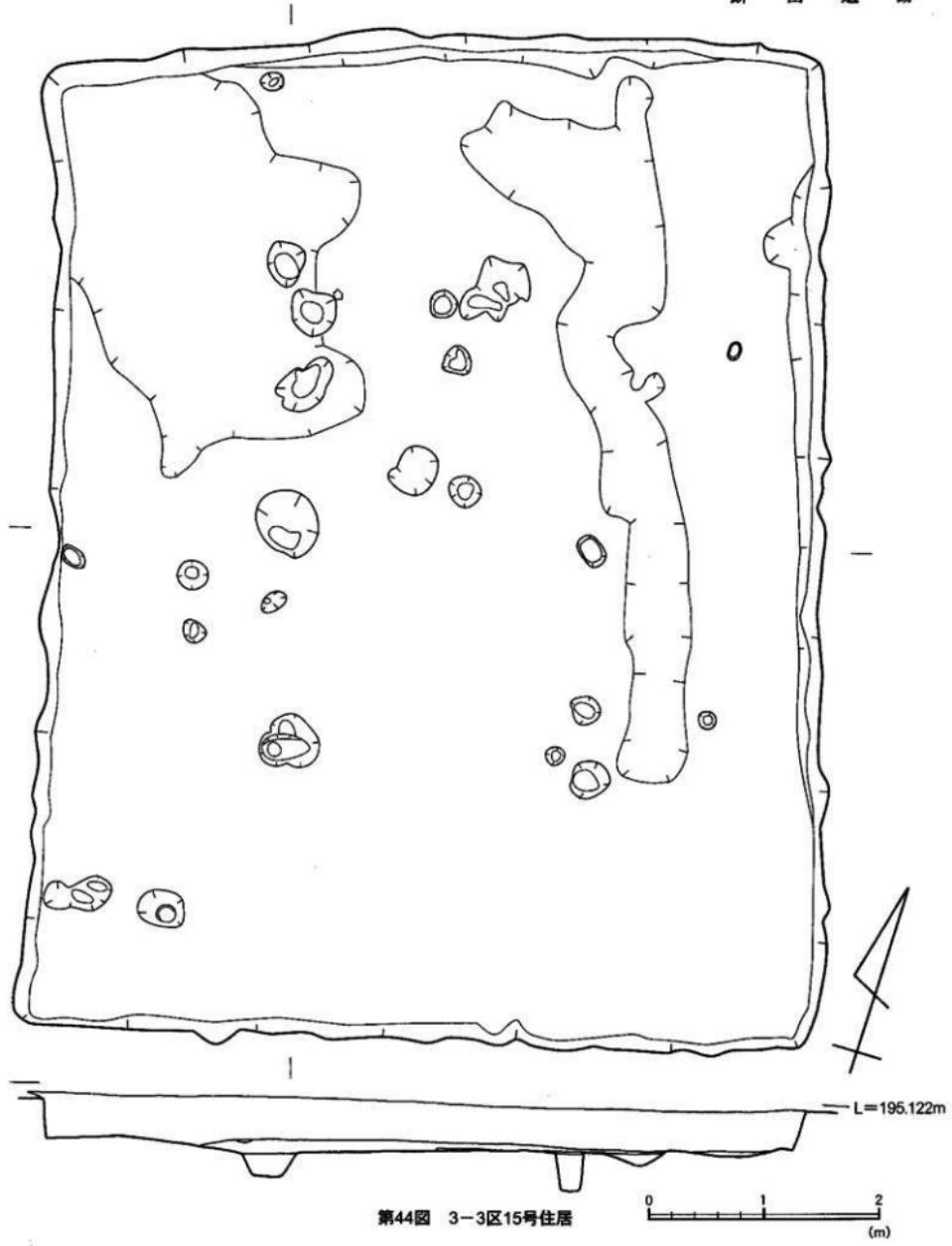
17、18は壺である。17は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦である。床面より浮いた状態で出土した。外面は口縁端部を指押さえ後縦方向のハケ目、内面は口縁端部を指押さえ後横方向にハケ目を施している。18は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸い。

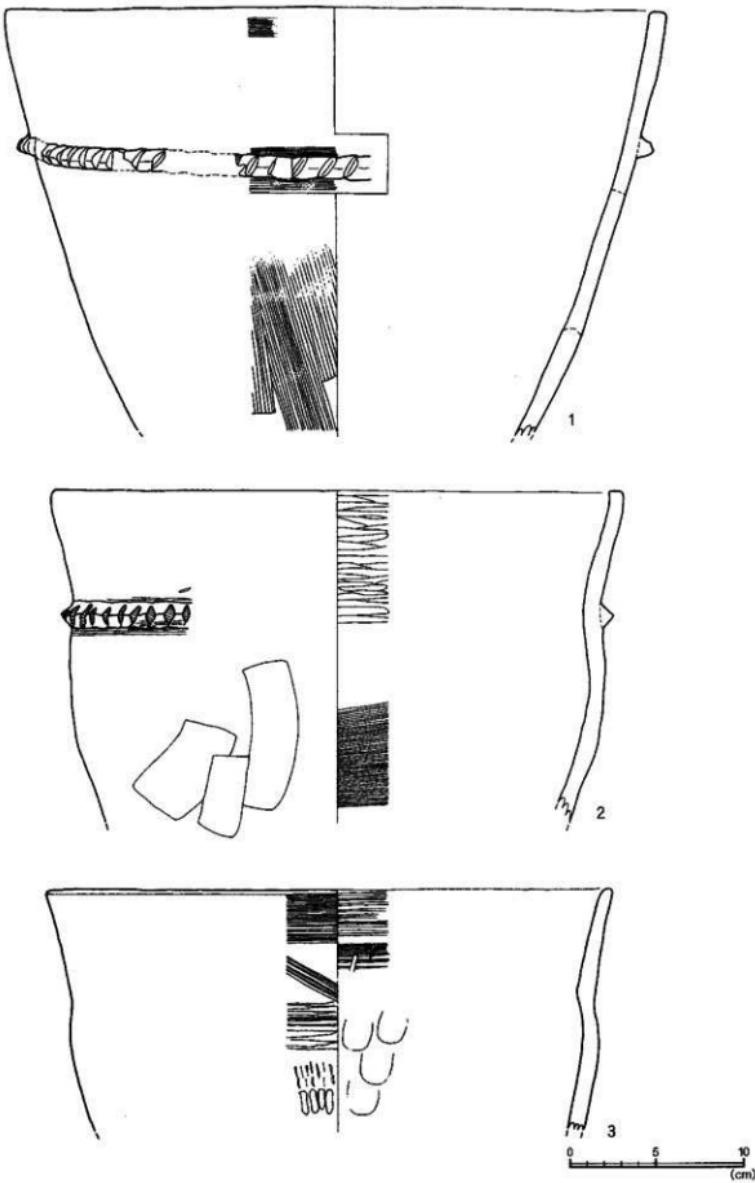
19~26は高壺である。19は壺中央から口縁部にかけてやや外反している。端部は丸い。壺底部との稜線は不明瞭である。外面から口縁端部内面まで丹塗りを施している。内外面にミガキを施す。床面から浮いた状態で出土した。20は壺底部から口縁部にかけて直線的に伸びる。端部は丸い。壺底部との稜線は明瞭である。21は19同様、壺中央から口縁部にかけてやや外反している。復元口径18.5cm。22の脚部はエンタシス状である。床面から浮いた状態で出土した。23、24は裾部を欠くが、26のような形状になるものと思われる。床面から浮いた状態で出土した。25の脚部はエンタシス状で、裾部との稜線は明瞭である。26の裾部は短く外反しており、脚部との稜線は不明瞭である。ラッパ型である。

14、15は弥生土器である。14は小型の甕で、胴

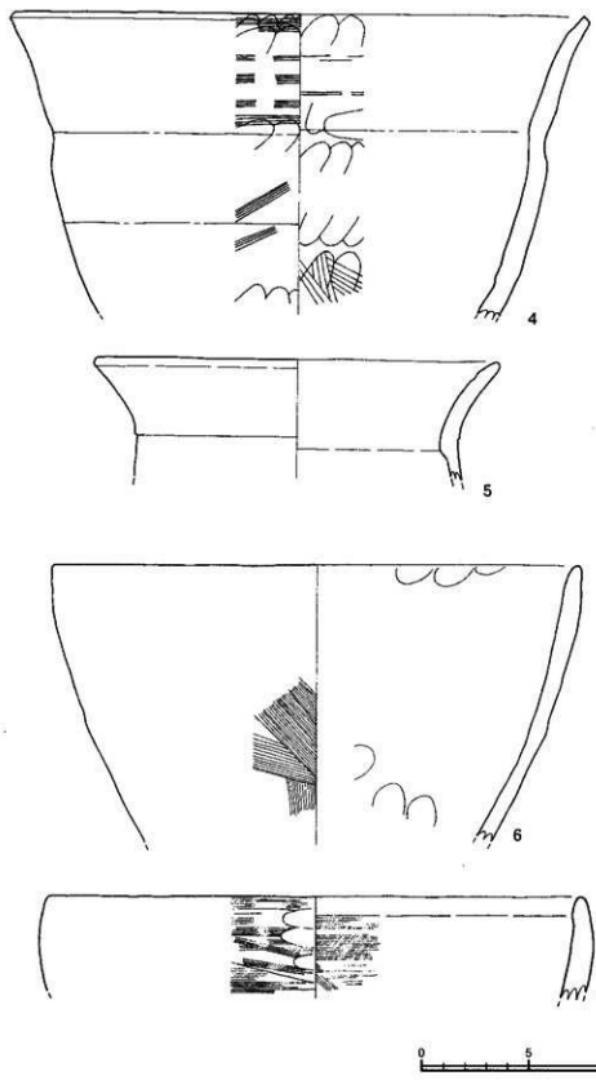
L=195.122m



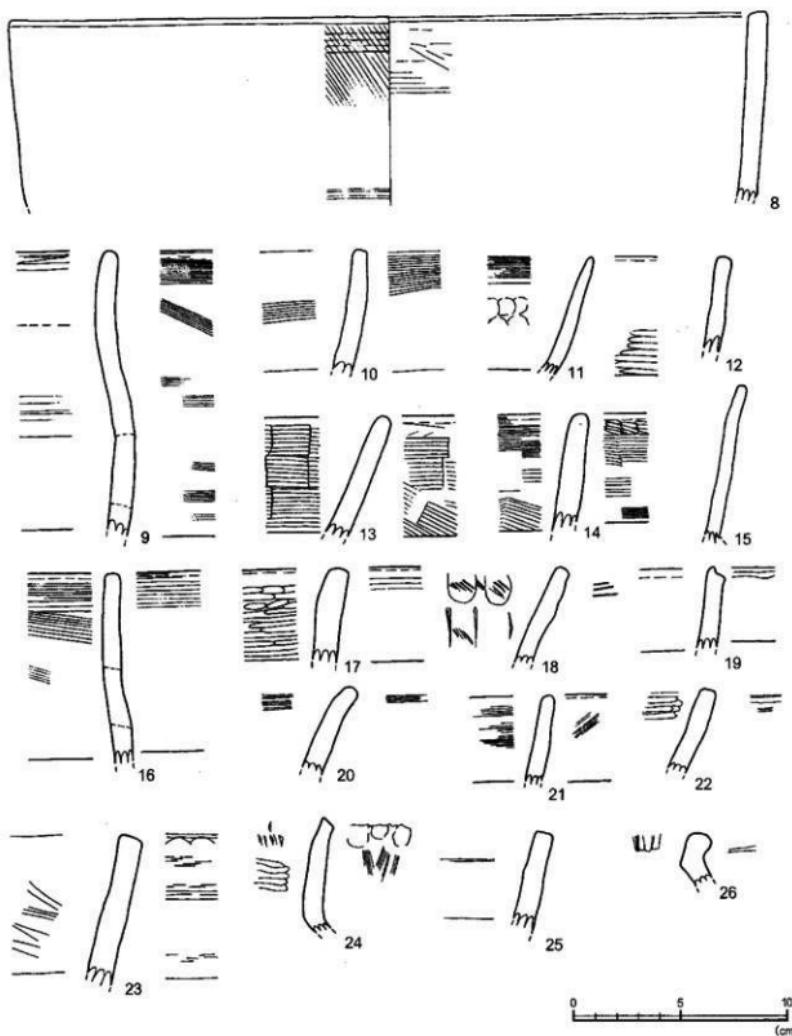




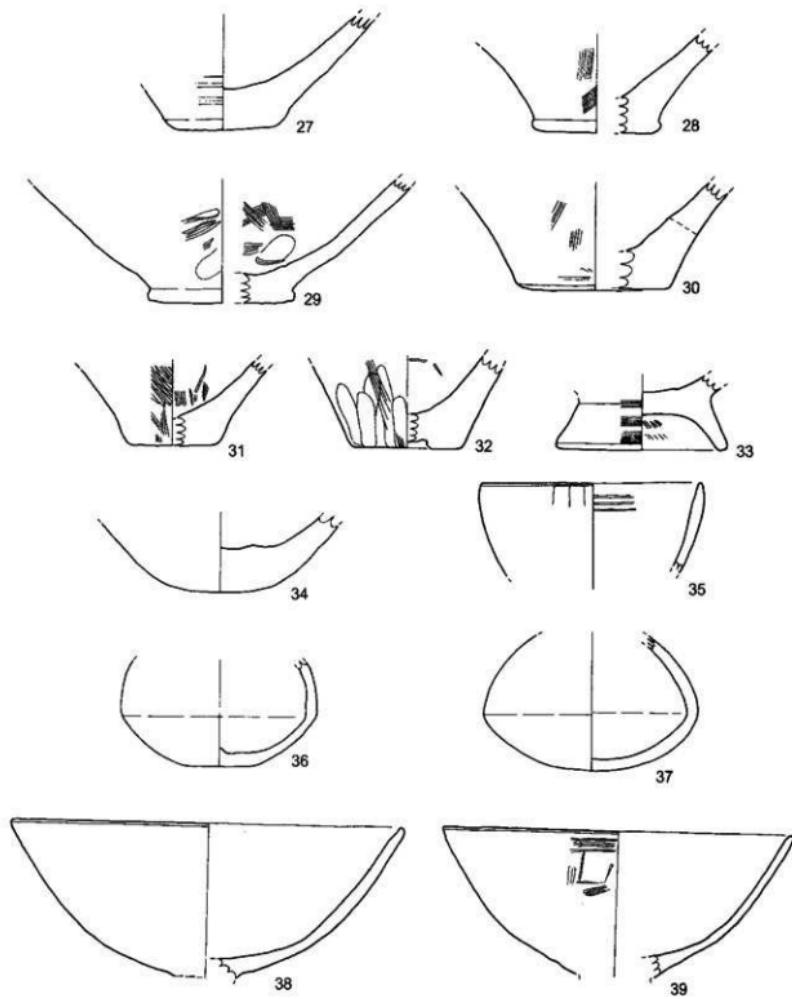
第45図 3-3区15号住居出土遺物（1）



第46図 3-3区15号住居出土遺物（2）

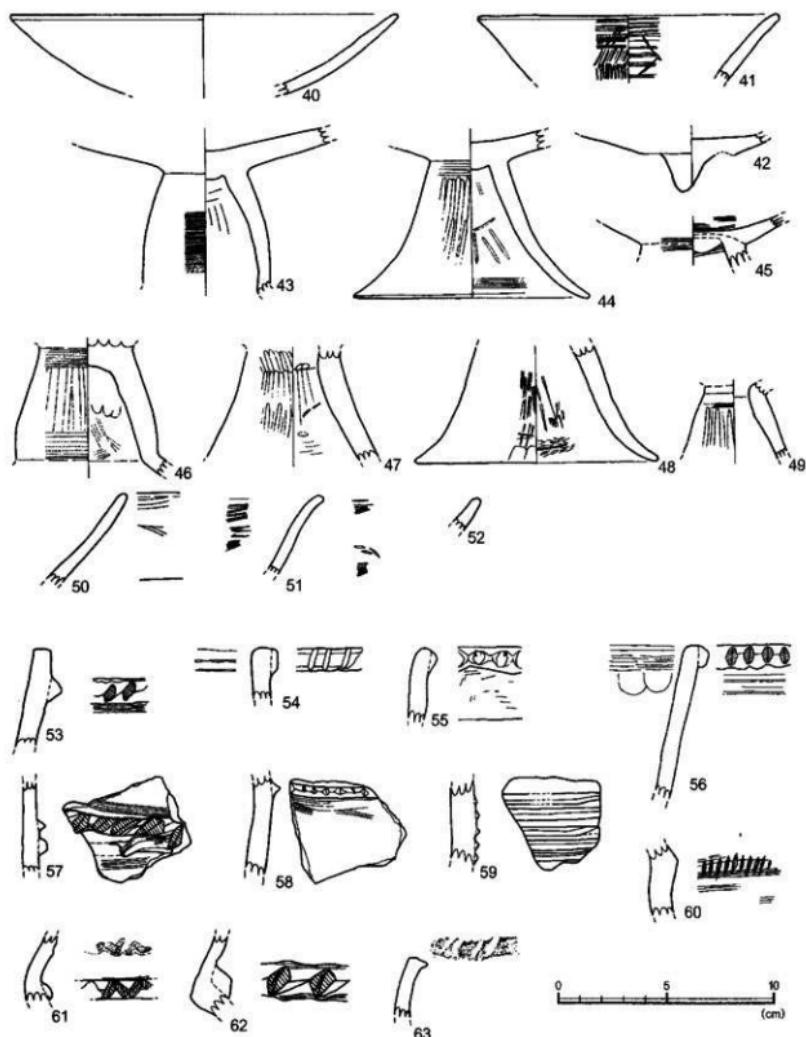


第47図 3-3区15号住居出土遺物（3）

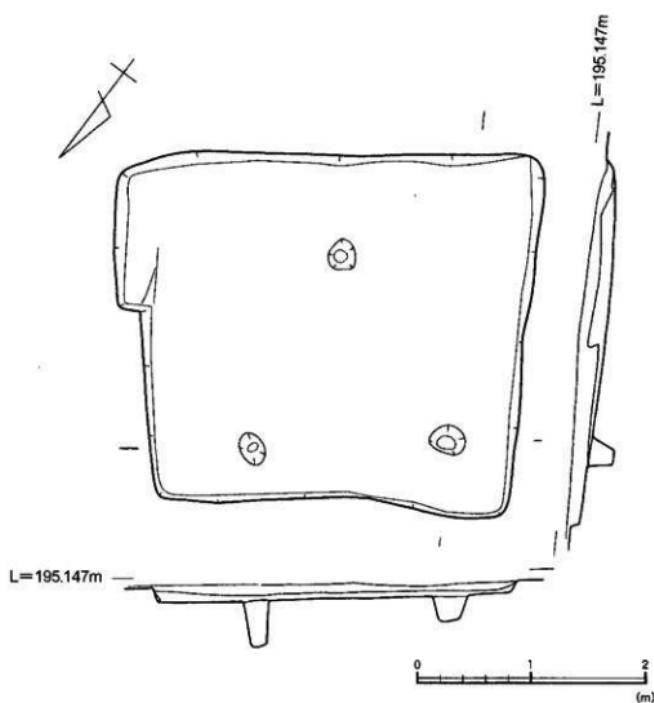


第48図 3-3区15号住居出土遺物（4）

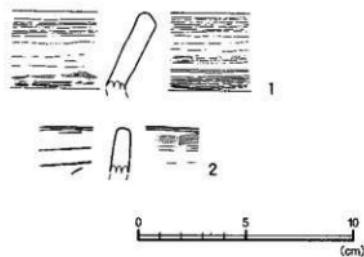
餅 田 遺 跡



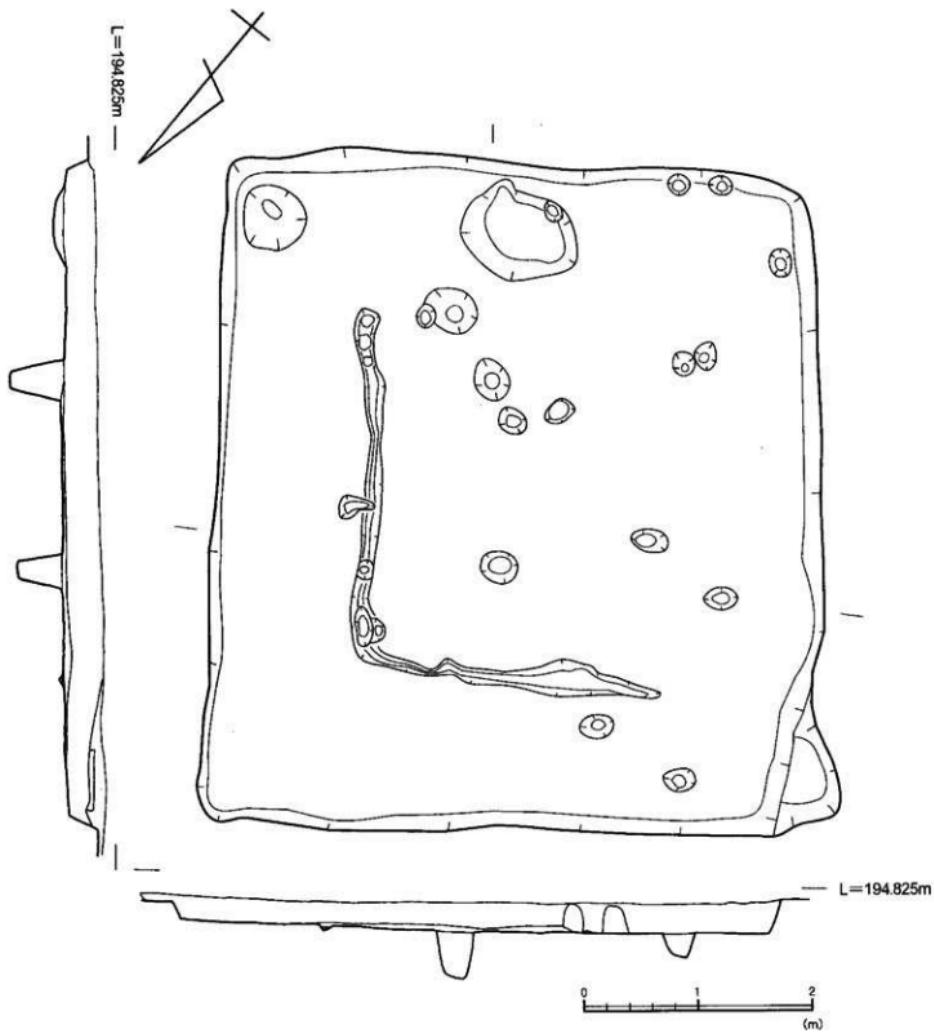
第49図 3-3区15号住居出土遺物 (5)



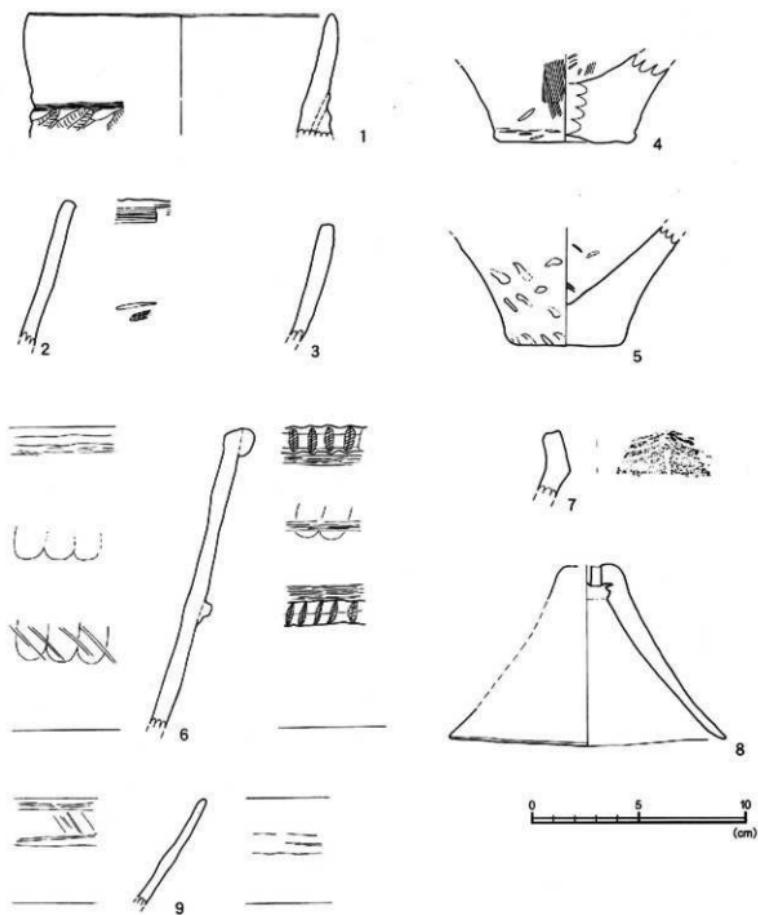
第50図 3-3区16号住居



第51図 3-3区16号住居出土遺物

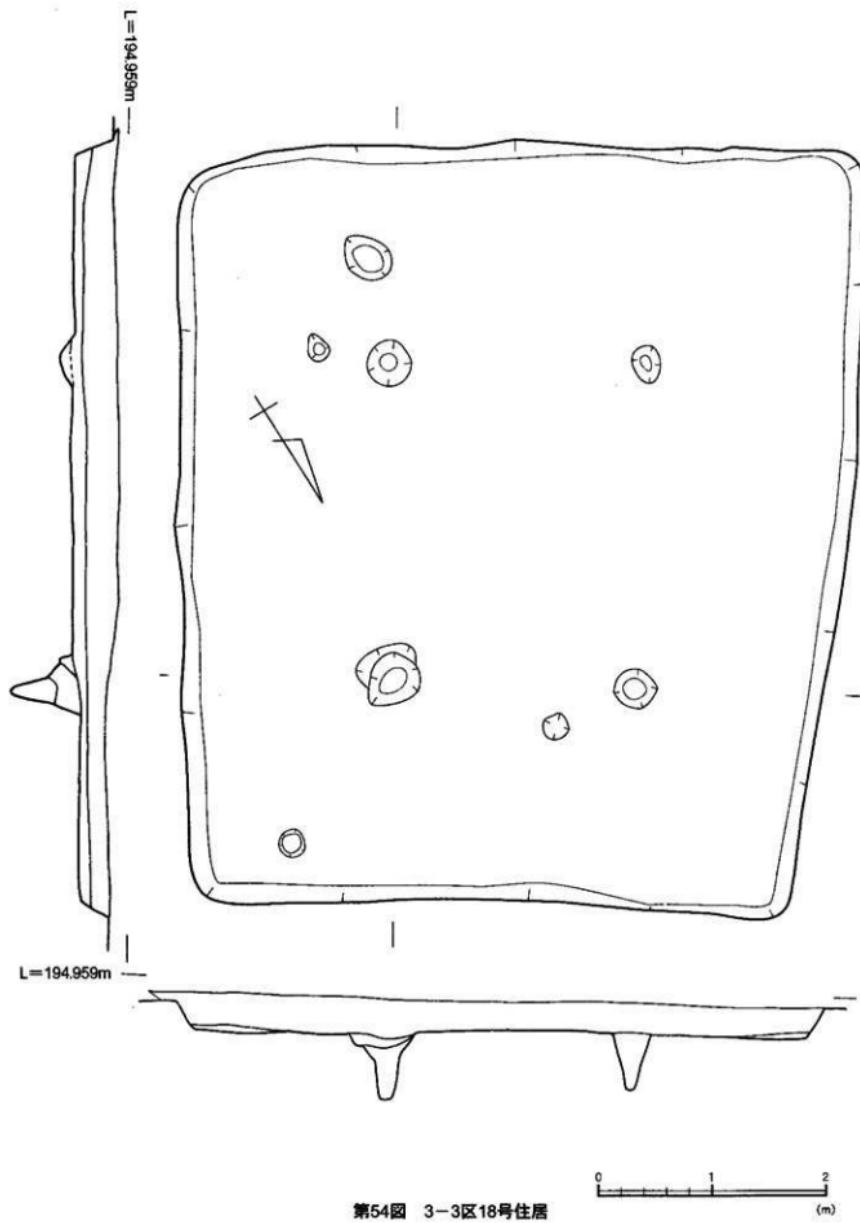


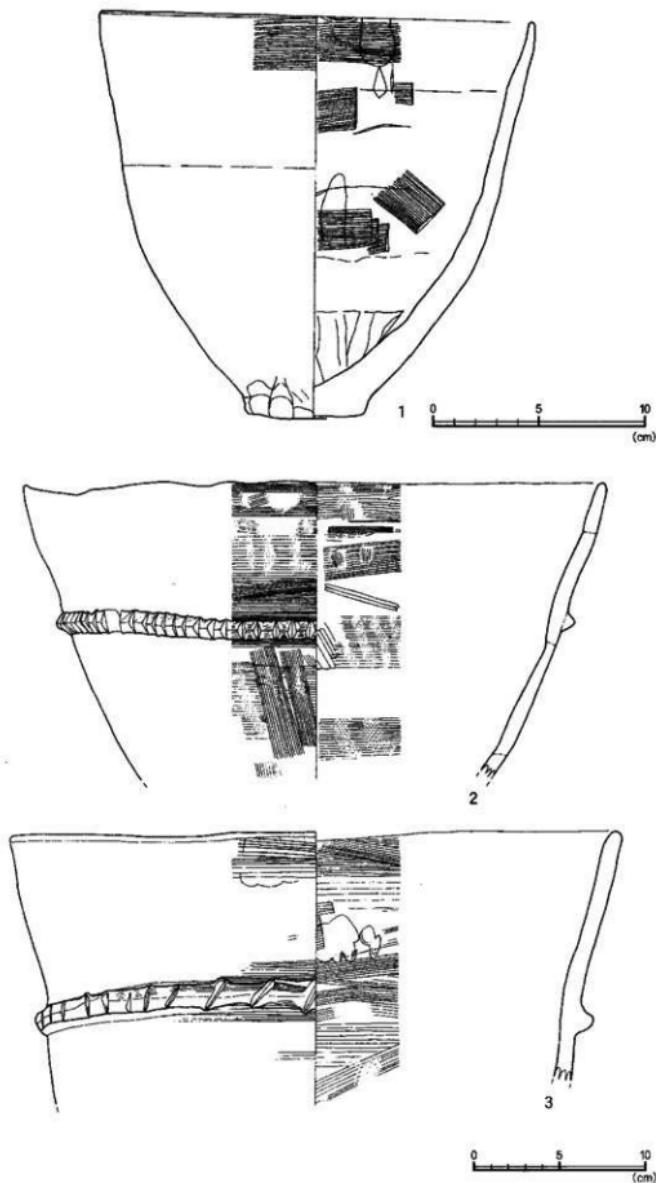
第52図 3-3区17号住居



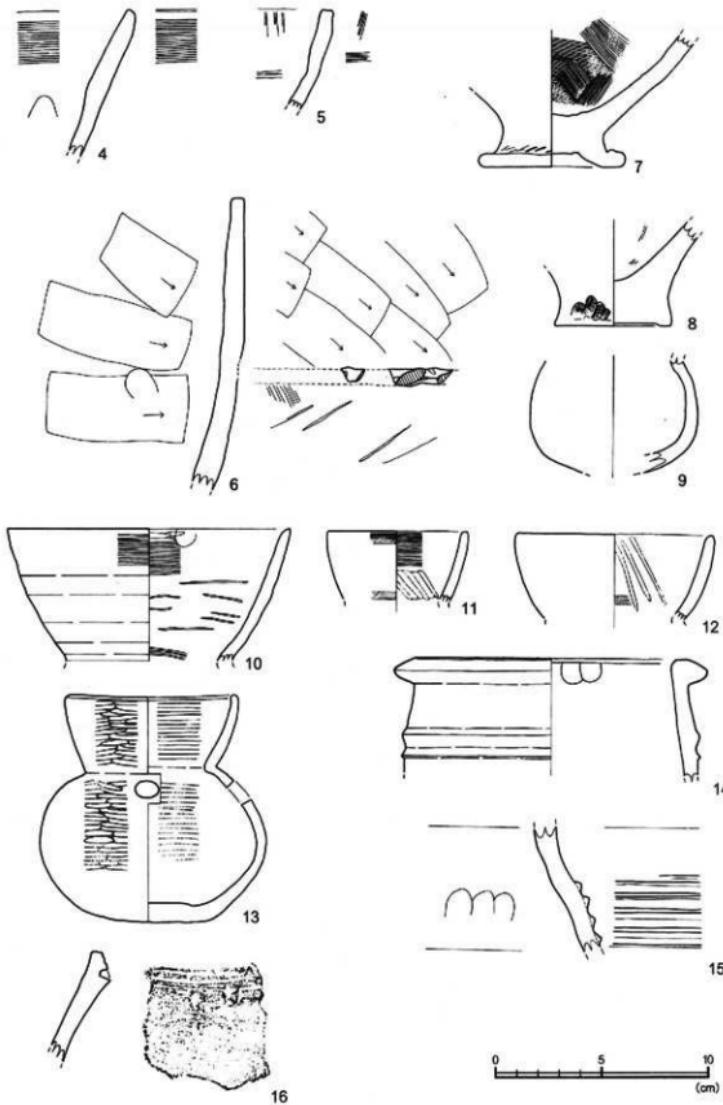
第53図 3-3区17号住居出土遺物

餅田遺跡

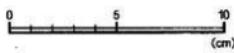
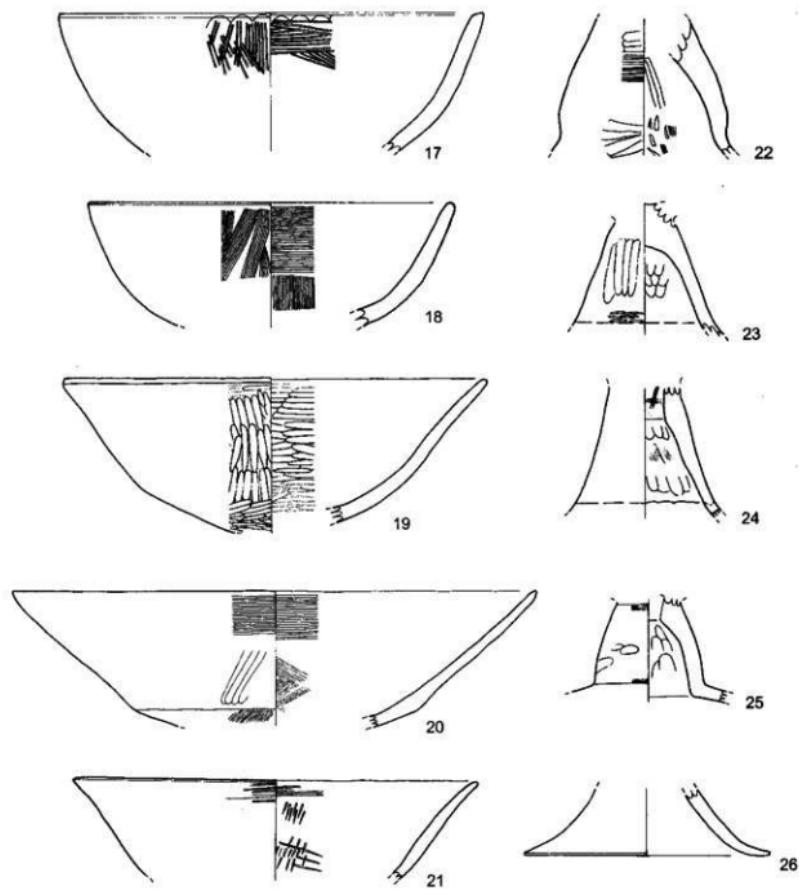




第55図 3-3区18号住居出土遺物（1）



第56図 3-3区18号住居出土遺物（2）



第57図 3-3区18号住居出土遺物 (3)

餅 田 遺 跡

部に2条の突帯を巡らしている。弥生中期と思われる。床面から浮いた状態で出土した。15は壺で、三角突帯が頸部に4条巡っている。床面から浮いた状態で出土した。

16は縄文土器の深鉢で、口縁端部に沈線と孔列文が施されている。西平系と思われる。

19号住居(第58図)

調査区の南西部に位置し、住居の長辺は3.56mで短辺は3.14m、床面積は11.18m²である。東西北3方の壁に接して幅60cm前後深さ3~10cmの溝が巡っている。

住居の中央には埋甕炉が設置されている。甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。いくつかのピットが住居の中から検出されているが、住居を支える主柱は不明である。

19号住居出土遺物(第59図)

1、2は埋甕である。2は1の内側に口縁部を下にして埋められていた。

1~3は土師器甕である。1の口縁部はやや内湾して立ち上がり、端部は平坦である。輪積み痕に指押さえが残っている。2の口縁部は短く外反し、端部は丸い。頸部の最大径は下位にくくる。長胴の甕である。3は厚い平底である。

20号住居(第60図)

調査区の南部に位置し、住居の1辺は4.7m、床面積は22.09m²である。ほぼ方形を呈している。

住居の中央には埋甕炉が設置されており、甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。

住居を支える主柱は4本と想定されるが南東、南西隅からは検出されなかった。主柱穴の深さは約50~65cmである。

20号住居出土遺物(第61、62図)

埋甕より布痕土器片が10数点出土している。また、甕の完形品の出土が多い。

1~7は土師器である。1~6は甕である。1はほぼ完形で、口縁部は短く、やや外反気味に立ち上がる。肩部に最大径がくる。内面には輪積み痕が残っている。頸部中位より上はかなりゆがんでおり、口径はだ円形である。いびつで難なつくりである。住居北東壁際、遺構検出面より横転して出土した。2は頸部下位がややすぼまつた形状の粗製の甕である。埋甕炉として使用されていた。3の最大径は頸部上位にある。口縁部は内湾し、輪積み痕が残っている。1号住居出土甕と形状、胎土が類似しており、甕の可能性も考えられる。住居西南隅、遺構検出面より出土した。復元口径20.8cm。4は平底の粗製甕である。口縁部は強く内湾している。頸部中位より上

はかなりゆがんでおり、口縁はだ円形である。輪積み痕を残している。住居南西角、遺構検出面より出土した。5は平底の粗製甕である。頸部はやや内湾して立ち上がる。底部に木の葉文が刻印されている。19号住居埋甕炉出土の土器片が1点接合した。6は口縁部で短く外反する。端部は平坦で、調整による横線が一条入る。

7は壺である。復元口径は12.2cm。12は須恵器甕の頸部である。内外面にタタキ痕があるが、外面は水平方向のハケ目調整でタタキ痕はほとんどわからない。

8~11は歴史時代の遺物である。8~10は土師器壺で、8、9は底部を回転ヘラケズリで切り離している。10は底部に短い高台がある。11は内黒土器で、高台は欠損している。

21号住居(第63図)

調査区の南端に位置し、住居の長辺は3.06mで短辺は2.82m、床面積は8.63m²である。東西南3方の壁に接して深さ5cmの壁帶溝が巡っている。

住居北壁際に直径1mの円形土壙が検出され、内側から高壺が一個出土した。また、土壤周辺には石が数個見つかっている。

住居を支える主柱は2本と想定されるが南側からは検出されなかった。主柱穴の深さは約40cmである。

21号住居出土遺物(第63図)

1は甕の口縁部で、やや内湾しながら立ち上がり、端部にはナデ調整による沈線が一条入っている。

2は高壺である。体部は壺底部から口縁部にかけて直線的に伸び、端部は尖っている。壺底部との稜線はやや不明瞭である。脚部はエンタシス状で裾部との屈曲は明瞭である。壺内底部に丹塗りの痕跡がある。土壙床面に伏せた状態で出土した。口径23cm。

3は壺で、口縁端部は丸く、器壁は薄い。この他に甕胸部破片が土壤から出土している。

4は縄文土器で、西平系と思われる。

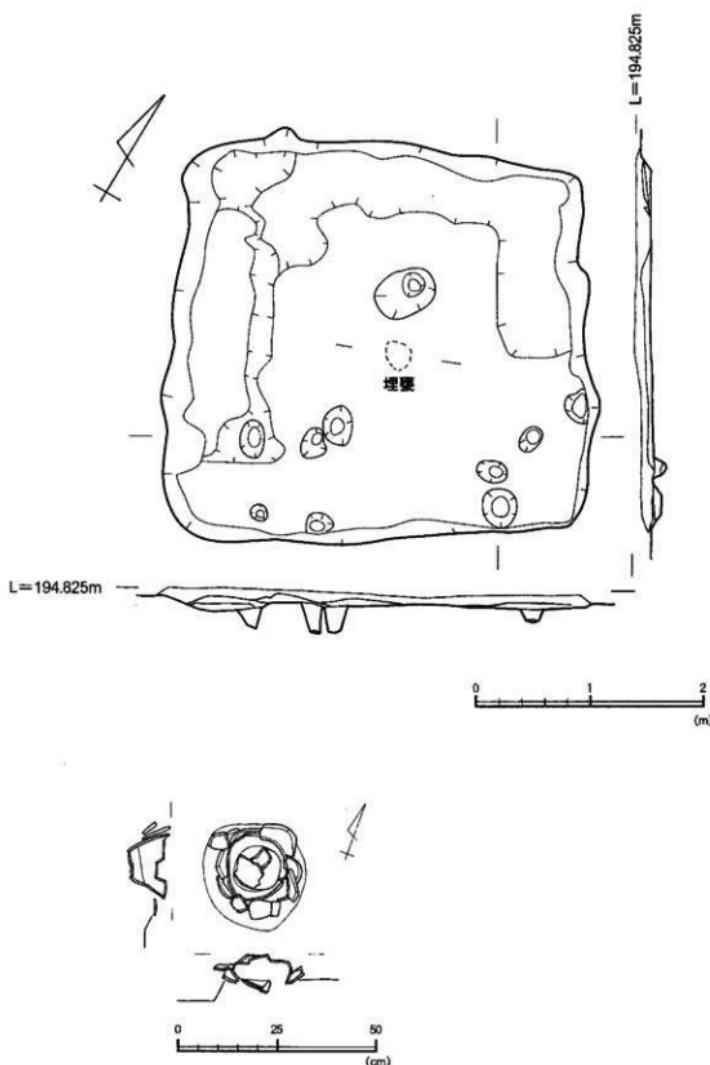
22号住居(第64図)

調査区の南東部に位置し、住居南側は削平されている。長辺は4.44mで短辺は4.2m+α、床面積は18.65m²+αである。

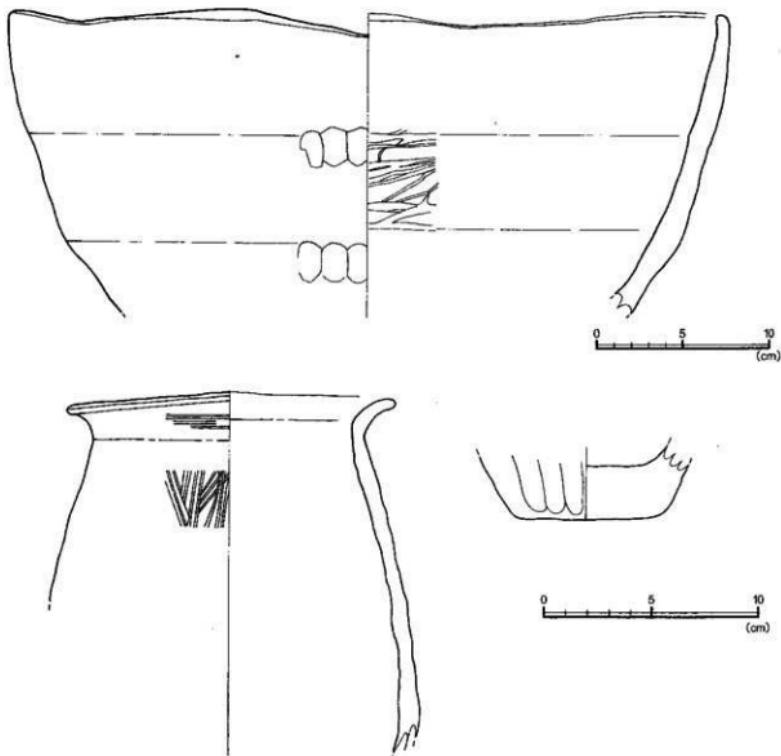
住居の中央南側には埋甕炉が設置されており、甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。

住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約25~35cmである。他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。

床面から鐵鎌が出土している。



第58図 3-3区19号住居



第59図 3-3区19号住居出土遺物

22号住居出土遺物(第65図)

1～3は土師器である。1は壺の胴部～底部である。粗製で、焼成は甘い。輪積み痕を残し、非常にいびつである。埋甕炉として使用されていた。

2は高壺の脚部で、器壁は厚く、裾部は短く外反している。脚部と裾部との屈曲は不明瞭である。

3は壺の口縁部で、短く外反している。外面に丹塗りの痕跡がある。

4は須恵器の広口壺で、内外面にハケ目調整を施している。内面に灰をかぶっている。

5は大型の圭頭縁の上部である。床面より出土した。

23号住居(第66図)

調査区の北東端に位置し、住居東半分が溝によっ

て削平されている。住居の1辺は3.88mである。住居を支える主柱は4本と想定されるが東側が削平されているため不明である。

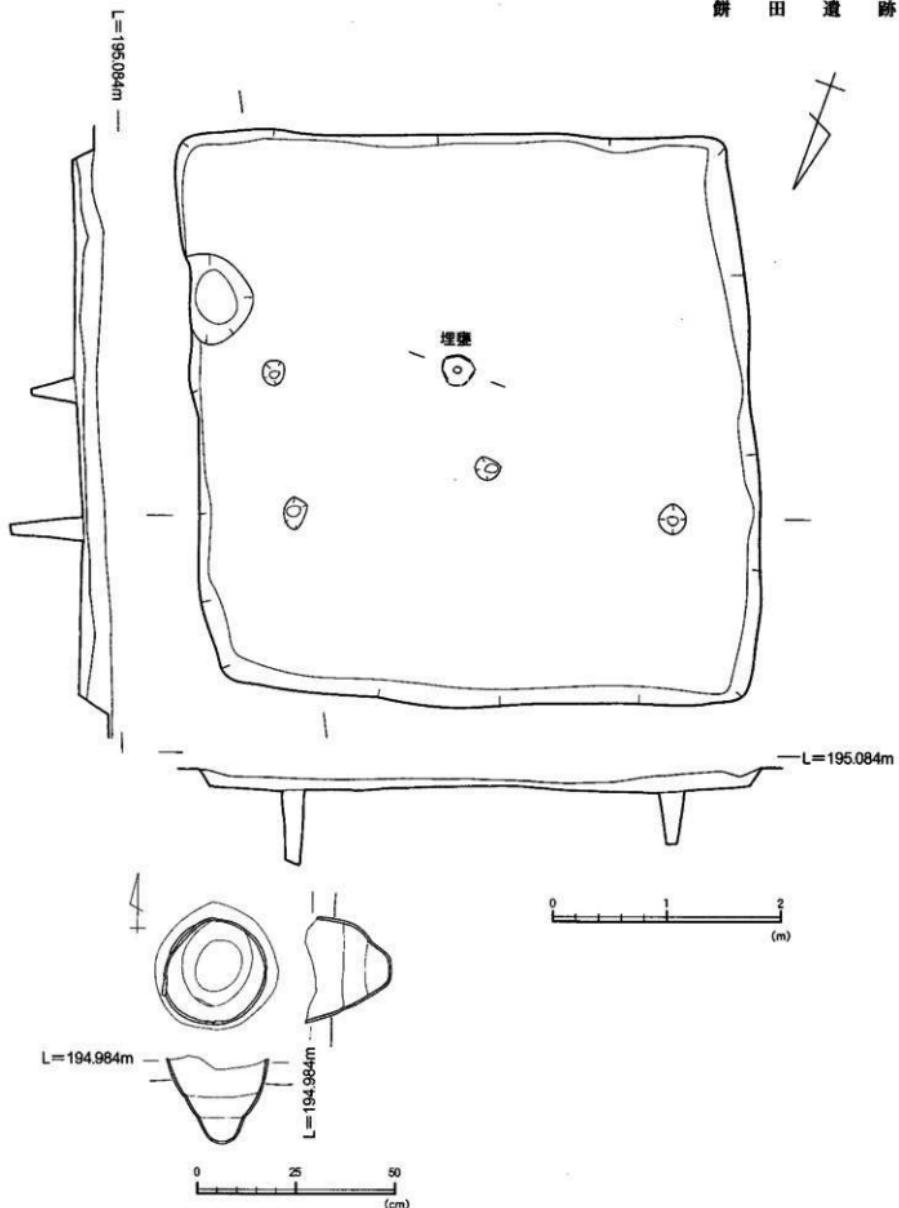
主柱穴の深さは約45cmである。

23号住居出土遺物(第66図)

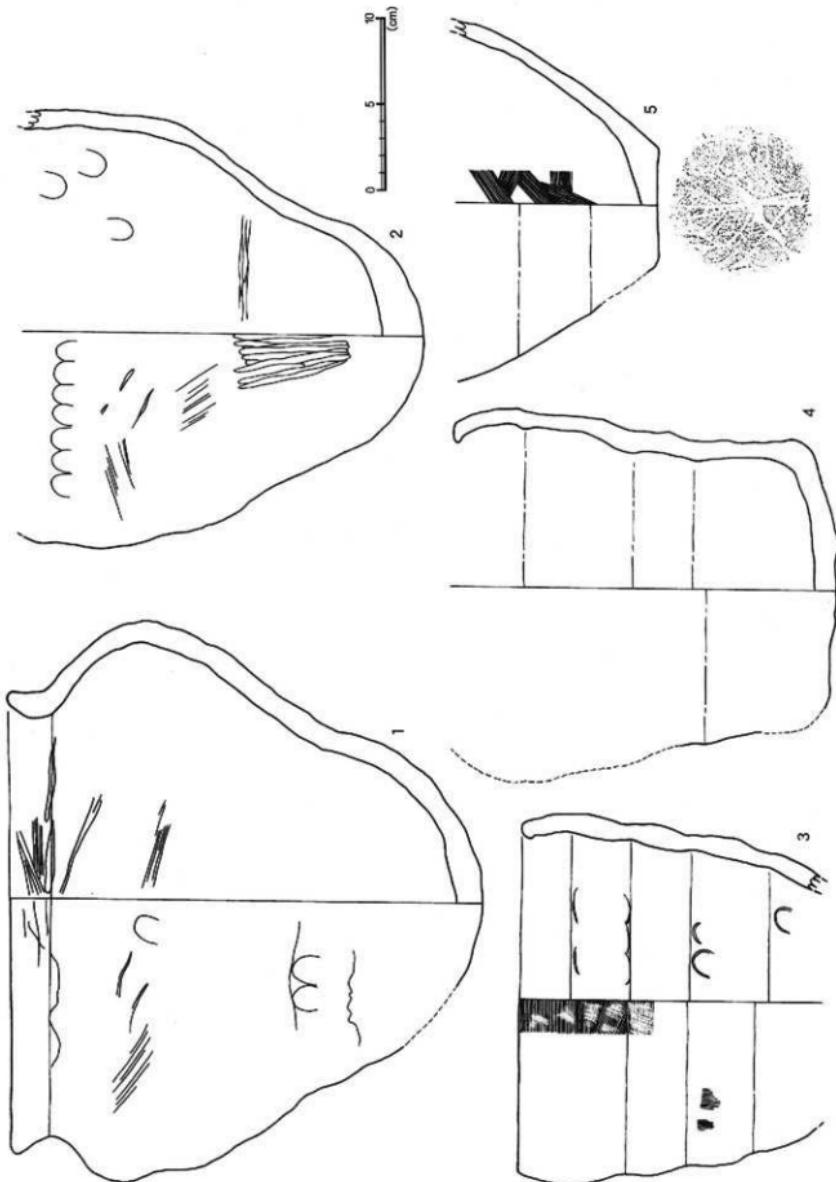
1は壺の頸部～肩部で、肩部は張っており、内面はヘラケズリ調整、頸部外面に指オサエを行っている。床面直上より出土した。

2は壺で、ほぼ完形である。口縁部はやや内傾しており、内外面に横ナデを施している。底部はヘラ切りである。床面直上より2つに割れて出土した。

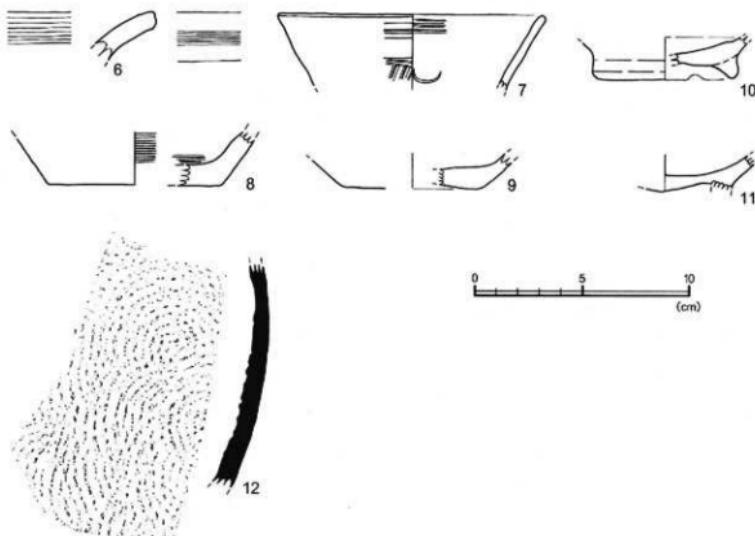
3は須恵器壺の胴部である。内外面にタタキを施している。



第60図 3-3区20号住居



第61図 3-3区20号住居出土遺物（1）



第62図 3-3区20号住居出土遺物（2）

24号住居(第67図)

調査区の中央部に位置し、25号住居を切っている。住居の長辺は8.9mで短辺は6.2mであり、床面積は55.18m²と他の住居の2~3倍の規模を持つ。北西壁から0.7m、南西壁から1.6m内側に溝が巡っており、深さは1~5cmである。また溝内側の区画は外側に比べ4~5cm程度低くなっている。溝内側の区画中央及び南端にそれぞれ直径1m、直径0.6mの土壠が検出されている。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約30~70cmである。他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。

24号住居出土遺物(第68~71図)

遺物量はパンケース2箱分に及ぶ。遺物の大半は床面から浮いた状態で出土した。

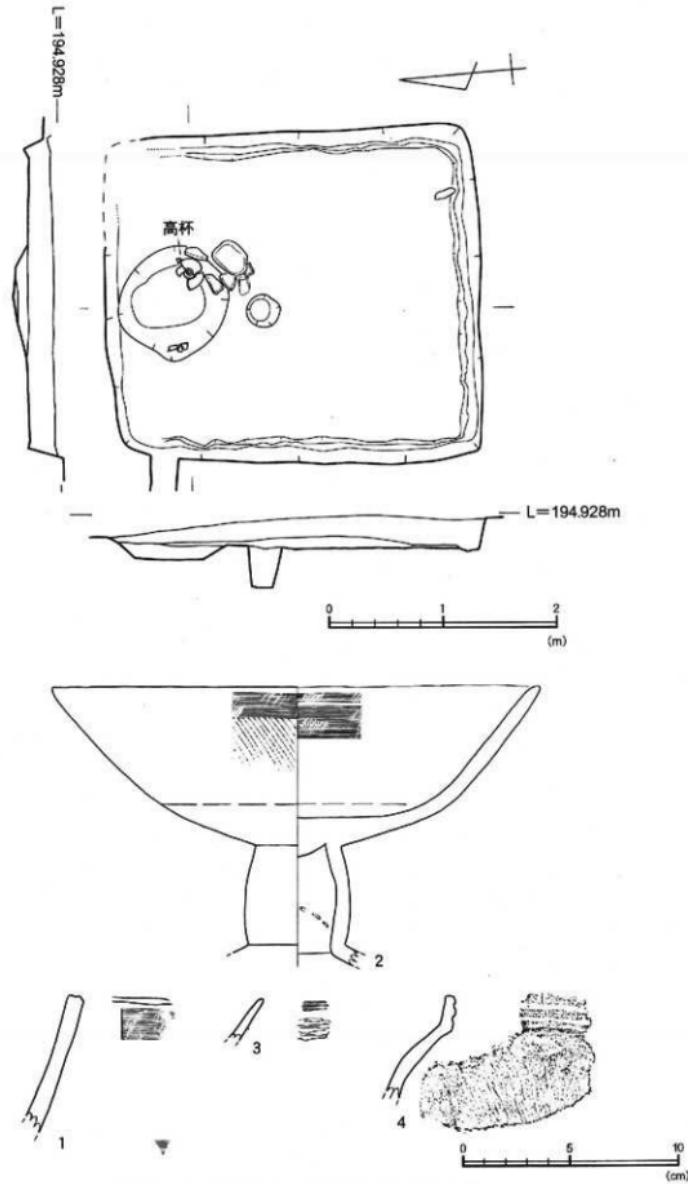
1~24は甕である。1の口縁部は直線的に開き、端部は丸い。2の口縁部はやや内湾している。頸部に刻み目突帯を施している。3の口縁部はほぼ垂直に立ち上っている。端部は平坦である。4の口縁部はやや外傾気味である。口縁端部にくぼみがある。5、6の肩部はなで肩で、頸部に布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らしている。6は床面直上より出土した。7は丸底で外面にやや突き出している。床面から浮いた状態で出土した。8は

厚い平底で、やや突き出している。9は平底で外面にやや突き出している。10は厚い丸底である。11は口縁端部でやや内湾する。端部は丸い。胴部に布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を持つ。床面から浮いた状態で出土した。12の口縁部は短く、強く外反している。端部は丸い。22は頸部に布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らしている。23は22同様、胴部に斜めの刻み目突帯を巡らしている。

24は鉢である。24号住居北壁上から出土しており、24、25号住居どちらの埋土に伴うものか不明である。

25~30は小型丸底甕である。25の口縁部は内湾しながら開いている。端部は丸い。床面直上から出土した。26の口縁部は長く、直線的に伸びる。端部は丸い。床面から浮いた状態で出土した。27、28の最大径は胴部中位で、口縁部は外に開く形状であったと思われる。29の最大径は胴部中位にくると思われる。30は底部である。

31~42は高杯である。31は杯底部からやや外反しながら伸びる。杯底部との稜線は不明瞭である。32は杯底部から口縁部まで直線的に伸びている。端部は丸い。杯底部との屈曲は明瞭である。杯外部から内面中位まで丹塗りである。33は32同様杯底部から口縁部まで直線的に伸びている。端部は丸い。杯底部との屈曲は明瞭である。34は杯底部から口縁



第63図 3-3区21号住居及び21号住居出土遺物

にかけてやや内湾し、口縁端部で外反する。端部丸い。坏底部との屈曲は明瞭である。坏部外面から内面中位にかけて丹塗りを施している。床面直上から出土した。35は坏底部から口縁部まで直線的に伸びている。坏底部との屈曲は明瞭である。床面から浮いた状態で出土した。36は口縁部まで直線的に開いている。端部は丸い。補修痕？がある。37は口縁部まで直線的に伸びている。端部は丸い。38は坏底部からやや外反しながら伸びる。坏底部との稜線は明瞭である。床面から浮いた状態で出土した。39の脚部はエンタシス状で裾部との屈曲は明瞭である。40、41の脚部はラッパ状に開く。42の口縁部はわずかに内湾している。坏部は浅いものであったと思われる。

43～46は坏である。43は口縁端部でやや外反している。端部は丸い。44の口縁部は内湾して立ち上がり、端部は丸い。45の口縁部はほぼ直立している。端部は尖っている。ヘラ切り底である。46は底部から内湾して立ち上がる。ヘラ切り底である。

13は弥生土器の壺で、動筋状の口縁部を持ち、外反している。口縁端部には調整による横線が一条巡っている。

25号住居(第72図)

調査区の中央部に位置し、24号住居に切られている。住居の長辺は4.58mで短辺は2.8m+ α 、床面積は12.82m²+ α である。住居を支える主柱は4本と想定されるが、住居南側が24号住居に切られているため不明である。主柱穴の深さは約30～50cmである。他にいくつかのビットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。遺物はなかった。

26号住居(第73図)

調査区の中央部に位置し、北東隅が削平されている。住居の長辺は6.4m、短辺は5.44m、床面積は34.82m²である。東西壁から1m、南北壁から0.8m内側に溝が巡っており、深さは約5cmである。また溝内側の区画は外側に比べ5cm程度低くなっている。住居東壁際中央より長径0.9m短径0.6mの楕円形土壙が検出されており、内部から土器片が出土している。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約30～50cmである。他にいくつかのビットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。

26号住居出土遺物(第74図)

1～7は土器器である。1～5は壺である。1の胴部は直線的に開いている。底部はやや上げ底で、突き出している。2の胴部は内湾して立ち上がる。上げ底で、外面に大きく突き出している。3の底部は平底でわずかに突き出している。4の口縁部はや

や内湾している。端部は平坦である。5の口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸い。

6は小型丸底壺で、外面は摩滅している。

7は高杯の坏底部である。

27号住居(第75図)

調査区の南端に位置し、住居の南側2/3は調査対象区外にあたり、完掘されていない。

住居の1辺は3.62mである。東壁に接して深さ約4cmの壁帶溝が検出されている。住居内からはビットは検出されていないため主柱等の構造は不明である。遺物は出土しなかった。

29号住居(第76図)

調査区の南部に位置し、南壁が削平されている。住居の長辺は2.56m+ α 、短辺は2.4m、床面積は6.14m²+ α である。東壁及び北壁、西壁の一部に深さ5cmの壁帶溝が巡っている。住居中央に直径45cmのビットがある。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約30～40cmである。ただし主軸が23度ほどずれているため、この住居に伴うものかや疑問が残るところである。

29号住居出土遺物(第76図)

1～4は土器器である。1は壺で、口縁部はやや外反している。口縁端部は丸く、胴部に布で包んだヘラ状工具で施した斜めの刻み目突帯を這らす。床面直上から出土した。

3、4は高杯である。3の脚部はラッパ状になると思われる床面から浮いた状態で出土した。4はミニチュア土器で、脚部は筒状で、裾部は開く。床面から浮いた状態で出土した。

2は坏で、口縁部は直線的に開く。端部は丸い。床面から浮いた状態で出土した。

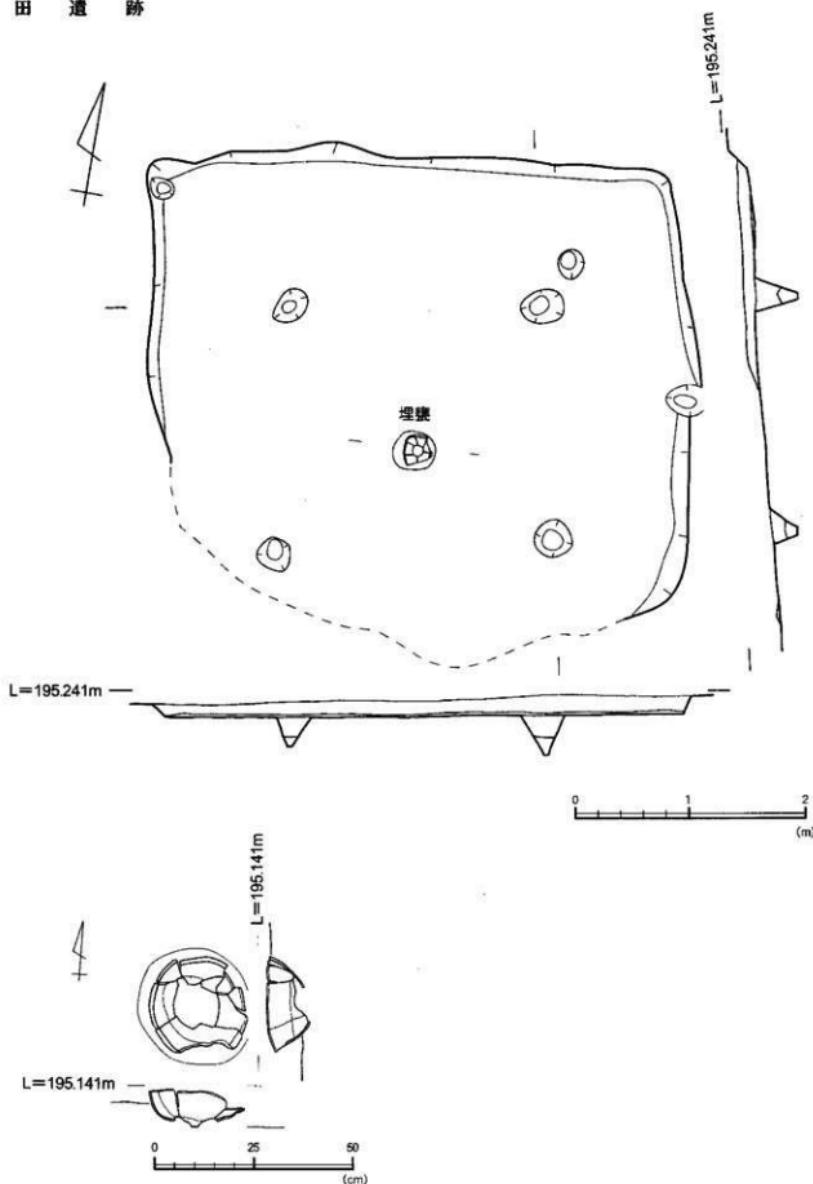
30号住居(第77図)

調査区の南東端に位置し、やや台形を呈している。住居の長辺は2.66m、短辺は2.18m、床面積は5.34m²である。深さ4cmの壁帶溝がほぼ全周している。住居中央に直径45cmのビットがある。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約15～40cmである。遺物は出土しなかった。

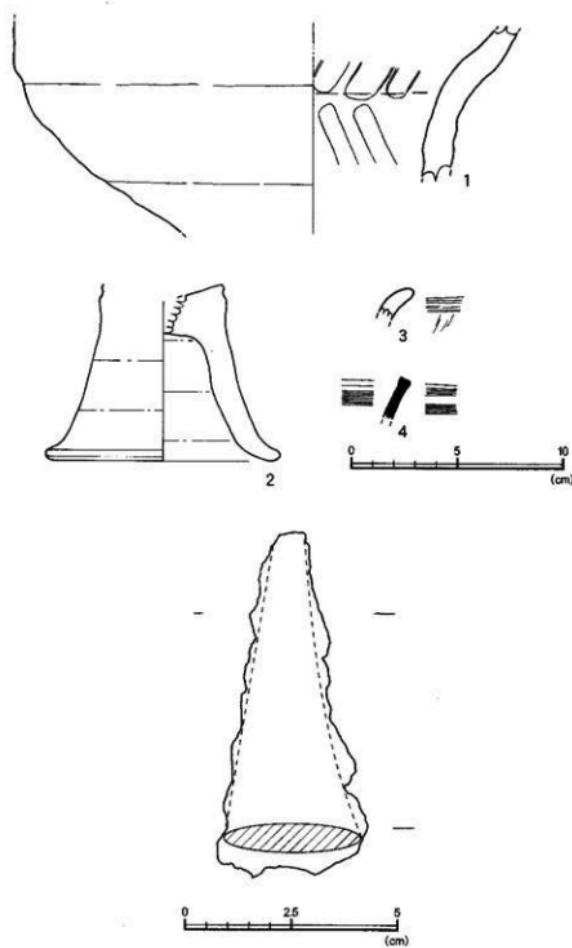
32号住居(第78図)

調査区の北西部に位置し、南側が削平されている。住居の長辺は3m、短辺は2.98m、床面積は8.94m²である。北東壁沿いに深さ4cmの壁帶溝が巡っている。住居北隅に不定形の土壙がある。住居を支える主柱は4本と想定されるが、住居北隅には土壙があるため、不明である。主柱穴の深さは約15～25cmである。

餅田遺跡

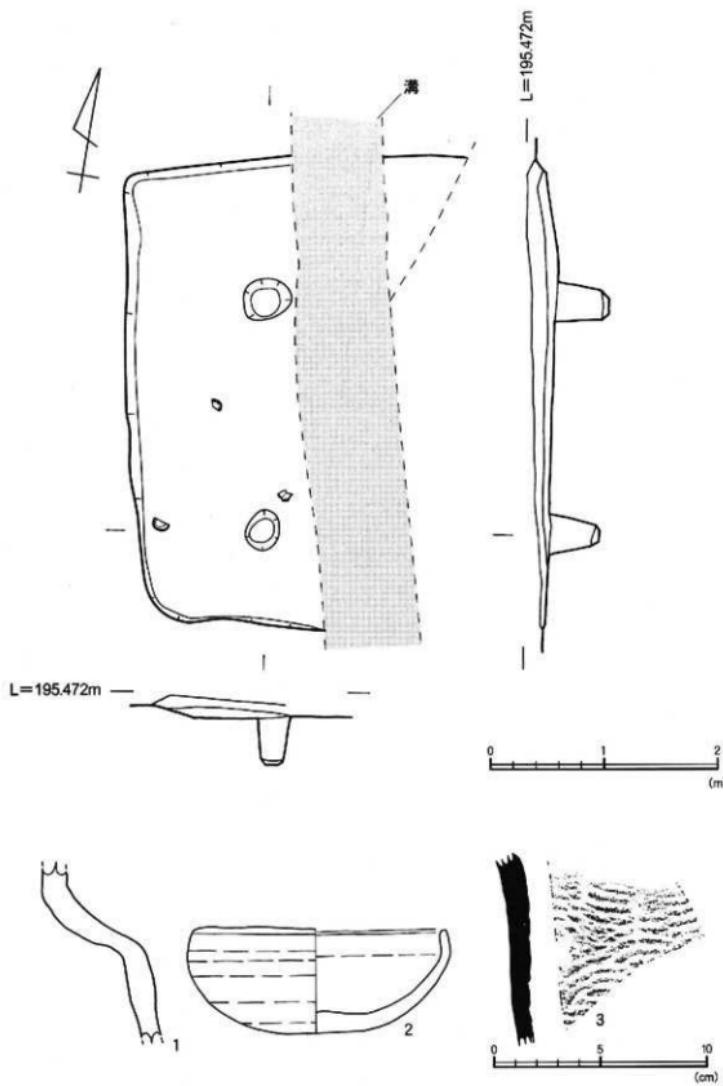


第64図 3-3区22号住居



第65図 3-3区22号住居出土遺物

餅田遺跡



第66図 3-3区23号住居及び23号住居出土遺物

32号住居出土遺物(第78図)

1は土師器壺である。口縁部は直線的に開く。端部は丸い。床面から浮いた状態で出土。この他土器細片が数点出土しているが、計測できなかった。

33号住居(第79図)

調査区の南西端に位置し、北壁が削平されている。住居の長辺は4.02m、短辺は3.3m、床面積は13.27m²である。幅40~90cm、深さ4~7cmの壁溝が南北壁及び東西壁の一部を巡っている。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約25~30cmである。他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるものかどうかは不明である。遺物はなかった。

掘立柱建物跡(第80図)

3~3区南西部に位置し、17号、18号住居を横断している。柱間1間×8間の掘立柱建物である。建物規模は桁行14.84m、梁行5.96m、柱間寸法は桁行0.6m~1.6m、梁行4.4m~4.7mを計測する。主軸方向はN-20°~Wである。

(4) その他の遺物(第81~83図)

3~3区からは黒ポク土層よりバンケース5箱に及ぶ遺物が出土している。

土師器

1~3は甕である。1は1/2残存で、口縁部は短く、やや外反する。輪積み痕が残る。最大径は胴部上位で、底部は平底である。別の甕破片に重なりあうように横転した状態で出土した。2の口縁部はほぼ直立し、端部は平坦である。頭部に布で包んだヘラ状工具で施した斜めの刻み自突帯を巡らせている。3は小型の甕で、口縁部は外反し、端部は丸い。

4~6は高杯である。4は杯底部からゆるやかに立ち上がる。杯底部との接線は不明瞭である。5は杯底部から口縁部まで直線的に伸び、杯底部との屈曲は明瞭である。口径30.6cmの大型高杯である。6はラッパ形に開く脚部である。

須恵器

7は环身の口縁端部である。8、9は杯蓋である。8は3~2区黒ポク土層出土破片と接合した。9は天井部にヘラ記号がある。

銅製品

10は耳環である。残存は約1/2で、金メッキが環の内側に少し残っている。

石器

1~4は打製石器である。1、2は石鏃でチャート製である。2は異形石鏃である。3、4は石斧で石材は安山岩と思われる。5~7は磨製石器で石材は粘板岩である。5、6は石鏃、7は石包丁の破片

である。8は砥石である。

4. 3~4区の調査

(1) 古墳時代の遺構・遺物

4号住居(第84、85図)

調査区の西側に位置し、住居の長辺は3.14mで短辺は2.68mであり、床面積は8.42m²である。住居の中央や東側には埋甕炉が設置されている。甕の周辺は焼土化し、掘り込み面との境目を不明瞭にしている。

住居を支える主柱は4本と想定されるが北東隅からは検出されず、他にいくつかのピットが住居の中から検出されているが、この住居の構造に関係あるもののかどうかは不明である。主柱穴の深さは約30cmである。住居北壁中央内側に45cm程度の突出部がみられる。

1号住居出土遺物(第85図)

1は土師器甕で、口縁部が欠損している。頸部に刻み目突窓を持つ。埋甕炉として用いられていた。

(2) その他の遺物(第86図)

土師器

1、2、4は甕である。1はほぼ完形で、口縁部は内湾するが端部は指オサエによりやや短く外反する。最大径は胴部上位にある。胴部中位ですばまり、下位で再び膨らむ形状を持つ。2の最大径は胴部上位にくると思われる。1と隣接して出土した。4は台付甕である。

6、7は小型丸底甕である。6の最大径は胴部中位にある。7の底部は平底で、やや卵形の体部を持つ。

5、8~10は壺である。5の口縁部は短く外反している。口縁部内面及び外面に丹塗りを施している。8はほぼ完形である。内外面に丹塗り、ヘラミガキを施している。9、10はヘラ切り底である。

11、12は高杯である。11は脚部でラッパ状に開く。裾部との接線不明瞭である。外面及び裾部内面の一部に丹塗りを施している。2は口縁端部でやや外反する。杯外縁に丹塗りを施している。

須恵器

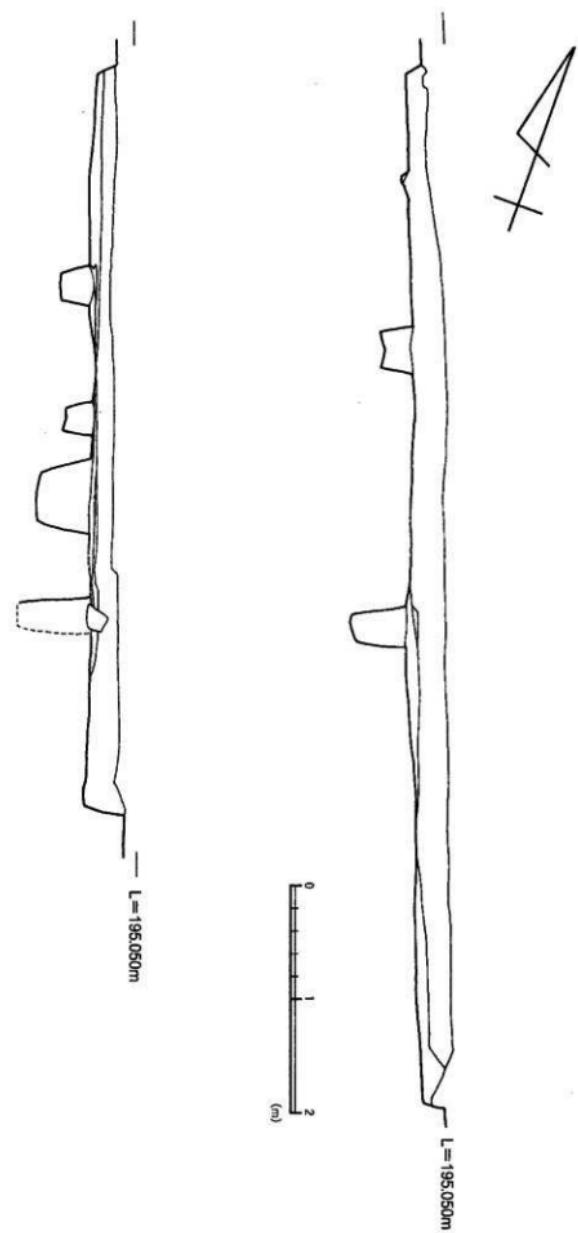
13、14は甕で、口縁部は短く外反し、端部を外側に折り曲げている。

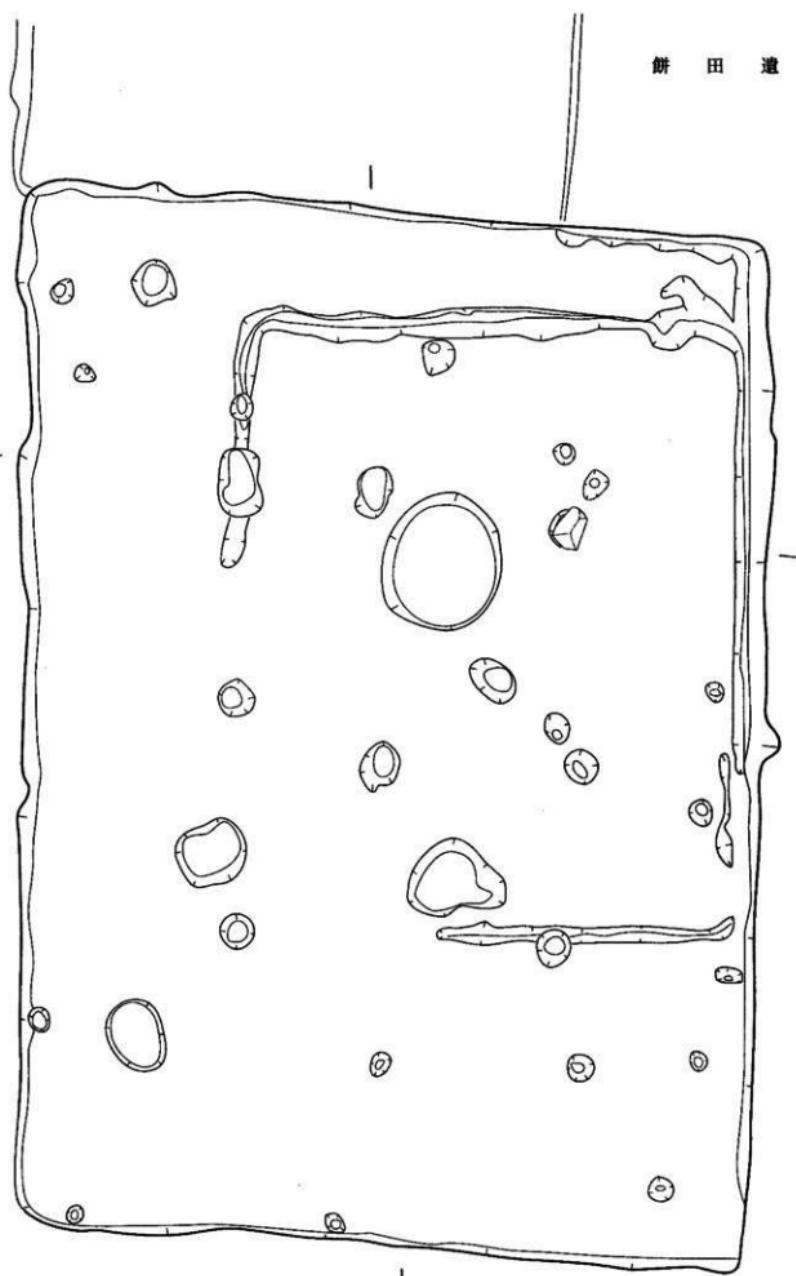
15は高台付甕で、外底部に灰かぶりが見られる。底部径8.4cm。

縄文土器

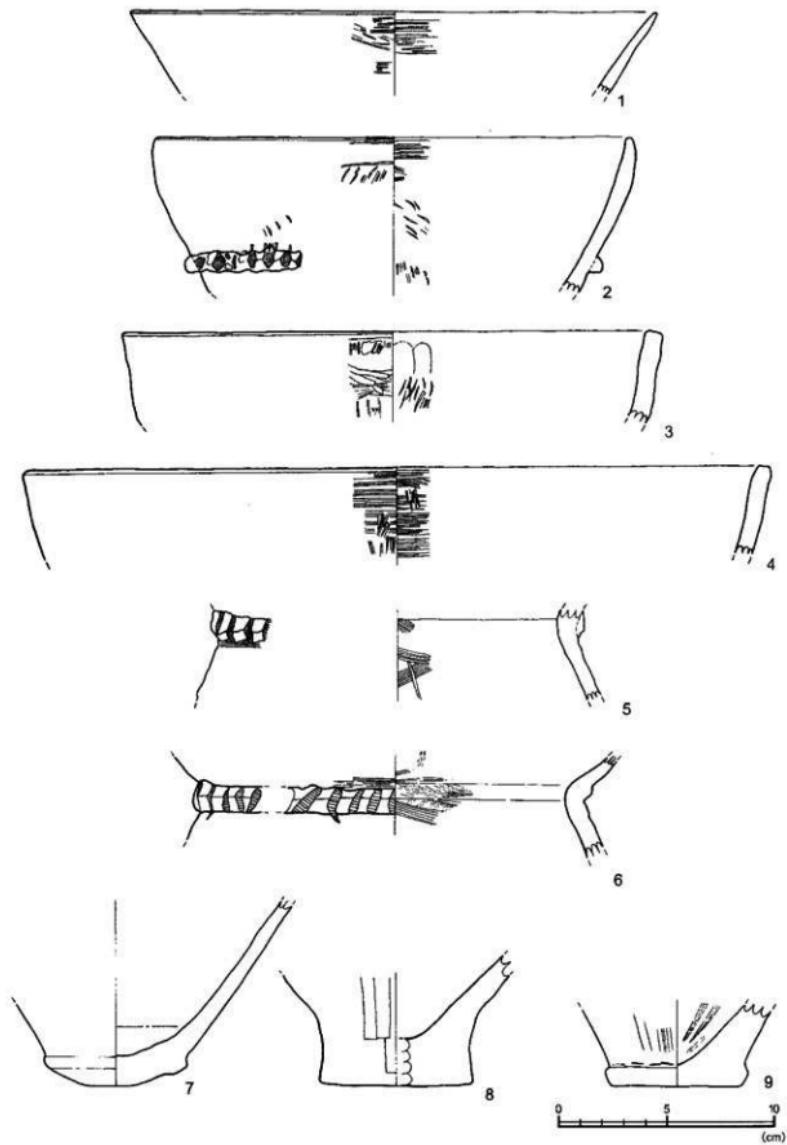
3は黒色磨研土器の口縁部である。

餅田遺跡

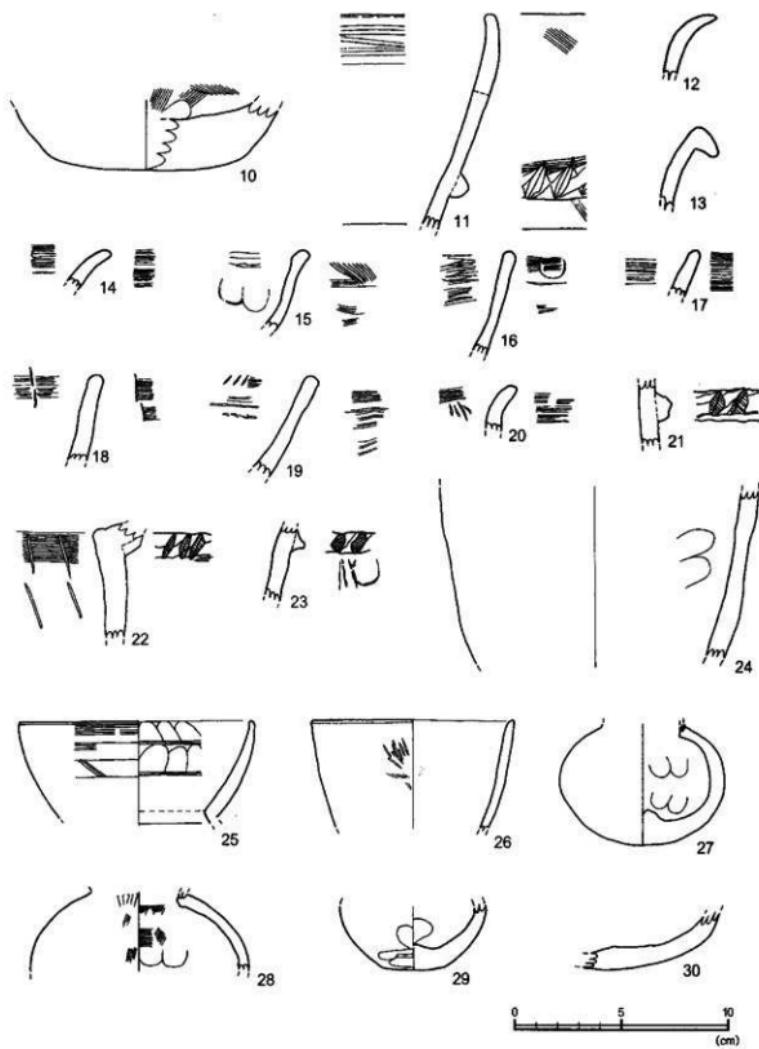




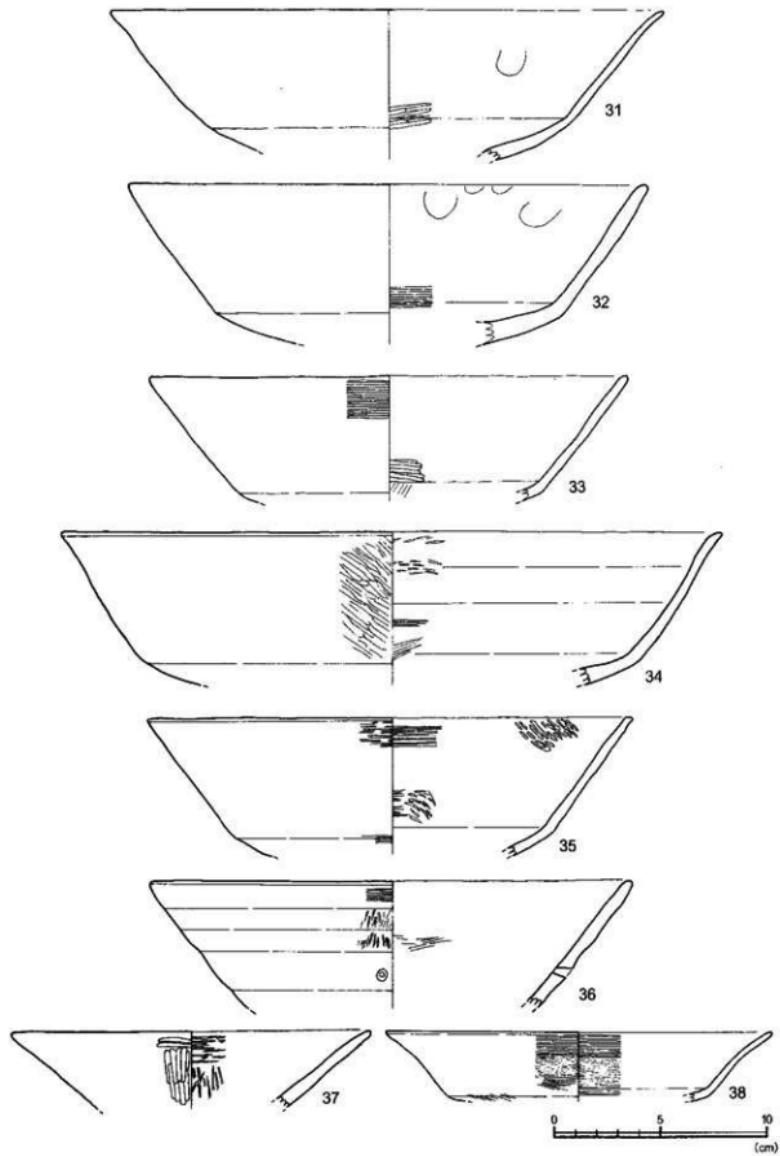
第67図 3-3区24号住居



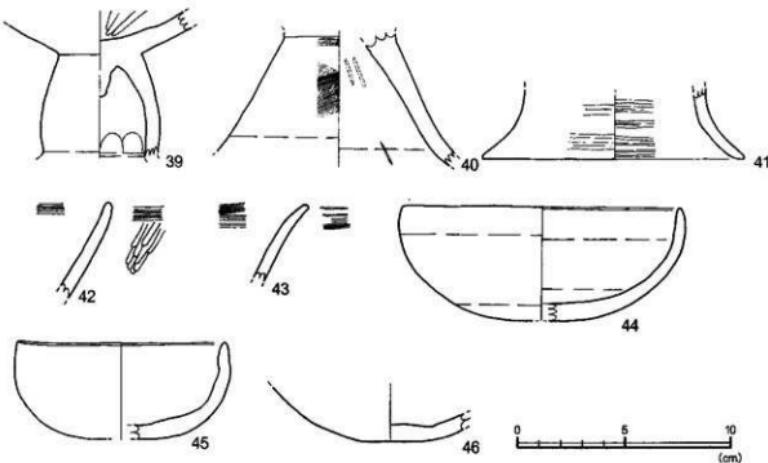
第68図 3-3区24号住居出土遺物 (1)



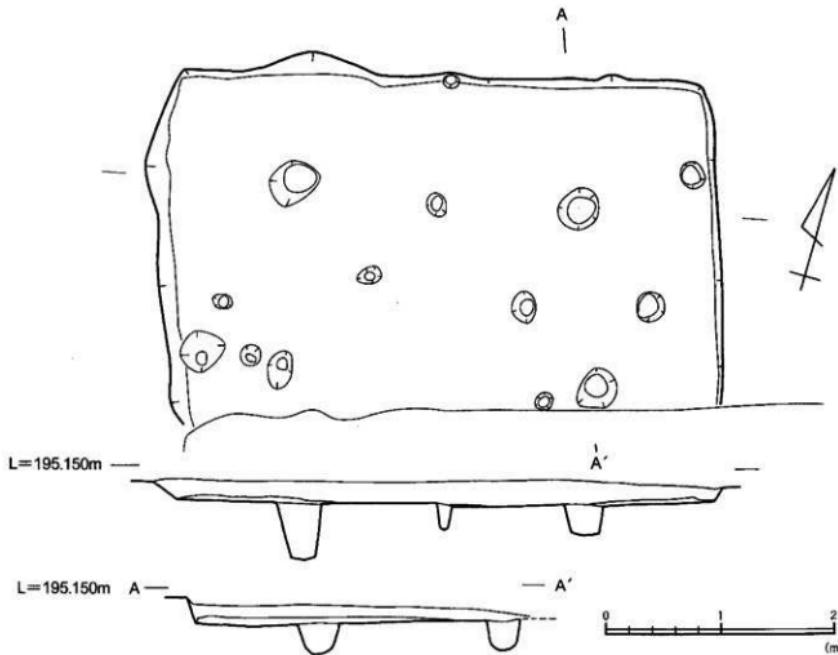
第69図 3-3区24号住居出土遺物（2）



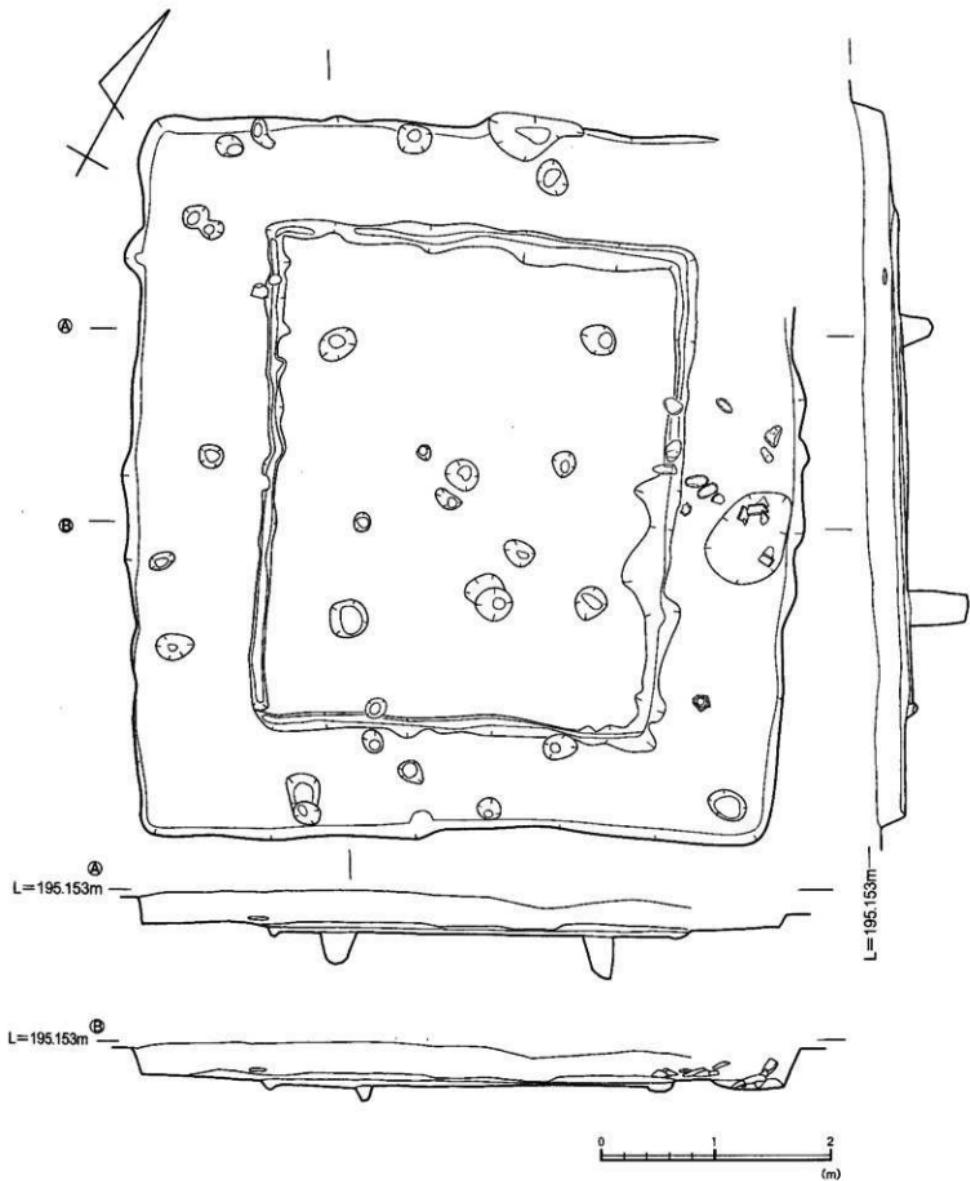
第70図 3-3区24号住居出土遺物（3）



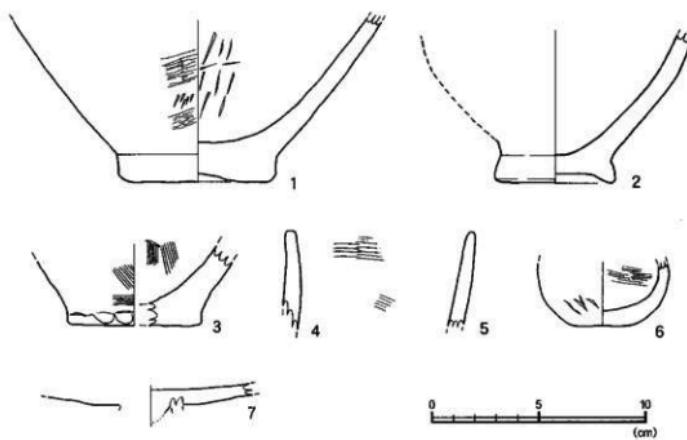
第71図 3-3区24号住居出土遺物(4)



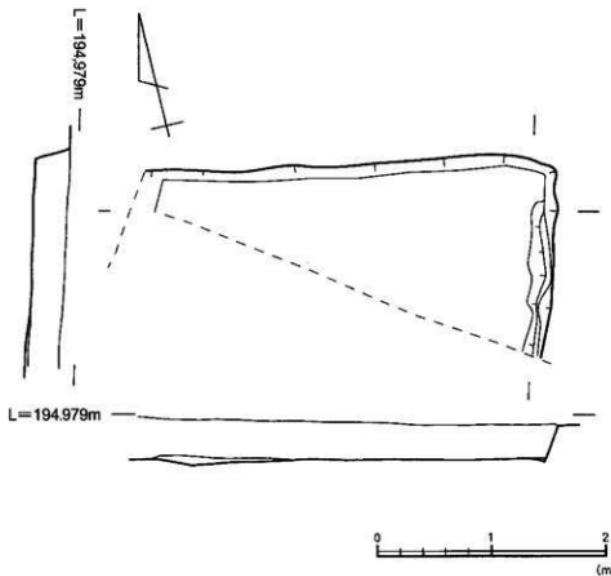
第72図 3-3区25号住居



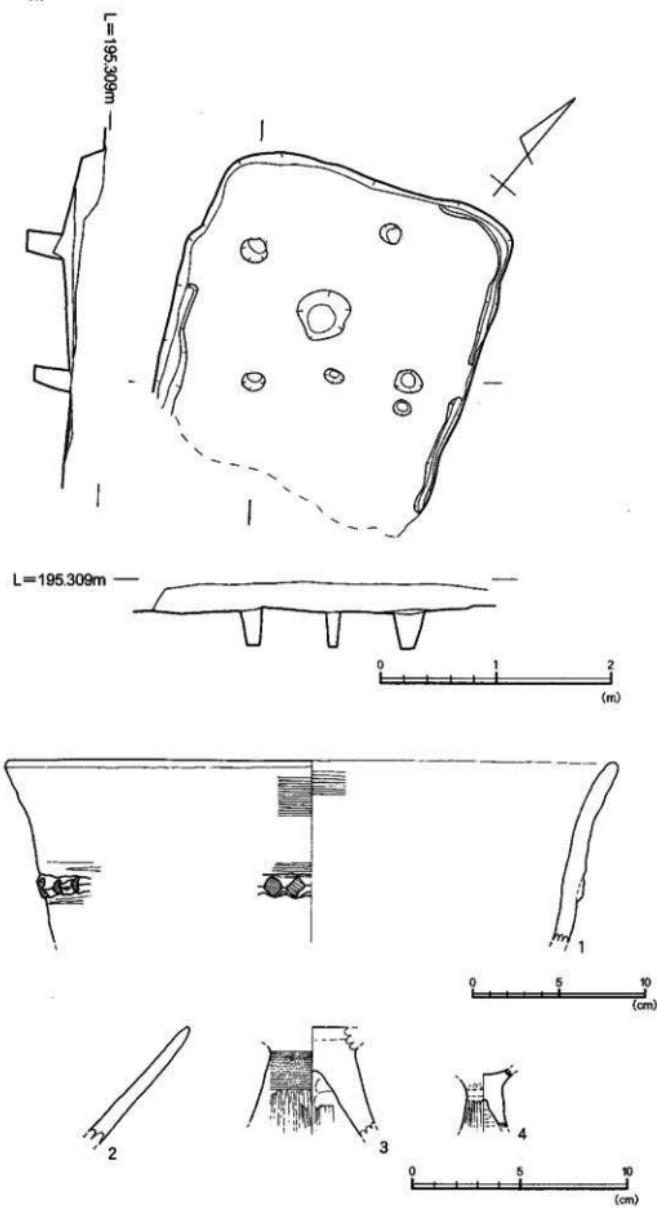
第73図 3-3区26号住居



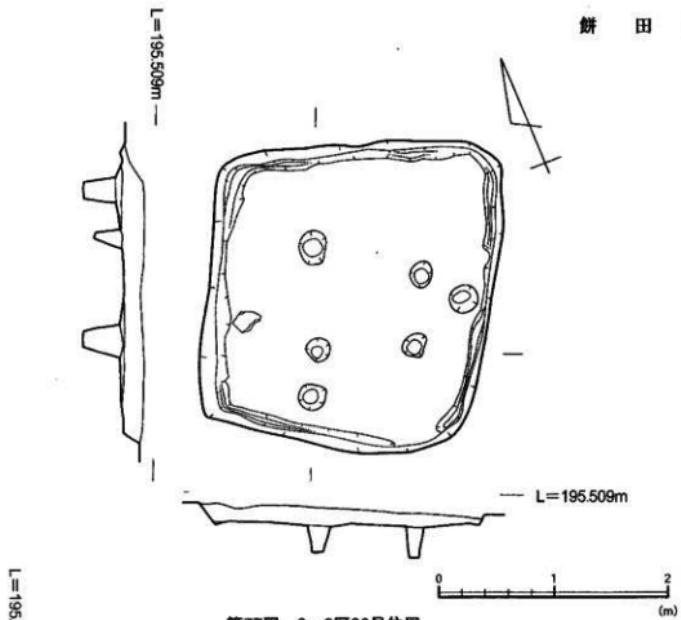
第74図 3-3区26号住居出土遺物



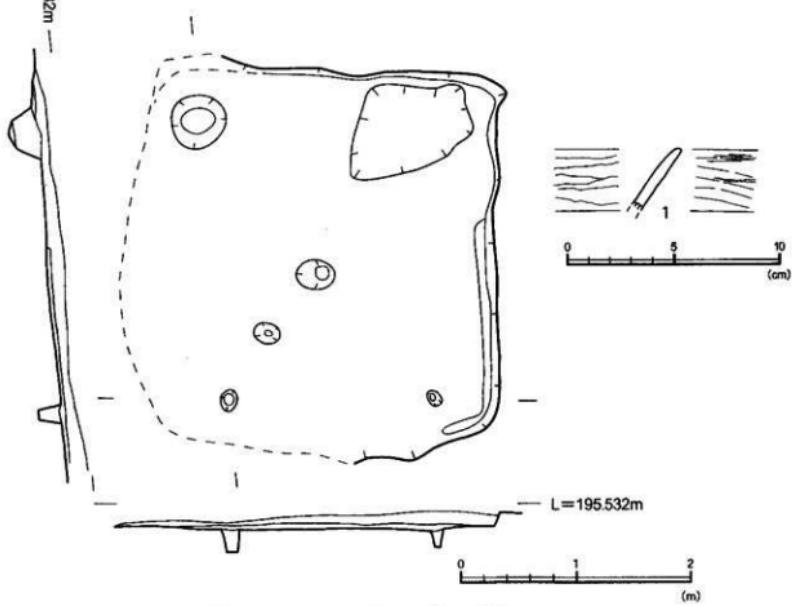
第75図 3-3区27号住居



第76図 3-3区29号住居及び29号住居出土遺物

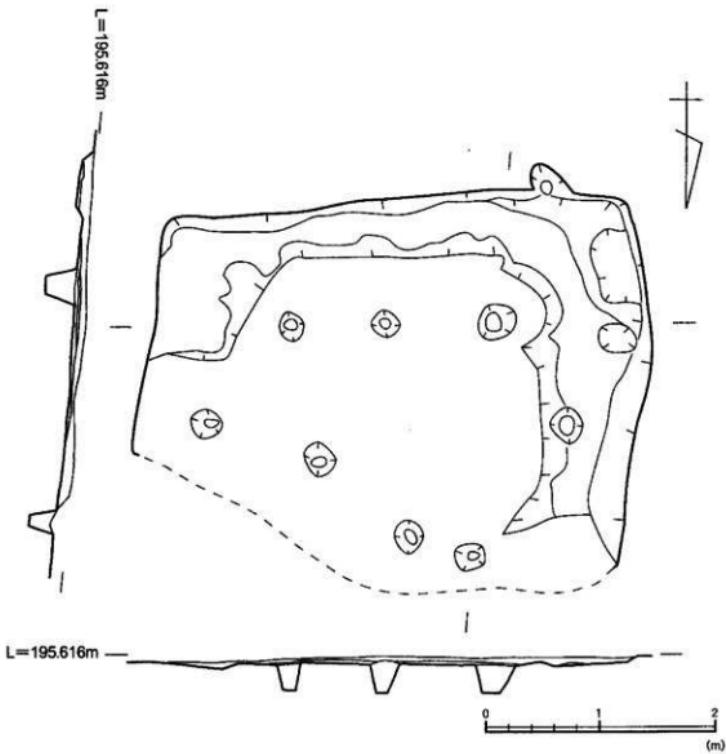


第77図 3-3区30号住居



第78図 3-3区32号住居及び出土遺物

餅田遺跡



第79図 3-3区33号住居

第6節まとめ

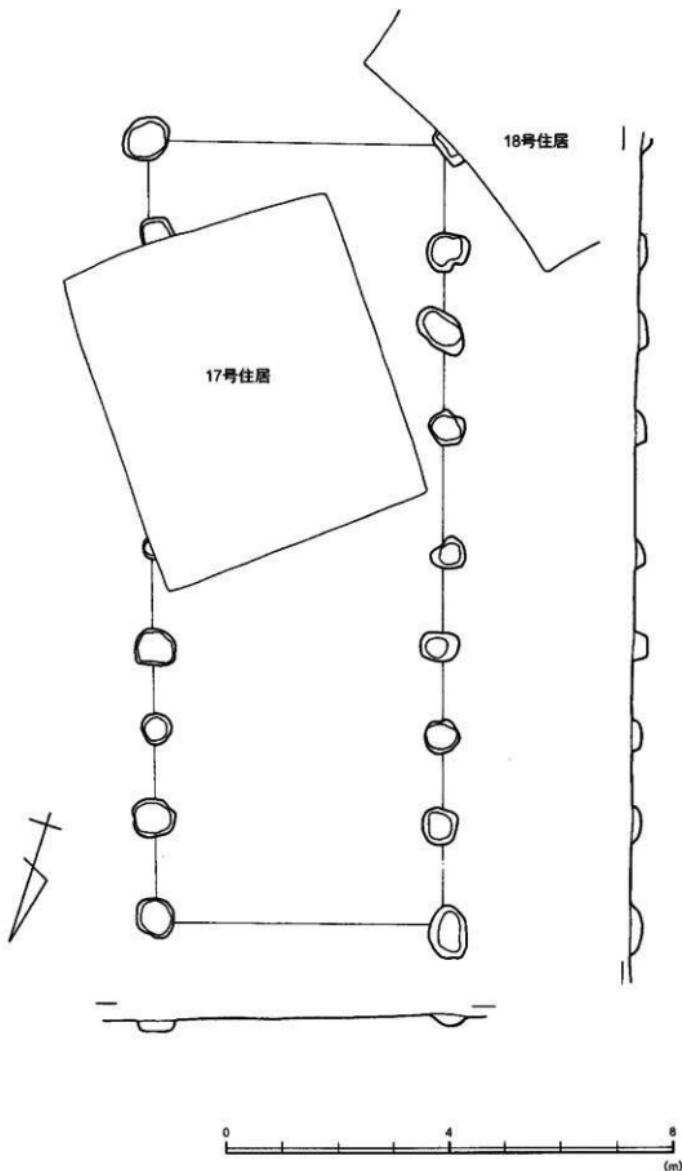
餅田遺跡では、縄文時代から古代の遺物が出土している。遺構は縄文時代の竪穴住居4軒、弥生時代の花弁状住居1軒、古墳時代の竪穴住居29軒、古代と推定される掘立柱建物が検出された。

縄文時代の円形住居からは西平式土器が出土しており、縄文時代後期と思われる。弥生時代の花弁状住居は半分が調査対象地区外にかかり、全体像を得るに至らなかった。5層の粘床が確認された。

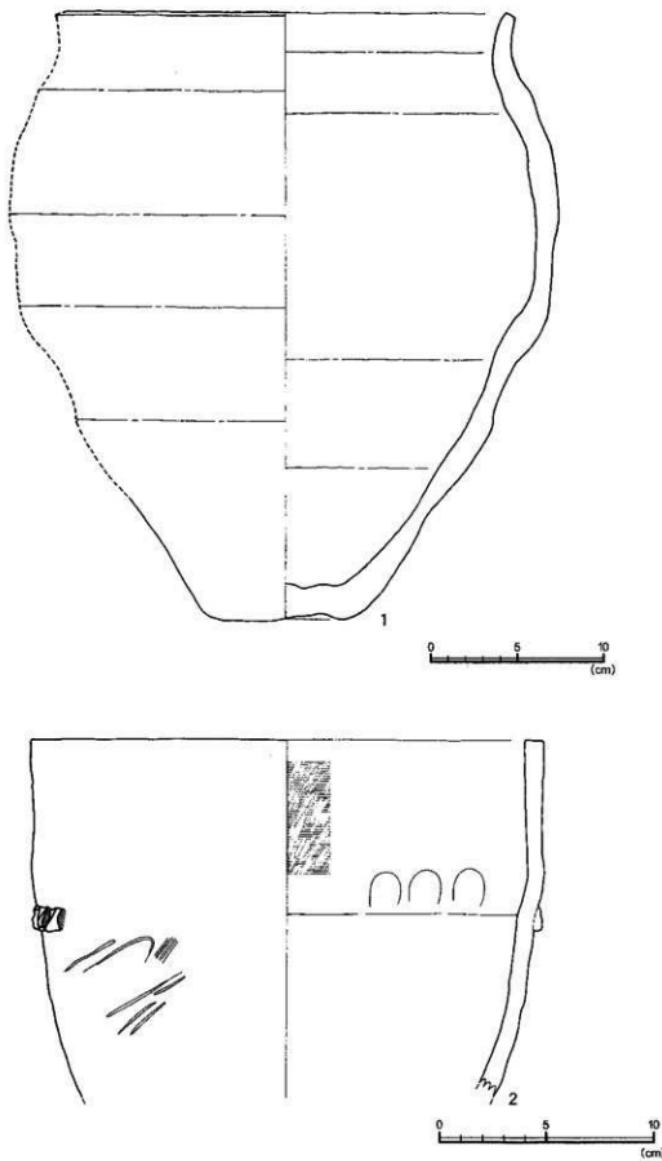
古墳時代の竪穴住居29軒のうち8軒に埋甕炉を備えている。6世紀後半代と思われる。住居内からの須恵器の出土はなかった。1号住居には竈自体はなかったが、煙出し穴と推測されるものが設置されており、また住居南東隅からは瓶が出土している。集

落が営まれたのは限定された時期であると思われる。住居内に一段低い区画を持つ竪穴住居は4軒あり、不定形な平面プランを持つ3号住居や区画が住居中央から大きくずれている24号住居の平面プランからみると、このような区画が生じたのは住居を拡張した結果ではないかと思われる。大型の竪穴住居については、1.長方形の平面プラン、2.土器の大量投棄、3.集落の中央部に位置する、4.埋甕炉を持たないなどの共通点を持つ。以上から集落内の公共的な施設であった可能性も考えられる。

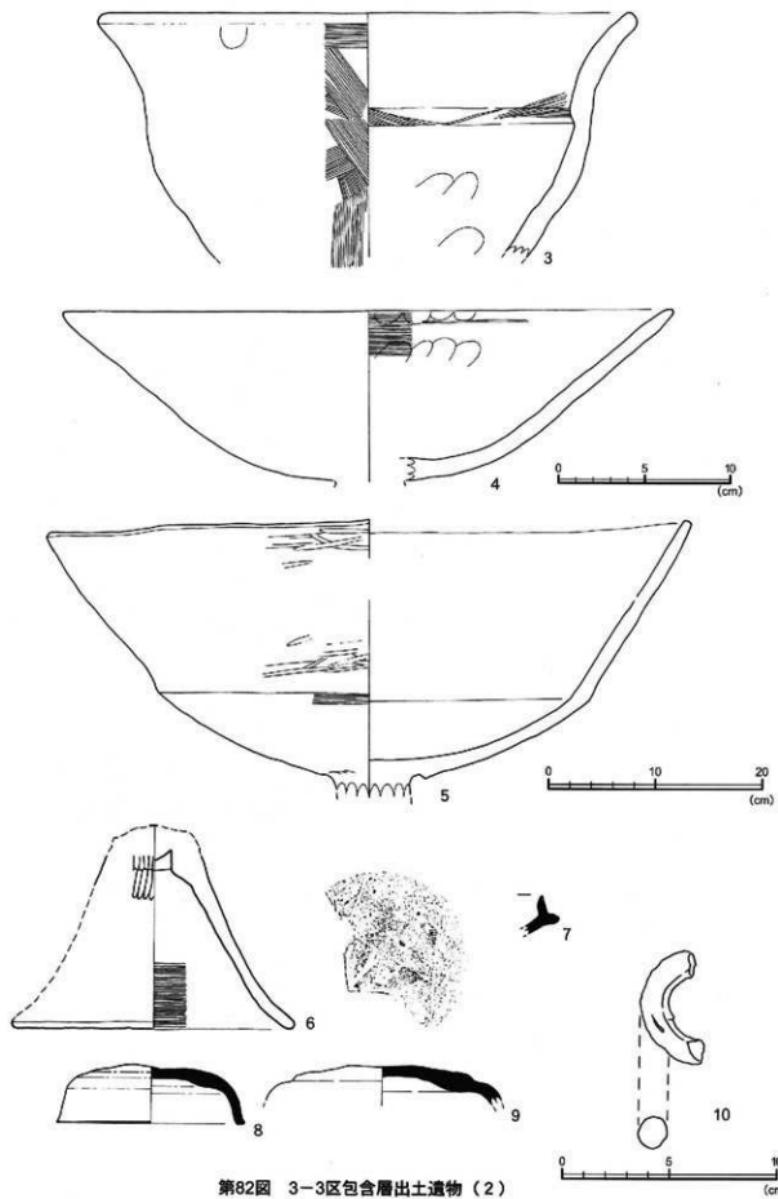
大型の掘立柱建物については、アカホヤ面で検出したが、非常に浅く、遺構面は黒ボク土であると思われる。古代の遺物としては布麻土器、土師皿、筋錠車、土鍤などがある。



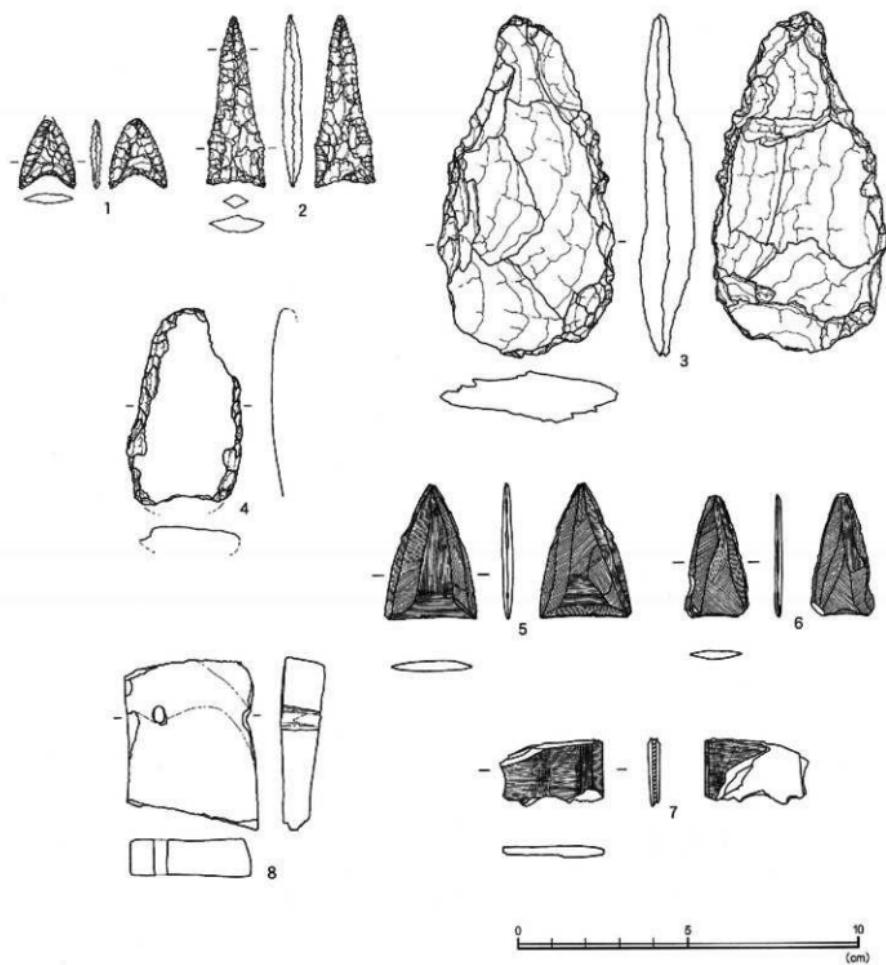
第80図 3-3区掘立柱建物跡



第81図 3-3区包含層出土遺物（1）



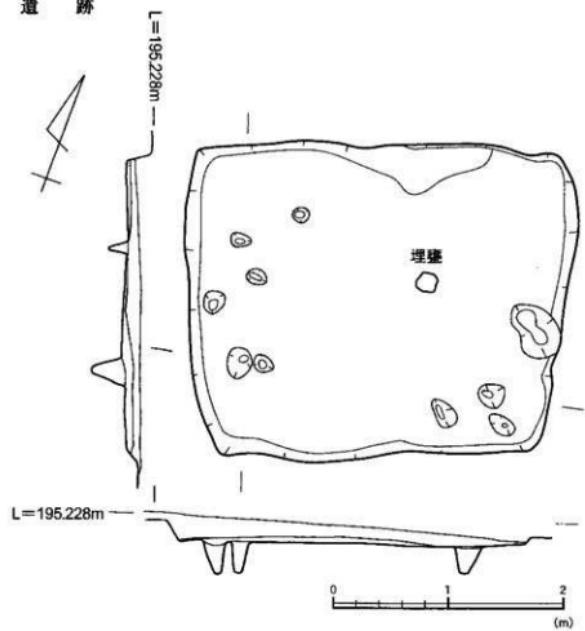
第82図 3-3区包含層出土遺物（2）



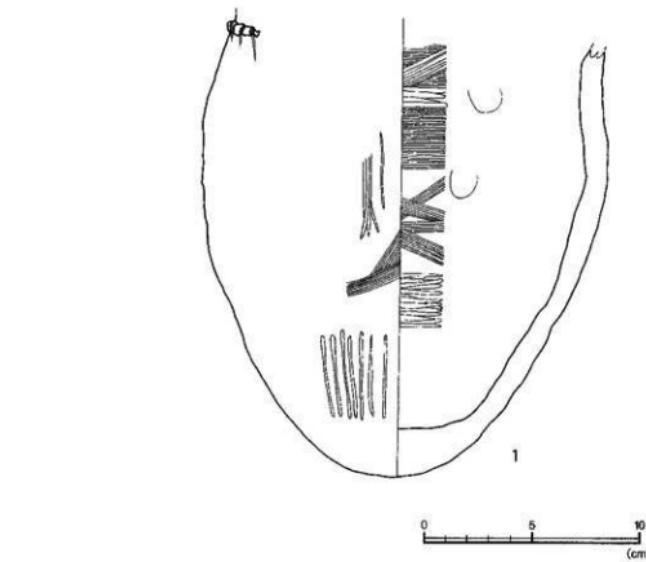
第83図 3-3区包含層出土遺物（3）



餅田遺跡

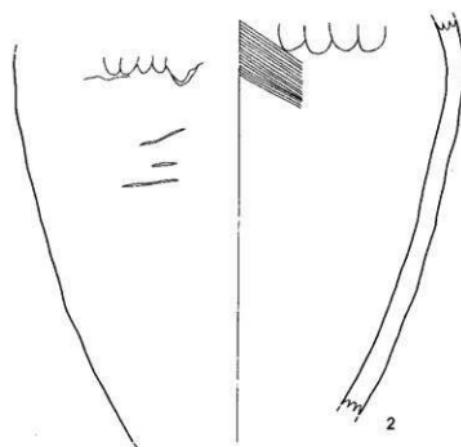
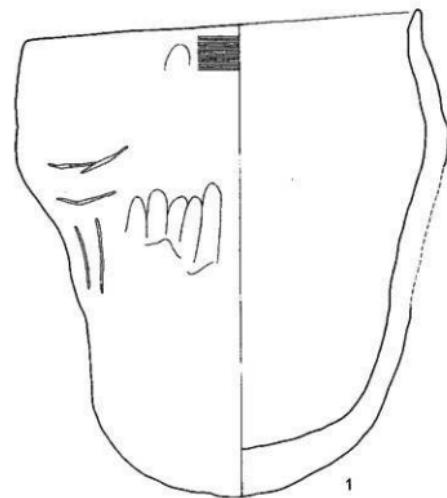


0 1 2
(m)

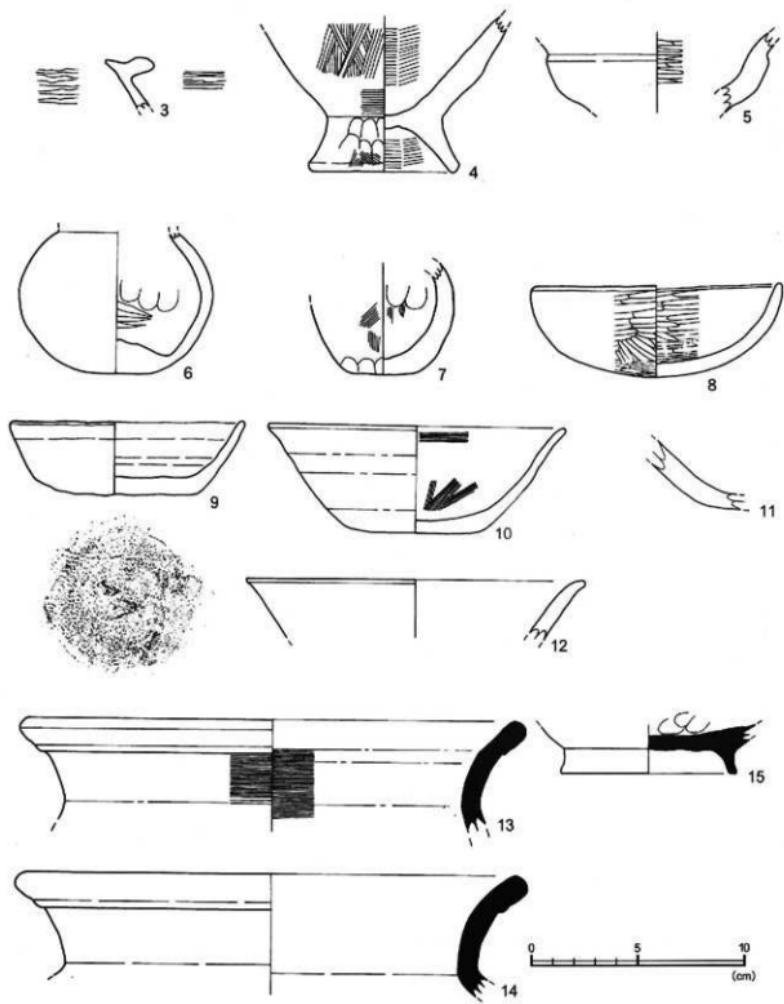


0 5 10
(cm)

第85図 3-4区1号住居及び出土遺物



第86図 3-4区包含層出土遺物（1）



第87図 3-4区包含層出土遺物（2）

だい ぶ
大 部 遺 跡



第4章 大部遺跡の調査

第1節 位置と環境

当遺跡は、市内中央部に位置し、標高は約200mである。真方川（大淀川支流）によって形成された河岸段丘の東岸に立地し、北側の保楊枝原台地及び東側の杉蘿台地によって挟まれている。

第2節 調査に至る契機

西諸県農林振興局との協議の結果、平成8年度市谷地区3工区の面工事実施面積7.5haのうち、25,000m²について発掘調査を実施することになった。

第3節 調査の概要

調査期間は平成8年7月25日から平成9年3月7日で、事業予定地を1～4区に設定し、うち1区をさらに5区間に分けた。（第2図）

大部地区の基本層序は次のとおりである。

1
2
3
4
5

第1層 耕作土
第2層 黒ボク土
第3層 アカホヤ火山灰土
第4層 牛ノ脛火山灰土
第5層 暗褐色土

第1図 大部遺跡基本層序

第2層の黒ボク土層は2層に分かれており、下層が若干色が薄いようである。しかし、発掘時には区分できなかった。遺物を多量に包含している。遺構はアカホヤ火山灰面で検出した。

第4節 1区の調査（第3図）

1区は平坦な地形で、ピット群が一面に広がっている。また、1～2区からは竪穴住居跡が、1～4区、1～5区から竪穴状遺構がそれぞれ1軒ずつ検出されている。

1.1-1区の遺構・遺物（第4図）

1～1区からはピット群が検出されている（第4図）。一部アカホヤ上面まで削平を受けている。遺物はすべて黒ボク土層からの出土である。

1-1区出土遺物（第5図）

土師器

1～4は甕である。1は頸部に布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らせていている。2は口縁端部を外側につまみ出している。3は平底で、外側に大きく突き出している。4は厚い平底である。

歴史時代の遺物

5は染付碗である。外面は浅黄色、内面は明オリーブ灰色で、外底部は露胎である。

6は青磁碗である。外面は緑灰色、内面は明緑灰色で蓮弁文を施している。

7は滑石製の石鍋で、色調は銀灰白色である。

2.1-2区の調査（第6、7図）

1～2区からは竪穴住居跡1軒、土壙1基、ピット群が検出されている。

(1) 古墳時代の遺構・遺物

1号住居（第8図）

調査区の北東部に位置し、住居の1辺は5.9mであり、ほぼ方形を呈している。床面積は34.8m²である。住居南西壁沿いに3m×1.3m程度のベッド状遺構を、また南東、北東、北西壁に接して深さ3cmの壁帶溝を持つ。住居を支える主柱は4本で、主柱穴の深さは約25～50cmである。

ベッド状遺構の上からは甕、高坏が検出された。

1号住居出土遺物（第9図）

1～3は土師器である。1は甕で、底部中央に凹みがあり、胴部は直線的に開く。住居北西隅のベッド状遺構の上に横転した状態で出土した。

2、3は高坏である。2の坏部の縦線は明瞭で、坏底部からやや外反して伸びる。端部は丸い。丁寧なミガキを施している。3の坏部は内湾して立ち上がり、縦線は不明瞭である。端部は丸い。ベッド状遺構の上に伏せた状態で置かれていた。

土壙1（第10図）

長辺2.46m、短辺2.3mで、隅丸方形のプランを持つ土壙である。土師器甕が1点出土している。

土壙1出土遺物（第11図）

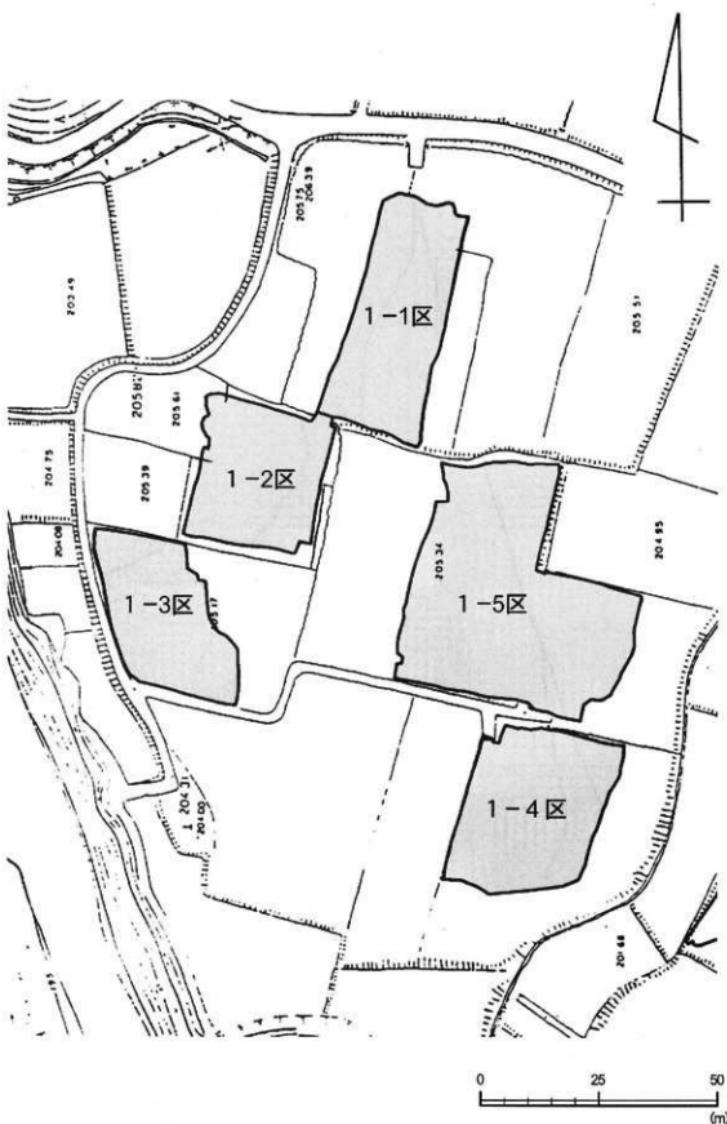
1は甕の胴部で、外面はタテ方向にヘラケズリを施している。床面直上より出土した。

大 部 遺 跡

大部遺跡

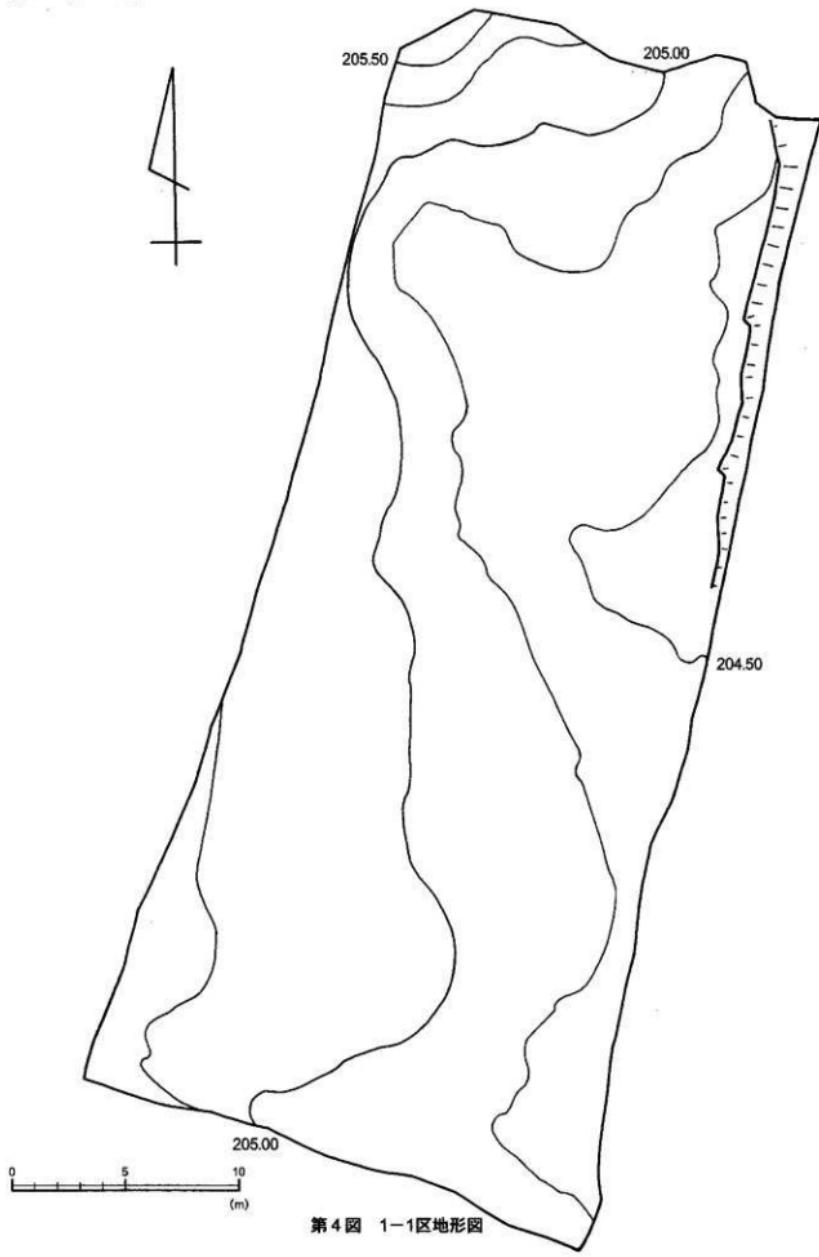


第2図 大部遺跡位置図

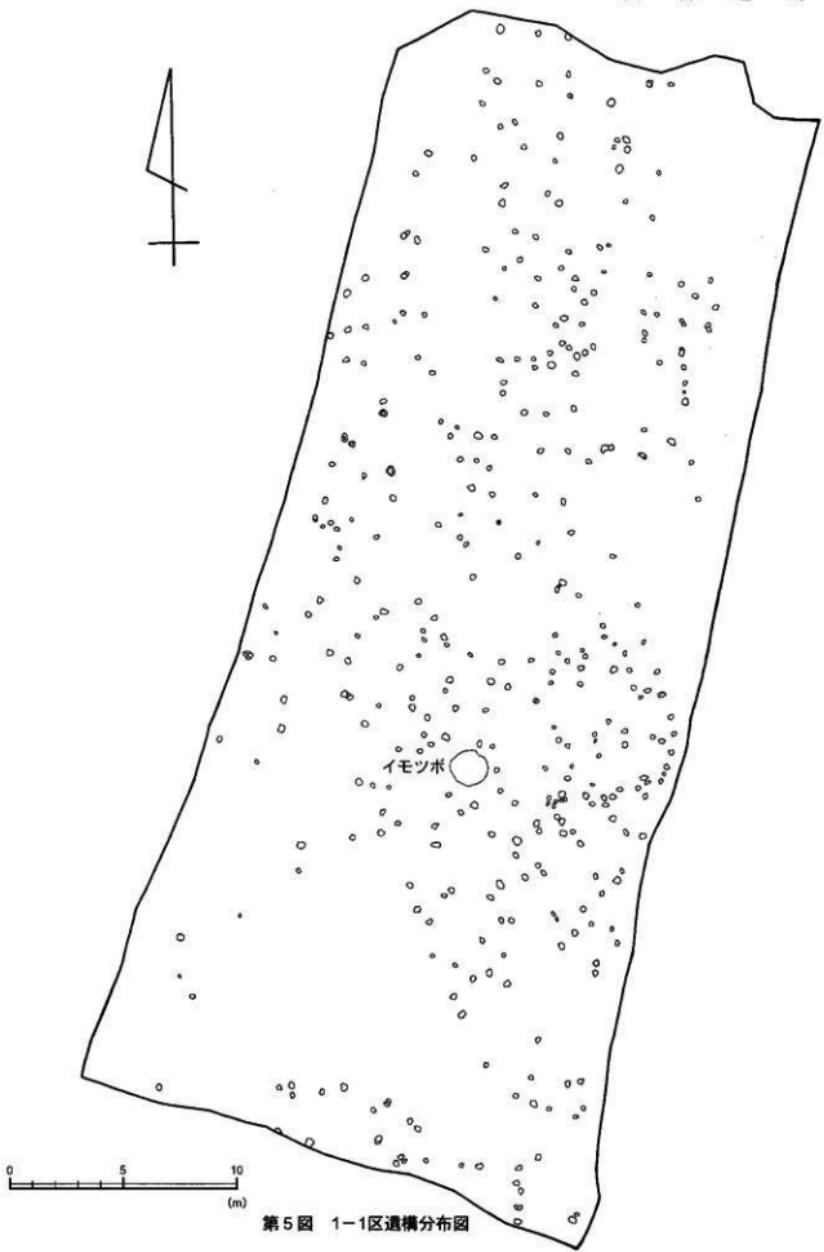


第3図 1区配置図

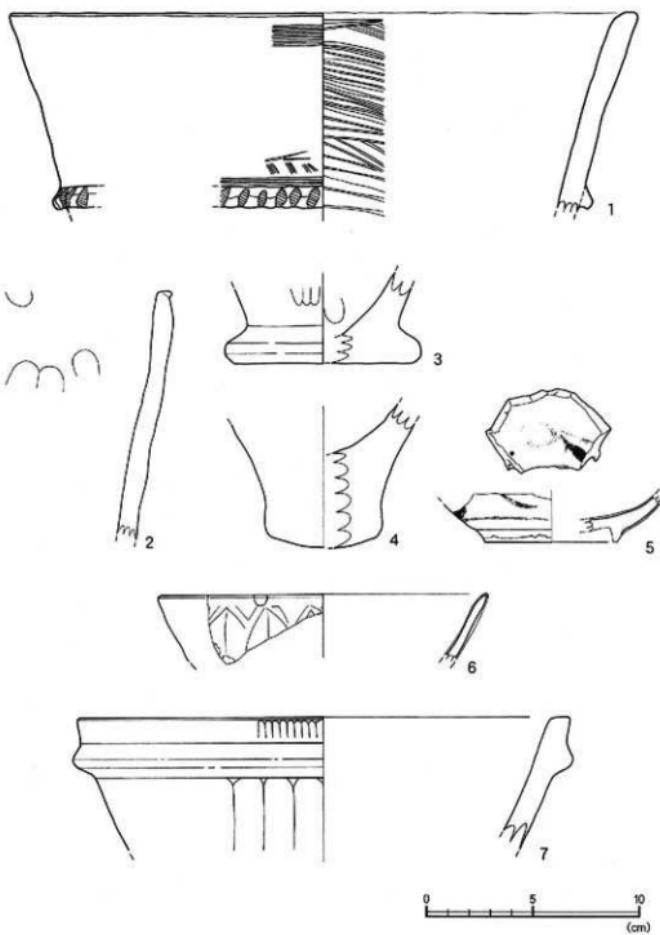
大部遺跡



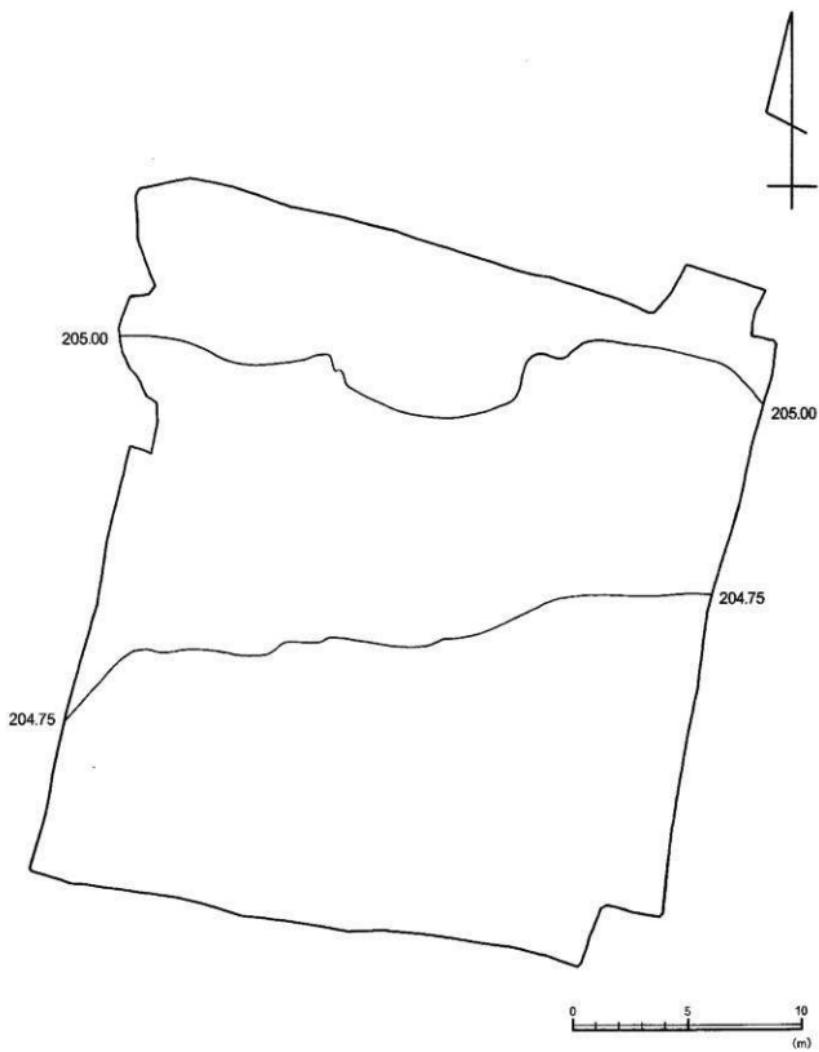
大部遺跡



第5図 1-1区遺構分布図

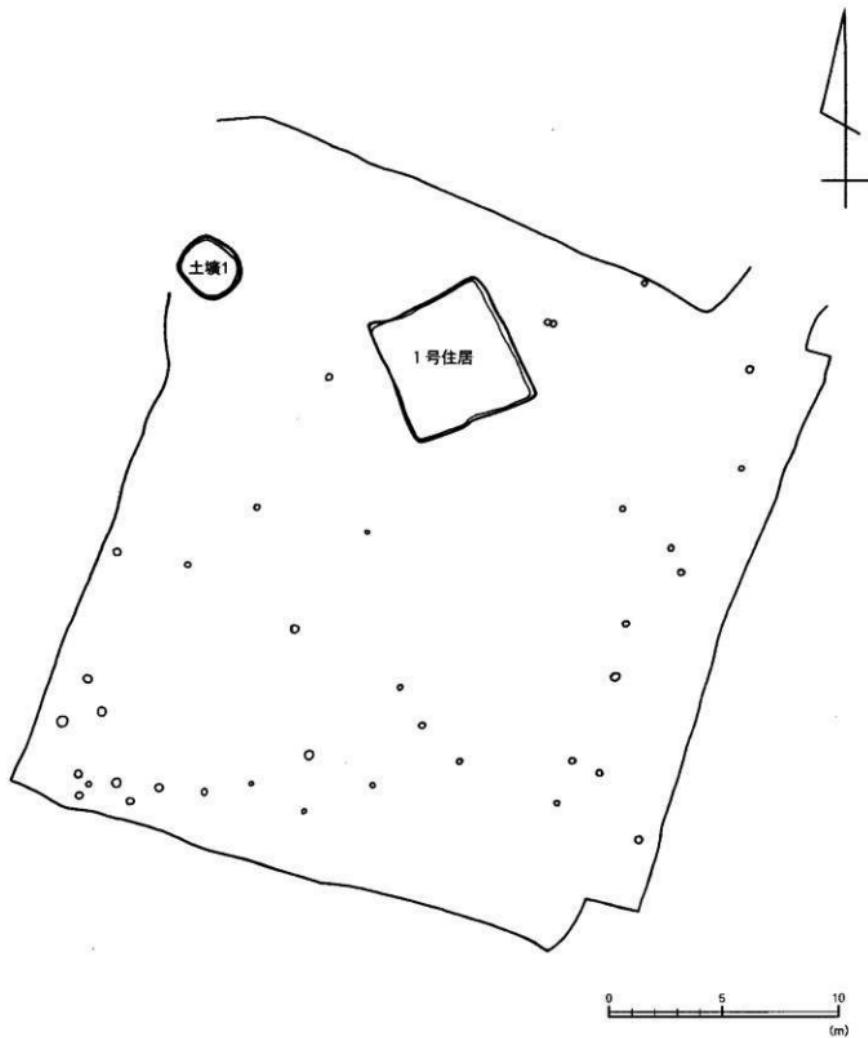


第6図 1-1区包含層出土遺物

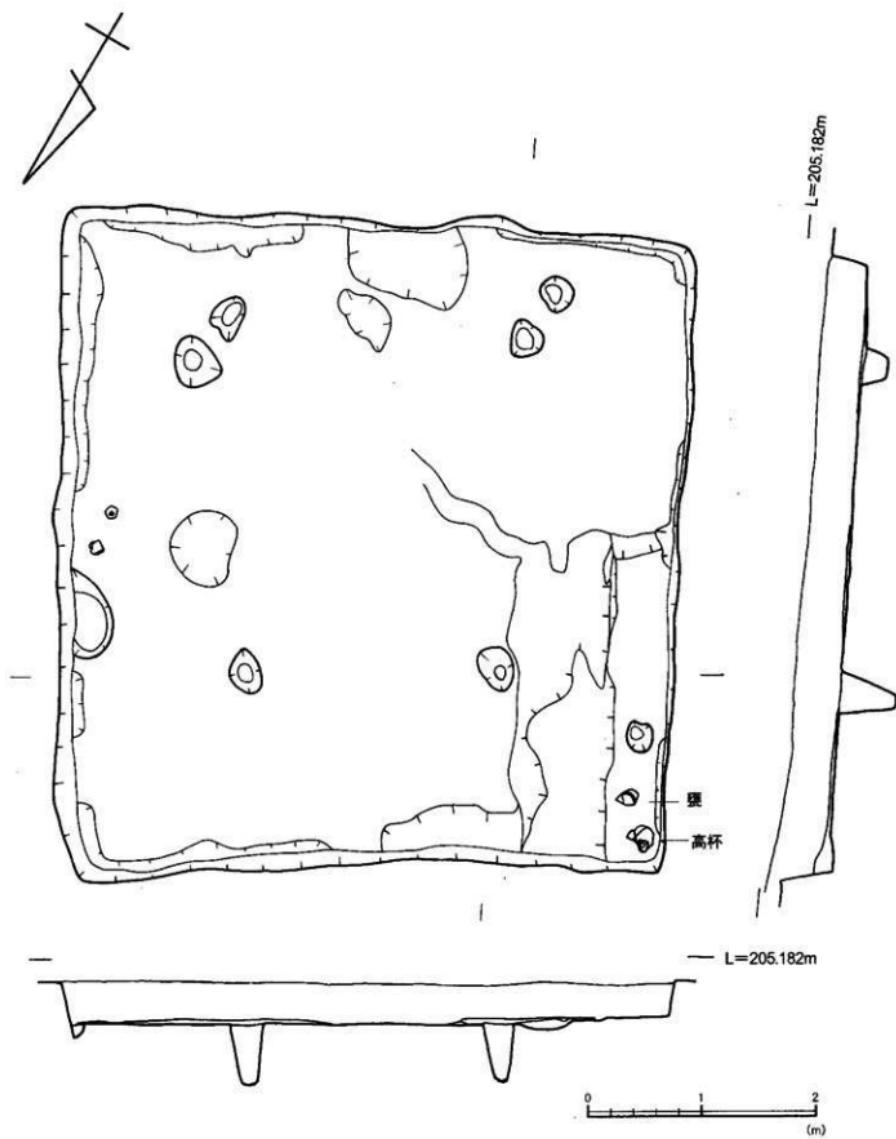


第7図 1-2区地形図

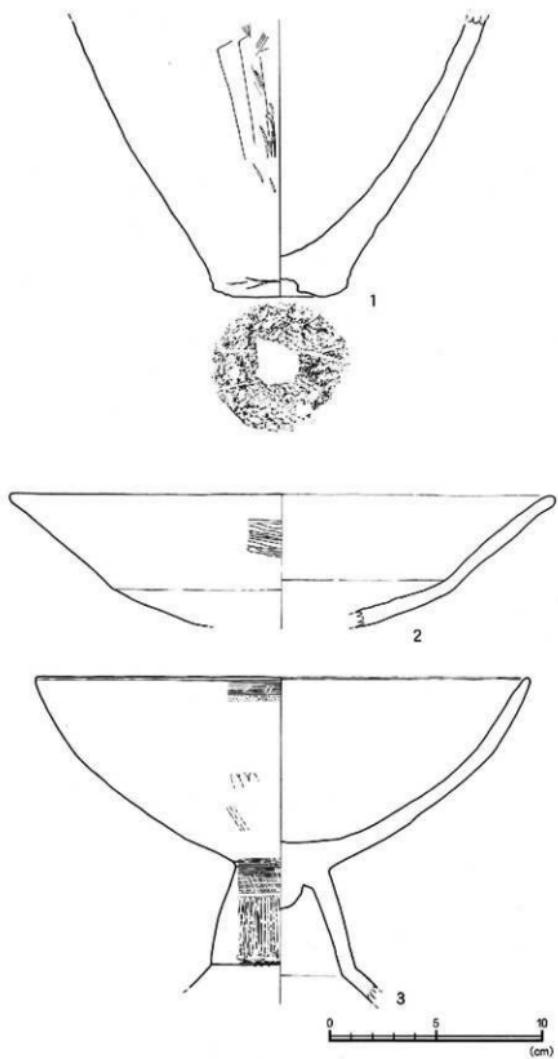
大 部 遺 跡



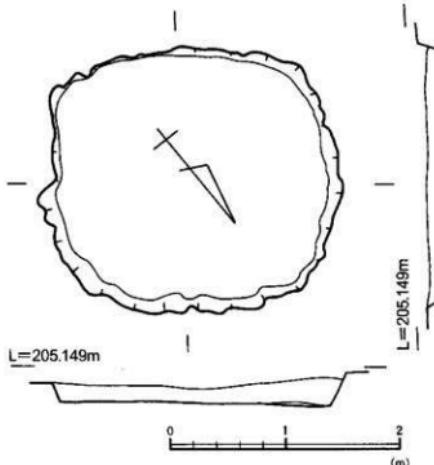
第8図 1-2区遺構分布図



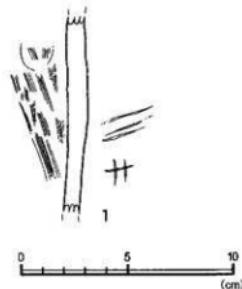
第9図 1-2区1号住居



第10図 1-2区1号住居出土遺物



第11図 1-2区土壤1



第12図 1-2区土壤1出土遺物

(2) その他の遺物(第13、14図)

土師器

1～7は甕である。1は頸部に布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らせていている。端部は丸い。外面に炭化物が付着している。2の口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸い。3の口縁部はやや内湾しており、端部は丸い。頸部には布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らせていている。4の口縁部は外反しており、端部は平坦である。5～7は平底でやや突き出している。

8は小型丸底甕で、口縁部は内湾して立ち上がる。弥生土器

9は器台で、裾部は開くものと思われる。

歴史時代の遺物

10は土師器皿で、ロクロ成型を行っている。糸切り底である。

11は青磁碗で蓮弁文を施している。内外面はオーブ灰色である。

3. 1～3区の遺構・遺物(第15、16図)

1～3区からはピットが検出されている。遺物は細片のみの出土で計測できなかった。

4. 1～4区の遺構・遺物(第17、18図)

1～4区からは竪穴状遺構が1軒とピットが検出されている。

調査区の南側はアカホヤ下の牛ノ脛火山灰層まで

削平されている。

1～4区の遺構

竪穴状遺構(第19図)

調査区の北部に位置し、1辺は2.2mであり、ほぼ方形を呈している。床面積は5m²である。四隅から主柱穴が検出され、深さは約45cmである。遺物は出土しなかった。

1～4区の遺物(第20～23図)

いずれも黒ボク土層より出土している。

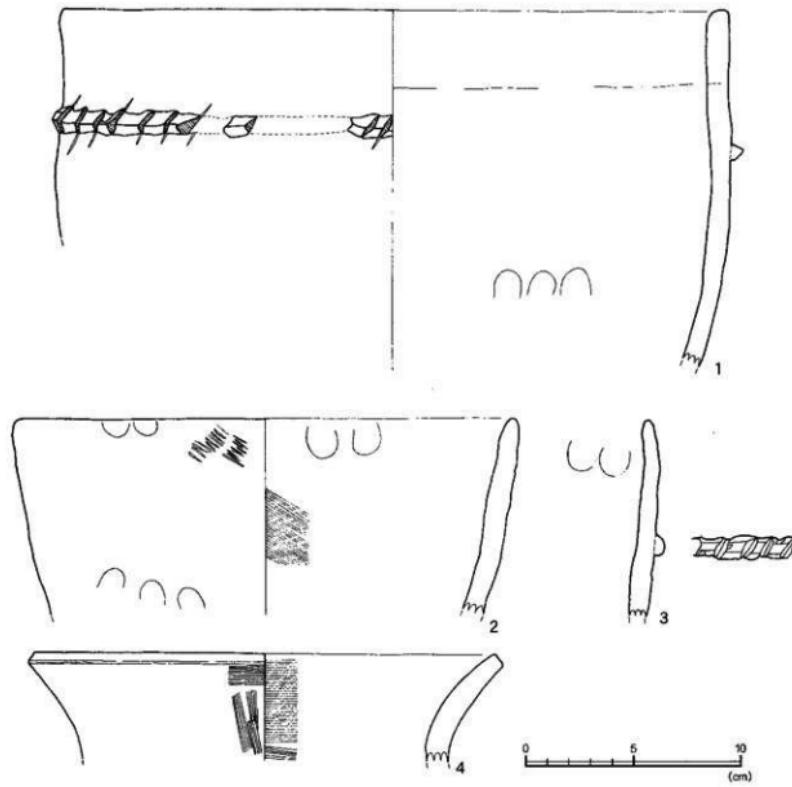
土師器

1～7は甕である。1、2の口縁部は短く外傾するかの字口縁である。最大径は胴部中位に来るものと思われる。内外面に丹念なハケ目調整を行っている。3の底部はやや上げ底である。4の底部は平底で、突き出している。5の底部は上げ底で、突き出している。6の口縁部は直線的に立ち上がり、端部は平坦である。頸部には布で包んだヘラ状工具で施文した斜めの刻み目突帯を巡らせてている。7の底部は平底で、外底部に棒状のもので押圧した痕跡がある。

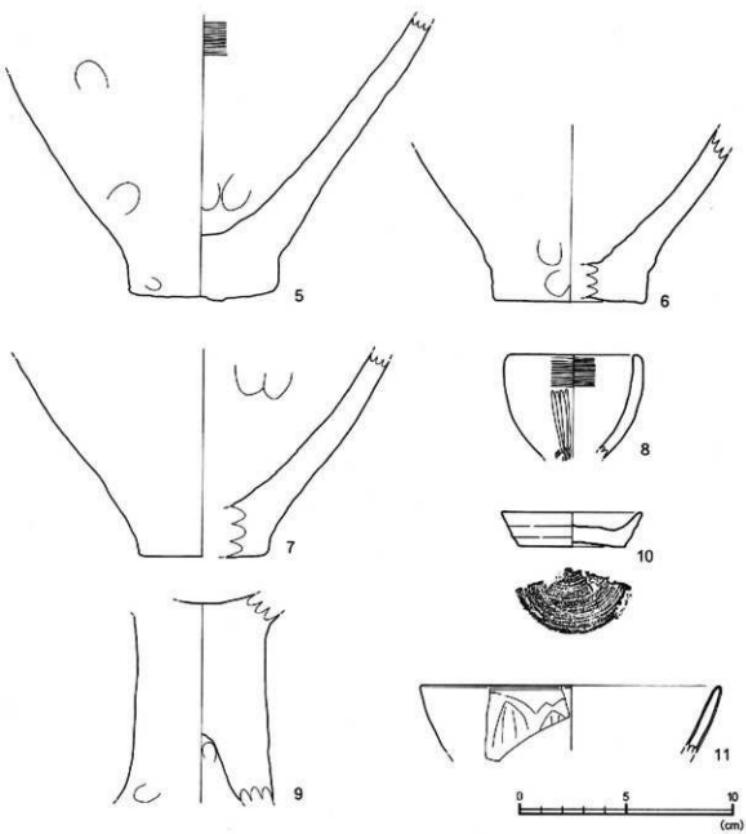
10は二重口縁甕で、口縁部は外反して立ち上がり、中ほどから直立する。

11、12、14は小型丸底甕である。11の口縁部は直線的に開き、端部は丸い。12、14の底部は平底で、最大径は胴部中位にある。

13は腰で底部はやや上げ底である。

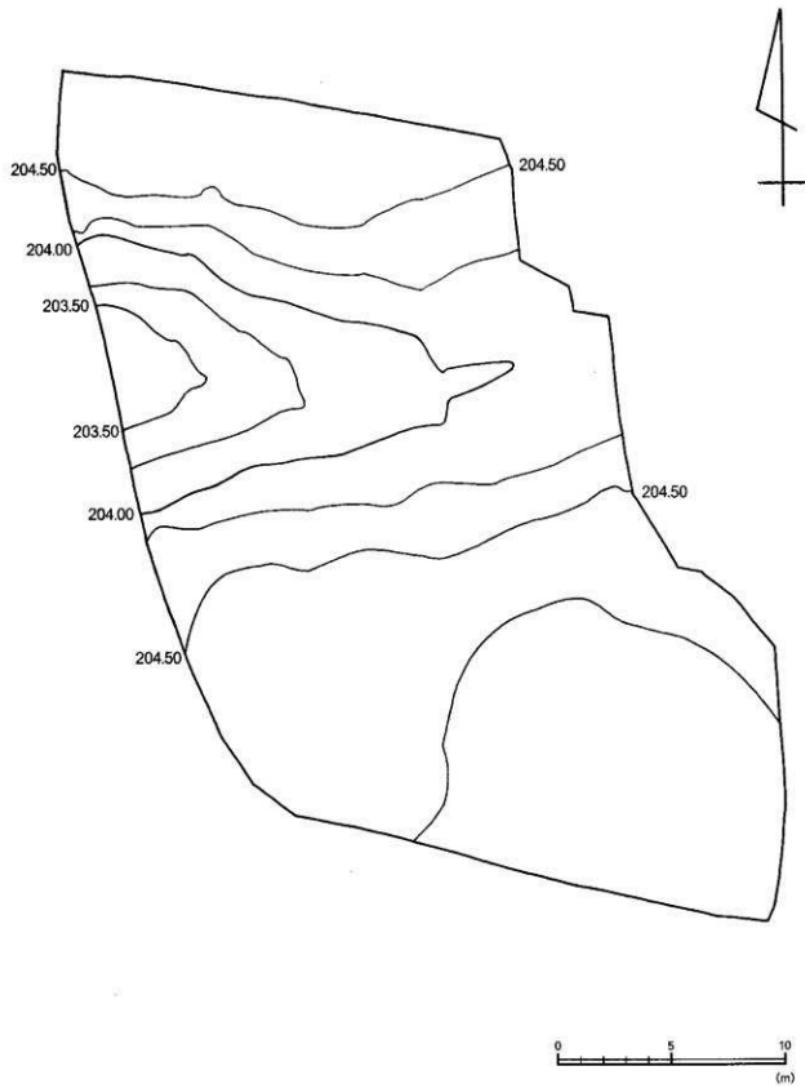


第13図 1-2区包含層出土遺物（1）

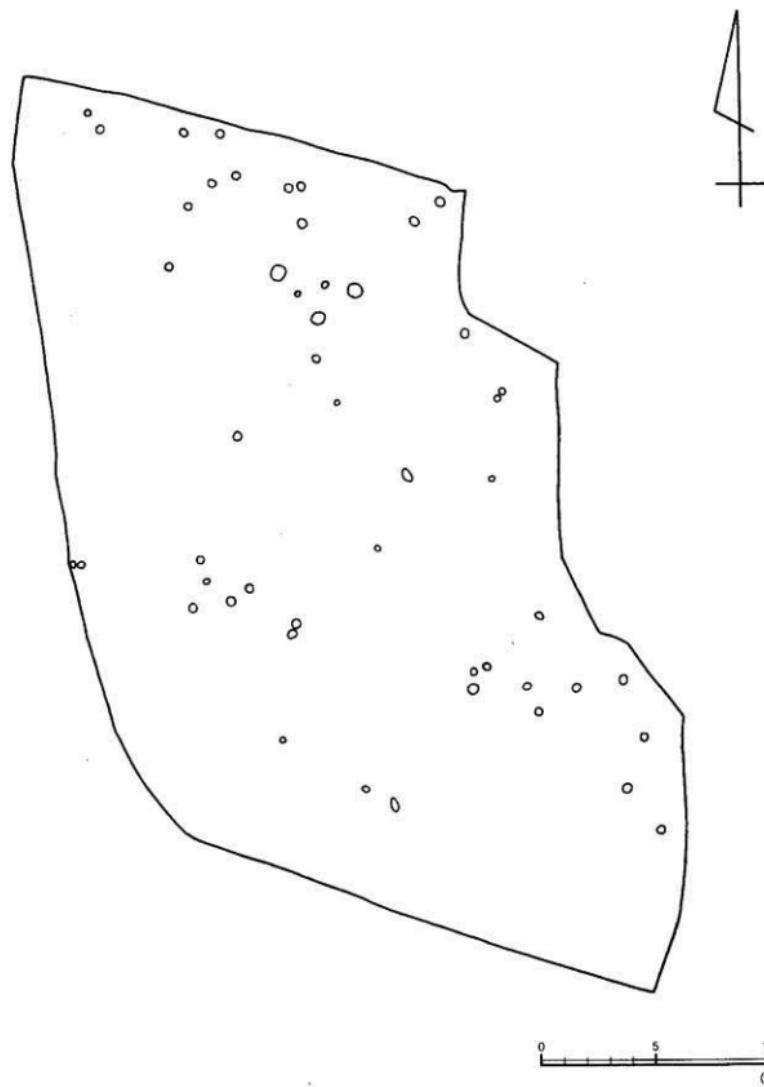


第14図 1-2区包含層出土遺物（2）

大部遺跡

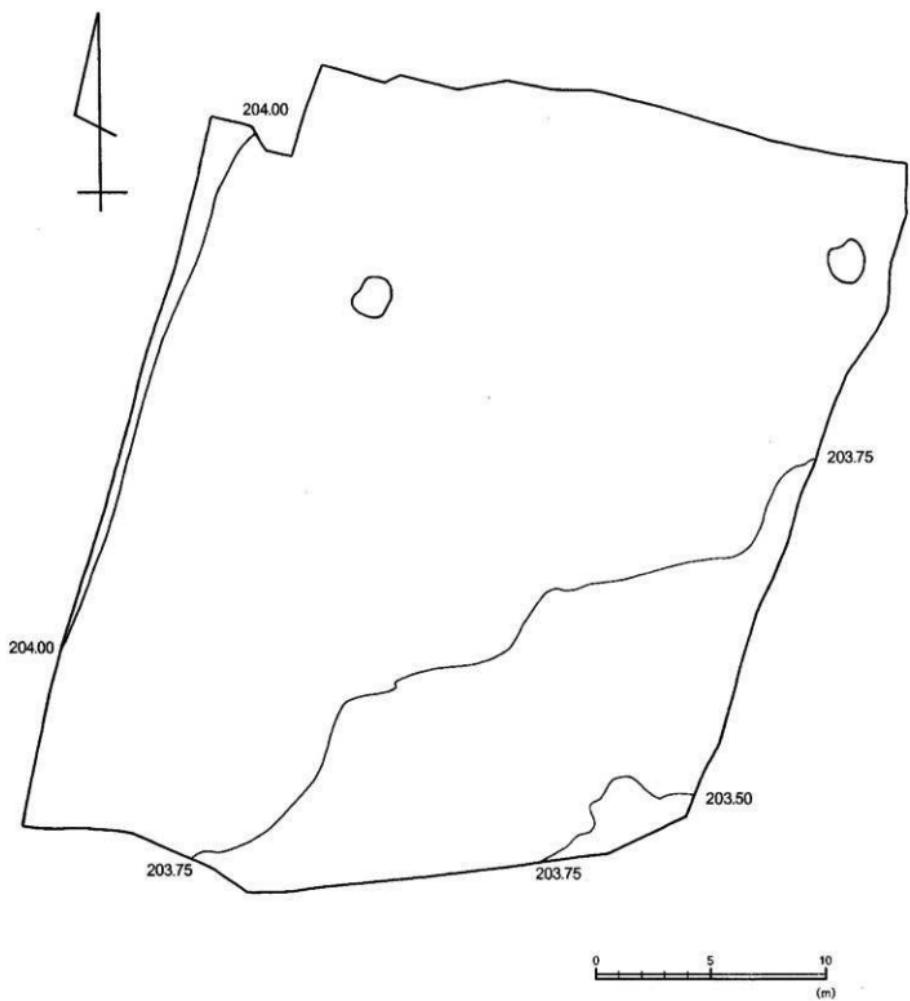


第15図 1-3区地形図

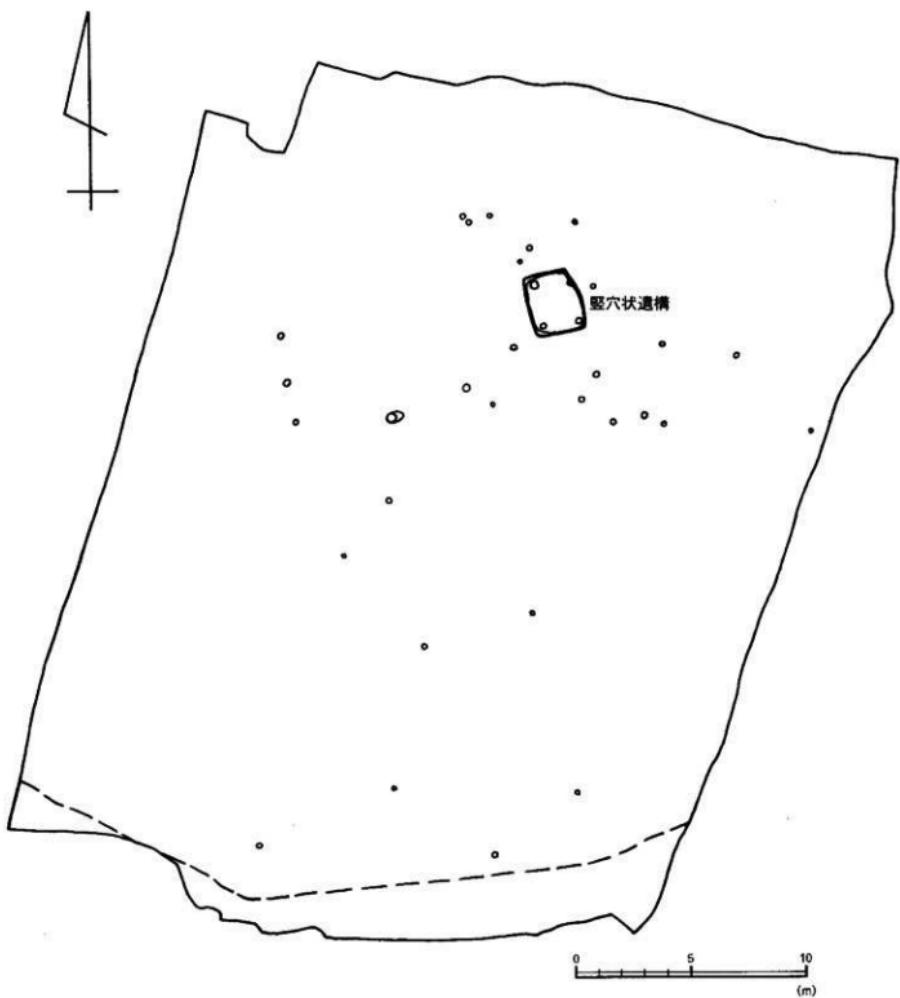


第16図 1-3区遺構分布図

大部遺跡

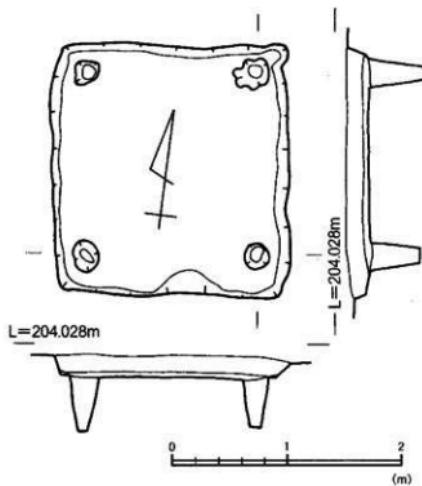


第17図 1-4区地形図



第18図 1-4区遺構分布図

大 部 遺 跡



第19図 1-4区竪穴状遺構1

15~19は高坏である。15は大型の高坏で、底面部から直線的に開く形状と思われる。16の坏部は浅く、端部は丸い。17も坏部は浅く、1と同型と思われる。18の脚部はエンタシス状で、ジョイント部分に穿孔がある。19の脚部はラッパ状に開く。

縄文土器

8、9は深鉢である。8の口縁部は直線的に立ち上がり、端部は平坦である。口縁部直下に孔列文が施されている。9の口縁部は外反し、端部は平坦である。内外面に丁寧なハケ目調整を施している。また外面に炭化物が付着している。

弥生土器

23、24は壺である。23の口縁部は内湾し、端部は平坦である。頸部に台形の突帯が一条巡っている。24は口縁端部外面及び直下に斜めの刻み目突帯を施している。また胴部上位にだ円の刻み目突帯を貼り付けている。

25、26は壺である。25の口縁部は外反し、端部は平坦である。口縁部内面に突帯が一条巡っている。26は頸部~胴部片で、頸部外面に沈線が2条巡っている。

歴史時代の遺物

20、21は壺である。20はロクロ成型、糸切り底である。21はヘラ切り底である。

22は高台付碗で内黒土器である。

27、28は東播系須恵器のこね鉢である。

29は呪具である。滑石製の人型座像で、胸部中央に穿孔が縦に2つある。

5. 1~5区の調査(第24、25図)

1~5区からは竪穴状遺構が1軒とピットが検出されている。

1~5区の遺構・遺物

竪穴状遺構(第26図)

調査区の南西部に位置し、長辺2.6m、短辺2.2mの長方形を呈している。北東隅は削平されている。床面積は5.8m²である。四隅から主柱穴が検出され、深さは約55cmである。遺物は土器片が3点出土したが、細片で計測できなかった。

第5節 2区の調査(第27、28図)

2区も全面にピット群が広がっている。竪穴状遺構1軒、掘立柱建物1棟、土壙が2基検出されている。溝は現代のものと思われる。

2区の遺構・遺物

竪穴状遺構(第29図)

調査区の南西部に位置し、1辺2.4mの方形を呈している。床面積は5.7m²である。主柱は8本と想定されるが、北側からは両端の2穴しか検出されなかつた。主柱穴の深さは約12~45cmである。遺物は出土しなかつた。

土壙1(第30図)

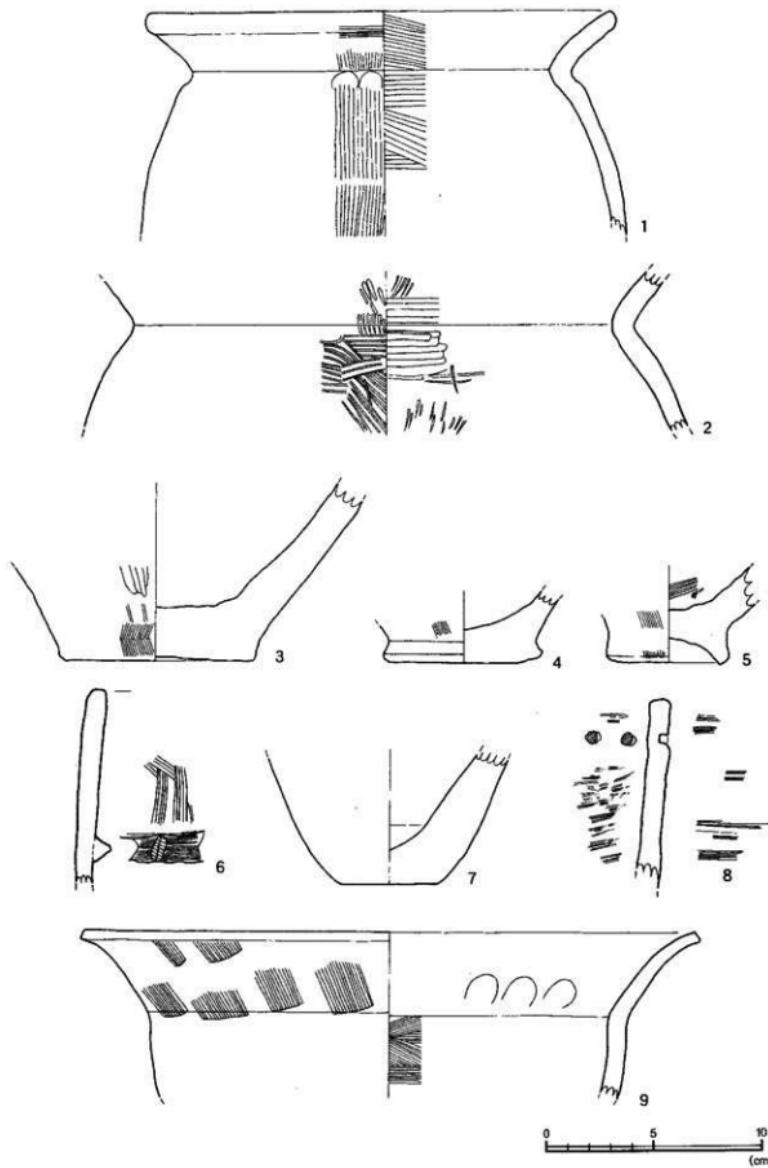
長辺3.8m、短辺2m、だ円状のプランを持つ。土壙内のピットは遺構に伴うものか不明である。床面から浮いた状態で高台付碗が1点出土している。

土壙2(第31図)

長辺3m、短辺0.8mの長方形を呈している。遺物は出土しなかつた。

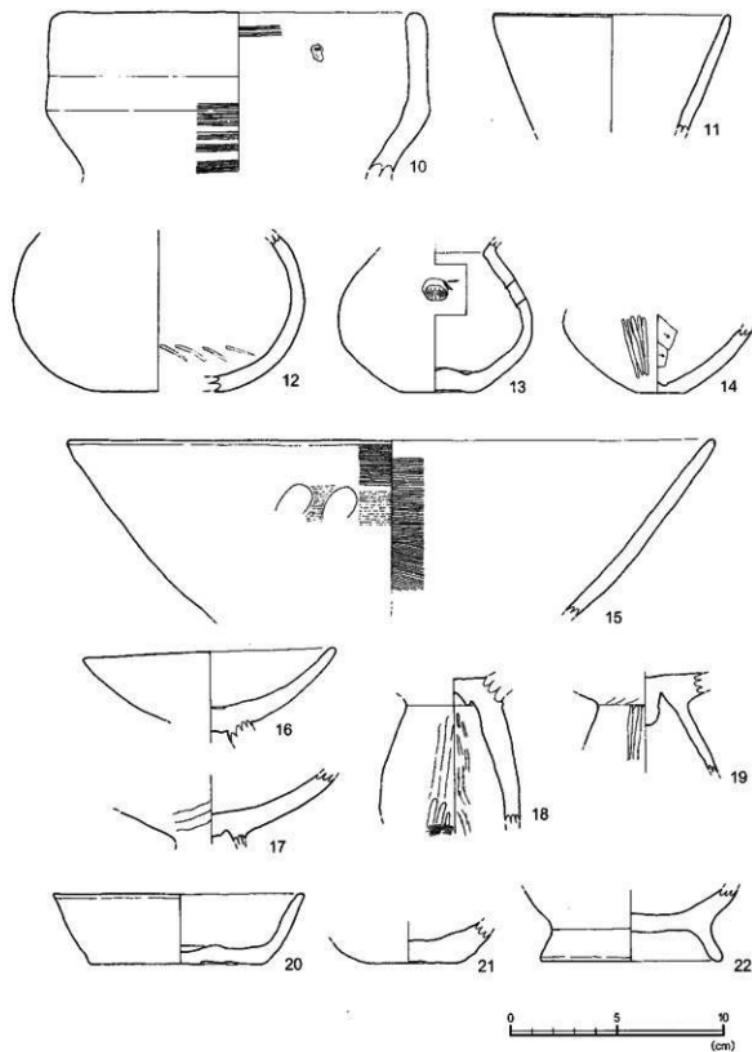
掘立柱建物跡(第33図)

2区南西部に位置し、柱間1間×8間の掘立柱建物である。建物規模は桁行14.84m、梁行5.96m、柱間寸法は桁行0.6m~1.6m、梁行4.4m~4.7mを計測する。主軸方向はS-6°-Wである。

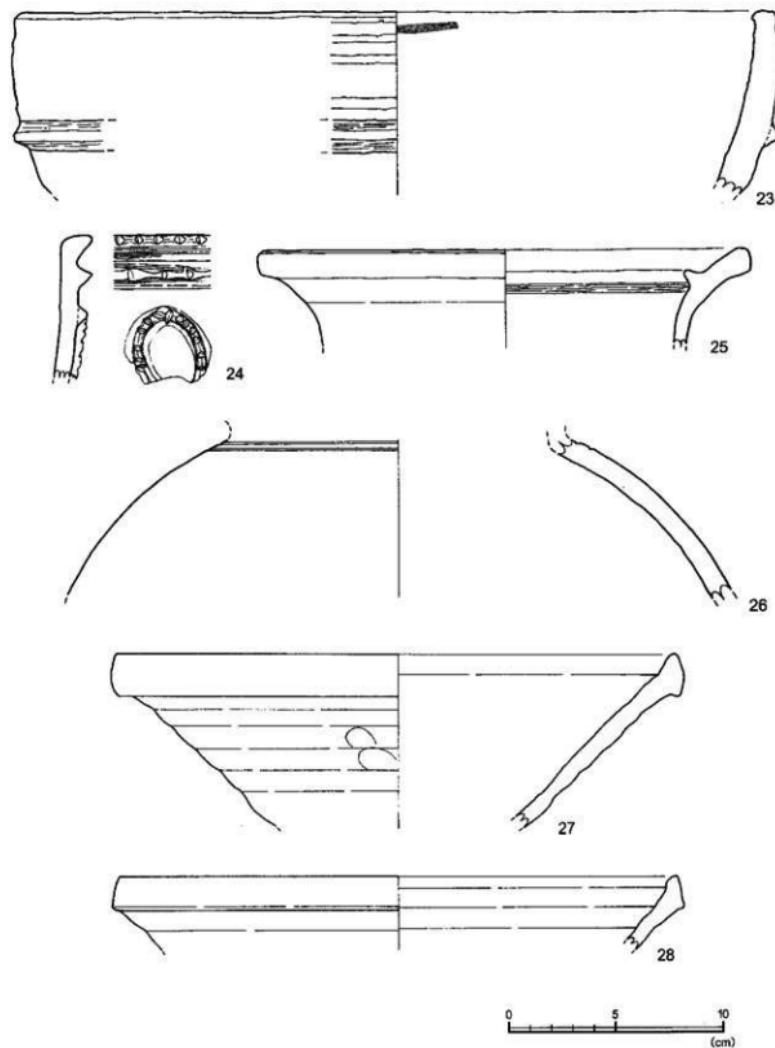


第20図 1-4区包含層出土遺物（1）

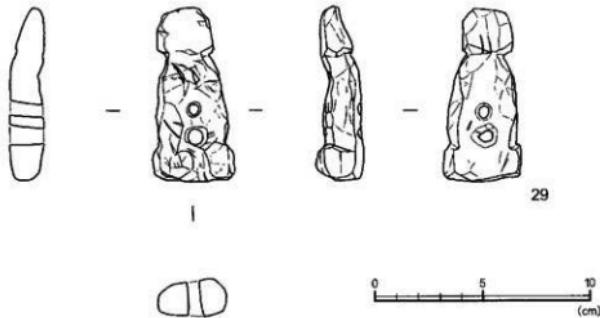
大部遺跡



第21図 1-4区包含層出土遺物（2）



第22図 1-4区包含層出土遺物（3）



第23図 1-4区包含層出土遺物（4）

2区の出土遺物(第32図)

いずれも黒ボク土層より出土している。

歴史時代の遺物

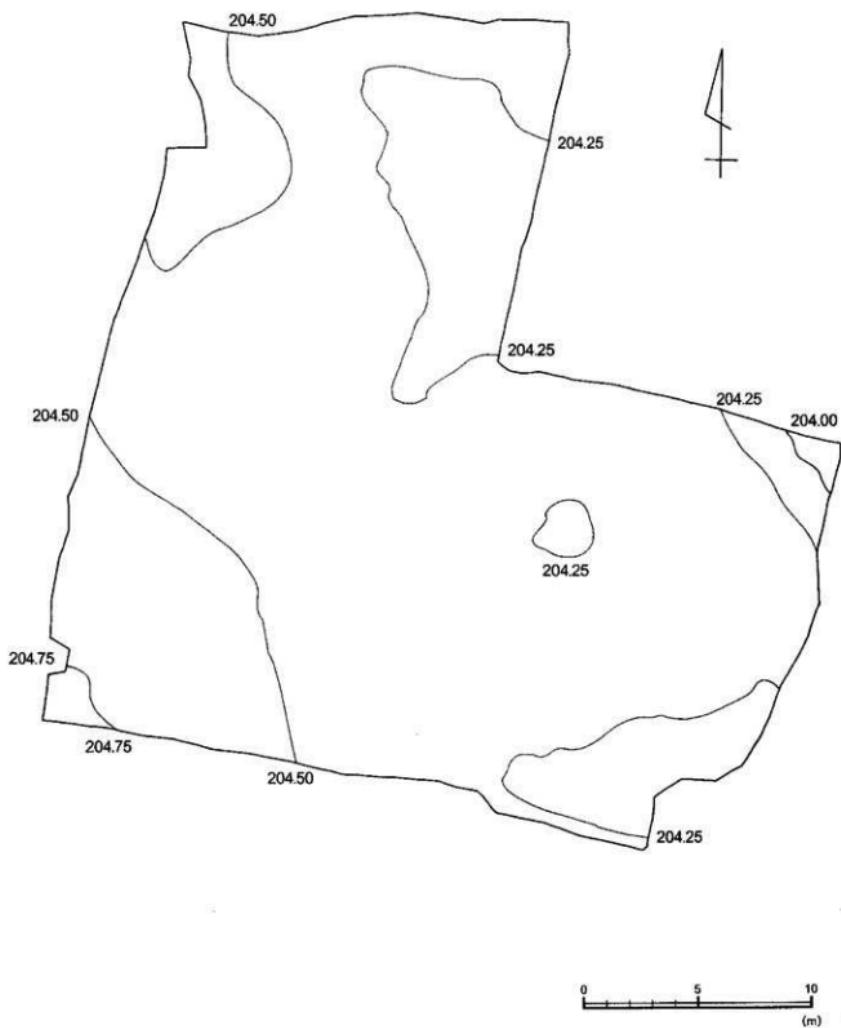
1は完形の高台付碗である。ロクロ成型を行って
いる。土壤1から出土した。

2は墨書土器である。胴部内面に墨書があるが、
不明瞭である。

3は青磁碗の底部で、見込みに「太」の字のスタン
プがある。

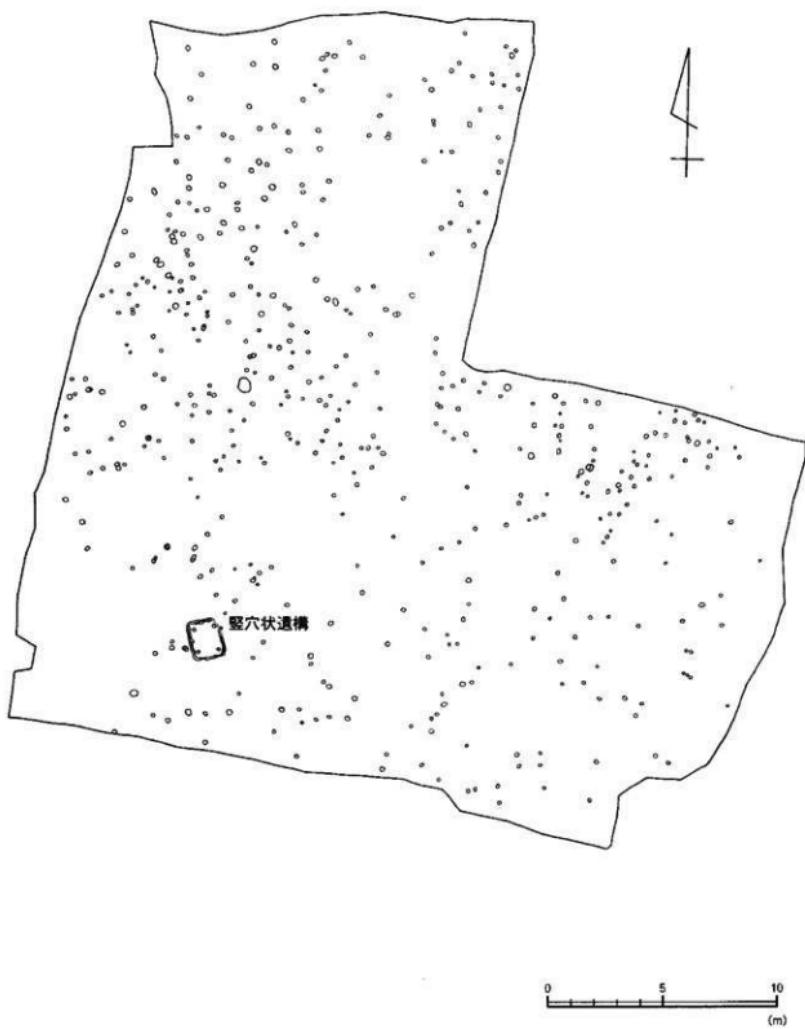
4は滑石製の石鍋片である。

5は銅鉢の舌である。

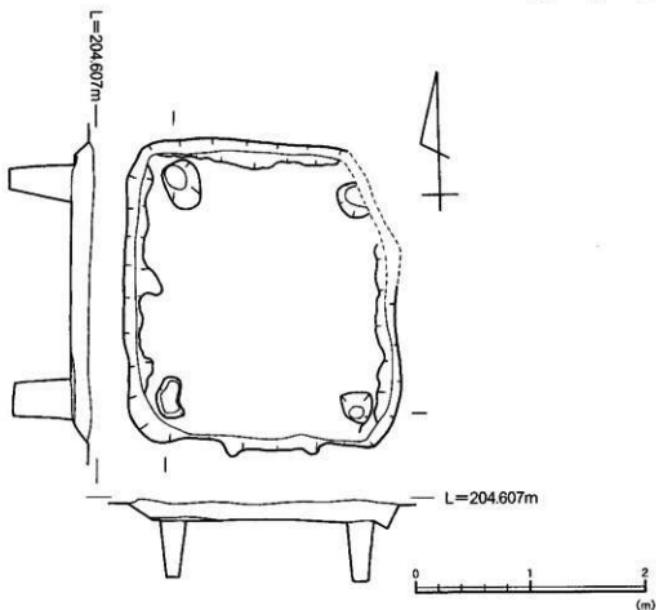


第24図 1-5区地形図

大部遺跡



第25図 1-5区遺構分布図



第26図 1-5区竪穴状遺構

第6節 3区の調査(第34、35図)

3区は河岸段丘の傾斜面に位置し、地元の方々の話によると、以前は姥捨山と呼ばれており、畑を耕作中、金のさかづきが出土したという。しかし調査の結果、調査区の北側を中心ピット群が検出されたものの、遺物はほとんど出土しなかった。また、3-2区にある数条の溝は現代のものと思われる。

3区の出土遺物(第36図)

いずれも黒ボク土層より出土している。

弥生土器

2は壺で、口縁端部外側に刻み目突帯を巡らせている。

歴史時代の遺物

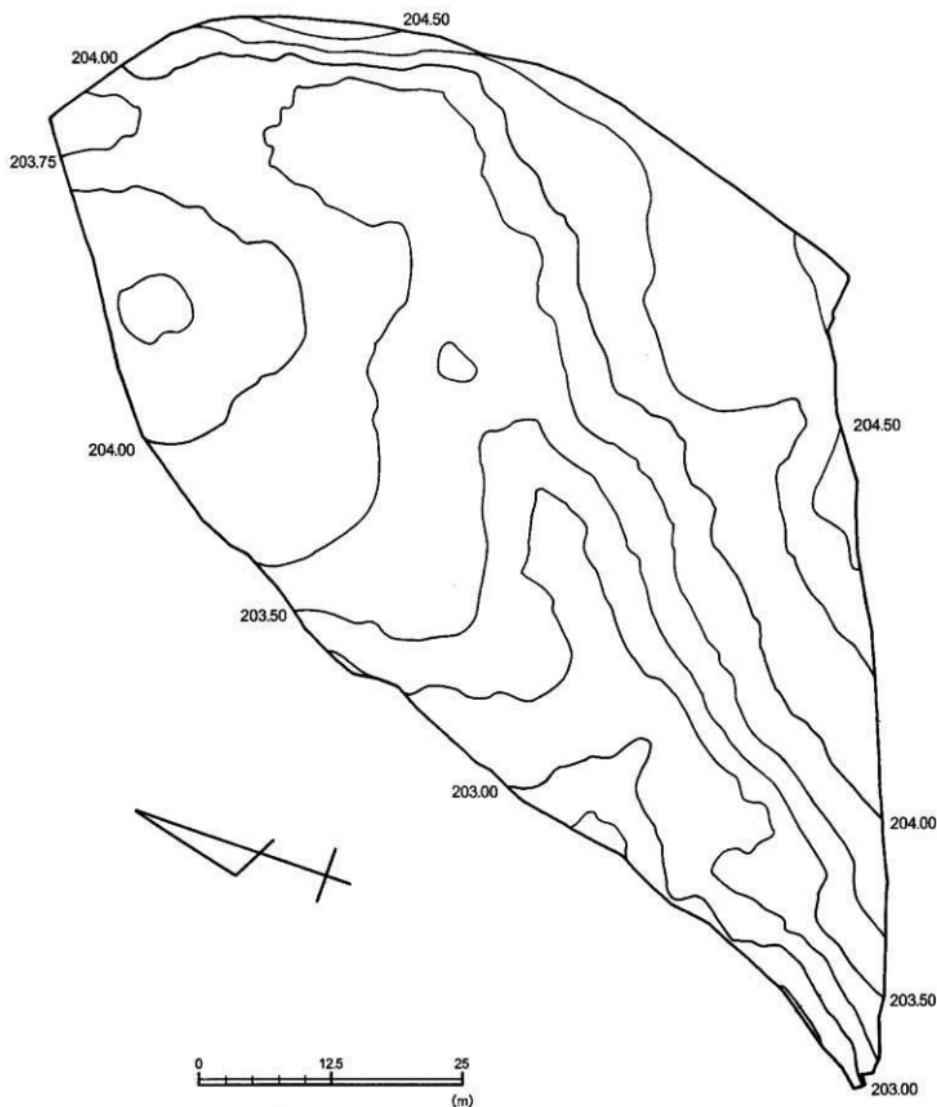
1は土師器の小皿である。

3、4は青磁碗である。3は蓮弁文を施しており、13~14世紀のものと思われる。外面は明緑灰色、内面はオリーブ灰色の釉がかけられている。4は外面及び内面上部に厚く釉がかかっている。

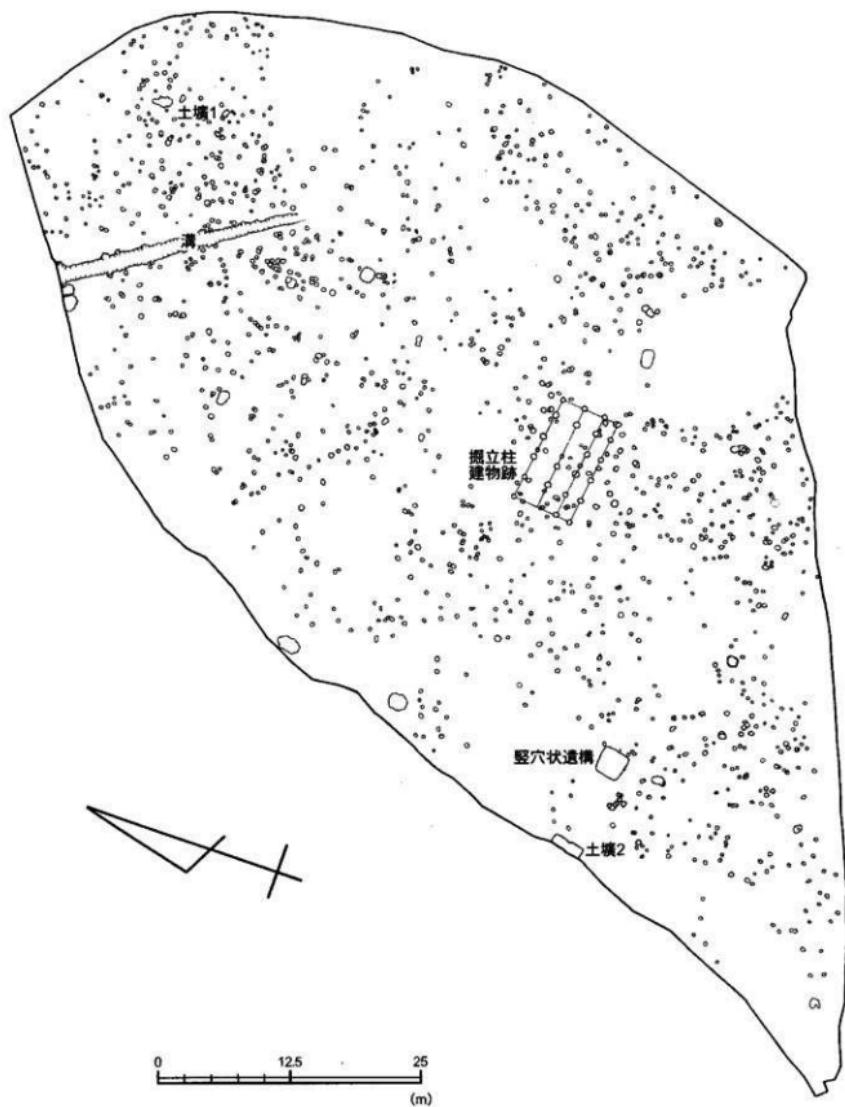
5~7は染付碗で6には見込みに目跡が残っている。

8は砥石で、穿孔がある。

大部遺跡

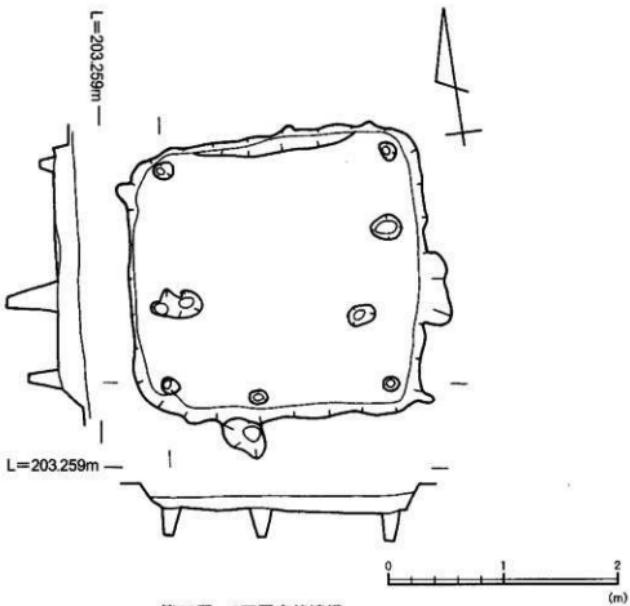


第27図 2区地形図

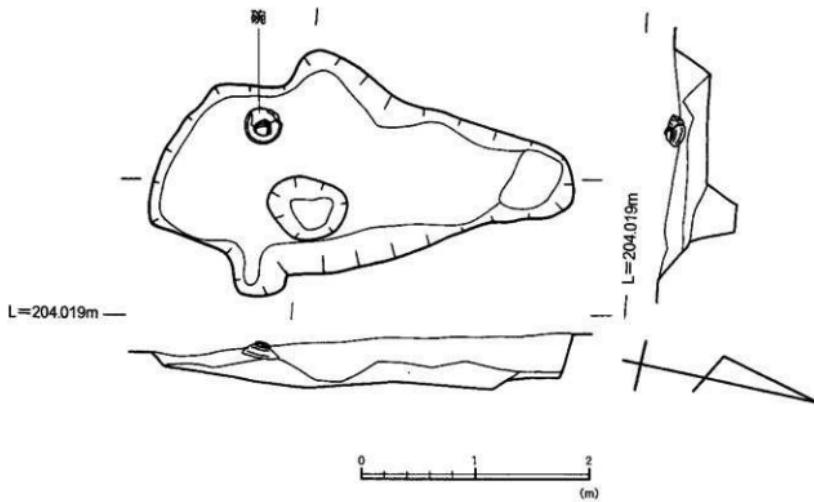


第28図 2区遺構分布図

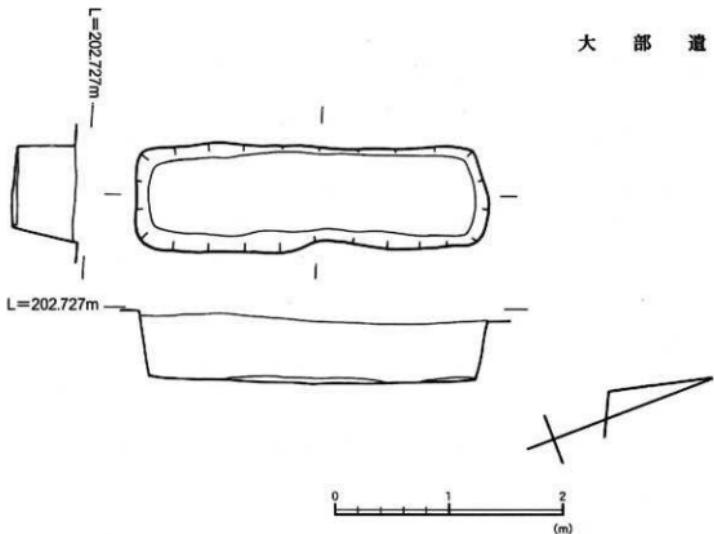
大部遺跡



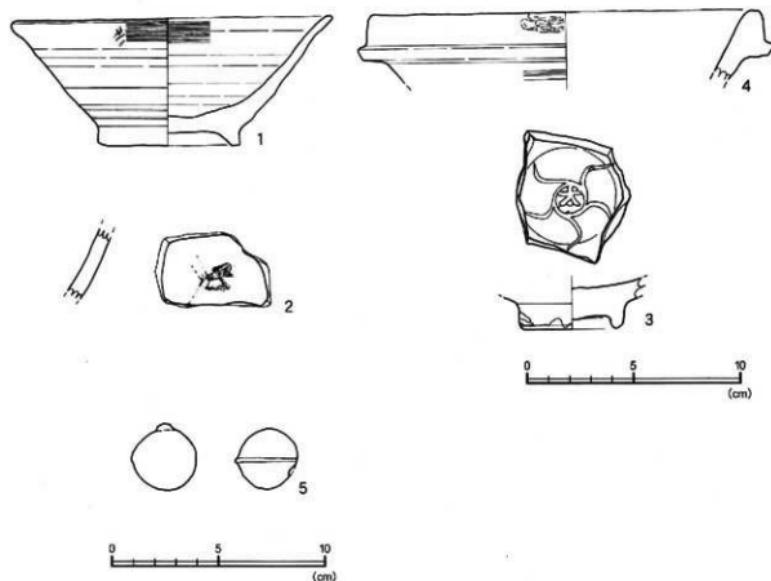
第29図 2区竪穴状遺構



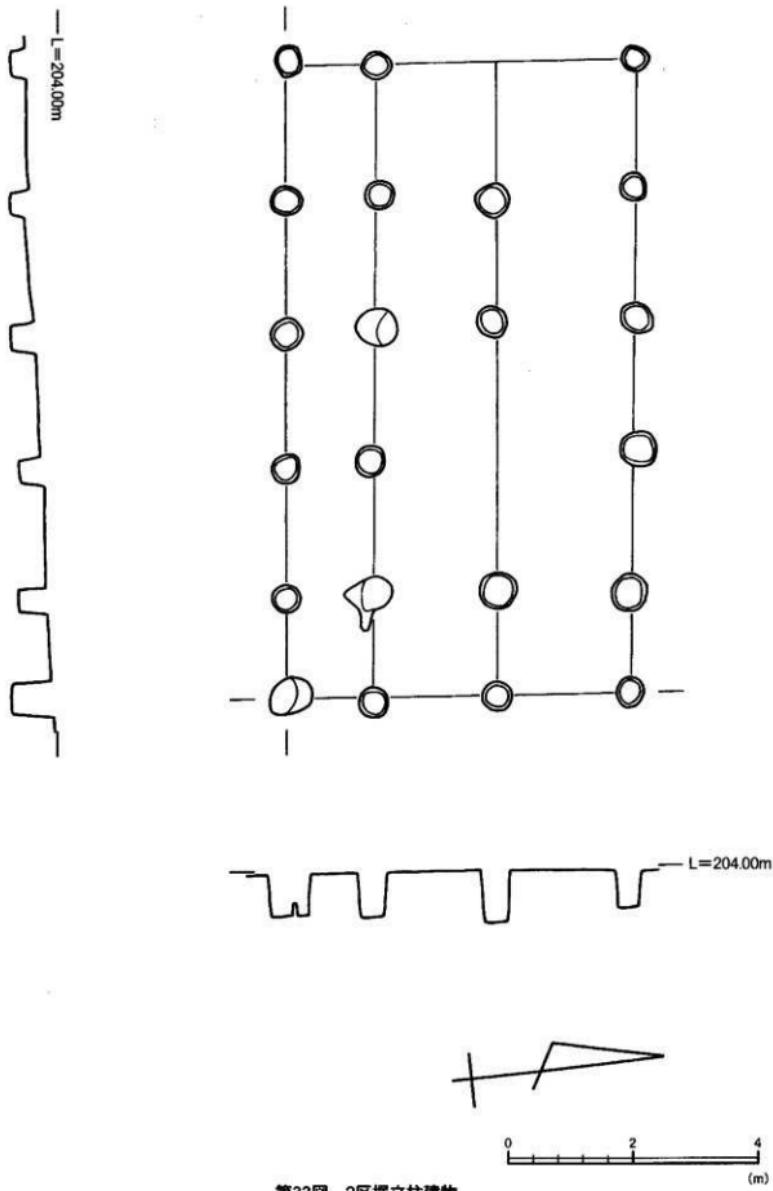
第30図 2区土壤1



第31図 2区土壙2

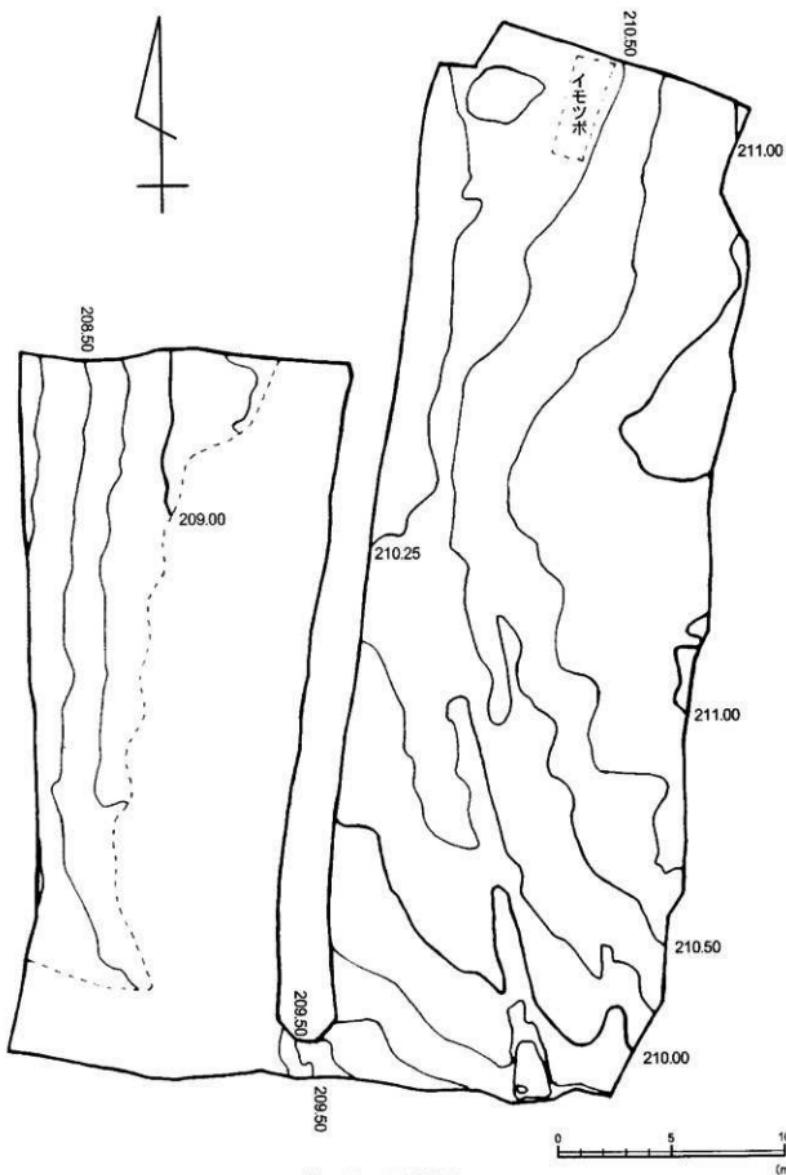


第32図 2区包含層出土遺物



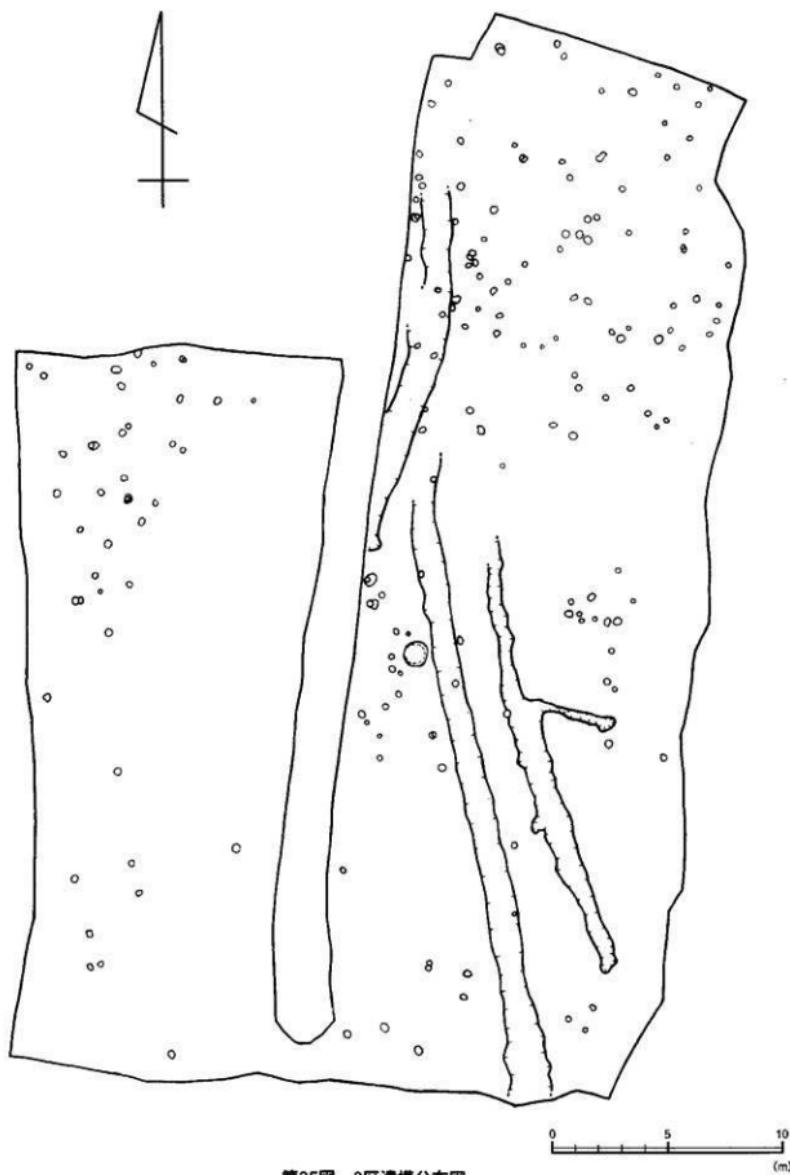
第33図 2区掘立柱建物

大部遺跡

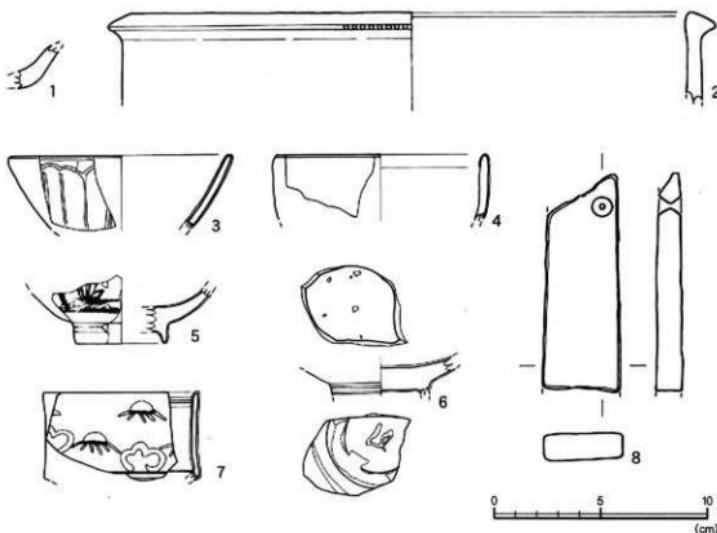


第34図 3区地形図

大部遺跡



第35図 3区遺構分布図



第36図 3区包含層出土遺物

第7節 4区の調査(第37、38図)

4区は北東から南西方向に天然の谷が横断する地形である。

遺構はピット群が全面に広がっている。土壙、溝状遺構も見られるが、現代のものと思われる。

4区出土遺物(第39図)

いずれも黒ボク土層より出土している。

土師器

1は甕である。口縁部は短く外反し、端部は丸い。
3は土錘である。

瓦質土器

2は甌で残存は約1/3である。

陶磁器

5は瀬戸・美濃系のおろし皿である。外面灰白色、内面は灰白色的釉を施している。

石製品

4は石臼で、全体の1/4程度残存している。

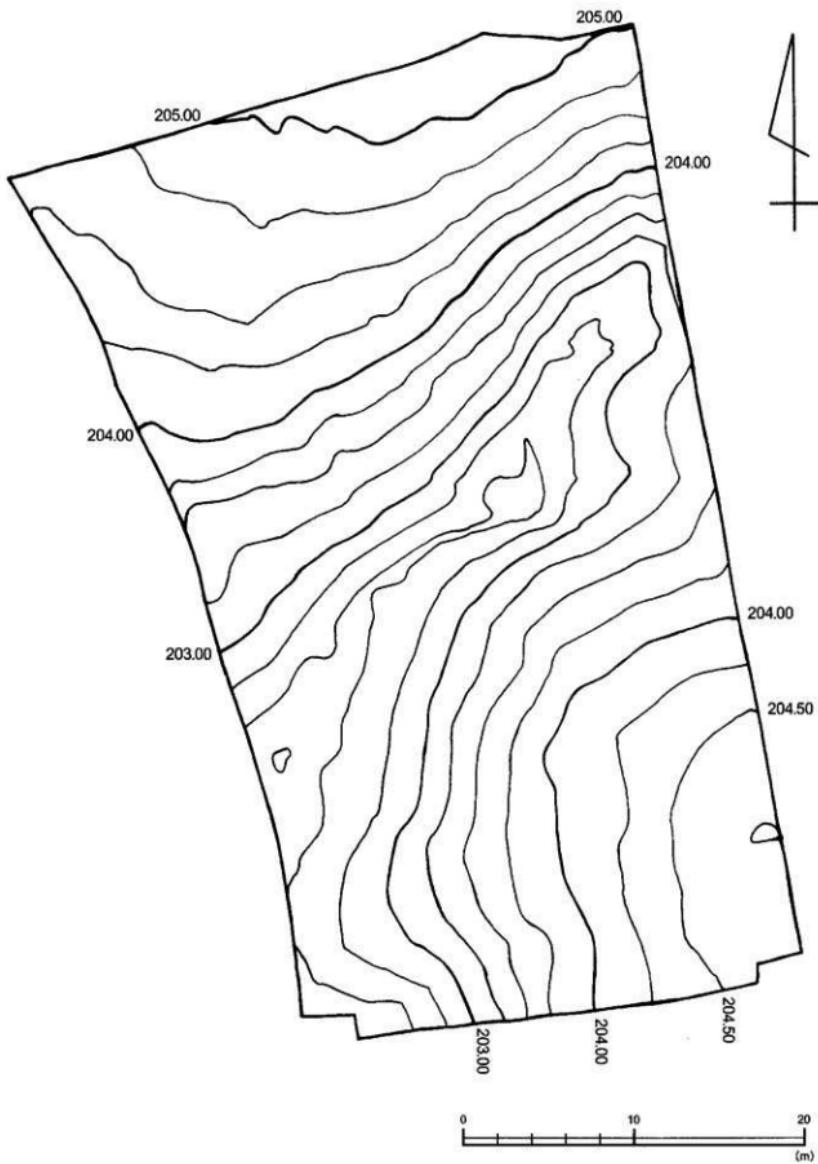
第8節 大部遺跡出土石器(第40図)

1は黒曜石製の打製石鎌、2～5は粘板岩製の磨製石鎌である。6、7は打製石斧である。石材は安山岩と思われる。いずれも包含層より出土した。

第9節まとめ

大部遺跡からは縄文時代から中世の遺物が出土している。遺構はピット群、竪穴住居、竪穴状遺構、掘立柱建物、土壙などが検出されている。竪穴住居は1軒検出されており、餅田遺跡同様古墳時代後期のものと思われるが、集落を形成するには至っていない。ピット群、掘立柱建物、土壙などは中世に帰属するものと思われる。

大部遺跡

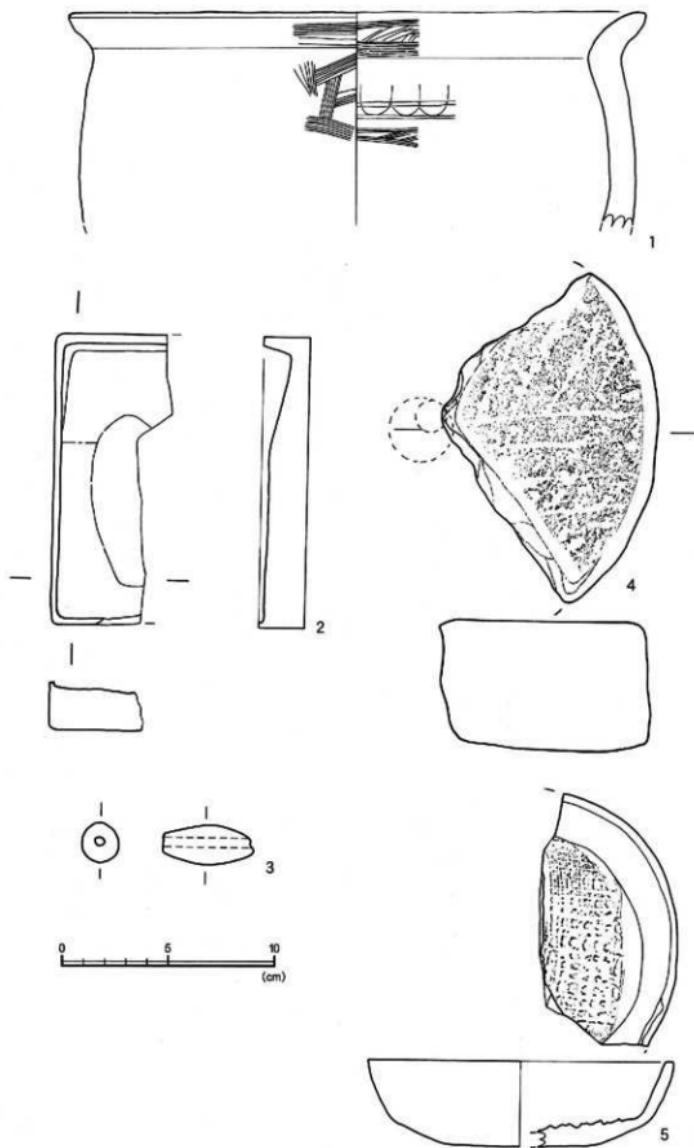


第37図 4区地形図



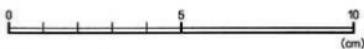
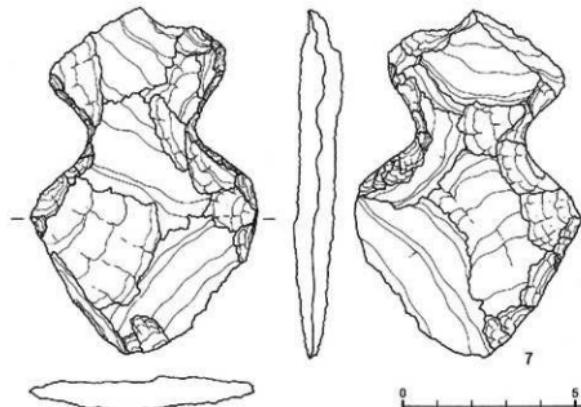
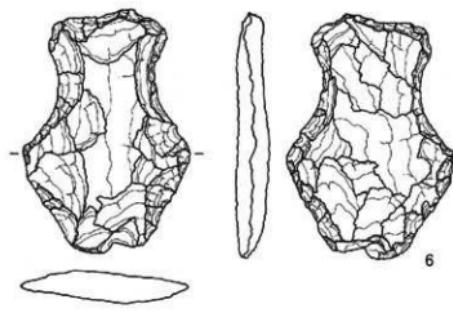
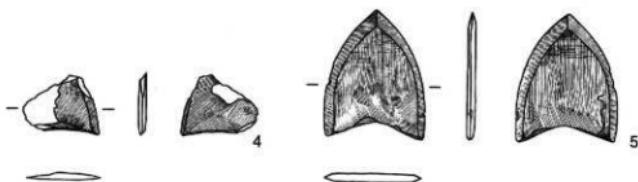
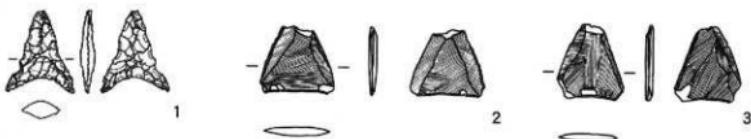
第38図 4区遺構分布図

大部遺跡



第39図 4区包含層出土遺物

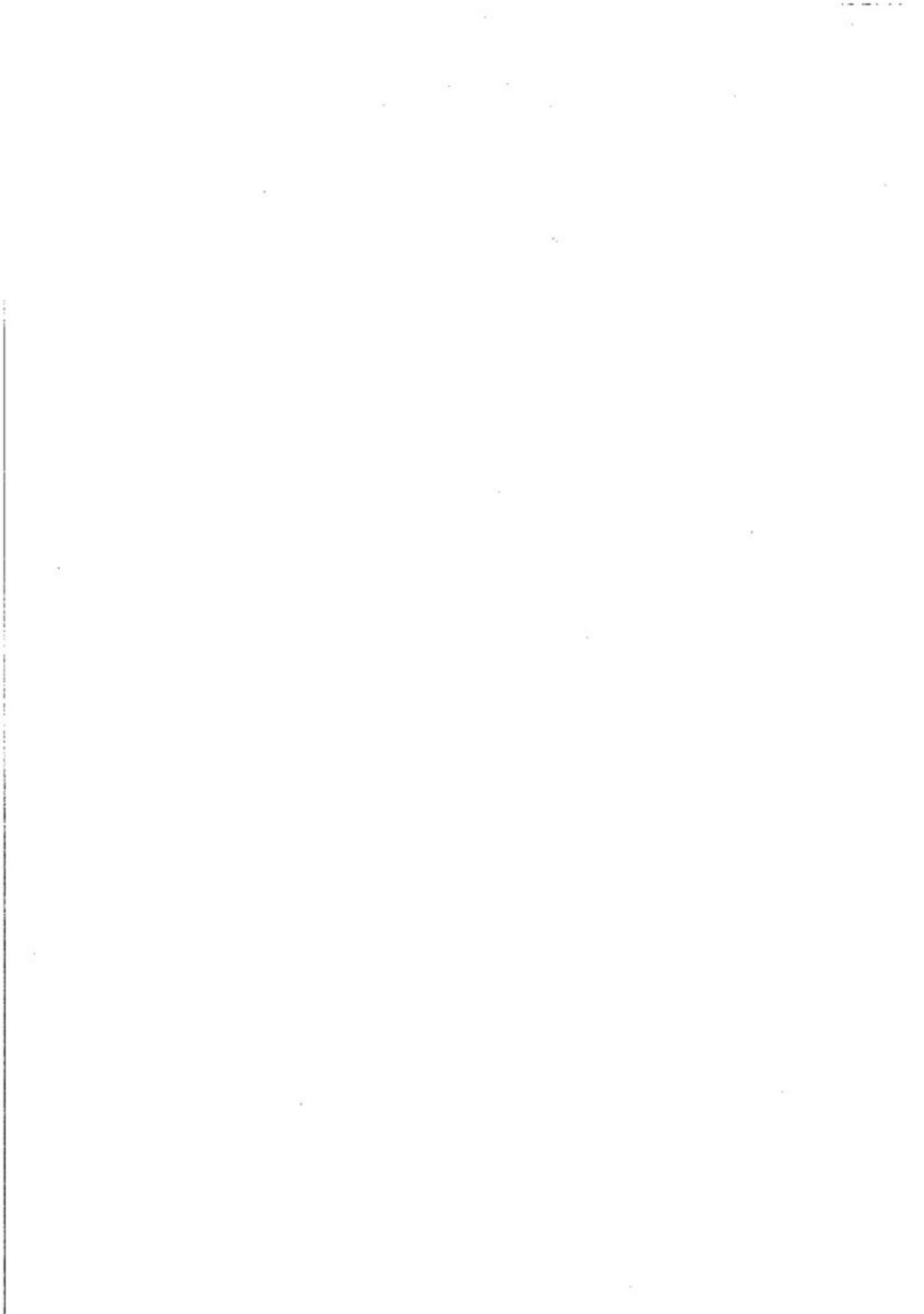
大部遺跡



第40図 大部遺跡出土石器

大 部 遺 跡

すぎ その
杉 蘭 遺 跡



第5章 杉蔭遺跡の調査

第1節 位置と環境

当遺跡は、市内中央部に位置し、標高は約200mである。真方川（大淀川支流）によって形成された河岸段丘の東岸に立地し、北側の保構枝原台地及び東側の杉蔭台地によって挟まれている。平成8年度調査した大部遺跡の東側である。

第2節 調査に至る契機

西諸県農林振興局との協議の結果、平成9年度市谷地区1工区の面工事実施面積8.4haのうち、5,000m²について発掘調査を実施することになった。調査中遺跡範囲が拡大したため、最終的に8,300m²を調査した。

第3節 調査の概要(第2図)

調査期間は平成9年5月6日から平成9年12月15日で、事業予定地を1～3区に設定した。

杉蔭地区の基本層序は次のとおりである。(第1図)

1	
2	第1層 耕作土
	第2層 黒ボク土
3	第3層 アカホヤ火山灰土
4	第4層 牛ノ脛火山灰土
5	第5層 暗褐色土

第1図 杉蔭遺跡基本層序

第2層の黒ボク土層は2層に分かれており、下層が若干色が薄いようである。しかし、発掘時には区分できなかった。遺物を多量に包含している。遺構はアカホヤ火山灰面で検出した。

第4節 1区の調査(第3、4図)

1区は平坦な地形で、ピット群が一面に広がっている。調査区北側で一部アカホヤ上面まで削平を受けている。

1区の遺物(第5、6図)

遺物はすべて黒ボク土層からの出土である。
陶器

1は小型のすり鉢である。口縁内外面に茶色の釉を施している。2は絵付の小鉢である。露胎は灰色で、内外面に浅黄色の釉がかけられている。内側中心付近に目勝がある。

3は印花文の小鉢である。素地は暗赤褐色で、灰色物が全面にかかっている。見込みに白色の顔料で同心円2個と花文のスタンプ8個が施されている。小石原焼か。

磁器

4、5は青磁碗である。4は外面暗オリーブ灰色、内面オリーブ灰色で蓮弁文を施している。5は内外面とも灰オリーブ色で蓮弁文を施している。内側に目勝がある。

6、7は染付である。6は皿で、外面灰白色、内面灰色。内面に鉄輪で絵付けしている。7は蓋で、外表面はやや緑がかった灰色で、藍色の顔料で下絵付けしている。つまみは欠損している。

古代の遺物

8、9は布痕土器の胸部及び口縁部片である。

弥生土器

10は壺で、口縁端部は外側に垂れ、端部外面にタテ方向の刻み目を持つ。

第5節 2区の調査(第7、8図)

2区は調査区中央を南北方向に自然の谷が走っている。また調査区東西端は一部アカホヤ上面まで削平されている。ピット群は全体に広がっているが、西側に多く分布している。遺構は竪穴状遺構が3軒、土塙が2基、円形土塙が6基検出されている。

竪穴状遺構 1(第9図)

調査区の北西部に位置し、長辺3.4m、短辺2.6mであり、台形を呈している。床面積は9.6m²である。主柱穴は12基で、深さは約16～40cmである。遺物は出土しなかった。

竪穴状遺構 2(第10図)

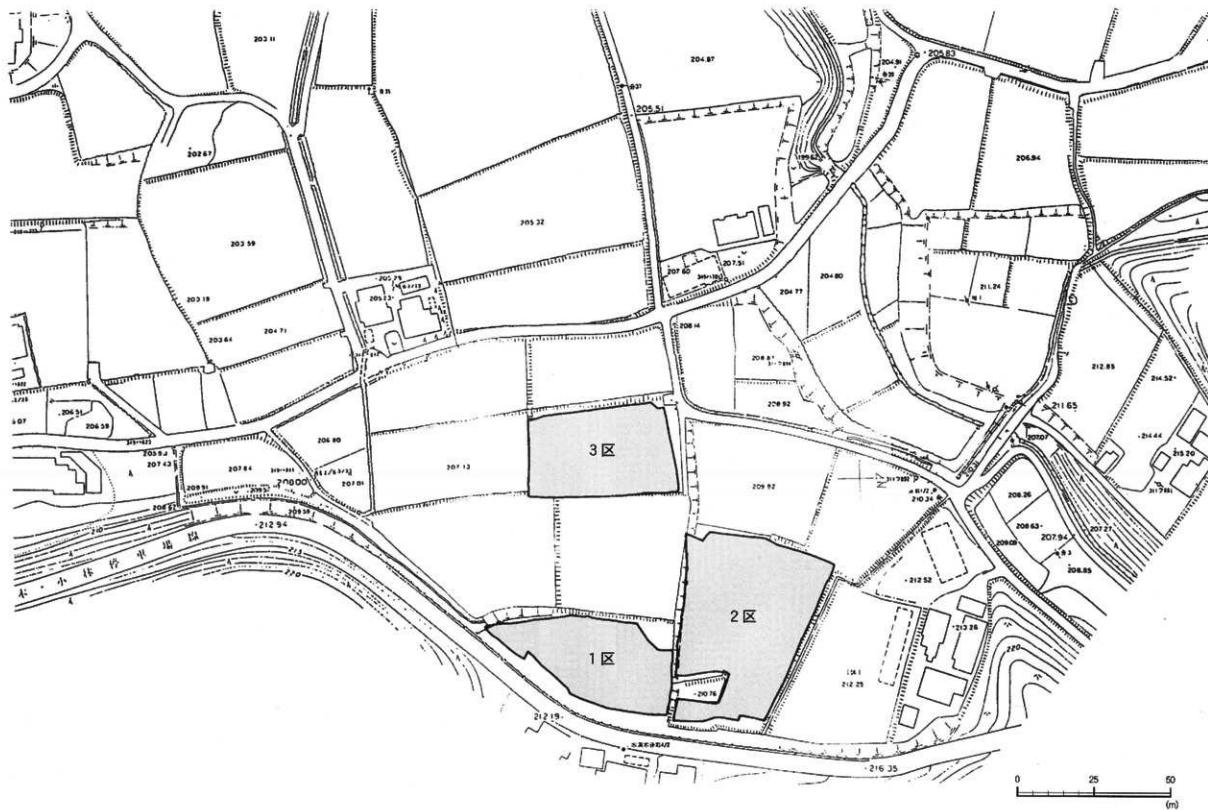
調査区の西部に位置し、1辺2.9mで、北西隅と南東隅が一部削平されている。床面積は8.4m²である。主柱穴は4基で、深さは約20～44cmである。

出土遺物(第10図)

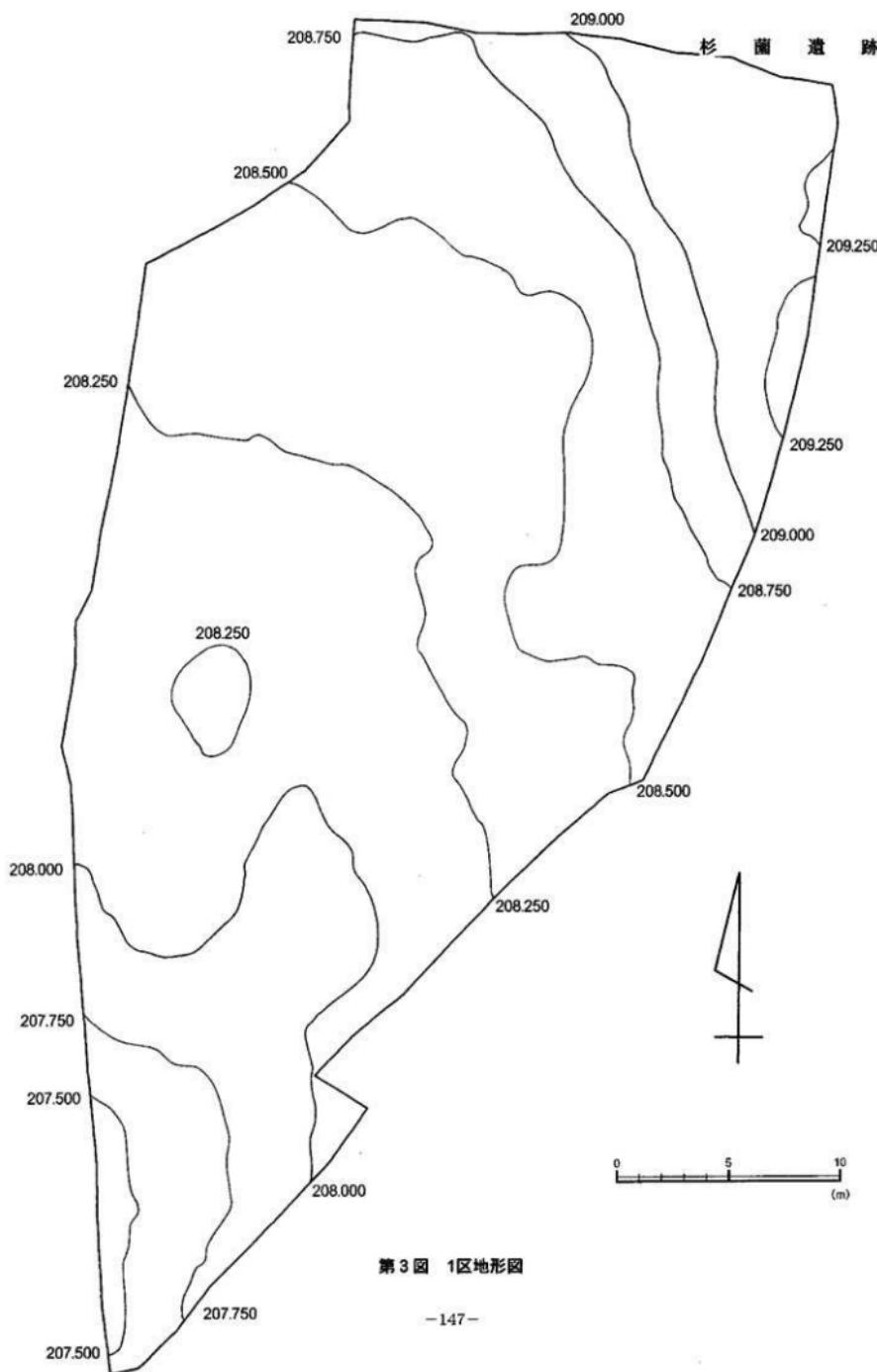
歴史時代の遺物

1はすり鉢で、埋土から出土した。

杉 菌 遺 跡

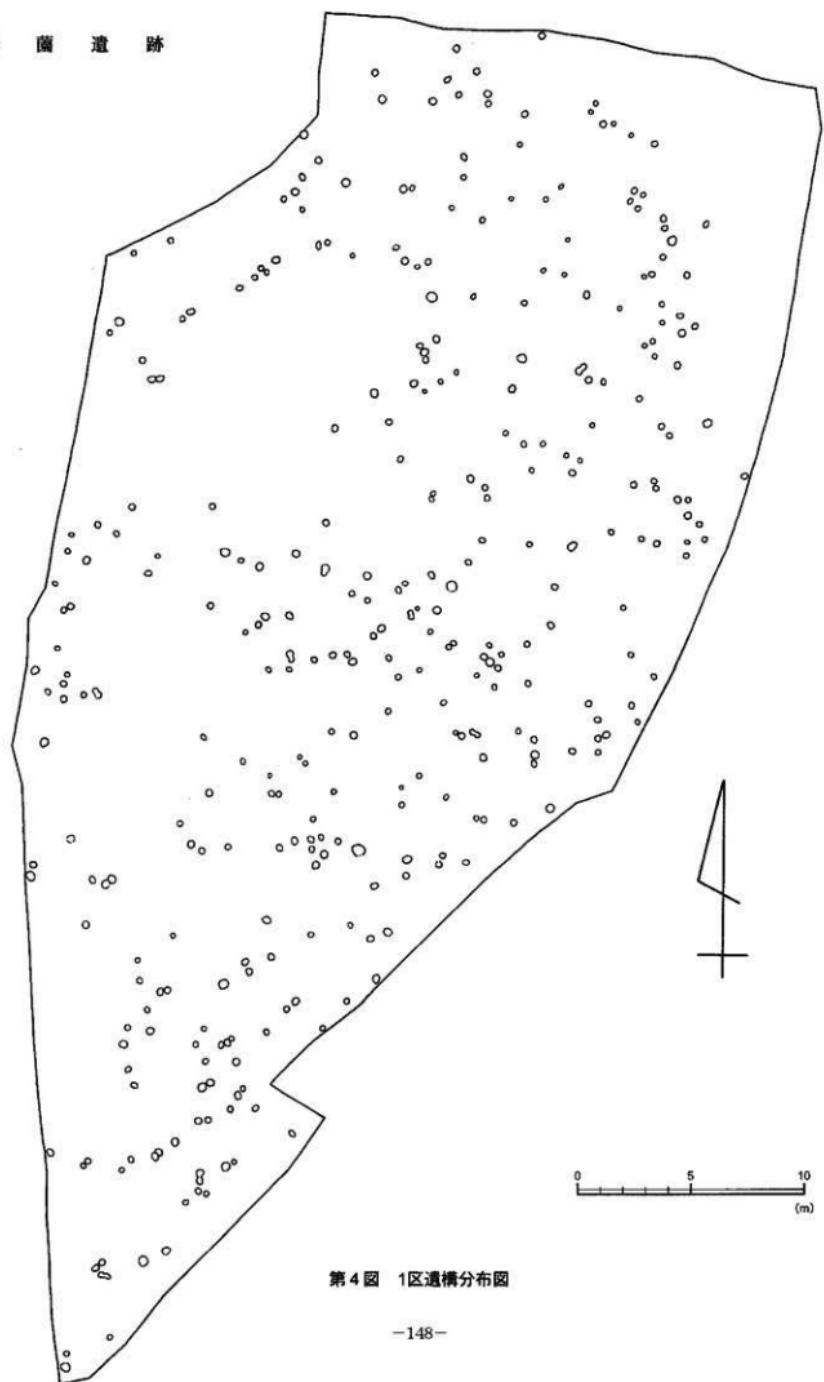


第2図 杉薦遺跡位置図

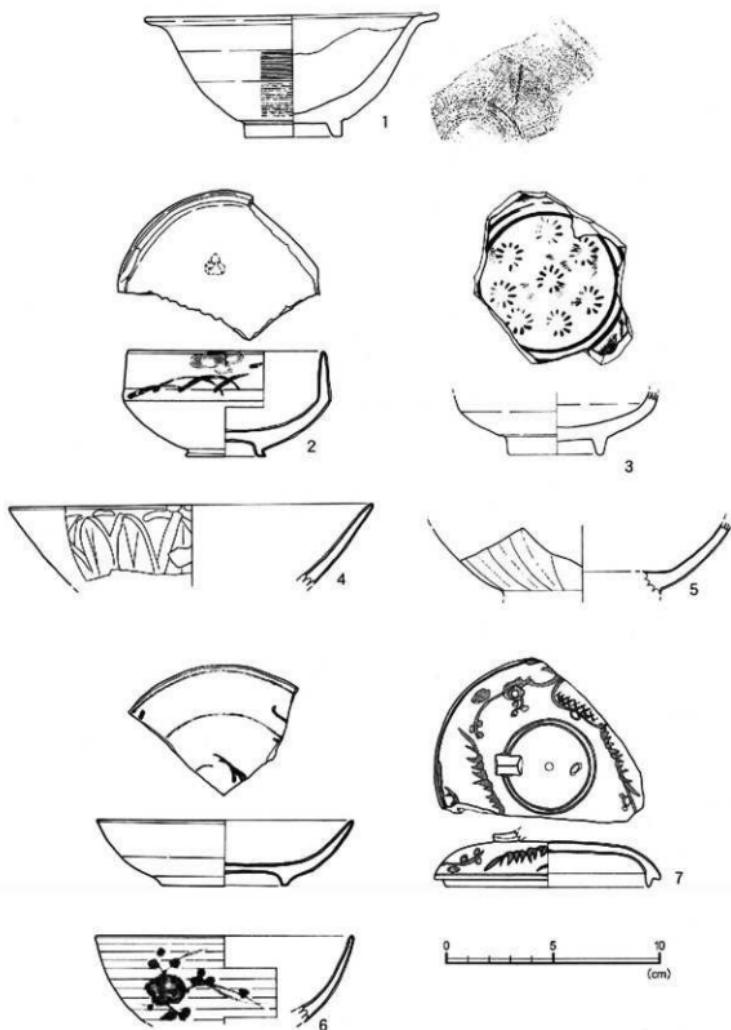


第3図 1区地形図

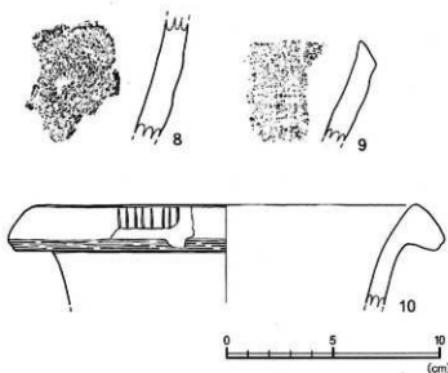
杉菌遺跡



第4図 1区遺構分布図



第5図 1区包含層出土遺物（1）



第6図 1区包含層出土遺物（2）

豊穴状遺構 3（第11図）

調査区の西部に位置し、1辺3.2mで、方形を呈している。床面積は10.2m²である。主柱穴は4基以上あるものと想定されるが、遺構内からは1基しか検出されなかった。深さは約50cmである。床面からこぶし大の石が数点出土している。

出土遺物（第11図）

土器片が160点以上出土しているが、いずれも細片で埋土からの出土である。

土師器甕 1

底部は平底で外に突き出している。

土壙 1（第12図）

調査区の北西部に位置し、長辺5.6m、最大幅4.6m、不定形の土壙である。土師器細片が20点ほど出土しているが、計測できなかった。いずれも埋土からの出土である。

土壙 2（第13図）

調査区の西部に位置し、長辺5.1m、短辺3m、長方形の土壙である。ピットが検出されているが、遺構に伴うものは不明である。土師器細片が20点ほど出土しているが、計測できなかった。いずれも埋土からの出土である。

円形土壙（第14～19図）**円形土壙 1（第14図）**

調査区の西部に位置し、直径1mの円形土壙である。土師器細片が20点ほど出土しているが、計測できな

かった。

いずれも埋土からの出土である。

円形土壙 2（第15図）

調査区の西部に位置し、直径1.2mの円形土壙である。遺物は出土しなかった。

円形土壙 3（第16図）

調査区の西部に位置し、直径0.92mの円形土壙である。白色砂が敷かれた床面から3枚重ねの銅鏡が出土した。（第26図）

円形土壙 4（第17図）

調査区の西部に位置し、直径0.97mの円形土壙である。遺物は出土しなかった。

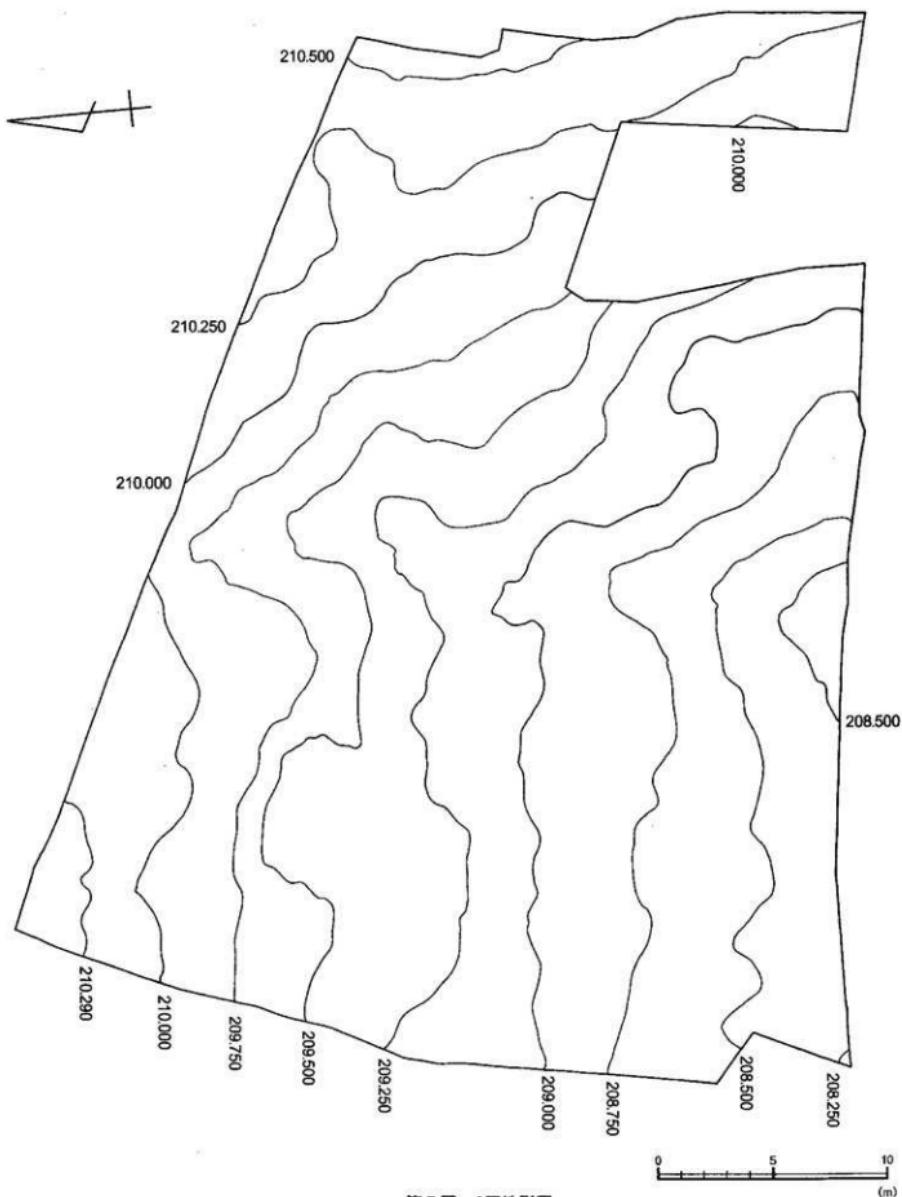
円形土壙 5（第18図）

調査区の西部に位置し、直径1.8mの円形土壙である。土壙内部のピットは遺構に伴うものかは不明である。遺物は出土しなかった。

円形土壙 6（第19図）

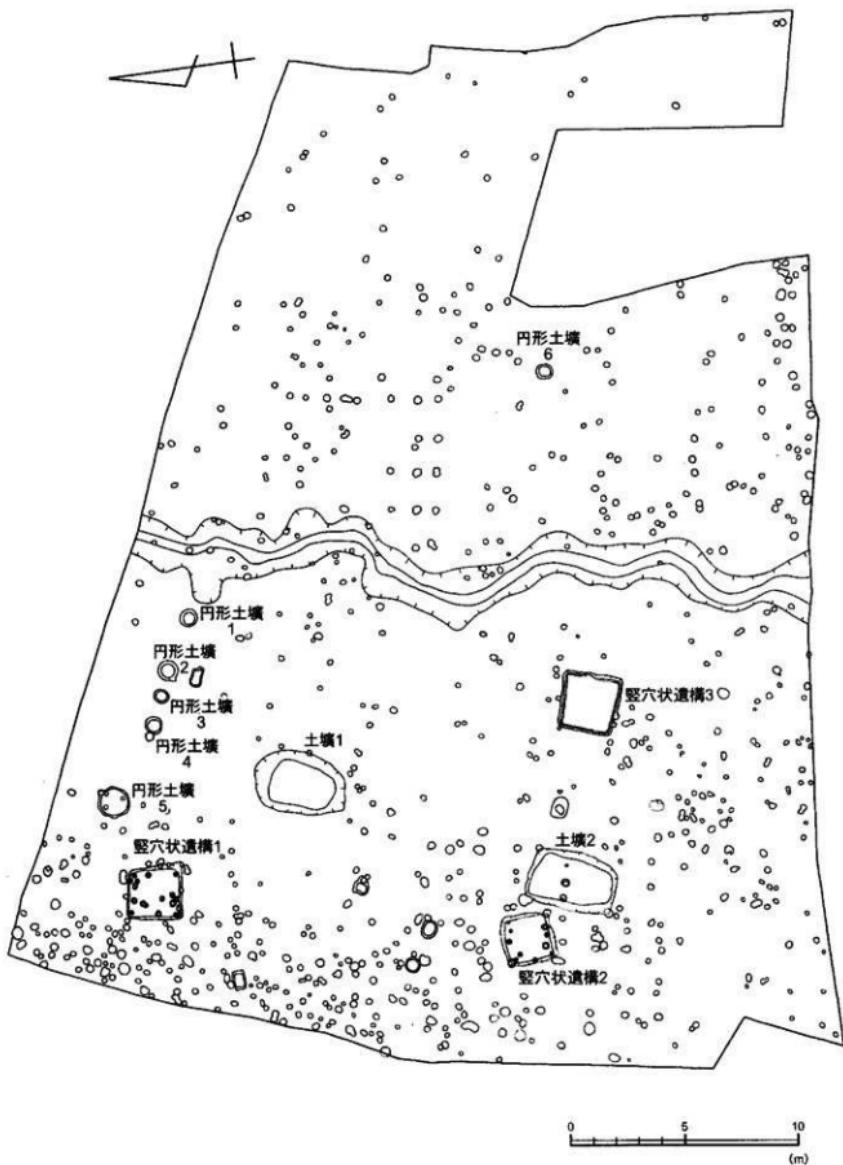
調査区の東部に位置し、直径0.9mの円形土壙である。遺物は出土しなかった。

杉 路 遺 墓

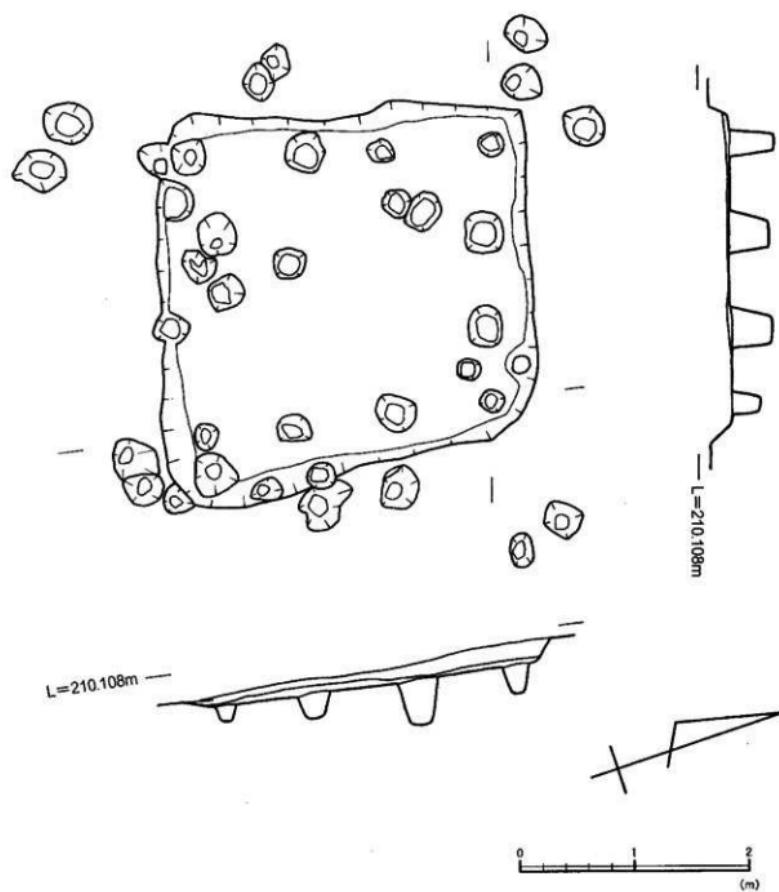


第7図 2区地形図

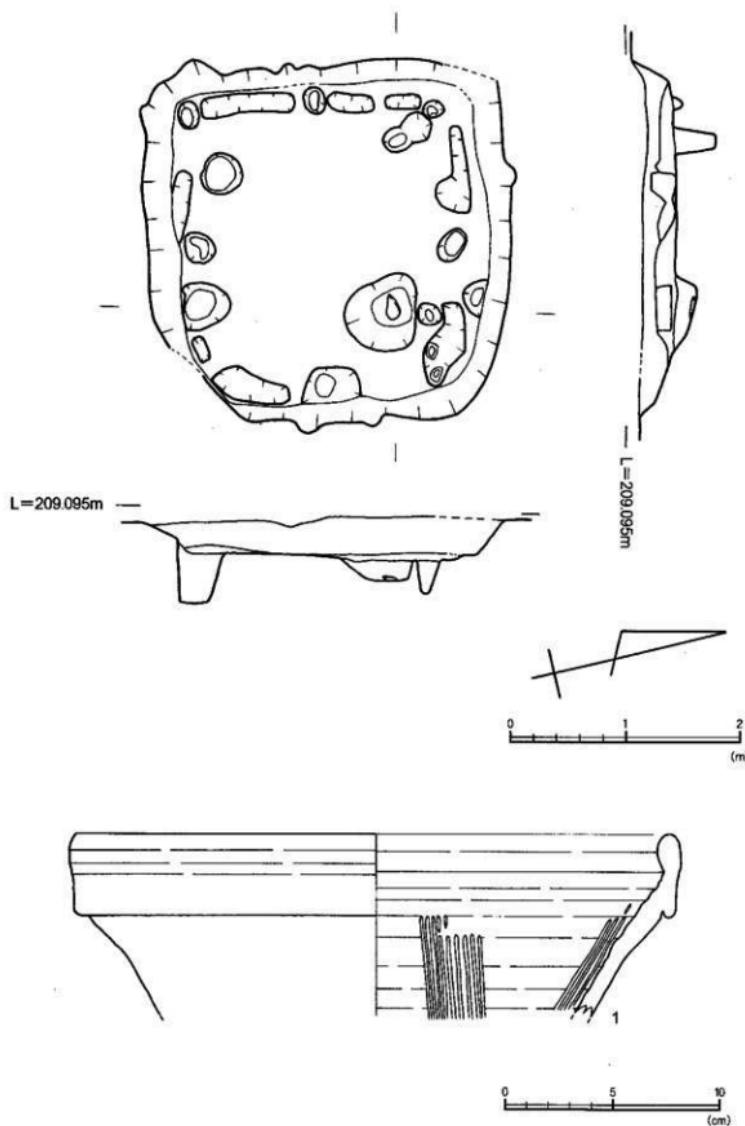
杉 茅 遺 跡



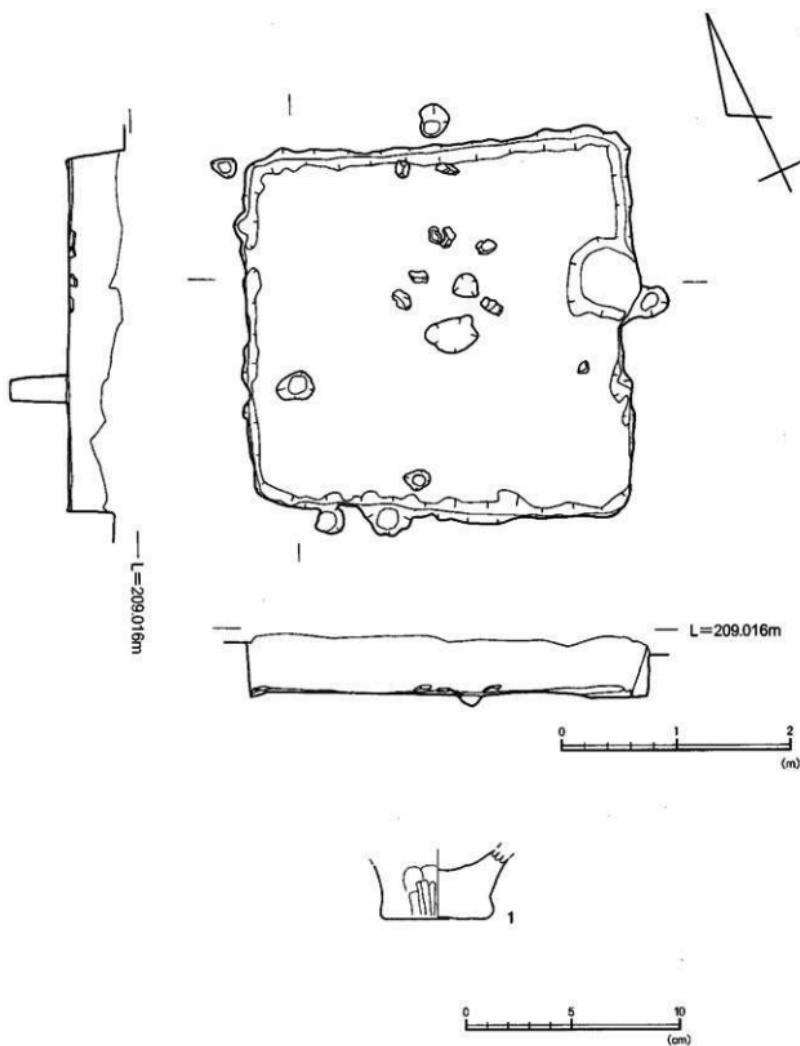
第8図 2区遺構分布図



第9図 2区堅穴状遺構 1

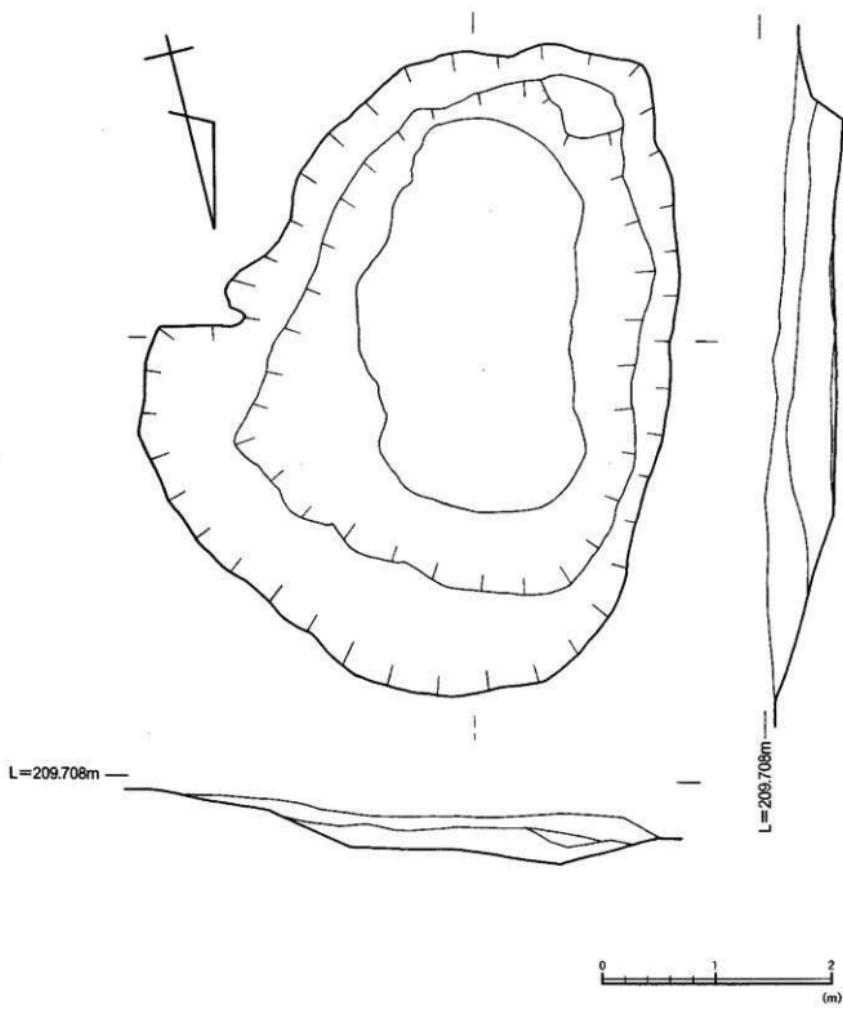


第10図 2区堅穴状遺構 2 及び出土遺物

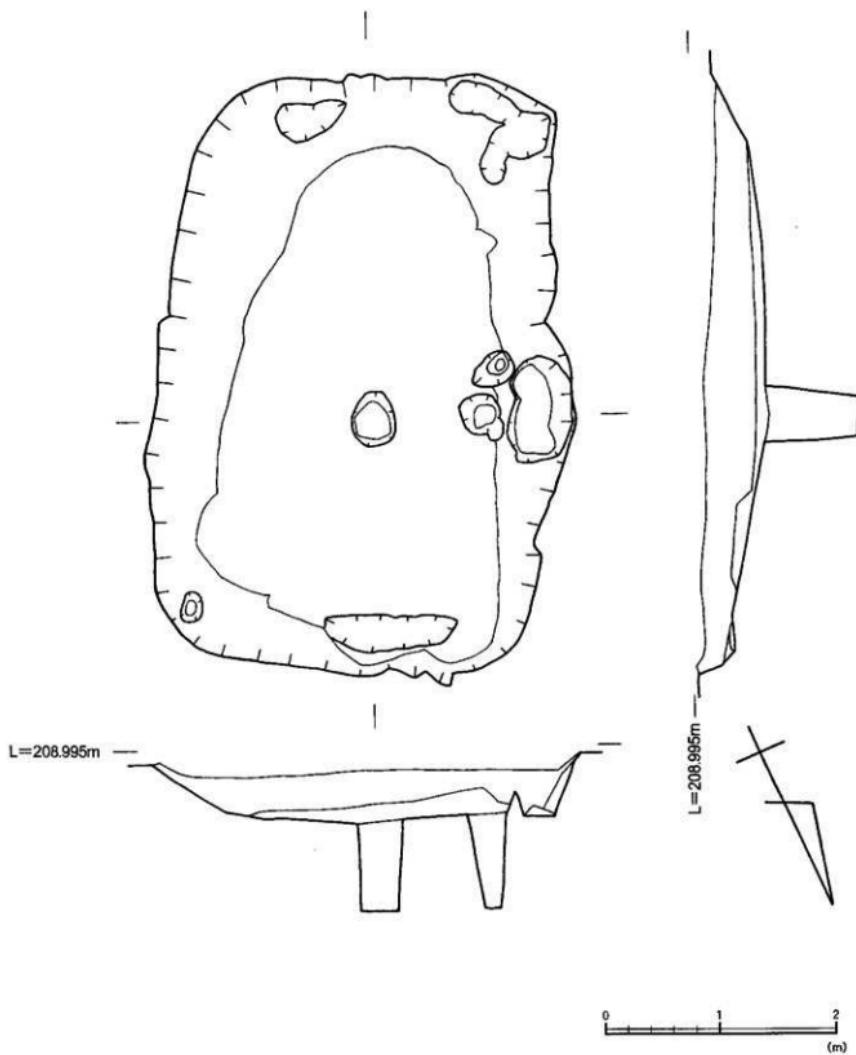


第11図 2区竪穴状遺構 3 及び出土遺物

杉 蘭 遺 跡

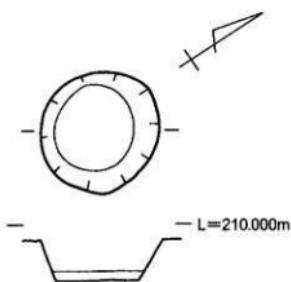


第12図 2区土壤1

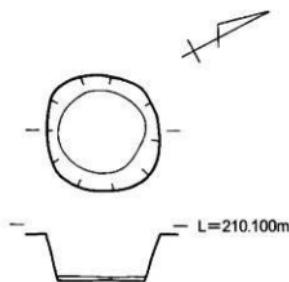


第13図 2区土壤2

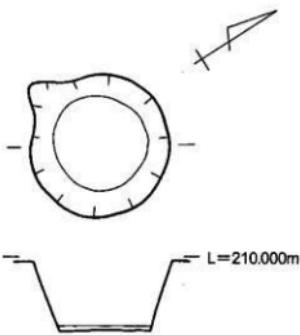
杉 菌 遺 跡



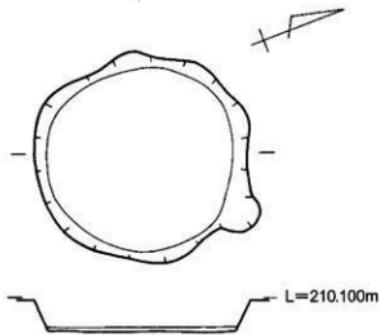
第14図 2区円形土壤 1



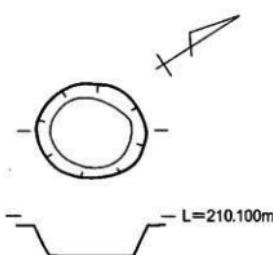
第17図 2区円形土壤 4



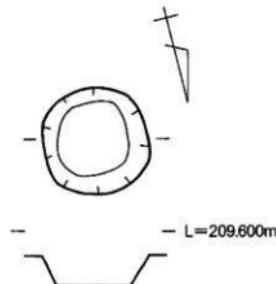
第15図 2区円形土壤 2



第18図 2区円形土壤 5

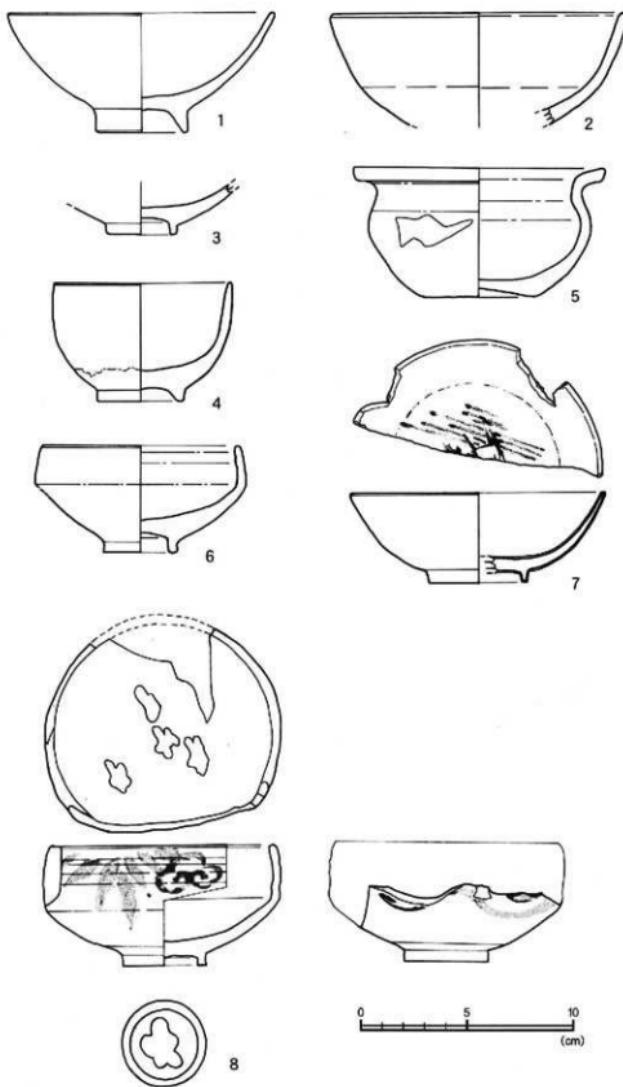


第16図 2区円形土壤 3

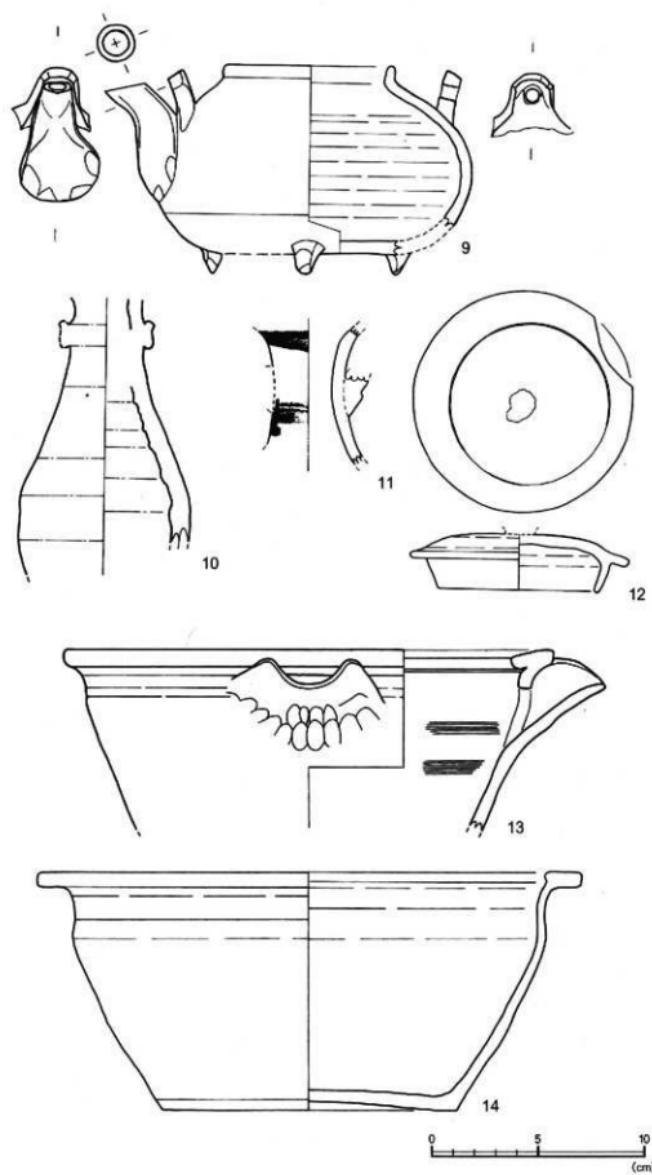


第19図 2区円形土壤 6

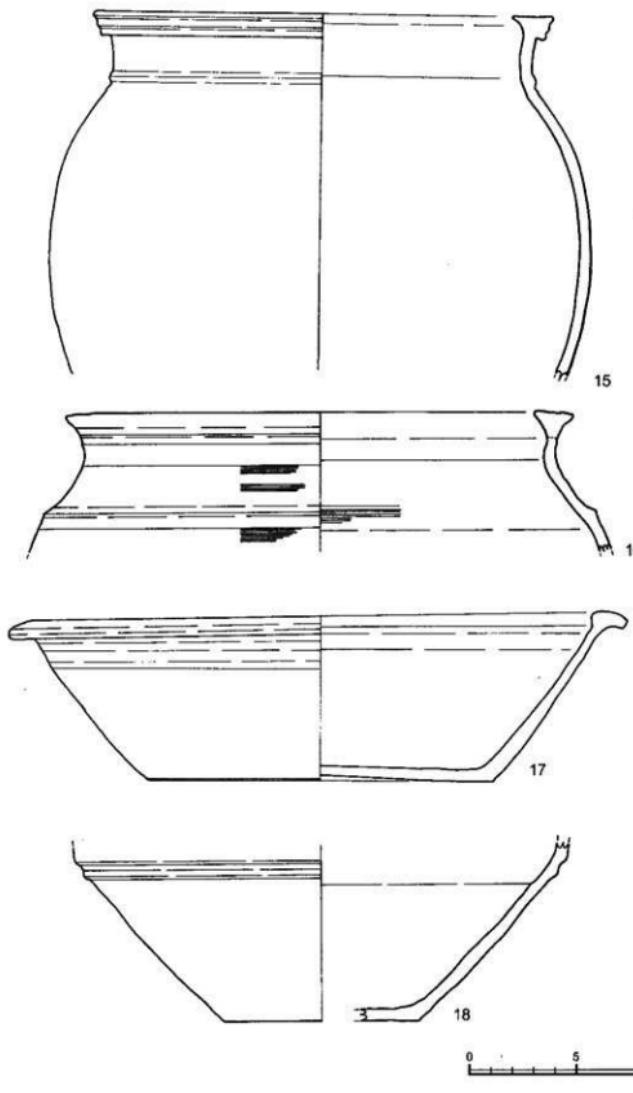




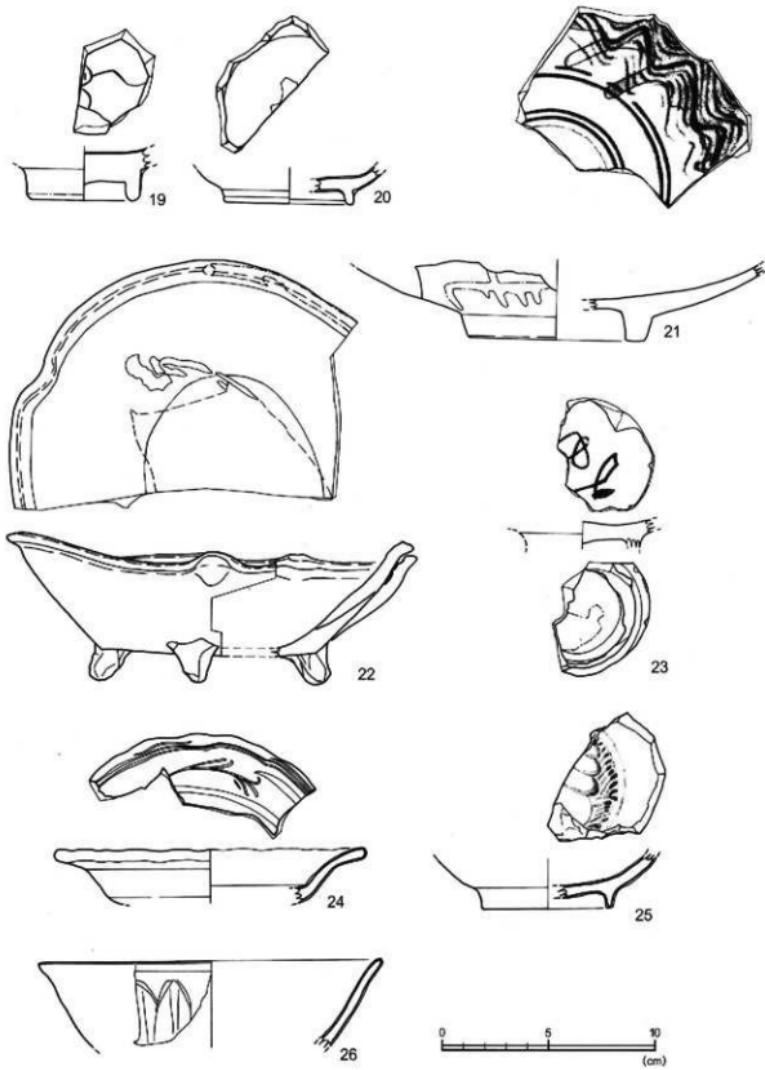
第20図 2区包含層出土遺物（1）



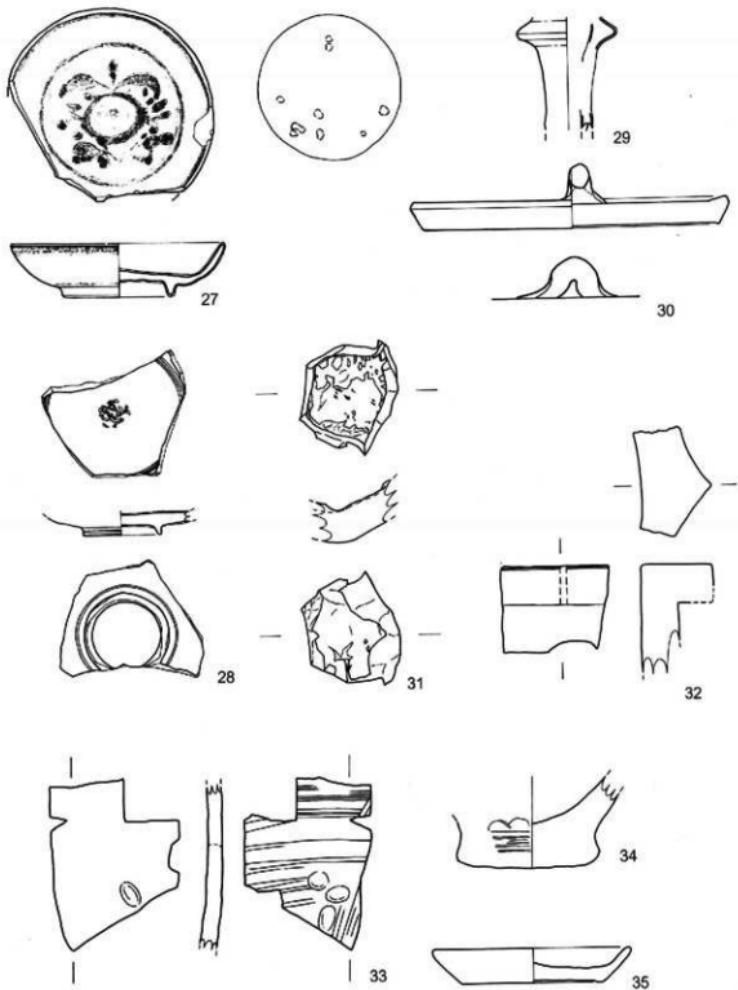
第21図 2区包含層出土遺物（2）



第22図 2区包含層出土遺物（3）

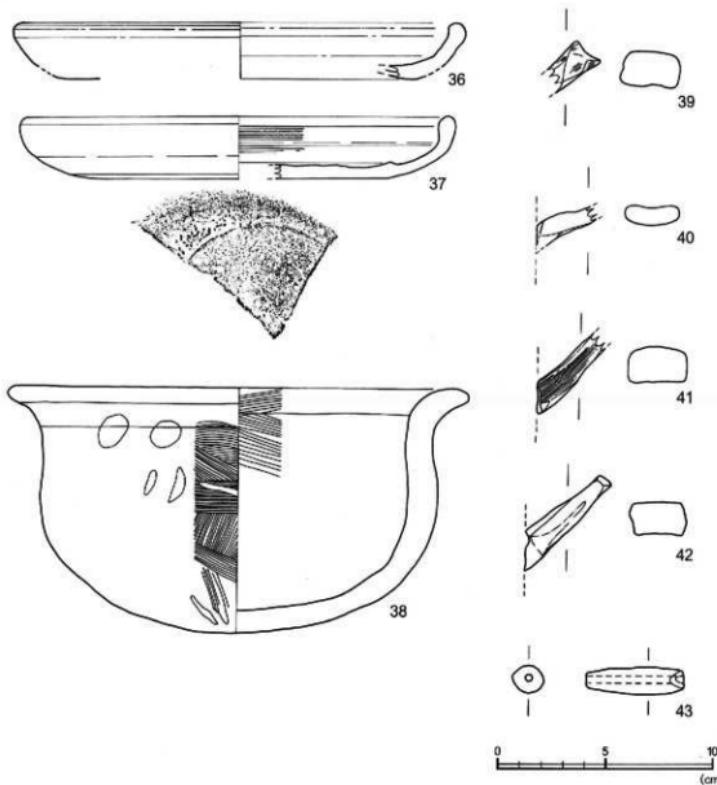


第23図 2区包含層出土遺物（4）



0 5 10 (cm)

第24図 2区包含層出土遺物 (5)



第25図 2区包含層出土遺物（6）

2区の遺物(第20~27図)

陶器

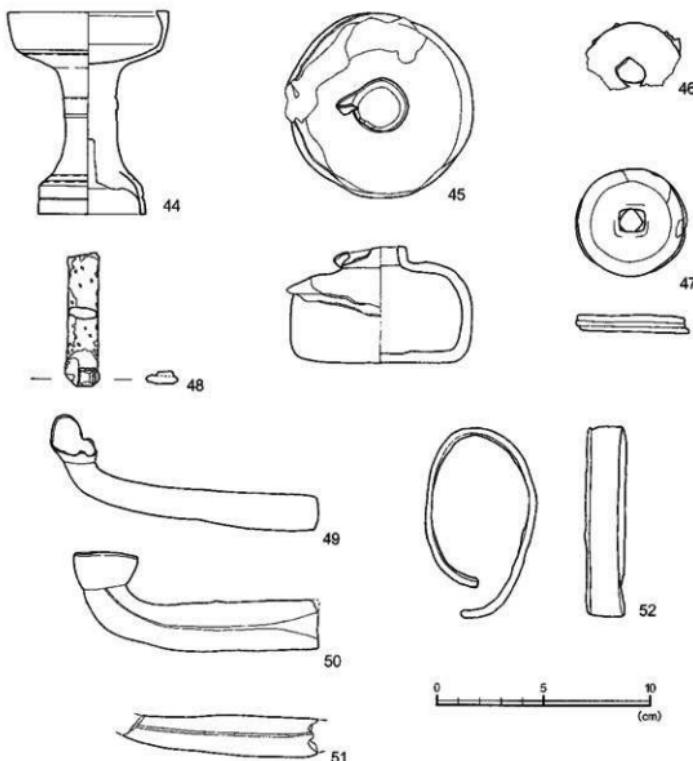
1は碗である。素地はにぶい黄色で、透明釉がかけられている。2の素地はにぶい橙色で、白色釉が厚くかかっている。ピット埋土より出土した。3の素地はにぶい黄色で、透明釉がかけられている。唐津系か。4は湯飲み茶碗である。素地は赤褐色で、内面及び外面胴部に白化粧を施し、上から薄い黄色釉がかけられている。見込みに目跡がある。5は小鉢である。素地は赤褐色で、外面口縁～胴部及び口縁端部内面にオリーブ黒色釉がかけられている。6は小鉢である。素地はにぶい黄色で、透明釉がかけられている。また胴部に褐色釉が一部かかっている。

7は碗である。素地はにぶい黄色で、透明釉がかけられている。見込みにオリーブ灰色の顔料で絵付けがある。唐津系か。ピット埋土より出土した。

8は小鉢である。素地は黄灰色で、薄い綠釉がかけられている。胴部外面に絵付け。見込みに目跡がある。

9は急須である。素地はにぶい赤褐色で、内外に綠釉がかけられている。

10は両耳瓶である。素地は黄褐色で、黒褐色釉がかけられている。11は両耳瓶。素地は暗赤褐色で、茶褐色釉、黒褐色釉、白化粧が施されている。



第26図 2区包含層出土遺物（7）

12は鉢蓋である。つまみが欠損しており、素地は暗赤褐色、天井部外面に暗灰緑色釉がかけられている。天井部外側にときどき重ね焼の痕跡がある。

13は片口鉢である。素地は暗赤褐色で外面に船形釉がかけられている。口縁上面は露胎である。

14は浅鉢である。素地は暗赤褐色で内外面に船形釉がかけられている。口縁上面及び外底部は露胎である。17は浅鉢である。素地は暗赤褐色で内外面に船形釉がかけられている。口縁上面は露胎である。

18はすり鉢である。素地は暗赤褐色で内外面に黒褐色釉がかけられている。外底部は露胎である。

15は甕で暗茶褐色の釉がかけられている。外面は釉薬がはげている。16は甕である。素地は褐灰色で

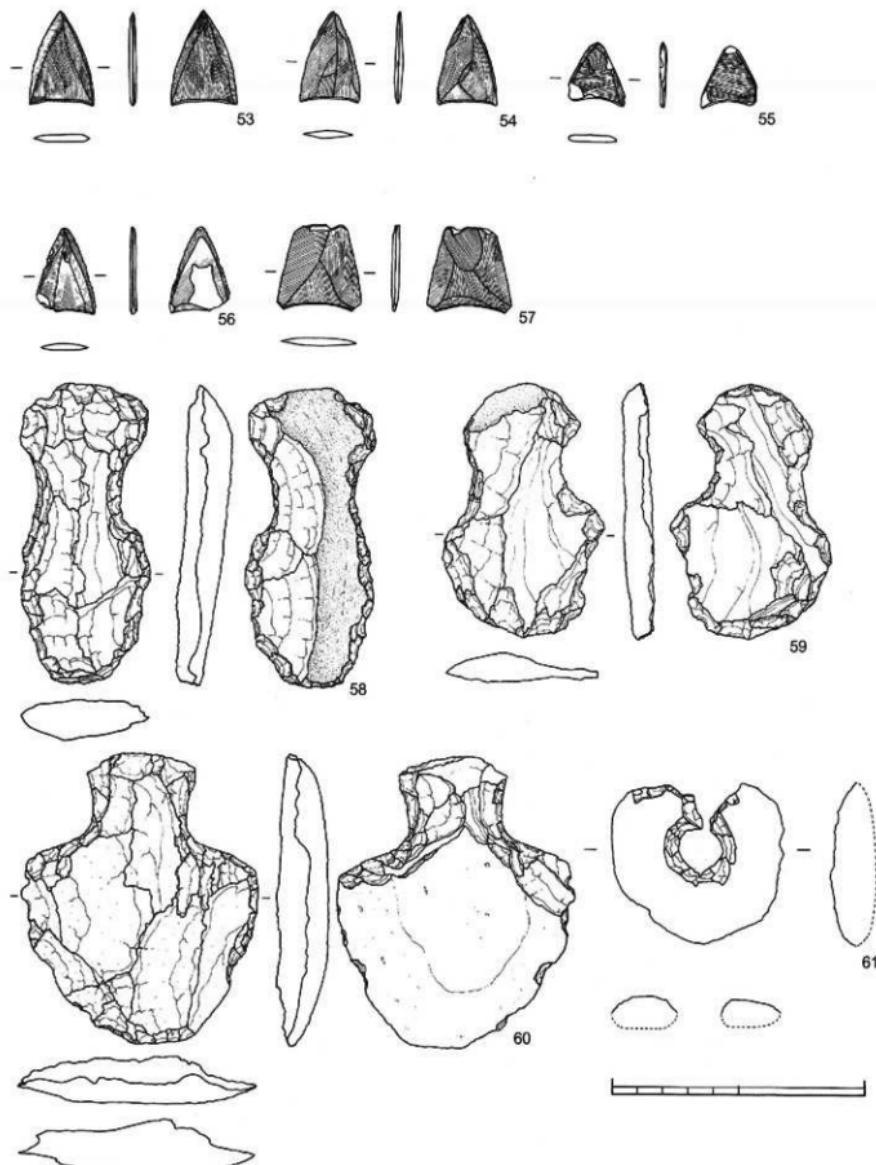
外面面に船形釉がかけられている。口縁上面は露胎である。

19は緑釉陶器の小鉢？である。素地は暗灰色、明オリーブ灰色の釉がかけられている。見込みにへらで文字？が書かれている。

21は肥前系二彩皿である。素地は赤褐色で見込み中央を灰白色、その外側を浅黄色の化粧土を施し、さらに船形釉をかけている。外面は露胎である。

22は火合である。素地は暗赤褐色で外面に船形釉がかけられている。口縁部を数ヶ所つまみ上げている。

杉 菌 遺 跡



第27図 2区包含層出土遺物 (8)

0 5 10
(cm)

磁器

20は青磁皿で素地は灰白色、緑灰色の釉がかけられている。見込みにヘラ描き文を施している。

24は青磁皿である。素地は灰白色、緑灰色の釉がかけられている。波状口縁で、内面にヘラで草花文を施している。26は青磁瓶である。緑灰色の釉がかけられている。蓮弁文を施している。ピット埋土より出土した。29は青磁瓶である。素地は薄い灰白色、緑灰色の釉がかけられている。

23は染付碗の底部である。素地は灰白色、暗青色の顔料で見込みと外面に染付けがある。明代のものと思われる。25は碗の底部で、素地は灰白色、暗青色の顔料で見込みと外面に絵付けがある。明るい緑灰色の釉がかけられている。27は染付皿で、復元口径9.8cmである。素地は灰白色、内外面に暗青色の顔料で絵付けされている。オリーブ灰色の釉がかかっている。目跡がある。ピット埋土より出土した。28は染付皿の底部である。素地は灰白色、暗青色の顔料で絵付けしている。

土師器

34は甕である。底部は平底で外側につきだしている。35は皿で、糸切り底である。36、37は大型の皿で、糸切り底である。

38は鍋で、口縁部は短く外反している。外面胴部は布でナデている。外面に炭化物が付着している。39～42は土鍋の把手である。39はにぶい橙色。40は浅黄橙色。41はにぶい黄褐色で、下半分はススによって黒変している。42はにぶい黄橙色。

43は土錠である。

その他の遺物

30は炻器の鉢蓋。外面は灰赤色、内面はにぶい赤褐色である。31はるつぼの底部である。内面に鉄滓が付着している。32は瓦質の羽釜破片で内外面とも暗灰色である。

33は束縛系須恵器の胸部破片である。

銅製品

44は仏飯器である。脚部内側に鋳型の粘土が残っている。45は墨壺で蓋が欠損している。46は銅鏡である。2枚重ね、刻字等不明。47は銅鏡である。円形土壙3の床面より、3枚重なった状態で出土した。49～51はキセルの雁首である。51は火皿を欠損している。52は締め金具？である。

鉄器

48は刀子である。刃部が欠損している。

石器

53～57は粘板岩製の磨製石器である。58～60は打製石斧である。61は環状石斧である。残存1/2である。

第6節 3区の調査(第28、29図)

3区は北東から南西方向に傾斜する地形である。ピット群は全面に検出されているが、北半分に多く分布している。遺構は南西隅に竪穴状遺構が1基検出されている。

竪穴状遺構1(第30図)

調査区の南西隅に位置し、1辺は2.4mであり、ほぼ方形を呈している。床面積は5.7m²である。主柱穴2本で、深さは約25cmである。遺物は出土しなかった。

3区の出土遺物(第31図)

磁器

1、2は青磁碗である。1は灰オリーブ色で蓮弁文を施している。2は緑灰色である。

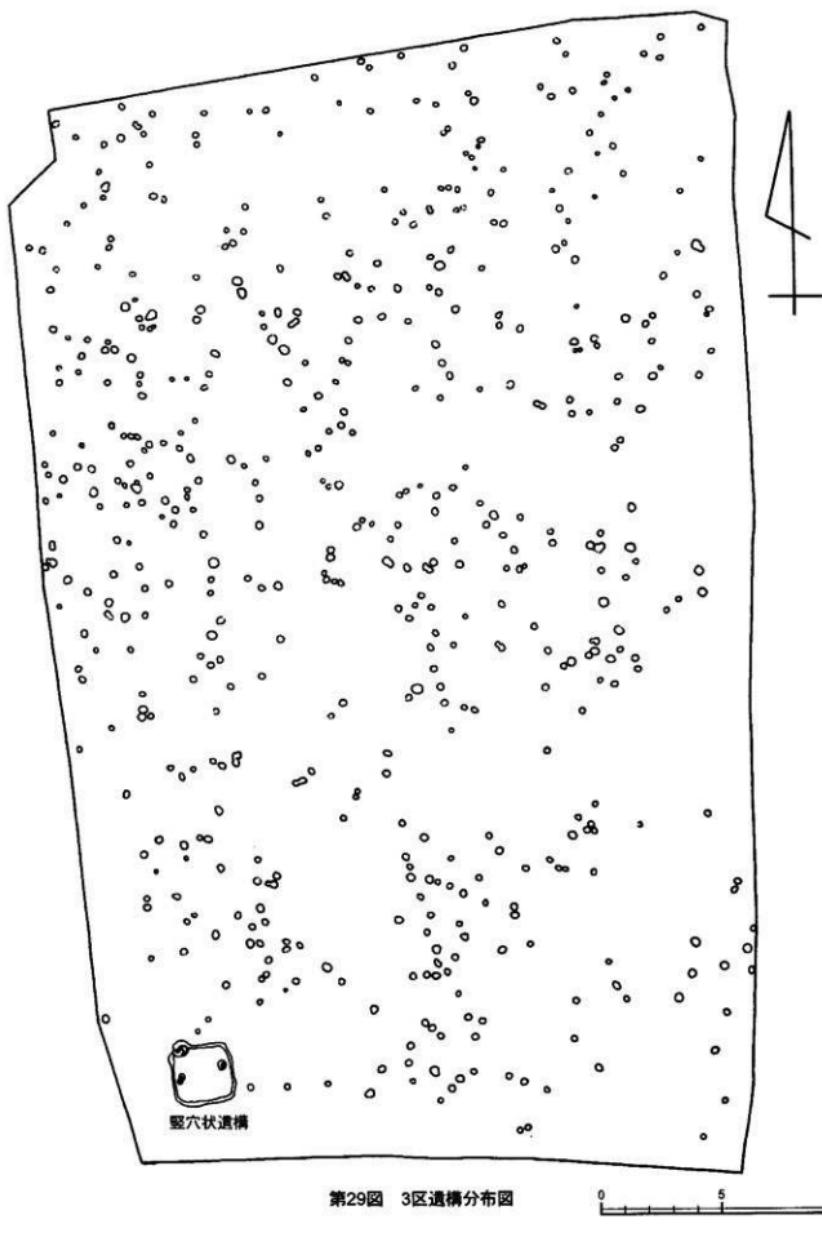
第7節 まとめ

杉蔭遺跡では縄文時代から近世にわたる遺物が包含層より出土している。遺構はピット群、竪穴状遺構、土壙、円形土壙が検出されている。ピット群がどの時代に帰属するものは不明であるが、大半の遺物が陶磁器類であるところから14、15世紀以降に構築されたものと思われる。

円形土壙については、出土遺物がほとんどなく、その機能については断定はできないが、1基からは銅鏡が出土していることから、土壙墓ではないかと思われる。

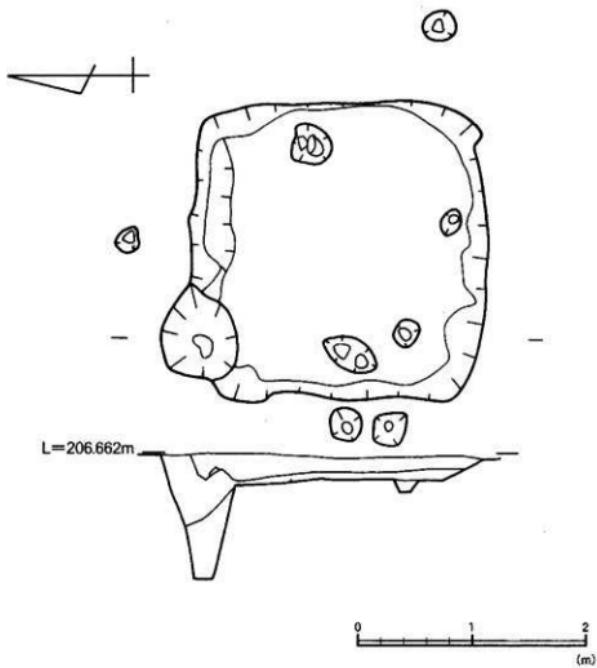
杉 茅 道 跡



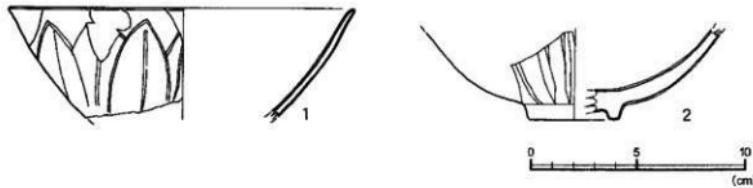


第29図 3区遺構分布図

0 5 10
(m)



第30図 3区堅穴状遺構1



第31図 3区包含層出土遺物

とし がみ
年 神 遺 跡

第6章 年神遺跡の調査

第1節 位置と環境

当遺跡は、市内中央部に位置し、標高は約200mである。真方川（大淀川支流）によって形成された河岸段丘の東岸に立地し、北側の保桜枝原台地及び東側の杉藪台地によって挟まれている。平成8、9年度調査した大部、杉藪遺跡の南に隣接し、平成7年度調査した餅田遺跡の対岸に位置する。

第2節 調査に至る契機

西諸県農林振興局との協議の結果、平成10年度市谷地区4工区の面工事実施面積1.5haのうち、12,200m²について発掘調査を実施することになった。

第3節 調査の概要(第2図)

調査期間は平成10年5月20日から平成11年3月15日で、事業予定地を北から1~3区に設定し、うち2区をさらに4区間に分けた。

年神地区の基本層序は次のとおりである。(第1図)

1
2
3
4
5

第1層 耕作土
第2層 黒ボク土
第3層 アカホヤ火山灰土
第4層 牛ノ脛火山灰土
第5層 暗褐色土

第1図 年神遺跡基本層序

第2層の黒ボク土層は2層に分かれており、下層が若干色が薄いようである。しかし、発掘時には区分できなかった。遺物を多量に包含している。遺構は主にアカホヤ火山灰面で検出した。

第4節 1区の調査(第3図)

1区は平坦な地形で、ピット群が一面に広がっている。調査区北側で一部アカホヤ上面まで削平を受けている。

1区の遺物(第4図)

遺物はすべて黒ボク上層からの出土である。

古代の遺物

1は土師皿で残存は1/2である。ロクロ成型、糸切り底でピット埋土より出土した。復元底部径8cm。

第5節 2区の調査(第5、6図)

2区は調査区北側、2~4区を東西方向に自然の谷が走っている。また調査区北端は一部アカホヤ上面まで削平されている。ピット群は全体に広がっている。遺構は2区全体で竪穴住居1軒、竪穴状造構2軒、土壙2基、石組造構1基、集石造構3基が検出されている。2~3、2~4区の境界に川原石からなる石垣があり、積石の間から土師碗が出土した。2~1区と2~2区、2~3区を隔てる溝については、埋土から現代のものと思われる。

1.2~1区の遺構、遺物(第7、8、17~23図)

竪穴状造構1(第7図)

調査区の南西部に位置し、1辺3.2mであり、東半分は調査区外である。遺物は出土しなかった。

土壙1(第8図)

調査区の中央部に位置し、長辺3.4m、短辺2.8m。不定形の土壙で、深さは約16~40cmである。埋土から青磁碗片が1点出土した。口縁部が1/8残存している。素地は灰白色で、明緑灰色の釉がかかっている。

包含層出土遺物(第17~23図)

歴史時代の遺物(第17~22図)

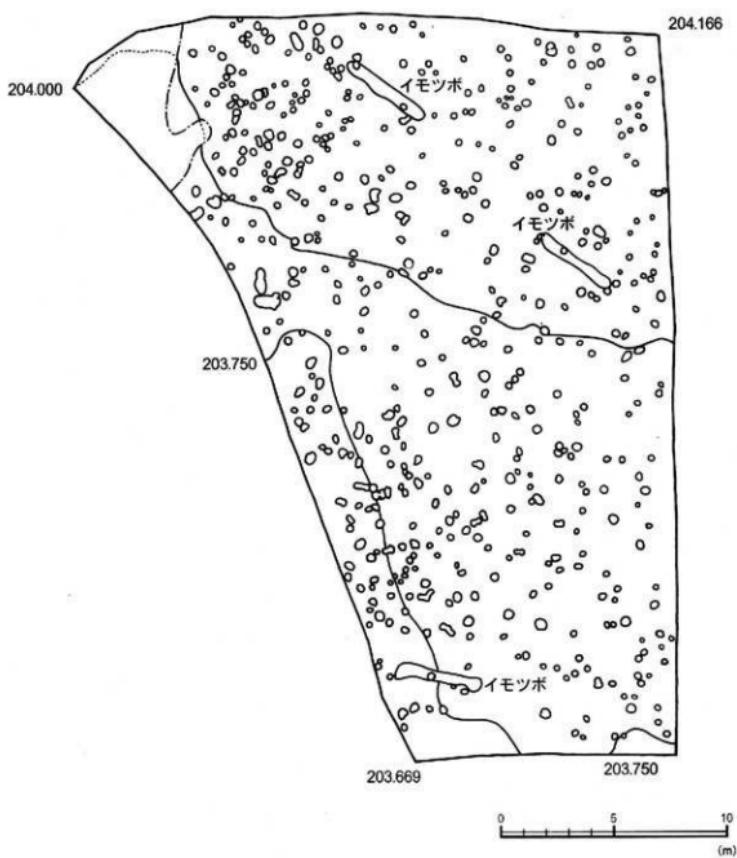
1~6は土師皿である。1の残存は1/3である。ロクロ成型、糸切り底である。復元口径13.8cm。2の残存は1/3である。ロクロ成型、糸切り底である。3はほぼ完形である。ロクロ成型、糸切り底である。口径7.7cm、底部径6.2cm。4の残存は1/3である。ロクロ成型、糸切り底である。復元口径8.4cm、底部径6.8cm。5は1/2残存である。ロクロ成型、糸切り底である。復元口径9cm、復元底部径7.6cm。6は底部である。ロクロ成型、ヘラ切り底で、外底部に「沙」と思われる墨書きがある。

7は紡錘車である。残存は1/2で、土師皿の転用品である。

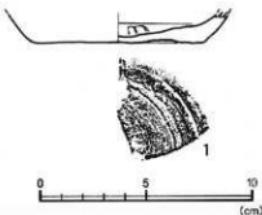
8はおろし皿で、底部は糸切り底である。素地は灰白色で、白色釉がかかっている。外底部は露胎である。美濃瀬戸系で15~16世紀のものと思われる。10は八角小鉢で1/3残存している。切り高台である。



第2図 年神遺跡位置図



第3図 1区地形図・遺構分布図



第4図 1区出土遺物

素地は灰白色で、灰白色の釉がかかっている。外底部は露胎で見込みに目跡がある。

12~16世紀は青磁碗である。12の口縁部は丸く、厚みを帯びている。薄緑釉がかけている。14~16世紀と思われる。13の口縁部は丸く、短く外反している。オリーブ灰釉がかけている。内面に花文がある。14~16世紀と思われる。14の残存は1/4で口縁部は丸く、オリーブ灰釉がかけている。外面に蓮弁文がある。復元口径13.6cm。15の口縁部1/10残存でオリーブ灰釉がかけている。外面に簡略化された蓮弁文が施されている。14~16世紀のものと思われる。復元口径14cm。16の口縁部は1/8残存で灰オリーブ釉がかけている。口縁端部外面に雷文が施されている。14~16世紀と思われる。復元口径14.6cm。17の口縁部は1/7残存で灰オリーブ釉がかけたり、玉縁である。14~16世紀のものと思われる。20は皿で残存は1/3である。見込みに線描文が施されている。オリーブ灰釉がかけている。見込みに花文が施されている。高台内面は露胎である。14~16世紀のものと思われる。20は皿で残存は1/3である。見込みに線描文が施されている。オリーブ灰釉がかけている。復元口径9.6cm。

21~23は白磁である。21は碗の口縁部で1/5残存している。玉縁で灰白色の釉がかかっている。胴部下位は露胎である。12~13世紀のものと思われる。復元口径16.4cm。22は高台付皿で1/2残存している。口縁端部は短く外反し、灰白色の釉がかかっている。見込みに目跡がある。15~16世紀のものと思われる。22は皿で1/5残存している。素地は灰白色で、白色釉がかかっている。復元口径9cm。13~14世紀のものと思われる。

24は青白磁の合子蓋で、1/4残存している。素地は白色で、明緑灰色の釉がかけられている。

25、26は染付である。25は台付鉢で、1/3残存している。素地は灰白色で、暗青色の顔料で絵付けし、上から明緑灰色の釉をかけている。26は台付皿で

1/4残存している。素地は灰白色で、暗青色の顔料で絵付けし、上から白色の釉をかけている。見込みに輪剥ぎ砂目がある。

27~30は東播系須恵器である。27は鉢の口縁から胴部で、内外面とも橙色に赤変している。28は裏の胴部破片で灰色を呈している。外面にタタキ痕がある。29は鉢の口縁部破片で暗灰色を呈している。13世紀頃と思われる。30は鉢の口縁部破片で灰色を呈している。13世紀頃と思われる。

31は石臼で1/4残存している。砂岩製である。32は仕上げ砥石の破片で、粘板岩製である。にぶい褐色を呈している。

33、35、36は滑石製品である。35は石鍋の底部で1/4残存している。銀灰色で、内底部に炭化物が、胴部外面にススが付着している。断面に鋸引痕がある。36は石鍋破片である。黃灰色で、外側にススが付着している。33は石鍋の口縁~胴部である。銀灰色で、外側にススが付着している。

34は軽石製品で、用途は不明である。

37、38は銅鏡である。37はほぼ完形、38は全面に錆が付着している。39、40は銅鏡である。39は洪武通宝、40は不明である。

古墳時代の遺物(第23図)

41は土師器甕である。口縁から肩部が残存している。口縁部は短く外反している。最大径は胴部中位にくるとと思われる。復元口径22.6cm。42は土師器甕の口縁部である。口縁部は短く外反している。最大径は胴部中位にくるとと思われる。復元口径20cm。

縄文時代の遺物(第23図)

43、44は深鉢の口縁部破片である。44は深鉢の口縁部破片で西平式土器である。

弥生時代の遺物(第23図)

45は甕の口縁部で、突帯が2条巡っている。

2. 2~3区の遺構、遺物(第9図)

竪穴状遺構1(第9、10図)

調査区の北西部に位置し、1辺2.4mの方形を呈している。床面積は5.76m²である。主柱穴は18基で、深さは約40cmである。

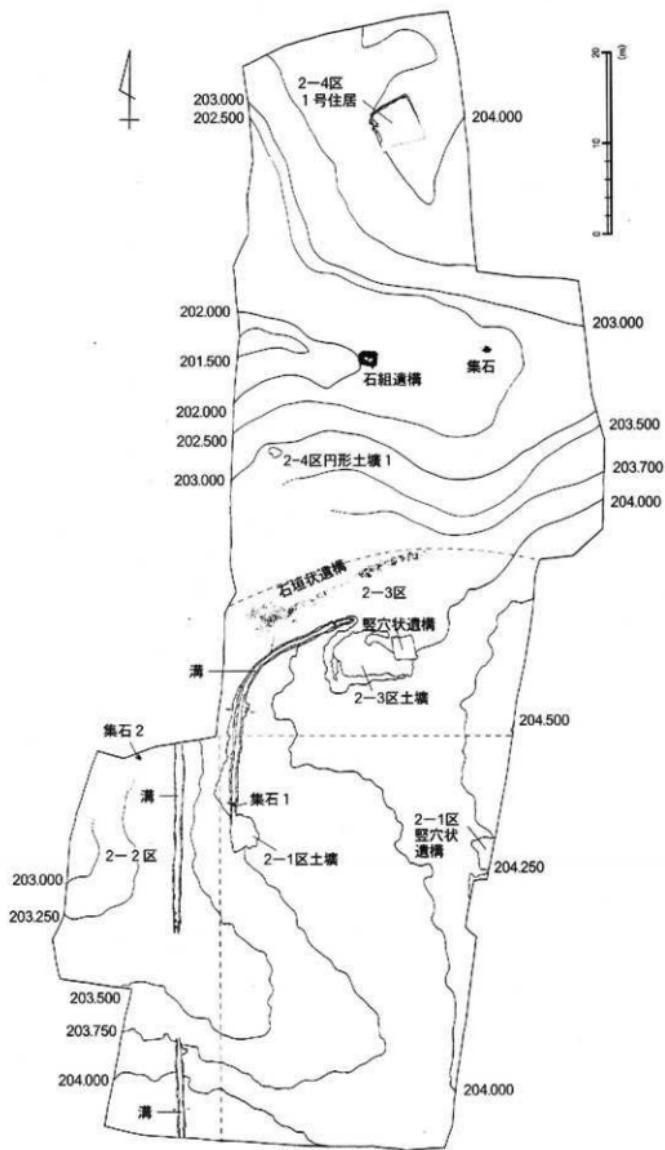
1は土師器甕である。残存1/3で、墨書が施されているが、判読不明である。2は青磁碗で、灰オリーブ釉がかけられている。復元口径17cm。14~16世紀のものと思われる。

土壙1(第11図)

調査区の北西部に位置し、不定形である。遺物は出土しなかった。

集石遺構1(第12図)

調査区の北西部に位置し、直径40cmである。アカホヤ面より検出した。

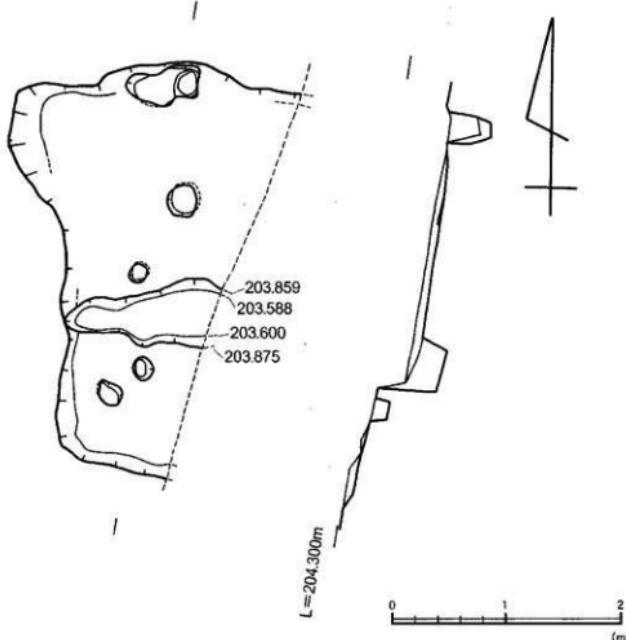


第5図 2区地形図

年 神 遺 跡



第6図 2区遺構分布図



第7図 2-1区竪穴状遺構

集石遺構2(第13図)

調査区の北西部に位置し、直径60cmである。アカホヤ面より検出した。

石垣状遺構(第5、29図)

積石の間から土師器碗が出土しており、中世以降に田の堤防としてつくられたものと思われる。

1は高台付碗で口縁部は1/4残存している。ロクロ成型で、口縁端部外面に墨のようなものを塗布している。礫群内から出土した。復元口径16.6cm。復元底部径8.1cm。

包含層出土土器(第24図)

1は完形の皿である。ロクロ成型、糸切り底である。底部径7.5cm。2は内黒上器で、残存は1/2、ロクロ成型である。内面に丁寧なミガキを施している。3は陶器の皿で、薄緑釉がかかっている。見込みに櫛描文を施している。外底部は露胎である。

3.2-4区の遺構・遺物(第14~16、25~28、30図)**竪穴住居(第14図)**

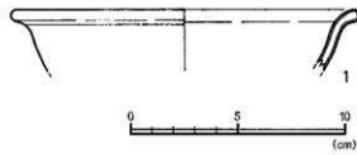
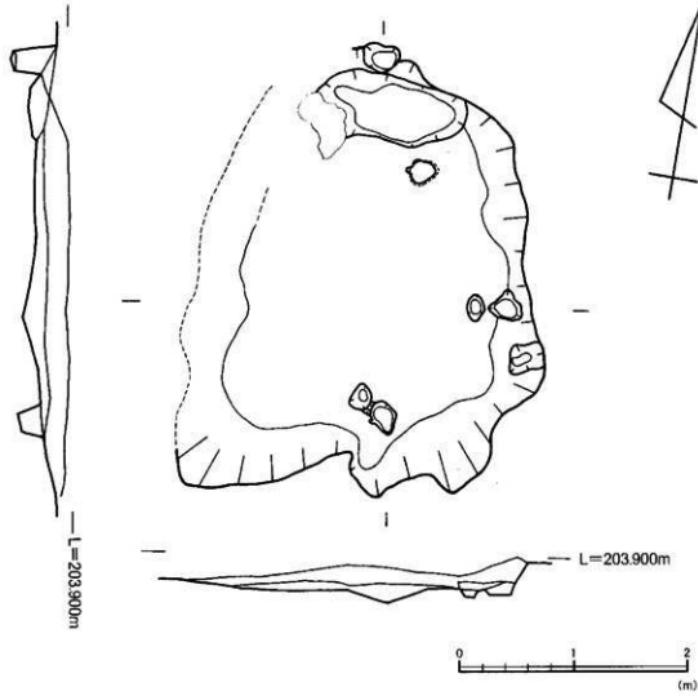
調査区の北西部に位置し、長辺5.2m、短辺4.4mであり、台形が床面まで削平されている。深さは約16~40cmである。

円形土壙1(第5、28図)

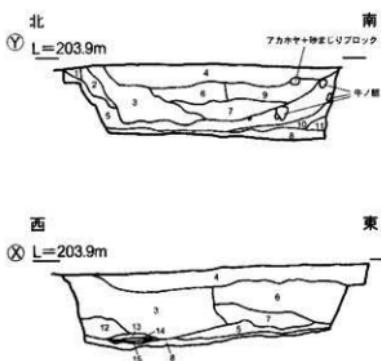
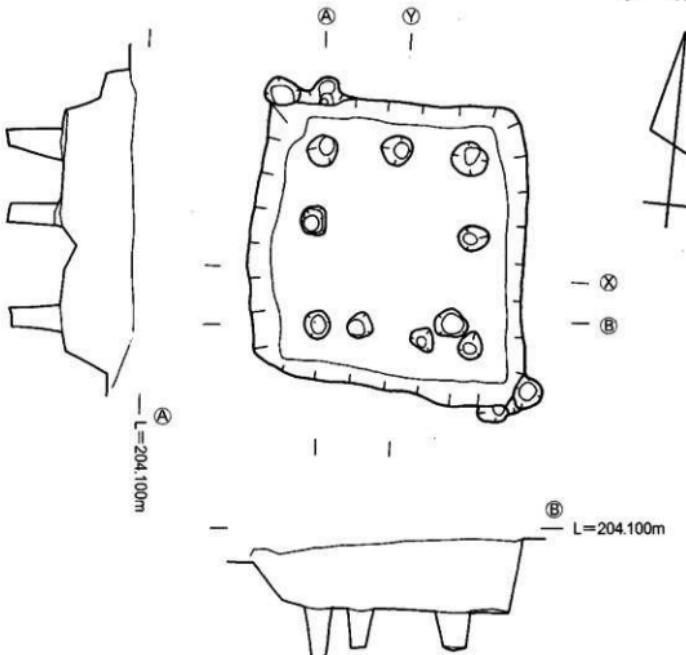
調査区の北西部、谷の傾斜部に位置し、直径1.4m、深さ約1mである。湧水があり、木杭や桃の種子、甲虫の羽、脚などの遺物が良好な状態で残存している。

1~6は木杭である。いずれも樹皮が残っている。1、2はイヌガヤ製。3はモミ属製。4は環孔材製。5、6は樹種不明である。7は土師器高杯の脚部である。エンタシス状でジョイントがある。埋土から出土した。

その他に桃の種子73個、小型甲虫の羽、脚などが出土している。



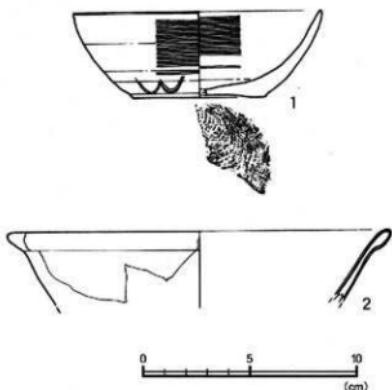
第8図 2-1区土壤1及び出土遺物



- 1: 黒ボク土(黒色 Hue10YR1.7/1)、アカホヤ粒(径1~2mm
明黄褐色 Hue10YR6/8)混入。
- 2: 黒ボク土、アカホヤブロック(径3~4cm)混入。
- 3: 黒ボク土、アカホヤ粒(径1~2mm)、アカホヤブロック(径
3~7cm)多数混入。
- 4: 黒ボク土、アカホヤ粒、アカホヤブロック、牛ノ脛ブロック
(径5cm)混入。
- 5: 黒ボク土、アカホヤ粒少々、牛ノ脛ブロック(径8cm)混入。
- 6: 黒ボク土、アカホヤブロック(径1~2cm)土層境界に多く
含む。
- 7: 黒ボク土、アカホヤブロック(径1~2cm)牛ノ脛ブロック
(径1~2cm)混入。
- 8: 黒色土、粘土質、アカホヤ粒(径1~2cm)をわずかに含む。
- 9: 黒ボク土、アカホヤ粒(径1mm)、アカホヤブロック混入。
- 10: 黒ボク土、アカホヤ粒少々含む。
- 11: 黒ボク土、アカホヤ粒多く混入。
- 12: 黒ボク土、アカホヤ粒少々含む。
- 13: 黒色土、アカホヤブロックを少々含む。
- 14: 黒色土、アカホヤ砂をわずかに含む。
- 15: 黒色土、アカホヤ砂を含む。

0 1 2
(m)

第9図 2-3区竪穴状遺構1



第10図 2-3区堅穴状遺構出土遺物

石組遺構(第15図)

礫を方形の箱型に積み上げた石組遺構が検出された。調査区の北西部に位置し、規模は長さ2m、幅1.5m、深さは検出面より80cmである。礫は、底面は扁平な円錐を用いて敷き詰めしており、壁面には細長いか比較的小さなやや角ばった円錐を用いている。礫間は白色粘土で目張りしている。埋土は黒色土に白色粘土粒が混じっており、中央部には焼土も含まれていた。

この石組遺構の用途は、各地で類例が増加しながらも未だ明確でない部分も多い。時期に関しては、類例を見ると中世のものが多いようである。近年の類例分析報告文献によると、住居に付随する「便槽」の他に、「水溜」が想定されている。

集石遺構(第16図)

調査区の北西部に位置し、直径70cmである。黒ボク土面より検出された。前述の石組遺構と同一検出面である。礫の上に滑石製の懐炉が置かれていた。

包含層出土土器(第25～27図)

歴史時代の遺物(第25、26図)

1は黒色土器の碗で、底部は1/4残存している。焼しが甘く、全体に暗灰色を呈している。2は内黒土器の高台付碗である。底部は1/4残存している。3、4は土師皿である。3は胴～底部が1/3残存している。4は土師皿である。5は底である。復元口径8.2cm。6は底部が1/2残存している。糸切り底である。復元口径8.7cm、底部径7.7cm。

5～9は青磁碗である。1は口縁部が1/5残存している。口縁部外面に簡略化された蓮弁文が施されている。緑釉がかけられている。復元口径18.8cm。

6は口縁部が1/9残存している。内面に柳描文がある。オリーブ灰釉がかけられている。復元口径16cm。7は底部～高台の破片である。見込みに牡丹のスタンプがある。オリーブ灰釉がかけられている。高台内側は露胎である。8は底部～高台の破片である。見込みに目跡が多数ある。緑釉がかけられている。14～16世紀のものと思われる。9は底部～高台の破片である。見込みに牡丹のスタンプがある。薄緑釉がかけられている。高台内面は露胎である。

10～14は白磁碗である。10は口縁部で1/8残存している。玉縁で、素地は灰白色で透明釉がかかれている。11は口縁部で1/8残存している。玉縁で、素地は灰白色で透明釉がかかれている。復元口径13.7cm。12～13世紀のものと思われる。12は口縁部片である。素地は灰白色で内面と胴部外面上位～中位に白緑色釉がかかれている。復元口径19.2cm。13は底部で1/2残存している。見込みに目跡とヘラ描文様が入っている。素地は灰白色で白緑色釉がかかれている。12～13世紀のものと思われる。14は染付碗で、見込みに暗青色の顔料で文様を施した後、透明釉をかけている。16～17世紀のものと思われる。

15～18は束縛系須恵器である。15は腹の脚部で、外面にタタキ痕がある。16は腹の脚部～底部で、平底である。17、18は鉢で、口縁部が1/4残存している。口縁端部外面に自然釉がかかれている。復元口径30cm。

古墳時代の遺物(第27図)

22～26は土師器甕である。22の口縁部は短く外反し、端部は丸い。外面に炭化物が付着している。復元口径28cm。23の口縁部は短く外反し、端部は丸い。24の口縁部は短く外反する。肩部に突帯の跡が残っている。復元口径22.4cm。25の口縁部は短く外反する。肩部に刻み突帯が一条巡っている。26は底部で、平底である。

27～30は鐵鍤である。27は刃部、茎部を一部欠損している。28は刃部先端、茎部の一部を欠損している。29は刃部先端を欠損している。31は刀子で、茎部を欠損している。

その他の遺物(第26図)

19は滑石製品で、石鍋の破片を転用している。懷炉と思われる。集石遺構の礫上に置かれた状態で出土した。20は滑石製品で、石鍋の破片を転用したものである。4ヶ所に穿孔がある。懷炉と思われる。

21は銅鏡で、4枚重なった状態で出土した。全体が鏡で覆われている。

2-4区外出土遺物(第30図)

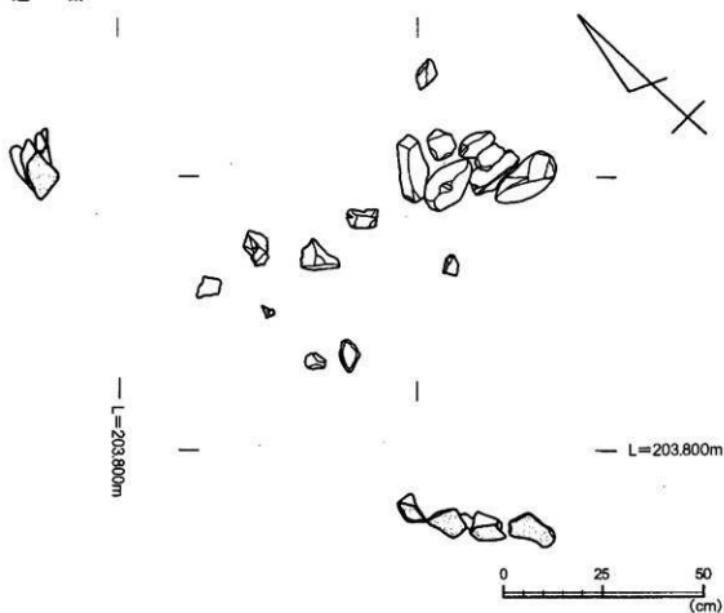
2-4区外西側で水路工事中に出土した。工事場所は湧水があり、泥土となった黒ボク土から発見されたため、正確な出土位置は不明である。

1は板状製品である。2は木製の高台付碗で、2/5残存している。ロクロ成型である。

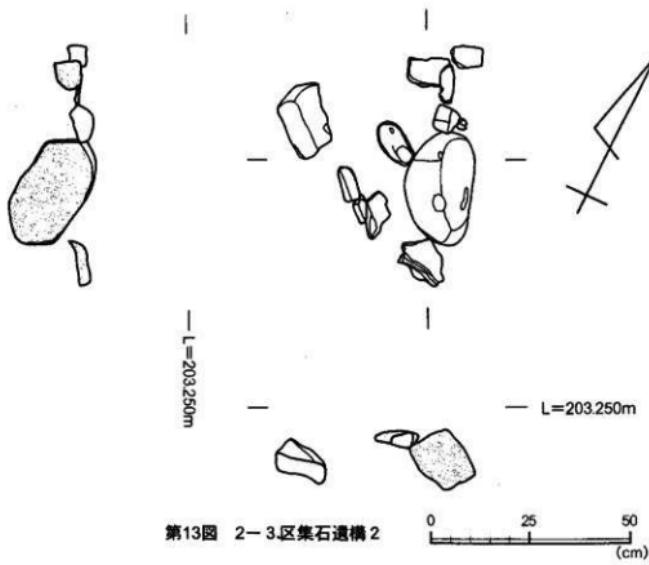


第11図 2-3区土壤

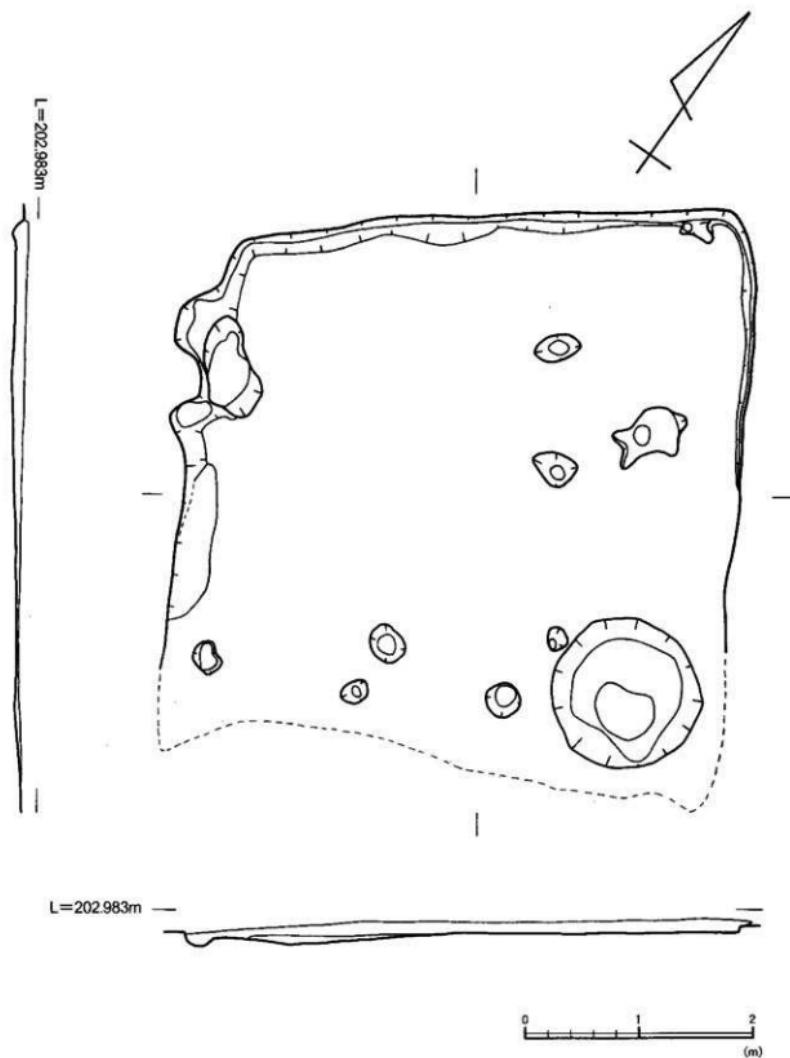
年 神 遺 跡



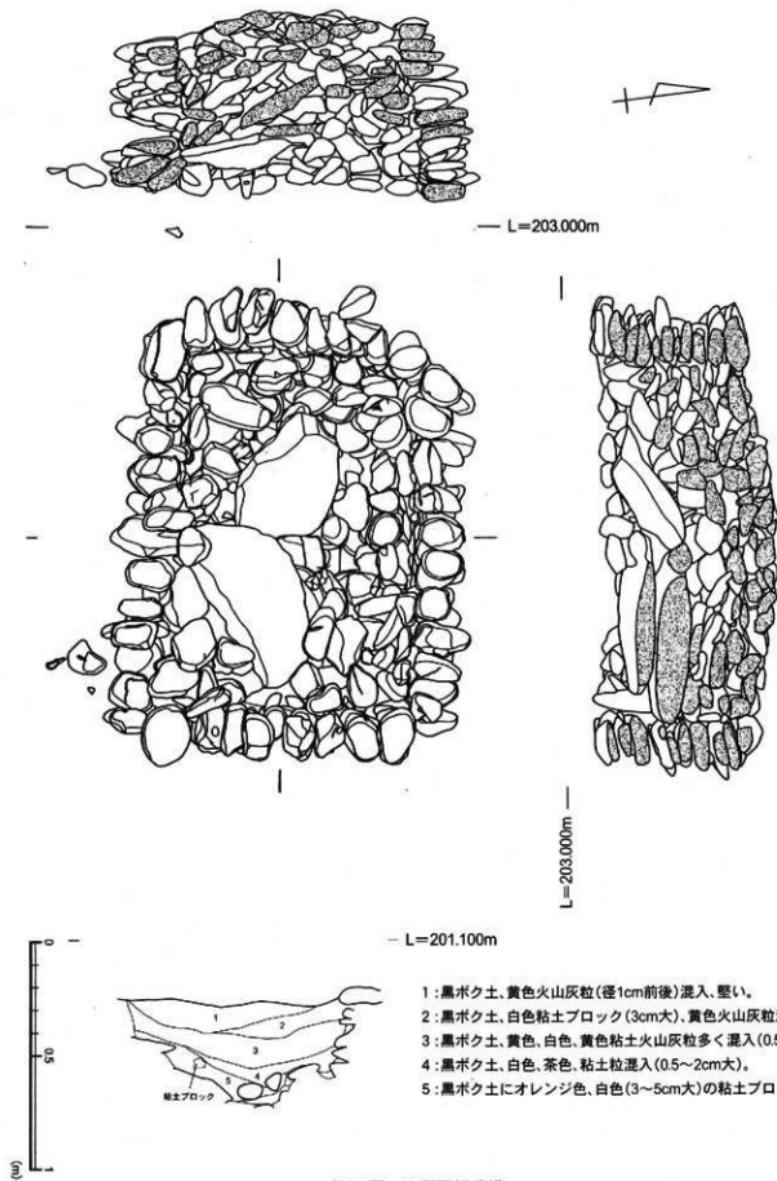
第12図 2-3区集石遺構 1



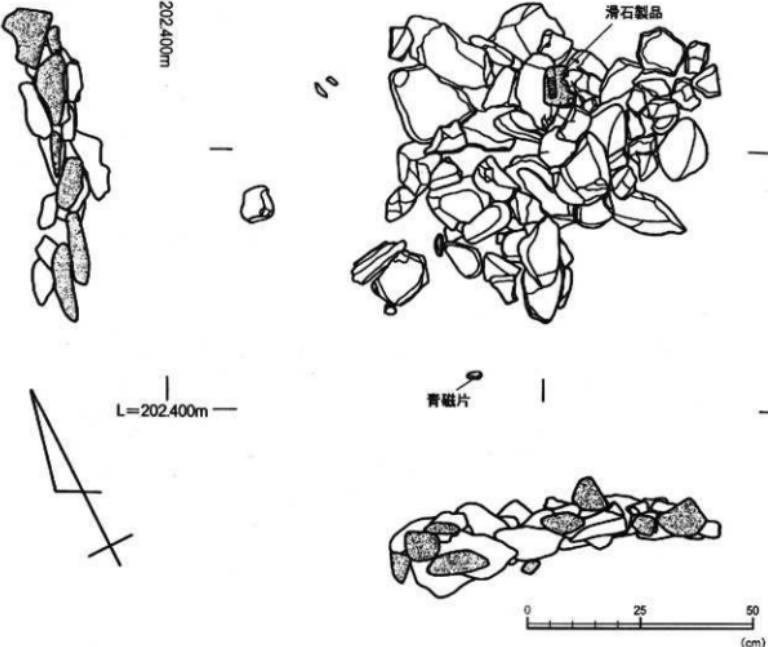
第13図 2-3区集石遺構 2



第14図 2-4区竖穴住居



第15図 2区石組遺構



第16図 2-4区集石遺構

第6節 3区の調査(第31～46図) 竪穴状遺構1(第33、34図)

調査区の東部に位置し、長辺5.6m、短辺5mであり、方形を呈している。床面積は28m²である。主柱穴は7基で、深さは約20～40cmである。焼失家屋である。¹⁴C年代測定の結果、14世紀末の年代を得ている。

1、2は土師器皿である。1は1/6残存しており、糸切り底である。2は1/6残存しており、糸切り底である。

3は青磁碗破片で、外面に蓮弁文が施されている。

竪穴状遺構2(第35図)

調査区の東部に位置し、床面まで削平されている。焼失家屋である。¹⁴C年代測定の結果、14世紀末の年代を得ている。

1は土師器皿で、1/4残存している。ヘラ切り底

である。2は青磁碗破片で、外面に蓮弁文が施されている。

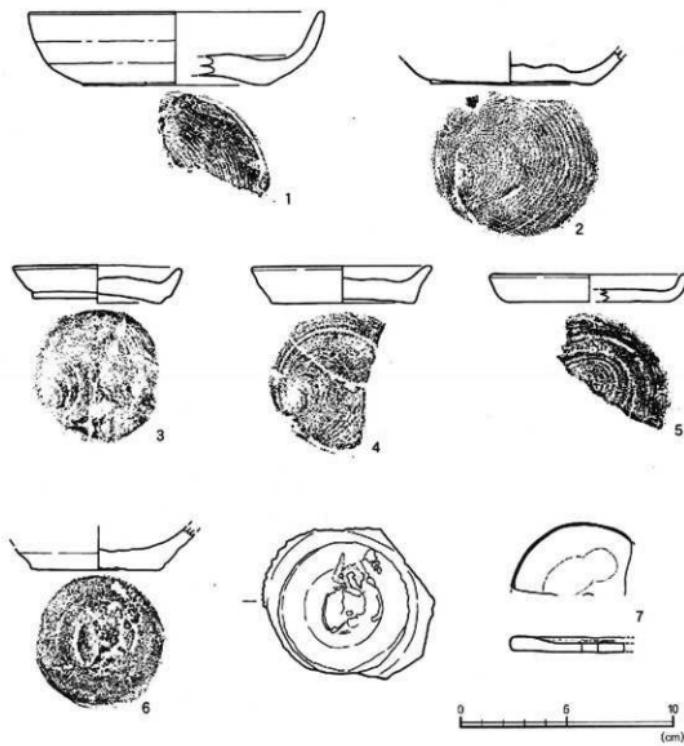
竪穴状遺構3(第36図)

調査区の中央部に位置し、1辺2.6mであり、方形を呈している。床面積は6.76m²である。調査時に湧水があり、床面がぬかるみ主柱穴は不明である。1、2は土師器皿である。1は1/3残存しており、糸切り底である。2は1/6残存しており、糸切り底である。

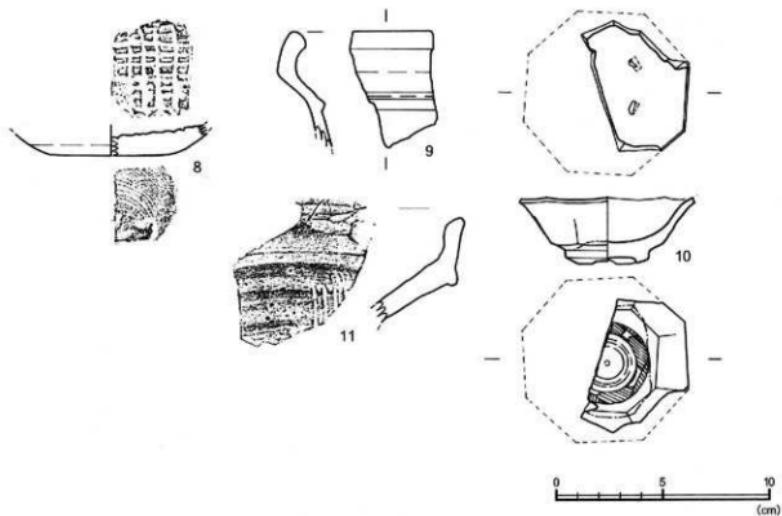
3は青磁碗破片で、外面に蓮弁文が施されている。4、5は白磁碗の口縁部である。6は束縛系須恵器で、鉢口縁破片である。

竪穴状遺構4(第37図)

調査区の西部に位置し、1辺2.6mであり、台形を呈している。床面積は6.76m²である。調査時に湧水があり、床面がぬかるみ主柱穴は不明である。1



第17図 2-1区包含層出土遺物（1）



第18図 2-1区包含層出土遺物（2）

は土師器皿で、1/5残存している。糸切り底である。

土壤1(第38図)

調査区の北部に位置し、直径1.4mの円形土壤で、深さは約90cmである。遺物は出土しなかった。

土壤2(第39図)

調査区の北部に位置し、長辺1.6m、短辺0.8m。長方形の土壤で、深さは約70cmである。遺物は出土しなかった。

包含層出土遺物(第40～46図)

歴史時代の遺物(第40～43図)

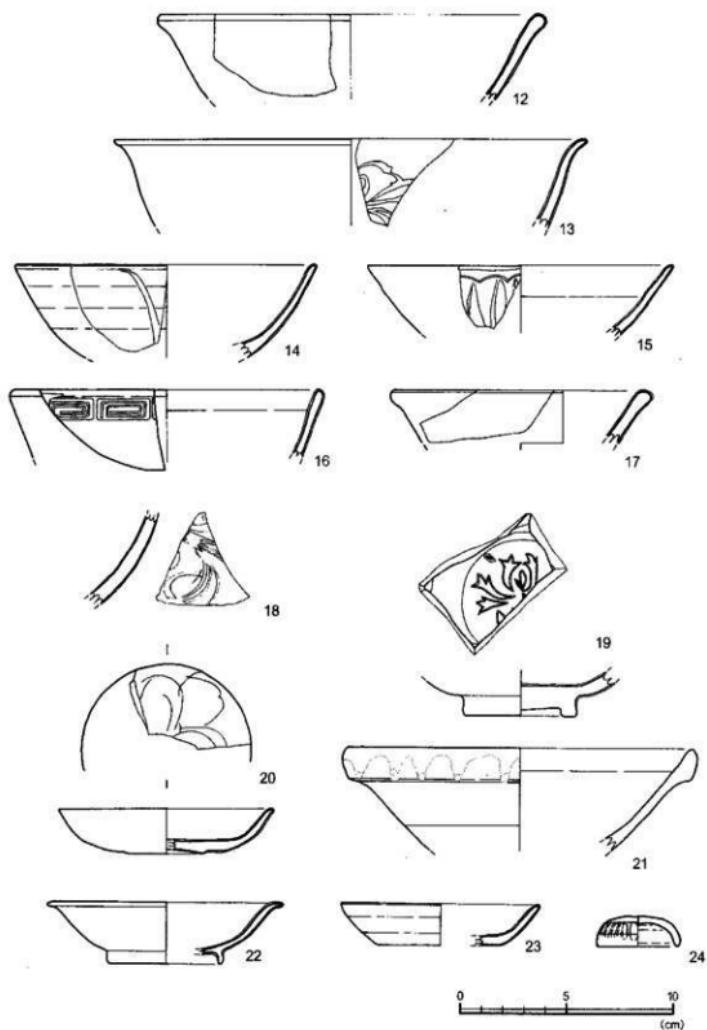
1～11は土師器である。1は壺で、ほぼ完形である。ロクロ成型、ヘラ切り底である。2は壺で、2/5残存している。外面に2ヶ所墨書きがある。不明瞭であるが「為」、「待」ではないかと思われる。ロクロ成型、ヘラ切り底である。復元口径13.5cm。3は壺で、1/3残存している。ロクロ成型、糸切り底である。4は壺破片である。外面に墨書きがあるがかすれており、不明。復元口径14cm。5は高台付碗で、1/3残存している。ロクロ成型。復元底部径6cm。6～14は皿である。すべてロクロ成型で、糸切り底である。14はピット埋土より出土した。

15は内黒土器の高台付碗である。底部が1/3残存している。

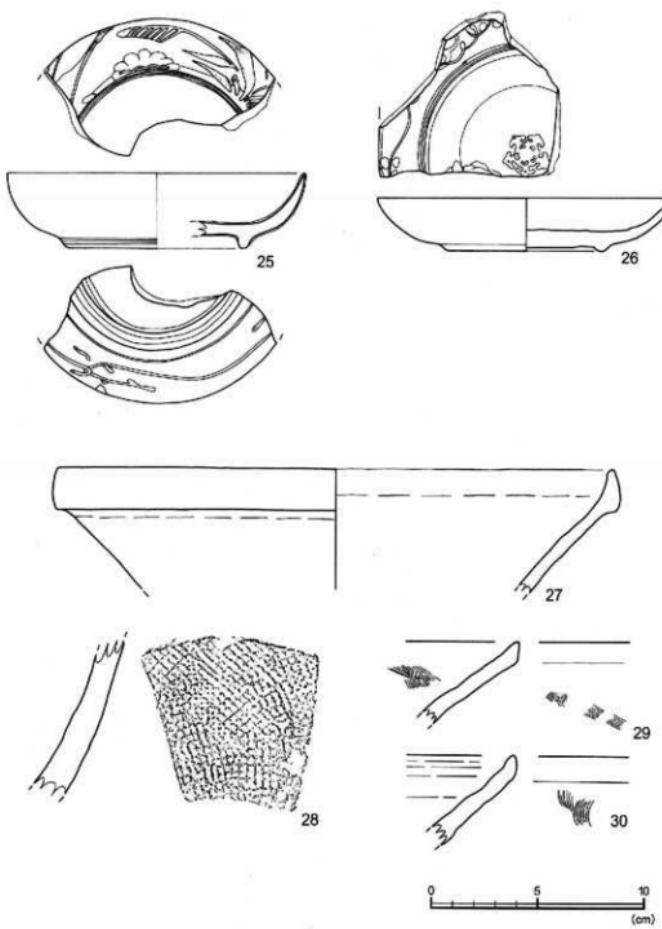
16、17は紡錘車で、土師器皿を転用している。

18～21は陶器である。18は薩摩焼の急須蓋である。素地はにぶい褐色で、外面に暗褐色の釉がかかっている。19はすり鉢の底部である。素地は暗赤褐色で、胎色釉がかかっている。20、21は備前系鉢で、N字状口縁をもつ。

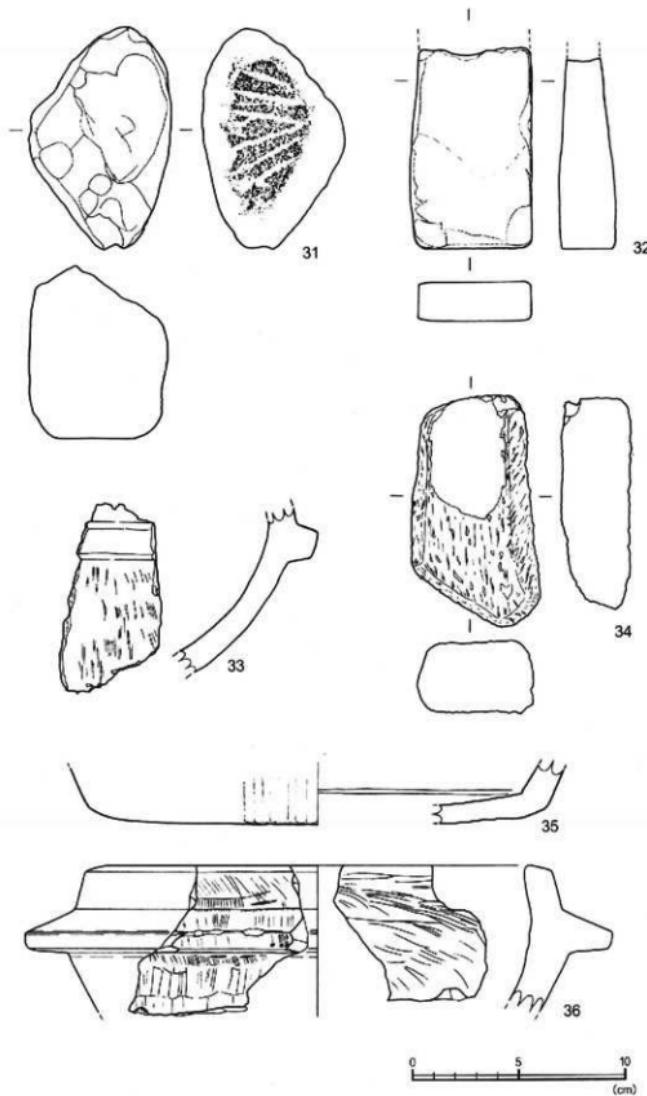
22～29は青磁碗である。22の口縁部は1/6残存している。外面に蓮弁文が施されている。素地は灰白色で、緑灰色の釉がかかっている。復元口径17.3cm。23の口縁部は1/9残存している。蓮弁文が施されている。素地は灰白色で、緑灰色の釉がかかっている。復元口径17.5cm。24の口縁部は1/8残存している。蓮弁文が施されている。素地は灰白色で、明緑灰色の釉がかかっている。復元口径17.2cm。25の口縁部は1/4残存している。外面に櫛描文、内面に片切り彫りと櫛描文が施されている。素地は灰色で、灰オリーブ色の釉がかかっている。26の口縁部は1/9残存している。内面に片切り彫りが施されている。素地は灰色で、灰オリーブ色の釉がかかっている。復元口径19.4cm。27は胴部破片で、蓮弁文が施されている。素地は灰白色で、オリーブ灰色の釉がかかっている。28は胴部破片で、外面に櫛描文、内面に櫛描文と片切り彫りが施されている。素地は灰白色で、オリーブ灰色の釉がかかっている。29は底部である。素地は灰白色で、灰オリーブ色の釉がかかっている。外底部は露胎である。30は青磁皿の口縁



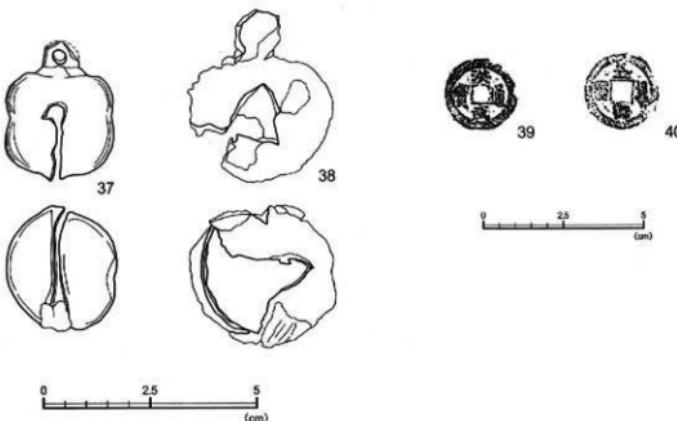
第19図 2-1区包含層出土遺物（3）



第20図 2-1区包含層出土遺物（4）



第21図 2-1区包含層出土遺物（5）



第22図 2-1区包含層出土遺物（6）

部で、1/8残存している。輪花形である。素地は灰白色で、灰オリーブ色の釉がかかっている。14~16世紀のものと思われる。

31~34は白磁である。31は碗で、口縁部は1/4残存している。玉縁で、素地は灰白色である。復元口径16.4cm。12~13世紀のものと思われる。32は碗で、底部は1/7残存している。素地は灰白色で、内外面に櫛描文が施されている。外底部は露胎である。復元底部径6.2cm。13~14世紀のものと思われる。33は碗の底部で、素地は灰白色。外底部は露胎である。12~13世紀のものと思われる。34は皿で、素地は灰色である。見込みに櫛描文が施されている。外底部は露胎である。13~14世紀のものと思われる。

35、36は青白磁の合子蓋である。35は1/4残存している。内面は露胎で、天井部に印花文が施されている。36は1/5残存している。天井部に印花文が施されている。

37~40は東播系須恵器である。37は甕の底部。38、39は片口鉢の破片。40はこね鉢破片で、復元口径33.2cm。いずれも13世紀のものと思われる。

41~49は滑石製品である。41は石鍋の取手破片で、外面にスス痕がある。42は石鍋の破片で、金雲母が

多く含まれている。復元口径32.4cm。43、44は石鍋の破片である。45~49は石鍋破片を2次加工している。懷炉と思われる。49は内側に穿孔しようとした痕がある。

古墳時代の遺物(第44、45図)

50~54は土師器である。50は甕の口縁部~胴部で、口縁端部は平坦にナデられている。51、52は甕の口縁部で、口縁端部は平坦にナデされている。53は底部で、外側につきだしている。54は底部で、わずかに外側につきだしている。

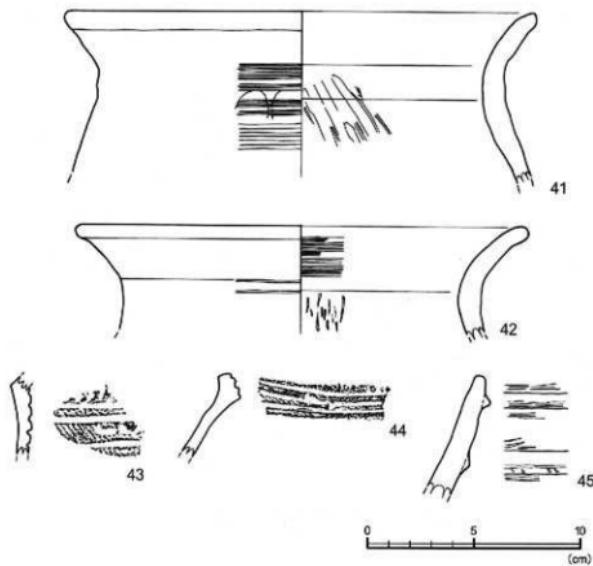
58は鉄鏃である。三角鏃で、ピット埋土より出土した。

绳文時代の遺物(第45図)

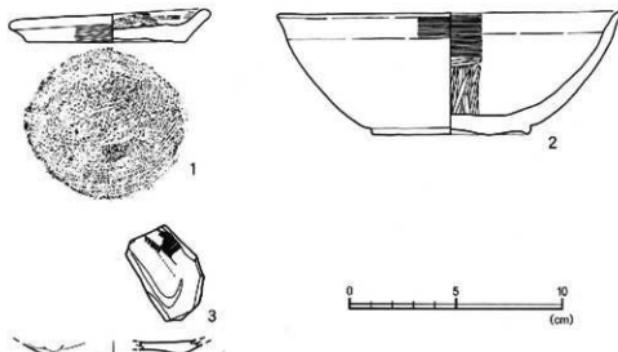
55~57は绳文土器である。55、56は浅鉢で、绳文時代晚期の黒色磨研土器と思われる。56は口縁部外面に炭化物が付着している。57は深鉢の破片である。

石器・石製品(第46図)

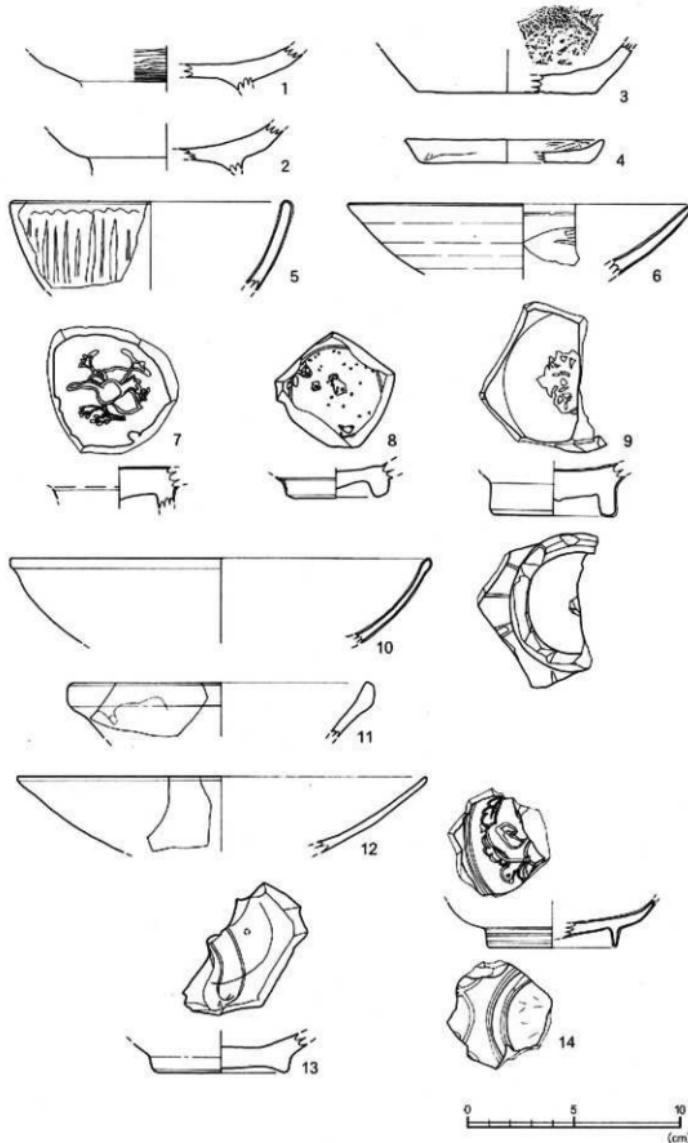
59~62は黒曜石製の打製石鏃である。63、64は粘板岩製の磨製石鏃である。65は打製石斧、66は十字型石器である。十字型石器は小林市では初めての出土である。67は仕上げ用の砥石、68は滑石製品である。



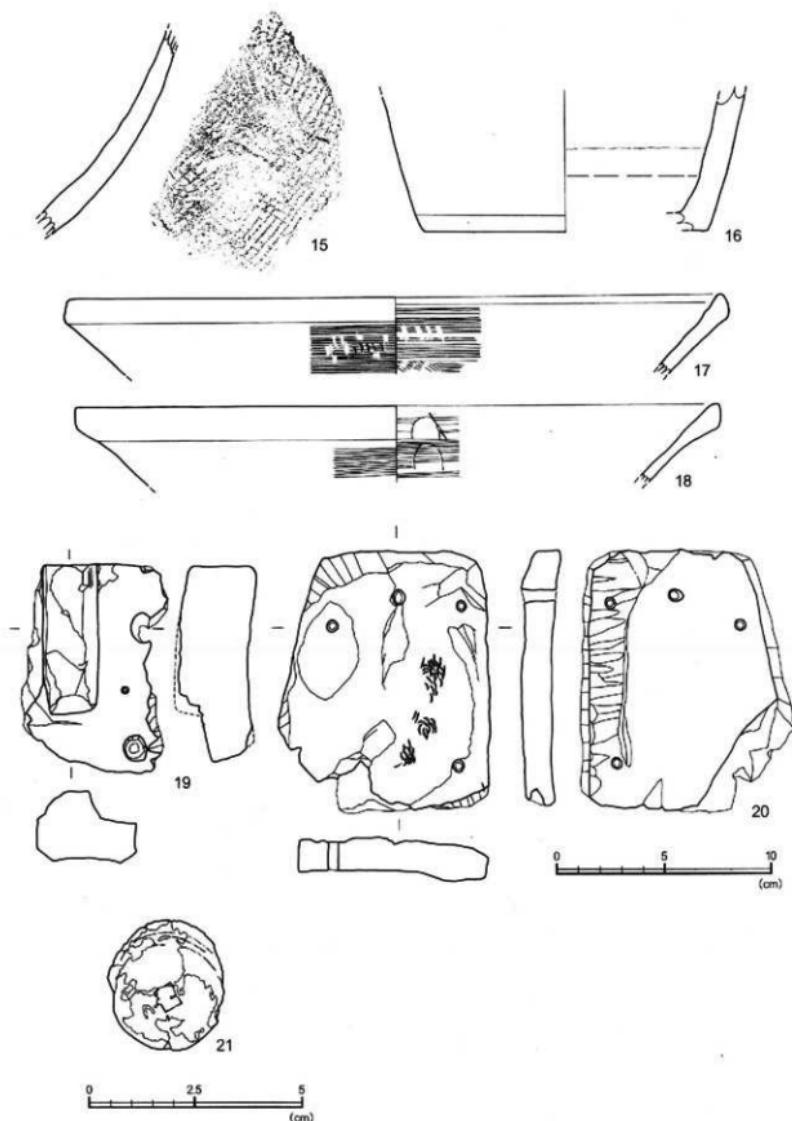
第23図 2-1区包含層出土遺物（7）



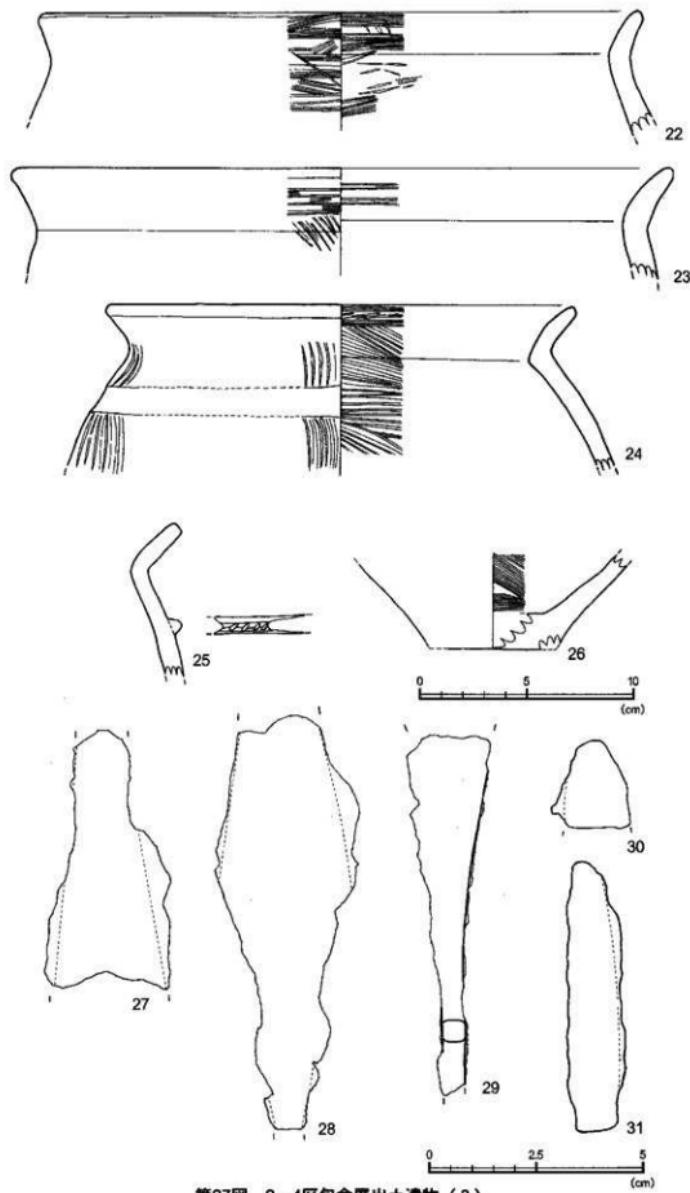
第24図 2-3区包含層出土遺物



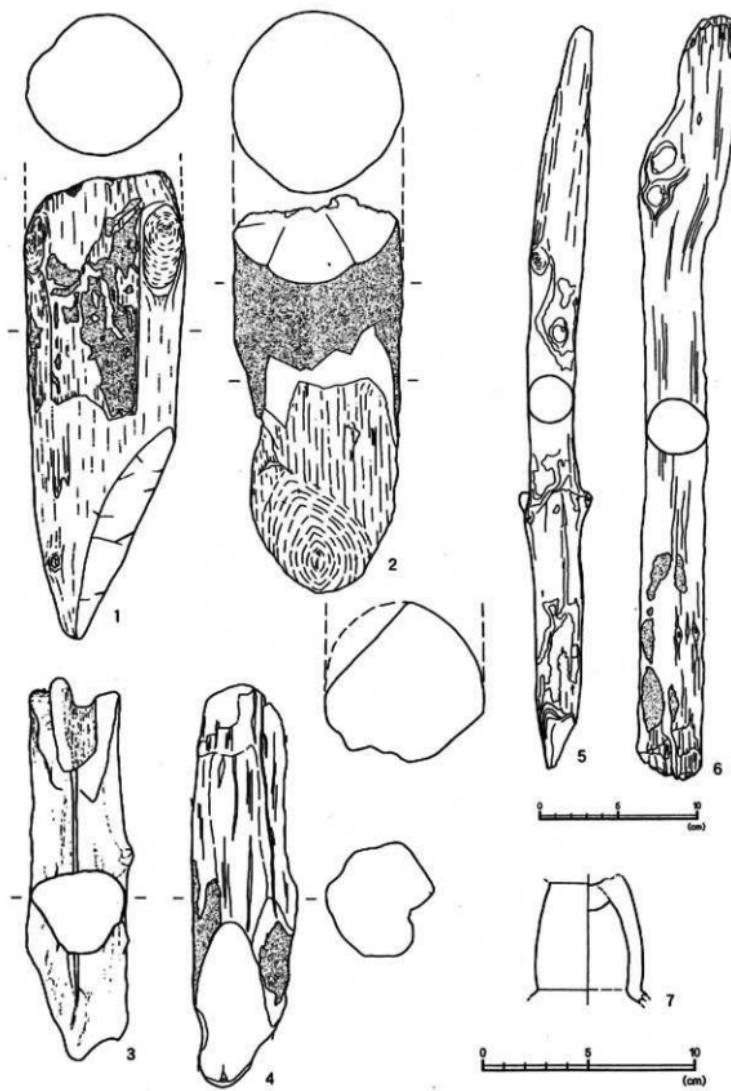
第25図 2-4区包含層出土遺物（1）



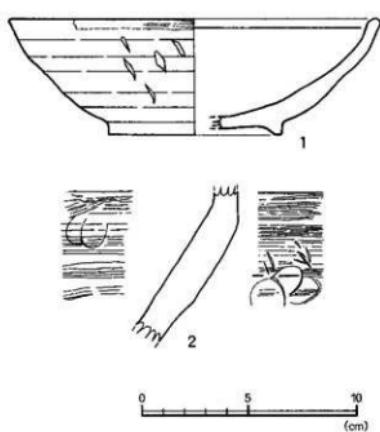
第26図 2-4区包含層出土遺物（2）



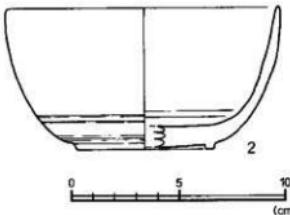
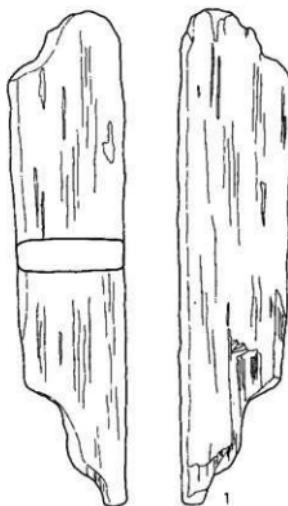
第27図 2-4区包含層出土遺物 (3)



第28図 2-4区円形土壙 1 出土遺物



第29図 2-3区石垣状遺構出土遺物



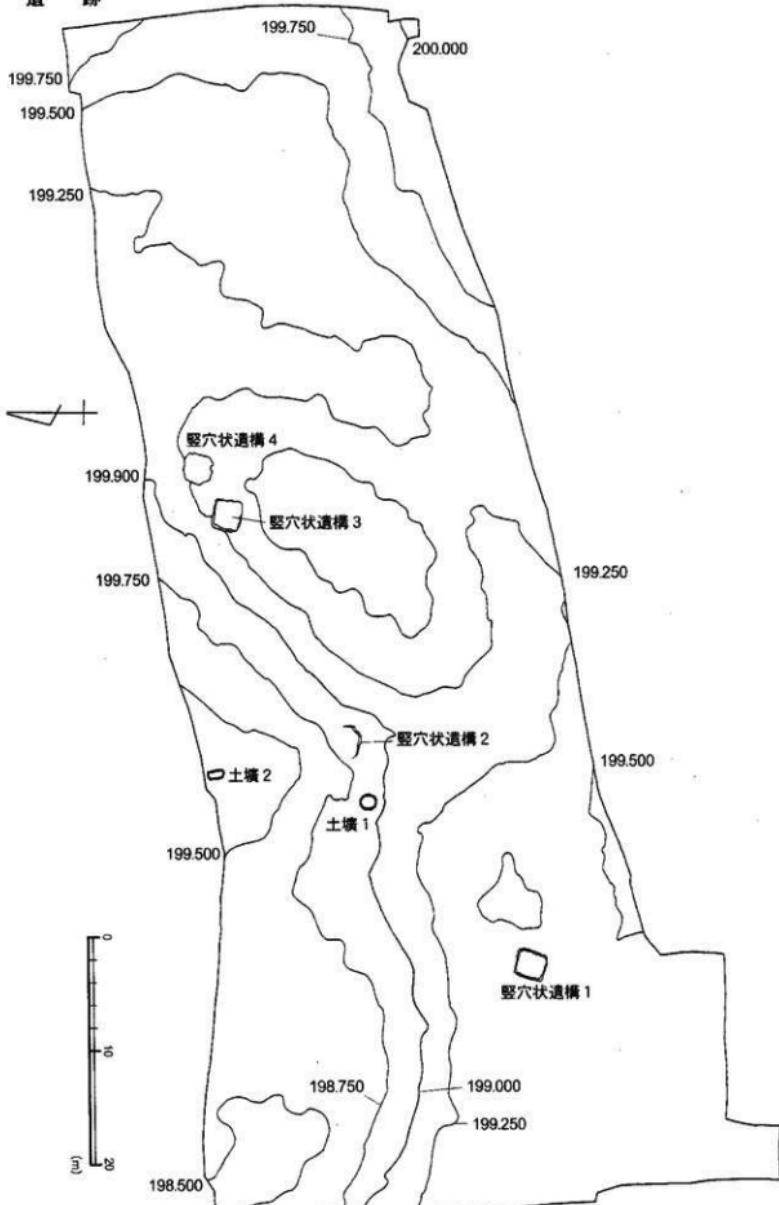
第30図 2-4区外出土遺物

第7節まとめ

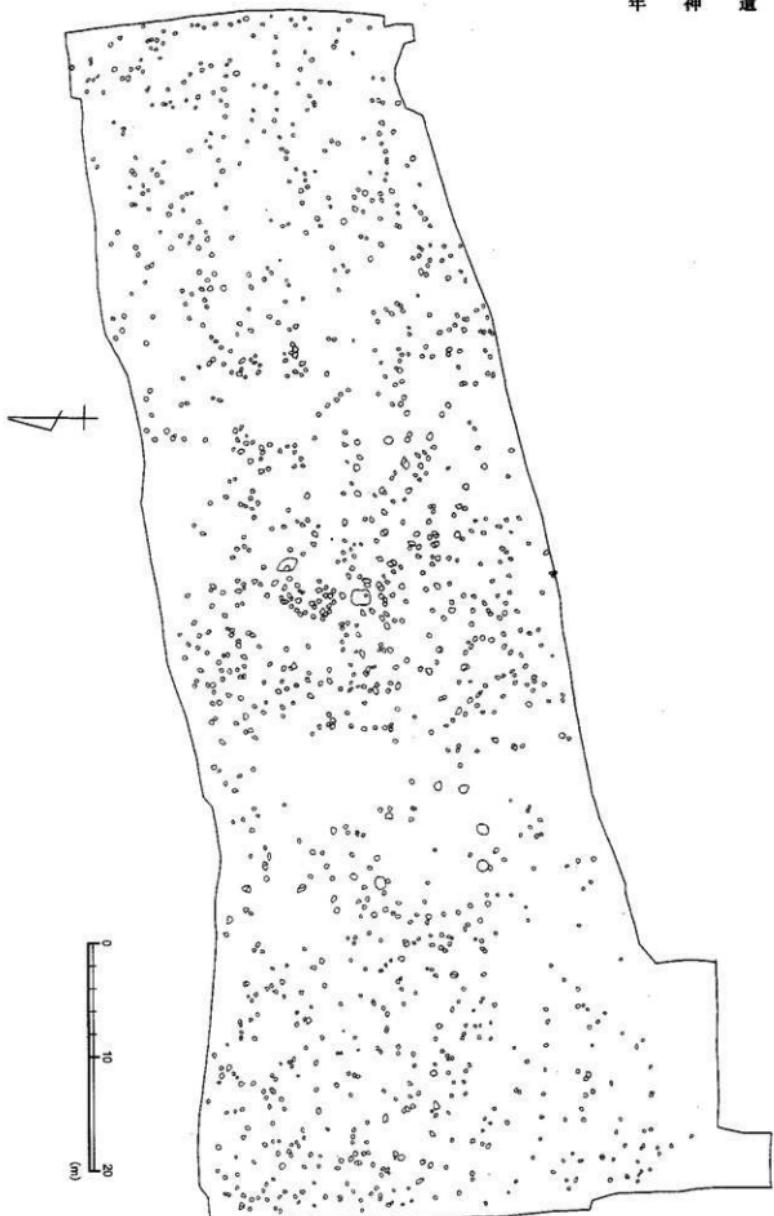
年神遺跡からは縄文時代から近世にわたる遺物が出土している。縄文～古墳時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代晩期の黒色磨研土器や打製石斧、石礫、十字型石器、磨製石鎌、土師器片などが出土している。

中世の遺構、遺物としては、竪穴状遺構、ピット群、石組遺構、集石遺構などがあり、輸入陶磁、国産陶器が出土している。なかでも3区の竪穴状遺構2軒より検出された炭化材から14世紀の年代を得ている。また2区の円形土壙から出土した桃の実からは11世紀の年代を得ている。集石遺構と石組遺構は黒ボク上面からの検出である。

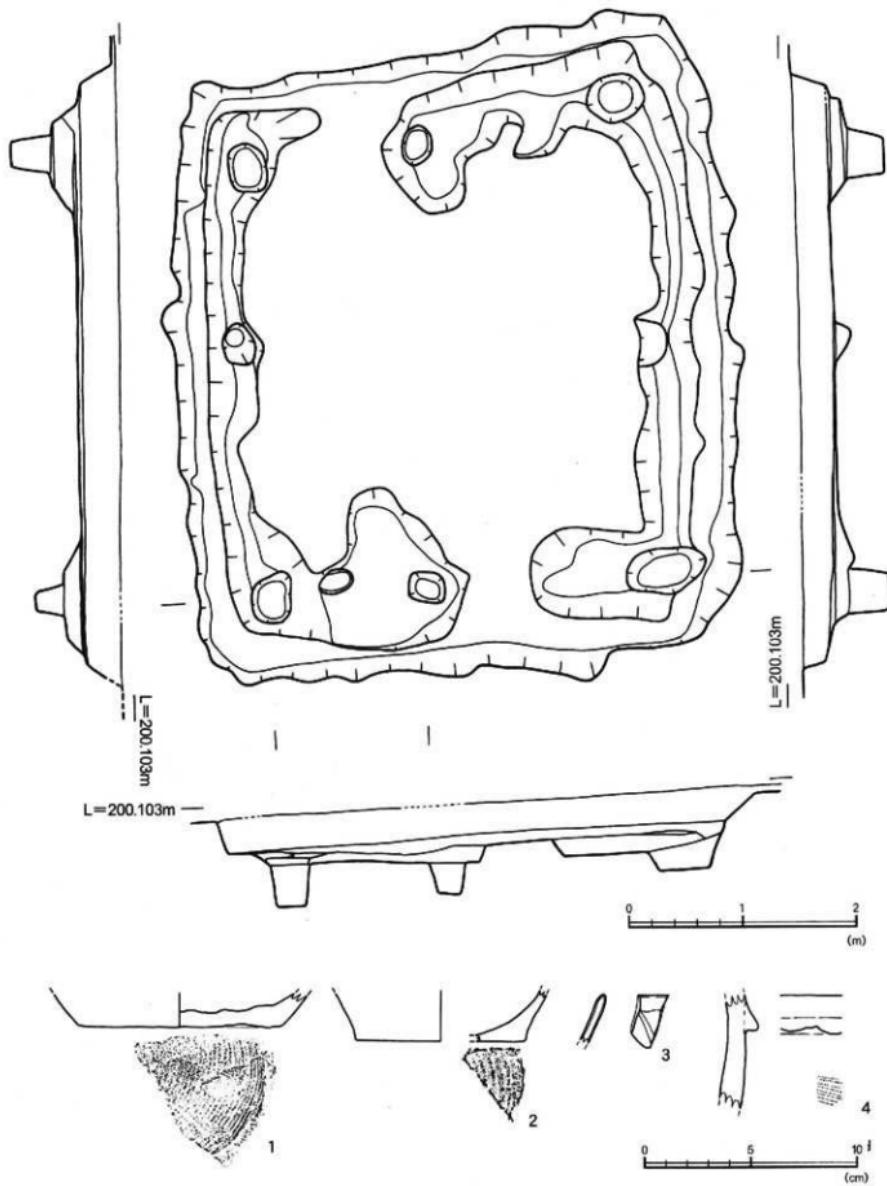
年 神 遺 跡



第31図 3区地形図



第32図 3区遺構分布図

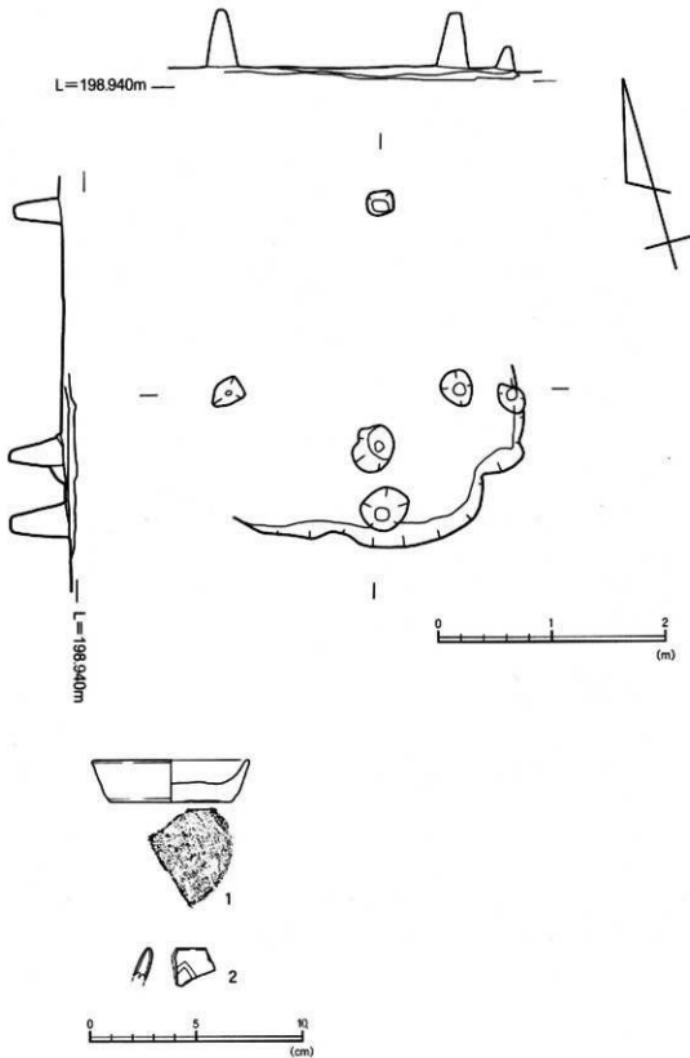


第33図 3堅穴状遺構 1 及び出土遺物

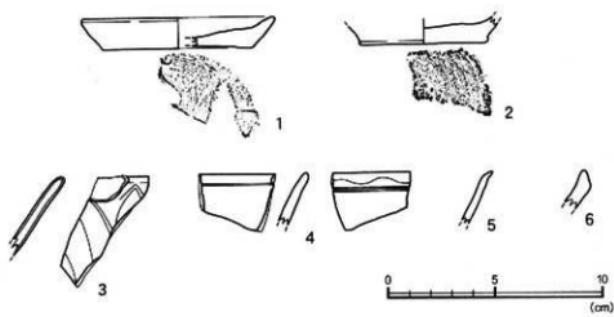
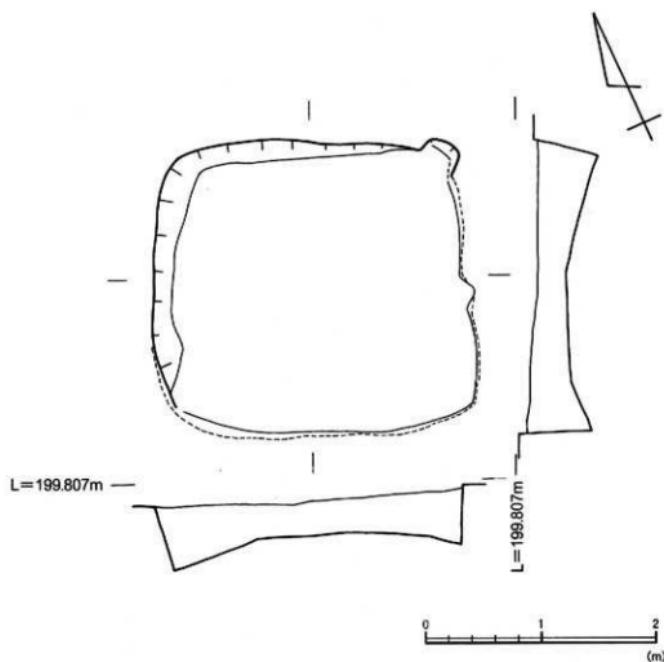


第34図 3区堅穴状遺構 1炭化物出土状況

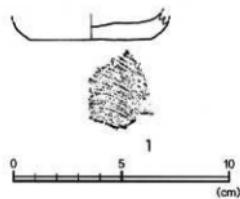
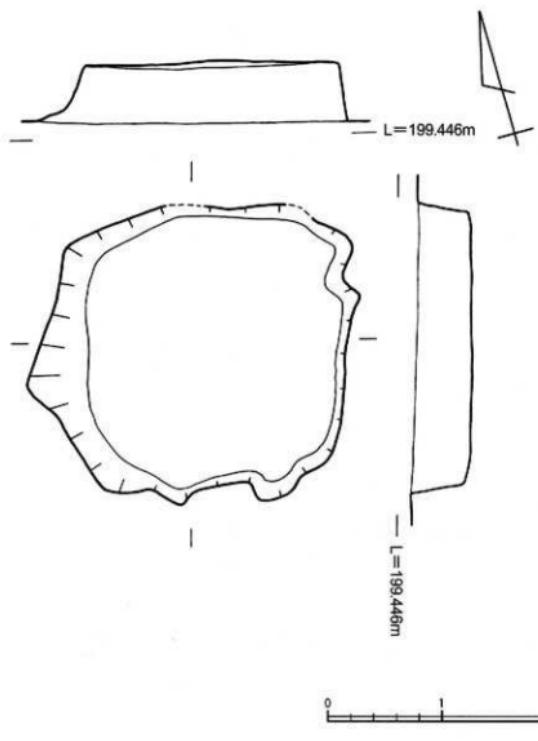
年 神 遺 跡



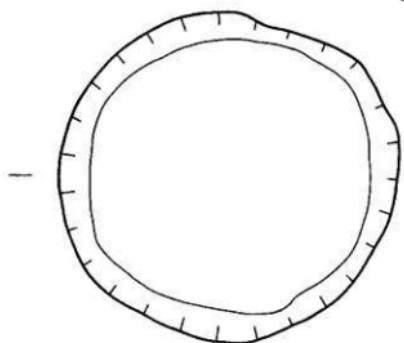
第35図 3区竪穴状遺構 2 及び出土遺物



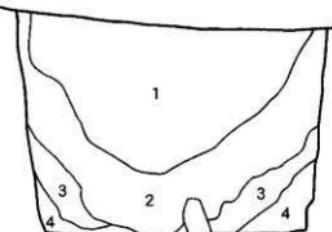
第36図 3区竪穴状遺構 3及び出土遺物



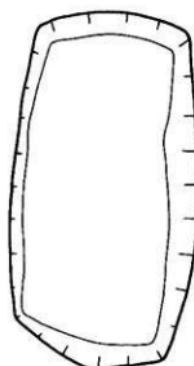
第37図 3区竖穴状遺構 4 及び出土遺物



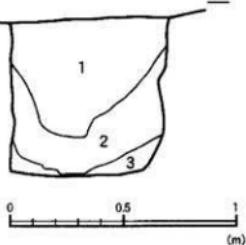
L=199.037m



- 1 : 黒色土、アカホヤ少々混じる。
- 2 : アカホヤブロック(3~10cm大)多
白色ブロック(3~10cm大)混
- 3 : 黒色土1より黒い、柔らかい。
- 4 : 暗褐色土



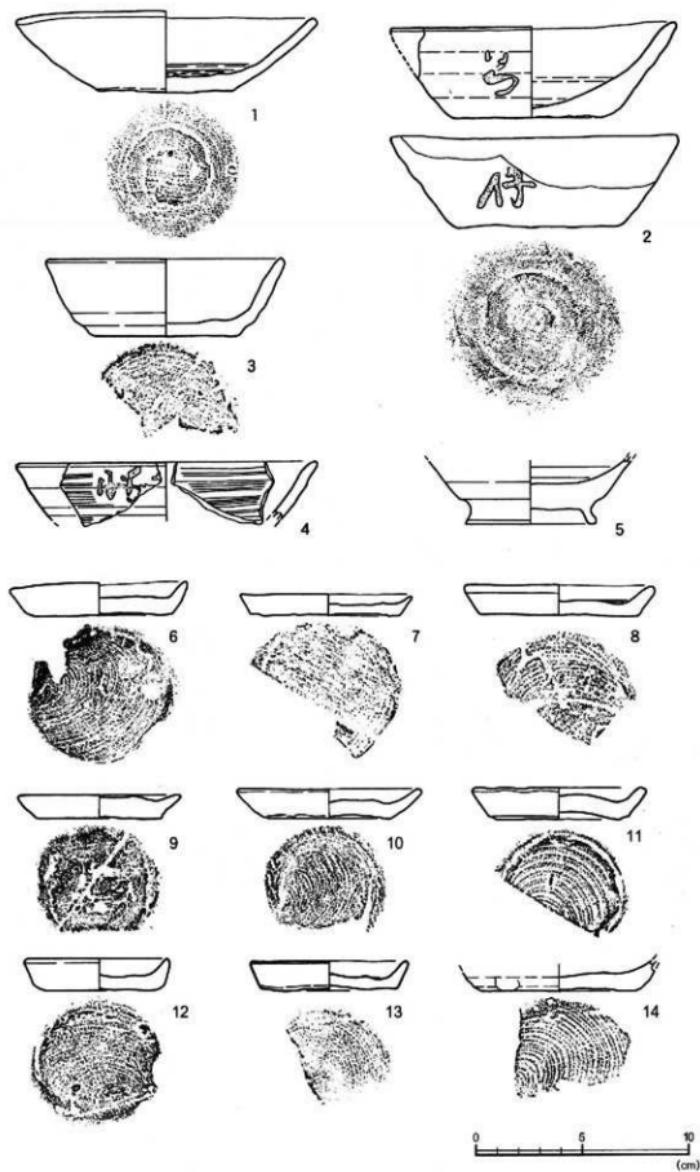
L=198.337m



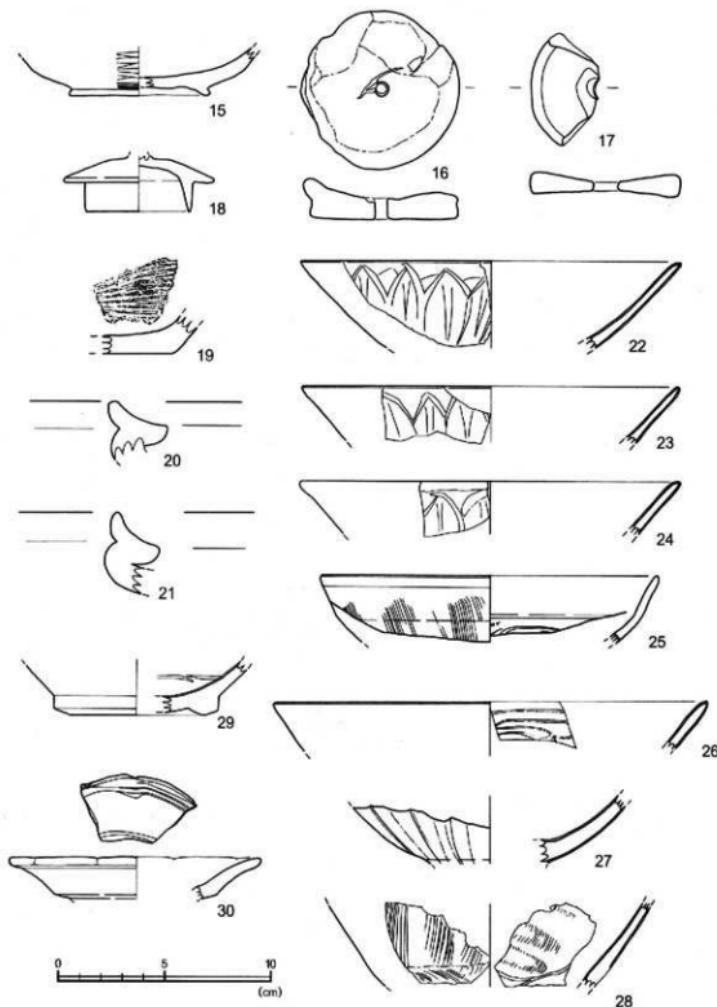
- 1 : 黒色土、アカホヤ粒少々含む。
- 2 : 黒色土、アカホヤブロック(1~5cm大)含む。
1より暗い。
- 3 : 灰褐色色土、粘土質。

第38図 3区土壤1

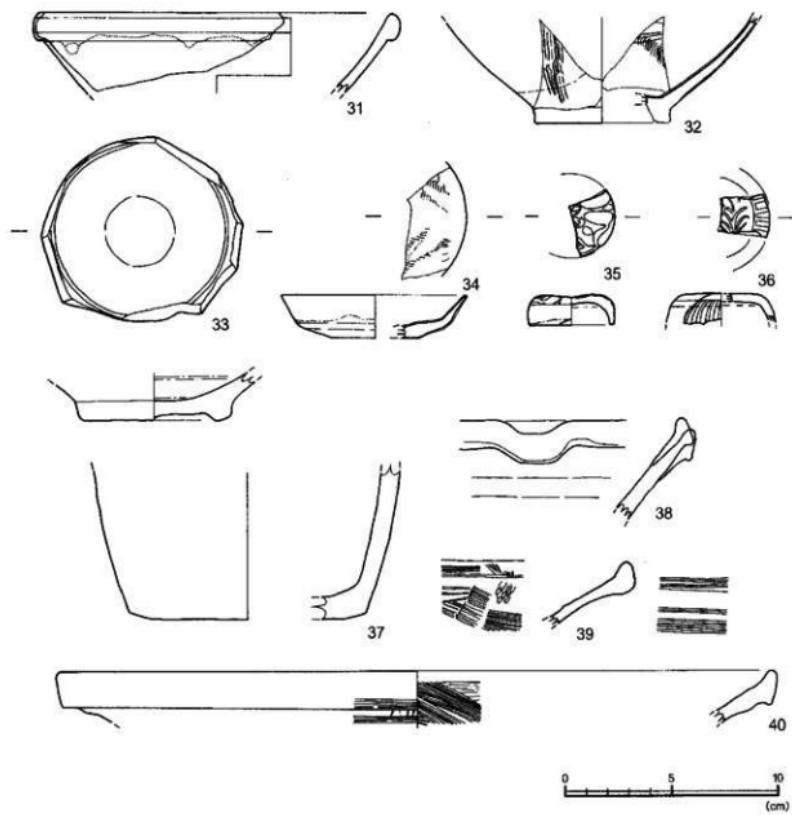
第39図 3区土壤2



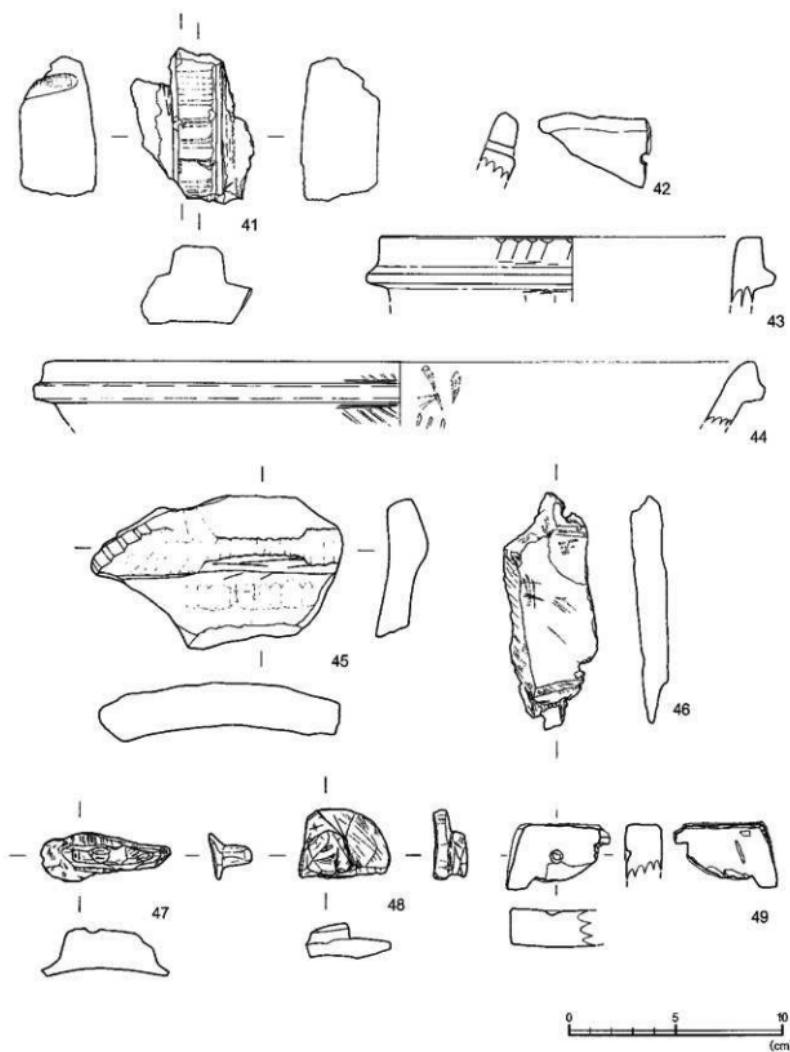
第40図 3区包含層出土遺物（1）



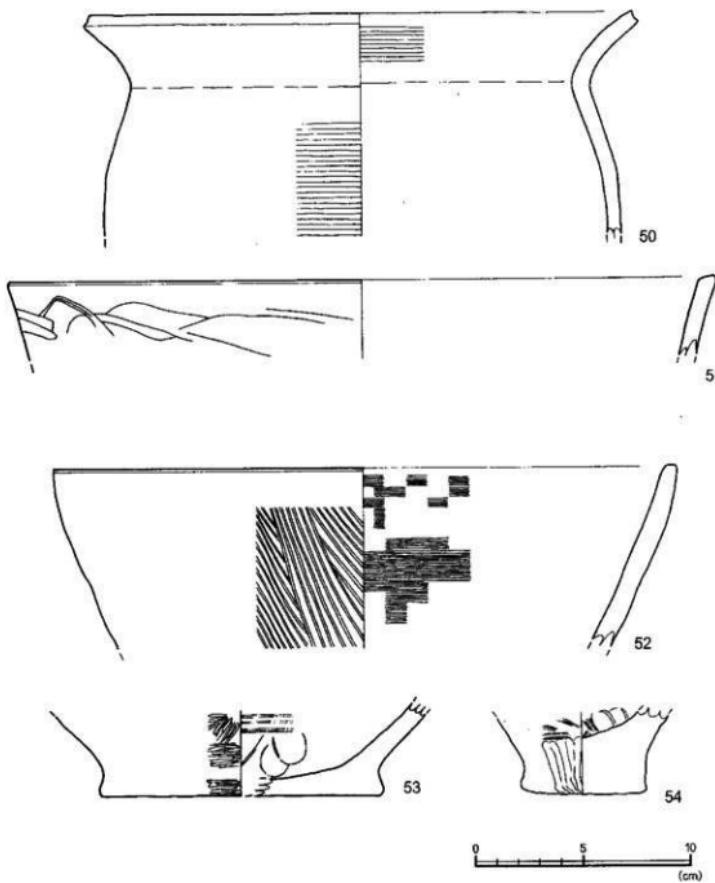
第41図 3区包含層出土遺物（2）



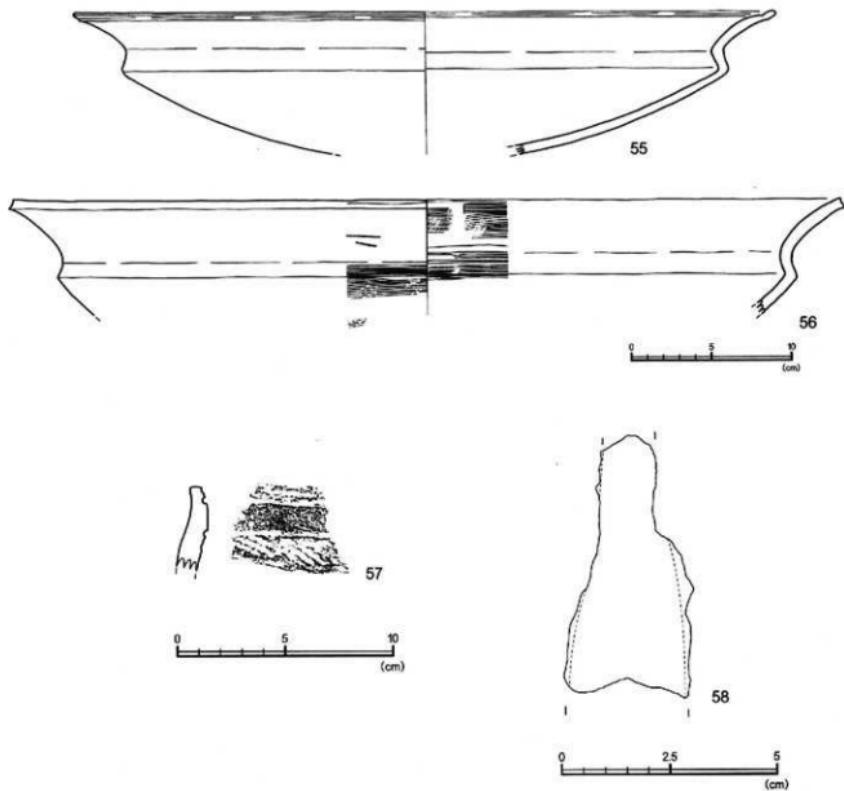
第42図 3区包含層出土遺物（3）



第43図 3区包含層出土遺物（4）

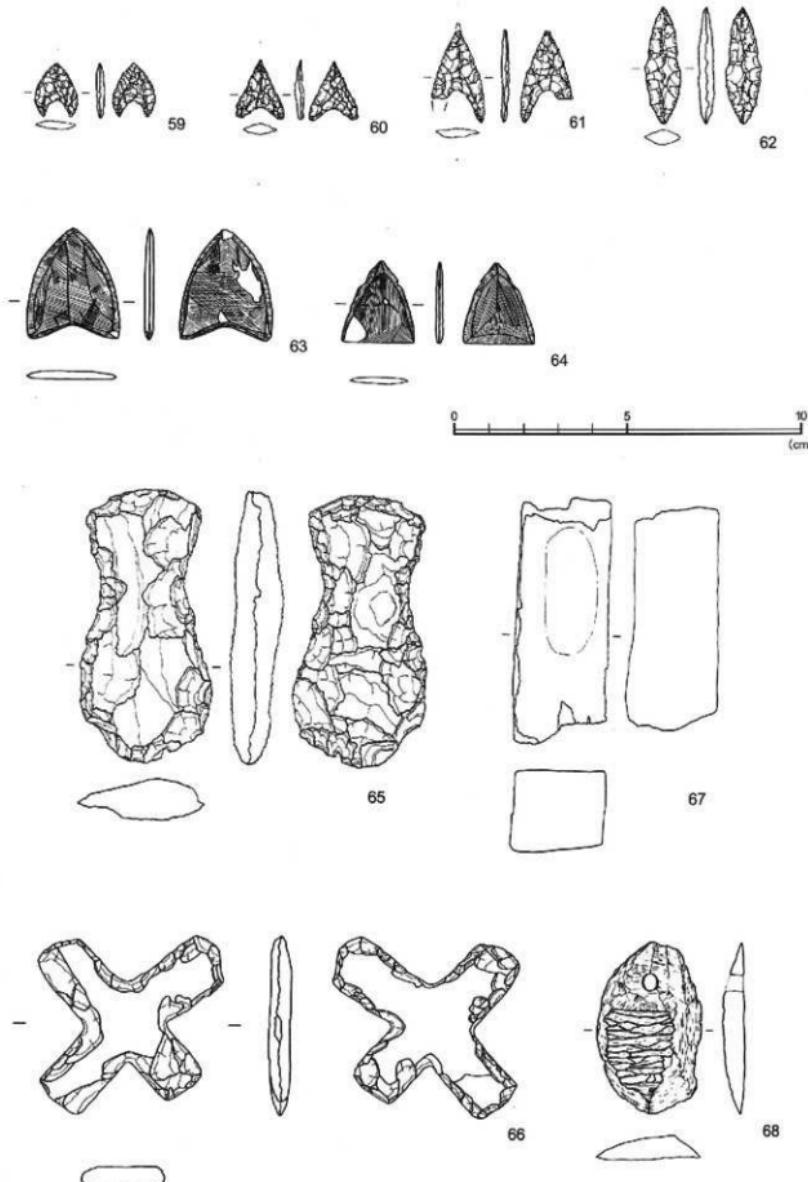


第44図 3区包含層出土遺物（5）



第45図 3区包含層出土遺物（6）

年神遺跡



第46図 年神遺跡出土石器

第7章 総 括

市谷地区については、4ヶ年の発掘調査を実施し、縄文時代後期から古墳時代後期、古代から近世に至る様々な遺構と遺物が出土した。

縄文時代の遺構、遺物としては餅田遺跡から堅穴住居が4軒検出され、うち2軒より西平式土器が出上している。また餅田遺跡の対岸に当たる年神遺跡からは遺構は確認されなかつたが、遺物包含層である黒ポク土層から十字型石器、ピット埋土からは晩期の黒色磨研土器が出土している。石器の原材料产地分析の結果、餅田、大部、年神遺跡からはえびの市桑ノ木津留、鹿児島県東、西北九州の黒砥石が出上している。また市内真方にある内屋敷遺跡から出土した産地不明の黒砥石遺物群であるUT遺物群が餅田、年神遺跡から出土しており、原石产地の解明を得たれる。

弥生時代後期になると、餅田遺跡において花弁状住居が造られる。残念ながら集落が形成されたと思われる餅田遺跡の北側は工事外地区であり、詳細は不明である。

古墳時代になると、餅田遺跡を中心に集落が営まれる。餅田遺跡からは29軒の堅穴住居が検出されたが、うち大型住居が2軒あり、大量の土器が廃棄されていた。集落の公共的施設であったとも考えられる。埋葬炉を持つ住居は8軒ある。炉に使用された土器は粗製の隻が多いが、8号住居出土物のように底部に焼成時に生じた亀裂のため、炉に用いられたと思われるものもある。

他の3遺跡(大部、杉蔭、年神遺跡)では同時期の堅穴住居は2、3軒しか見つからず、集落を形成するには至らない。

古代から中世にかけてピット群、掘立柱建物が全地域で見られる。餅田、大部遺跡では大型の掘立柱建物が検出している。ただしピット群、掘立柱建物の復元及び帰属年代については再度検討する必要がある。

大部、杉蔭、年神遺跡からは堅穴状遺構が検出されている。堅穴状遺構は掘立柱建物に付随する作業小屋の機能を有する施設と推定される。年神遺跡3区の堅穴状遺構2軒は焼失しており、炭化材からの年代測定ではそれぞれ14世紀の年代が示されている。また樹種同定から主柱にはマキなどを使用し、マダケなど屋根を造っていることが判明した。

杉蔭遺跡2区では直径1メートル前後の円形土壙が並んで検出され、うち1基からは銅錢が数枚重なった状態で出土した。土壙壁と推測される。

その他の遺構では年神遺跡から石組遺構、円形土壙、集石等が検出されている。円形土壙からは桃の種子が73点とその上に投棄された状態で木杭が見つかっている。現地は湧水があり、腐食を免れたのであろう。この土壙からは桃の実についていたと思われる1センチメートル弱の甲虫の羽や足が多数出土している。桃の貯蔵穴か廃棄穴かは不明である。年代測定の結果、

11世紀初頭の年代を得ている。石組遺構は小林市では初の出土である。遺物は輸入陶磁器、国産陶磁器、銅錢等が出土している。

近世の遺構については検出されていないが、遺物は国産陶磁器、煙管、銅錢などが出土している。

《参考文献》

樺山・郡元地区遺跡 年見川小規模河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1992 宮崎県教育委員会えびの市文化財調査報告書第6集 永田原遺跡 小木原遺跡群鹿地区(A・B地区) 口ノ坪遺跡-上江、池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I-1996 宮崎県えびの市教育委員会えびの市埋蔵文化財調査報告書第20集 田代地区遺跡群(上田代遺跡 松山遺跡 竹之内遺跡) 妙見原遺跡中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1997 宮崎県えびの市教育委員会

宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集 熊野原遺跡A・B地区 前原西遺跡 陣ノ内遺跡 前原南遺跡 前原北遺跡 今江城(仮称)跡 車坂城西ノ城跡 本文編 1988 宮崎県教育委員会

博多30-1・博多遺跡群第60次調査報告書-福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第285集 1992 福岡市教育委員会

博多47-1・第64次調査報告-福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第396集 1995 福岡市教育委員会

博多48-1・博多遺跡群第62次調査の概要-福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第397集 1995 福岡市教育委員会

博多32-1・博多遺跡群第68次発掘調査報告-福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書 1992 福岡市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第43集 北ヶ迫遺跡 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2000 宮崎市教育委員会

新富町文化財調査報告書第19集 県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴II期地区北原牧工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 北原牧地区遺跡 上蘭遺跡 A・B・C地区(I) 上蘭遺跡E地区(I) 1996 宮崎県新富町教育委員会

お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 上別府遺跡 1979 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集 広木野遺跡 神殿遺跡A地区 県立学校運動場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1997 宮崎県埋蔵文化財センター

都城市文化財調査報告書第44集 鶴喰遺跡-横市地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-1998 宮崎県都城市教育委員会

新富町文化財調査報告書第18集 県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴II期地区北原牧・溜水工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 北原牧地区遺跡 上蘭遺跡F地区 1996 宮崎県新富町教育委員会

図 版